埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第303集

熊谷市

北島遺跡 XI

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書
— Ⅵ —

2005

埼　玉　県
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

平成16年10月から11月にかけて、「とどけ　この夢　この歓声」をスローガンとして掲げた、第59回国民体育大会「彩の国まごころ国体」と第4回全国障害者スポーツ大会「彩の国まごころ大会」が熊谷スポーツ文化公園をメイン会場として開催されました。

熊谷スポーツ文化公園は、平成3年4月にオープンした広域都市公園で、県民の文化・スポーツ・レクリエーションの拠点として、また「親しみをもたれる緑豊かで魅力にあふれる公園」へと整備が進められてまいりました。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、昭和61年以来、公園の整備工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行い、これまでに縄文時代から中世にわたる竪穴住居跡や建物跡、それに伴う貴重な遺物を発見するなど多くの成果を挙げてまいりました。

国体開催に当たり、この公園内に屋内競技場や陸上競技場、調整池などの建設が予定され、予定地内に存在する埋蔵文化財の取扱いについて、関係機関が慎重に協議を重ねてまいりました。

その結果、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、やむを得ず現状での保存が困難となる範囲について、当事業団が埼玉県県土整備部の委託を受け、発掘調査を行うこととなりました。

調査の結果、弥生時代から平安時代にわたる「ムラ」の姿が明らかになり、多くの土器や石器、木製品などが出土しました。なかでも、弥生時代の水田、埴輪を並べた古墳、古代の豪族館などは、大変貴重な発見となりました。

本書はこれらのうち、陸上競技場建設用地の古墳時代前期の集落と水田跡及び畠跡、屋内競技場建設用地の堰跡及び畠跡並びに、オーバーブリッジ建設用地の調査成果についてまとめたものです。

埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発や学校教育、生涯学習の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県県土整備部都市公園課、埼玉県熊谷スポーツ文化公園建設事務所、熊谷市教育委員会並びに地元の関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　福田陽充

例　言

1．本書は、埼玉県熊谷市に所在する北島遺跡の発掘調査報告書である。

本編では、北島遺跡第17地点の古墳時代前期の遺構と遺物、第19地点の古墳時代前期以降の堀跡、河川跡、護岸跡、畠跡等及びそれに伴う遺物、第21地点の主な遺構と遺物について記述した。

北島遺跡は、これまで以下の報告書を当事業団から刊行している。

北島遺跡	事業団報告書第81集
北島遺跡Ⅱ	事業団報告書第88集
北島遺跡Ⅲ	事業団報告書第103集
北島遺跡Ⅳ	事業団報告書第195集
北島遺跡Ⅴ	事業団報告書第278集
北島遺跡Ⅵ	事業団報告書第286集
北島遺跡Ⅶ	事業団報告書第291集
北島Ⅷ／田谷	事業団報告書第292集
北島遺跡Ⅸ	事業団報告書第293集

2．遺跡の略号と代表地番及び各年度の発掘調査届に対する指示通知は以下のとおりである。

平成10年度

北島遺跡　第９次（59－058）

熊谷市大字上川上町田364他

平成10年７月27日付け教文第２－77号

平成11年度

北島遺跡　第12次（59－058）

熊谷市大字上川上町田364他

平成11年４月16日付け教文第２－５号

平成12年度

北島遺跡　第15次（59－058）

熊谷市大字上川上町田364他

平成12年４月19日付け教文第２－３号

3．発掘調査は、熊谷市スポーツ文化公園建設事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県北部公園事務所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査事業は、第Ⅰ章－３に示す組織により実施した。このうち本書にかかわる第17地点の発掘事業については、平成10年度を小野美代子、新屋雅明、福田聖が、平成11年度を利根川章彦、岩田明広が、平成12年度を赤熊浩一、吉田稔が担当した。

第19地点については、平成11年度を今井宏、若松良一、富田和夫、細田勝、鈴木孝之、黒坂禎二、石井伸明、村田章人、吉田稔、田中広明、福田聖、渡辺清志が、平成12年度を小野美代子、赤熊浩一、宮井英一、鈴木孝之、吉田稔、大谷徹、山本靖、君島勝秀、福田聖が担当した。

第21地点については、鈴木孝之、福田聖が担当した。

5．遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社シン技術コンサルに委託した。

6．掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は宅間清公が撮影した。

7．出土品の整理及び図版の作成は宅間が行い、桜井元子、大和田瞳の協力を得た。

8．本書の執筆は、第Ⅰ章－１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、その他を宅間が行なった。

9．本書の編集は宅間が行なった。

10．出土木材の樹種同定分析については株式会社パリノサーヴェイに委託した。

11．本書にかかわる諸資料は平成17年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターで管理・保管する。

12．発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々にご教示、ご協力を賜った。記して感謝を表します。

熊谷市教育委員会　飯塚武司　小出輝雄　笹森紀己子　笹森健一　高橋和　早坂廣人　松本完

凡 例

本報告書における挿図等の指示は、以下のとおりである。

1．遺跡全体におけるＸ・Ｙの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°00′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。

2．遺跡におけるグリッドの設定は国土標準平面直角座標に基づき、10ｍ×10ｍ方眼を基本グリッドとしている。

3．グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から順にＡ・Ｂ・Ｃ……Ｚ・ＡＡ・ＡＢ…とアルファベットを付し、東西方向は西から１・２・３…と算用数字で付し、Ａ１グリッド等の名称を付けた。

但し、第21地点に関しては他の地点との整合性を持たせるために、東西方向については東から－５・－６・－７…とし、Ｐ－５グリッド等の名称を付けた。

4．本報告書における遺構番号は、原則として発掘調査時に付した番号を掲載している。但し、本書掲載にさいして番号を変更したものについては新旧の番号表示を表記した。

5．本報告書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡　ＳＫ…土壙　ＳＤ…溝跡

ＳＮ…水田跡　ＳＸ…性格不明遺構(竪穴状遺構)

Ｐ…ピット

6．本報告書における挿図の縮尺は以下のとおりである。但し、例外もある。

遺構　全体図…1/1200・1/700・1/600・1/400

住居跡…1/60・1/30

土壙・ピット…1/60

溝跡…1/400・1/200・1/150・1/120・1/60

しがらみ状遺構…1/240・1/50

堰跡…1/100・1/60

河川跡…1/300・1/200・1/160・1/80・1/60

水田跡…1/500・1/100

畠跡…1/500・1/300・1/100

遺物　土師器…1/4・1/3

須恵器…1/4

土錘…1/3

石器…1/3

7．遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高を示しており、単位はｍである。

8．遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。

法量の（　）付き数値は推定値を、［　］付きは残存高を表す。

胎土は土器に含まれる鉱物等のうち特徴的なものを示した。

Ａ－赤色粒子　Ｂ－石英　Ｃ－長石　Ｄ－角閃石

Ｅ－白色粒子　Ｆ－白色針状物質　Ｇ－雲母

Ｈ－砂粒　Ｉ－片岩　Ｊ－礫　Ｋ－黒色粒子

Ｌ－チャート

色調は、『新版標準土色帖』1997年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）を基に通用表記とした。

残存率は、５％刻みで表示した。あくまでも目安としての大まかな全体表示である。

9．遺物のうち、土器実測図の網掛けは10％が釉、20％が赤彩範囲、40％が黒色処理を示す。木器実測図の網掛けは、被熱範囲を示す。

10．木製品の木取りについては、実測図の断面に模式的に図示した。

11．本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1／50,000、熊谷市都市計画図1／2,500を使用した。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 5
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 7
　1．地理的環境 …… 7
　2．歴史的環境 …… 8
Ⅲ　遺跡の概要 …… 12
Ⅳ　第17地点の調査 …… 14
　1．第17地点の概要 …… 14
　2．古墳時代前期の遺構と遺物 …… 22
　　(1)　竪穴住居跡 …… 22
　　(2)　竪穴状遺構 …… 37
　　(3)　土壙 …… 38
　　(4)　ピット …… 45
　　(5)　溝跡 …… 49
　　(6)　堰跡 …… 68
　　(7)　河川跡 …… 71
　　(8)　水田跡 …… 88
　　(9)　畠跡 …… 100
　　(10)　表採及びグリッド出土遺物 …… 103
Ⅴ　第19地点の調査 …… 108
　1．第19地点の概要 …… 108
　2．遺構と遺物 …… 108
　　(1)　しがらみ状遺構 …… 108
　　(2)　堰跡 …… 112
　　(3)　河川跡及び護岸跡 …… 121
　　(4)　畠跡 …… 126
　　(5)　中央水路出土遺物 …… 132
Ⅵ　第21地点の調査 …… 133
　1．第21地点の概要 …… 133
　2．遺構と遺物 …… 133
　　(1)　竪穴住居跡 …… 133
　　(2)　竪穴状遺構 …… 137
　　(3)　土壙 …… 138
　　(4)　ピット …… 146
　　(5)　溝跡 …… 149
　　(6)　河川跡 …… 164
　　(7)　畠跡 …… 166
　　(8)　グリッド出土遺物 …… 172
Ⅶ　付編 …… 173
Ⅷ　まとめ …… 178
写真図版
付図
抄録

挿 図 目 次

第１図　埼玉県の地形 …… 7
第２図　周辺の遺跡 …… 9
第３図　北島遺跡及び周辺遺跡のこれまでの調査 … 13
第４図　第17地点基本土層 …… 14
第５図　第17地点全体図 …… 15
第６図　Ａ区全体図 …… 16
第７図　Ｂ区全体図 …… 17
第８図　Ｃ区全体図 …… 18
第９図　Ｄ区全体図 …… 19
第10図　Ｅ区全体図 …… 20
第11図　Ｆ区全体図 …… 21
第12図　第21号住居跡 …… 22
第13図　第22号住居跡 …… 22
第14図　第23号住居跡 …… 23
第15図　第24号住居跡 …… 23
第16図　第25号住居跡 …… 24
第17図　第26号住居跡 …… 25
第18図　第26号住居跡出土遺物 …… 26
第19図　第27号住居跡 …… 26
第20図　第28号住居跡 …… 27
第21図　第29号住居跡 …… 28
第22図　第29号住居跡出土遺物 …… 29
第23図　第30号住居跡 …… 30
第24図　第30号住居跡炉２ …… 31
第25図　第30号住居跡出土遺物（1） …… 31
第26図　第30号住居跡出土遺物（2） …… 32
第27図　第31号住居跡 …… 33
第28図　第31号住居跡出土遺物 …… 34
第29図　第32・33号住居跡 …… 35
第30図　第32号住居跡出土遺物 …… 35
第31図　第34号住居跡 …… 36
第32図　第35号住居跡 …… 37
第33図　第44号竪穴状遺構 …… 37
第34図　土壙（1） …… 39
第35図　土壙（2） …… 41
第36図　土壙（3） …… 43
第37図　土壙（4） …… 44
第38図　土壙出土遺物 …… 44
第39図　ピット（1） …… 46
第40図　ピット（2） …… 47
第41図　ピット（3） …… 48
第42図　ピット出土遺物 …… 48
第43図　Ａ区溝跡（1） …… 50
第44図　Ａ区溝跡（2） …… 51
第45図　Ａ区溝跡出土遺物 …… 52
第46図　Ｃ区溝跡（1） …… 54
第47図　Ｃ区溝跡（2） …… 55
第48図　Ｃ区溝跡出土遺物 …… 56
第49図　Ｄ区溝跡 …… 57
第50図　Ｅ区溝跡 …… 58
第51図　Ｆ区溝跡区割図 …… 59
第52図　Ｆ区溝跡（1） …… 60
第53図　Ｆ区溝跡（2） …… 61
第54図　Ｆ区溝跡（3） …… 62
第55図　Ｆ区溝跡（4） …… 63
第56図　Ｆ区溝跡（5） …… 64
第57図　Ｆ区溝跡（6） …… 65
第58図　Ｆ区溝跡出土遺物 …… 66
第59図　第１号堰跡 …… 69
第60図　第２号堰跡 …… 70
第61図　河川跡（1） …… 72
第62図　河川跡（2） …… 73
第63図　河川跡・木材出土状態図 …… 74
第64図　河川跡杭列 …… 74
第65図　木製品出土状態図 …… 75
第66図　河川跡出土遺物（1） …… 77
第67図　河川跡出土遺物（2） …… 78
第68図　河川跡出土遺物（3） …… 79
第69図　河川跡出土遺物（4） …… 81
第70図　河川跡出土遺物（5） …… 83

第71図　河川跡出土遺物（6）…… 84
第72図　河川跡出土遺物（7）…… 85
第73図　河川跡出土遺物（8）…… 86
第74図　河川跡出土遺物（9）…… 87
第75図　A区水田跡全体図 …… 89
第76図　A区水田跡エレベーション …… 90
第77図　A区水田跡区割図 …… 91
第78図　A区水出跡（1）…… 92
第79図　A区水出跡（2）…… 93
第80図　A区水田跡（3）…… 94
第81図　A区水田跡（4）…… 95
第82図　A区水田跡（5）…… 96
第83図　A区水出跡（6）…… 97
第83図　A区水田跡出土遺物 …… 99
第85図　A区畠跡出土遺物 ……100
第86図　A区畠跡全体図 ……101
第87図　F区畠跡全体図 ……102
第88図　A区グリッド出土遺物 ……103
第89図　C区グリッド出土遺物 ……104
第90図　F区グリッド出土遺物（1）……105
第91図　F区グリッド出土遺物（2）……106
第92図　第19地点全体図 ……109
第93図　しがらみ状遺構（1）……110
第94図　しがらみ状遺構（2）……111
第95図　第1号堰跡（1）……113
第96図　第1号堰跡（2）……114
第97図　第2号堰跡（1）……115
第98図　第2号堰跡（2）……116
第99図　第2号堰跡（3）……117
第100図　第2号堰跡出土遺物……118
第101図　第3号堰跡（1）……119
第102図　第3号堰跡（2）……120
第103図　第3号堰跡出土遺物……121
第104図　河川跡・第1号護岸跡（1）……122
第105図　河川跡・第1号護岸跡（2）……123
第106図　第1号護岸跡・ムシロ状遺物検出状態図…124
第107図　第2号護岸跡……125
第108図　河川跡出土遺物……126
第109図　第19・20地点畠跡全体図……127
第110図　畠跡（1）……128
第111図　畠跡（2）……130
第112図　畠跡（3）……131
第113図　中央水路出土遺物……132
第114図　第21地点基本土層……133
第115図　第21地点第1面全体図……134
第116図　第21地点第2面全体図……135
第117図　第1号住居跡……135
第118図　第1号住居跡出土遺物……136
第119図　第2号住居跡……136
第120図　第3号住居跡……136
第121図　第4号住居跡……137
第122図　第1号竪穴状遺構……137
第123図　土壙（1）……139
第124図　土壙（2）……141
第125図　土壙（3）……143
第126図　土壙出土遺物……144
第127図　ピット（1）……146
第128図　ピット（2）……147
第129図　ピット出土遺物……148
第130図　溝区割図……150
第131図　溝跡（1）……152
第132図　溝跡（2）……153
第133図　溝跡（3）……154
第134図　溝跡（4）……156
第135図　溝跡（5）……158
第136図　溝跡出土遺物……161
第137図　第34号溝跡遺物出土状態……162
第138図　第34号溝跡出土遺物……163
第139図　河川跡……164
第140図　河川跡出土遺物……165
第141図　第2面畠跡区割図……166
第142図　第2面畠跡（1）……167
第143図　第2面畠跡（2）……168
第144図　第2面畠跡（3）……169

第145図　第２面畠跡（4）……170
第146図　第２面畠跡出土遺物……171
第147図　グリッド出土遺物……172
第148図　樹種同定……175
第149図　周辺遺跡の住居跡比率……180
第150図　水田跡の標高（区画別）……183
第151図　第17地点水田跡の変遷……184
第152図　農耕関係の遺構及び遺物の検出遺跡…186

表　目　次

第１表　北島遺跡周辺の遺跡地名表 …… 10
第２表　第17地点遺構番号新旧対応表 …… 22
第３表　第26号住居跡出土遺物観察表 …… 26
第４表　第29号住居跡出土遺物観察表 …… 29
第５表　第30号住居跡出土遺物観察表 …… 32
第６表　第31号住居跡出土遺物観察表 …… 34
第７表　第32号住居跡出土遺物観察表 …… 35
第８表　土壙出土遺物観察表 …… 44
第９表　第17地点土壙新旧対応表 …… 45
第10表　第17地点ピット一覧表 …… 45
第11表　ピット出土遺物観察表 …… 48
第12表　Ａ区溝跡出土遺物観察表 …… 52
第13表　Ｃ区溝跡出土遺物観察表 …… 56
第14表　Ｆ区溝跡出土遺物観察表 …… 66
第15表　河川跡出土遺物観察表 …… 79
第16表　水田計測一覧表 …… 98
第17表　Ａ区水田跡出土遺物観察表 …… 99
第18表　Ａ区畠跡出土遺物観察表 ……100
第19表　Ａ区グリッド出土遺物観察表 ……103
第20表　Ｃ区グリッド出土遺物観察表 ……104
第21表　Ｆ区グリッド出土遺物観察表 ……107
第22表　第２号堰跡出土遺物観察表 ……118
第23表　第３号堰跡出土遺物観察表 ……121
第24表　河川跡出土遺物観察表 ……126
第25表　中央水路出土遺物観察表 ……132
第26表　第１号住居跡出土遺物観察表 ……135
第27表　土壙出土遺物観察表 ……145
第28表　第21地点ピット一覧表 ……146
第29表　ピット出土遺物観察表 ……148
第30表　溝跡出土遺物観察表 ……162
第31表　第34号溝跡出土遺物観察表 ……163
第32表　河川跡出土遺物観察表 ……165
第33表　第２面畠跡出土遺物観察表 ……171
第34表　グリッド出土遺物観察表 ……171
第35表　農耕関係の遺構及び遺物の検出一覧表 …186

図 版 目 次

第17地点の調査

図版1　第25号住居跡（北東から）
　　第26号住居跡（南東から）
図版2　第29号住居跡（南東から）
　　第29号住居跡　ピット2遺物出土状態
図版3　第30号住居跡（南から）
　　第30号住居跡遺物出土状態
図版4　第28号住居跡（南から）
　　第31号住居跡（北東から）
図版5　第32・33号住居跡（東から）
　　第34号住居跡（東から）
図版6　第44号竪穴状遺構（北東から）
　　第14号土壙（東から）
　　第62号土壙
　　第62号土壙遺物出土状態
　　第57号ピット遺物出土状態
図版7　A区　第107号溝跡（東から）
　　C区　第125号溝跡（南から）
図版8　D区　第50・51・52号溝跡（南東から）
　　第93号溝跡（A H31グリット付近）（南から）
図版9　第1号堰跡（東から）
　　第1号堰跡（西から）
図版10　第2号堰跡（西から）
　　第2号堰跡（南西から）
図版11　河川跡全景（北東から）
　　河川跡護岸杭列（北から）
図版12　河川跡護岸杭列（北から）
　　河川跡（北東から）
図版13　河川跡（南西から）
　　河川跡木材集中1
　　河川跡木材集中2
　　河川跡木材集中3
　　河川跡断面
図版14　河川跡出土　すだれ状木製品
　　河川跡出土　梯子
　　河川跡出土　鍬身
　　河川跡出土　鎌柄
　　河川跡出土　鋤柄
　　河川跡出土　鋤柄
　　河川跡出土　弓
　　河川跡出土　不明木製品
図版15　A区水田跡（北西から）
　　A区水田跡畦畔検出状態（南東から）
図版16　A区水田跡遺物出土状態
　　A区畠跡（北西から）
図版17　A区畠跡（南から）
　　A区畠跡（南西から）
　　A区畠跡（南西から）
　　A区畠跡（南西から）
　　A区畠跡第4群（北東から）
図版18　A区畝調査状況（北東から）
　　F区畠跡全景（南西から）
図版19　第29号住居跡出土遺物
　　第30号住居跡出土遺物
　　第31号住居跡出土遺物
　　第32号住居跡出土遺物
図版20　第93号溝跡出土遺物
　　第126号溝跡出土遺物
　　第173号溝跡出土遺物
　　第62号土壙出土遺物
　　第57号ピット出土遺物
　　水田跡出土遺物
図版21　畠跡出土遺物
　　河川跡出土遺物
図版22　河川跡出土遺物
図版23　河川跡出土遺物
　　A区グリッド出土遺物
　　C区グリッド出土遺物
図版24　F区グリッド出土遺物
　　第29・30号住居跡出土遺物

図版25　グリッド　河川跡出土遺物
出土石器
図版26　河川跡出土木器
図版27　河川跡出土木器
図版28　河川跡出土木器
図版29　河川跡出土木器
図版30　河川跡出土木器
図版31　河川跡出土木器
図版32　河川跡出土木器
第19地点の調査
図版33　第１号堰跡検出状態（南から）
第１号堰跡検出状態（北から）
図版34　第２号堰跡検出状態（北から）
第２号堰跡検出状態（東から）
図版35　第３号堰跡検出状態（北から）
第３号堰跡検出状態（西から）
図版36　畠跡確認状態（北東から）
畠跡確認状態（北西から）
図版37　畝跡調査状況（Ａ25・26　Ｂ25・26グリッド）（南西から）
畝跡調査状況（Ａ25・26　Ｂ25・26グリッド）（北東から）
図版38　畝跡調査状況（Ａ22・23グリッド）（南西から）
畝跡調査状況（Ａ22・23グリッド）（東から）
図版39　第１号護岸跡全景（南から）
第１号護岸跡調査状況（西から）
図版40　第１号護岸跡調査状況（東から）
第１号護岸跡掘り方
第１号護岸跡断面
ムシロ状遺物
しがらみ状遺構
図版41　第２号堰跡出土遺物
中央水路出土遺物
図版42　第２号堰跡出土遺物
河川跡出土遺物
第２号堰跡・中央水路出土遺物
図版43　第２号堰跡出土遺物
第３号堰跡出土遺物
河川跡出土遺物
第21地点の調査
図版44　調査区第１面全景（東から）
調査区第１面全景（西から）
図版45　調査区第２面全景（東から）
調査区第２面全景（東から）
図版46　第２面畠跡確認状態（Ｓ－５グリッド付近）（南から）
第１号住居跡（南から）
図版47　第４号溝跡遺物出土状態（Ｓ－７グリッド）
第34号溝跡遺物出土状態（東から）
図版48　第１号住居跡出土遺物
第１号土壙出土遺物
第４号土壙出土遺物
第12号土壙出土遺物
図版49　第１号溝跡出土遺物
第３号溝跡出土遺物
第４号溝跡出土遺物
第12号溝跡出土遺物
第27号溝跡出土遺物
図版50　第34号溝跡出土遺物
第２面畠跡出土遺物
Ｏ－13グリッドピット１出土遺物
Ｏ－13グリッドピット２出土遺物
図版51　第３号土壙跡出土遺物
グリッド出土遺物
河川跡出土遺物
Ｐ－13グリッドピット１出土遺物
土錘

Ⅰ　発掘調査の概要

1．発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。各種大型のスポーツ大会の開催やスポーツ施設の整備を進めてきたのは、本県におけるスポーツの振興を図り、次代を担う人づくりを目標とした施策である。

2004年に開催される第59回国民体育大会、第４回全国身体障害者スポーツ大会に向け、そのメイン会場となる熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業も、その一環として計画されたものである。

熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業に先立ち、公園課長から平成９年７月18日付け公園第277号で、埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課長は、平成９年12月２日～５日に遺跡範囲確認のため試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成９年12月22日付け教文第1254号で、概ね次のような回答をした。

１　埋蔵文化財の所在

名　称	種　別	時　代	所　在　地
大神遺跡(59-101)	集落跡・古墳・窯	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	熊谷市大字上川上
北島遺跡(59-058)	集落跡・墓	弥生・古墳・奈良・平安・中世	熊谷市大字今井
田谷遺跡(59-071)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市大字上中条
人神東遺跡(59-078)	集落跡	古墳・奈良・平安・近世	熊谷市大字上川上

２　取り扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法の第57条の３の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

さらに、公園外周道路については、平成11年９月２日付け公園第355号で照会があり、平成11年９月16・17日に遺跡範囲確認調査を行い、平成11年９月22日付け教文第622号で次のとおり回答した。

１　埋蔵文化財の所在

名　称	種　別	時　代	所　在　地
永城遺跡(59-100)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市大字今井
北島遺跡(59-058)	集落跡・墓	弥生・古墳・奈良・平安・室町	熊谷市大字上中条
田谷遺跡(59-071)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市大字上中条

２　取り扱い

文化財保護課は、公園課や北部公園建設事務所と協議を重ねて工事と埋蔵文化財保護との調整を図り、できるだけ盛土による現状保存の措置を講じた。しかし、工事の計画変更が不可能であるメイン陸上競技上、調整池、屋内運動場、外周道路などについては、止むを得ず記録保存の発掘調査を実施することとし、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

調査は平成10年７月～平成12年12月まで２年５ヶ月にわたって行われた。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法第57条第１項にもとづき、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘調査届が、また埼玉県知事から第57条の３にもとづく発掘通知が提出された。それに対する指示通知は以下のとおりである。

発掘調査届：平成10年７月27日付け教文第２－77号
　　平成10年10月５日付け教文第２－120号
　　平成11年１月21日付け教文第２－178号
　　平成11年４月16日付け教文第２－５号
　　平成12年１月24日付け教文第２－129号
　　平成12年１月24日付け教文第２－130号
　　平成12年１月24日付け教文第２－131号
　　平成12年４月19日付け教文第２－３号
発掘通知：平成10年７月28日付け教文第３－278号
　　平成10年７月28日付け教文第３－279号

（文化財保護課）

2．発掘調査と報告書の作成の経過

（1）発掘調査

第17地点

北島遺跡第17地点の発掘調査は、第9次調査を平成10年７月１日から平成11年３月31日、及び第12次調査を平成11年４月８日から平成11年12月８日、第15次調査を平成12年７月１日から平成12年10月31日まで行なった。調査面積は、合計で15,000㎡である。

試掘調査の結果、複数の遺構面が確認された。記述の都合上、平安時代以降の遺構が検出された面を第１遺構面、古墳時代前期の遺構が検出された面を第２遺構面、弥生時代中期の遺構が検出された面を第３遺構面と呼称する。また、調査は便宜上、調査区をＡ～Ｆ区に分けて行なった。今回報告する古墳時代前期の遺構と遺物については、調査を地点ごとに行なったためすべての年度にまたがる。

[平成10年度　第９次調査]

Ａ～Ｃ区の第１遺構面及び第２遺構面の一部の調査を行なった。平成11年度７月当初より調査事務所の設置及び調査区の囲柵工事を行い、重機による表土除去に着手した。平安時代の水田跡が面的に検出できる高さまで重機により掘削を行なった。

水田跡はＡ区南側とＢ・Ｃ区で検出された。Ｂ・Ｃ区では重層して水田跡が認められたため、図面作成後、順次第２遺構面の調査に着手した。

Ａ区では古代の集落跡もあわせて検出した。集落跡の遺存状況はあまり良好ではなく、出土遺物も少なかった。第２遺構面では古墳時代の畠跡を検出した。

Ｃ区では古墳時代後期の溝跡や平安時代の条里の溝跡等も第１遺構面より検出された。

[平成11年度　第12次調査]

昨年度に引き続きＡ～Ｃ区の第２遺構面及び、Ａ・Ｃ区の第３遺構面の調査を行なうとともに、新たにＤ・Ｅ区の調査を開始した。調査したすべての区で古墳時代前期の遺構と遺物が認められた。

Ａ区では、間に洪水層を挟み弥生時代後期から古墳時代前期の水田跡と弥生時代中期の水田跡が検出された。洪水層を挟むことと、水田面の大きさの違いなどから明確に区別できた。

Ｄ区では、第１遺構面から中世の溝跡と平安時代の溝跡を検出した。第２遺構面からは古墳時代前期の溝跡と住居跡を検出した。相対的に遺構の分布は少なかった。

Ｅ区からは、第１遺構面からほぼ南北に走る平安時代の地割の溝跡を検出した。第２遺構面からは、古墳時代前期の住居跡を検出したが、他の区に比べ遺存状態が非常によかった。

Ｄ・Ｅ区ともに第３遺構面からは、遺構は検出されなかった。

[平成12年度　第15次調査]

新たな調査区であるＦ区及びＢ区の未調査部分（生活道路部分）を調査した。Ｂ区では、古代の溝跡の調査を行なった。おそらく平安時代の条里の溝跡と思われる。下層は調査区の南端で古墳時代前期の住居跡を検出した。住居跡は、上層の近世以降の溝跡により撹乱を受けていて、掘方だけの確認であった。

Ｆ区は、地上の建築物の撤去の後、パイル打ち込み部分を回避しながら表土除去を行なった。遺構精査の結果、第１遺構面からは古代の大型掘立柱建物跡を中心とする集落跡を検出した。第２遺構面では古墳時代前期の住居跡、土壙、ピット、溝跡、河川跡等を検出した。また、溝跡中より堰跡と思われる遺構が検出され、慎重に調査したところ杭列間に粘土ブロックと敷物とを互層にした盛土跡を検出することができた。

河川跡からは、同様に護岸の跡とともに多量の遺物が出土した。遺物は弥生時代中期から古代の遺物まで幅広く見られた。木製品も多く農具のほかに古

墳時代後期の遺物とともに竪櫛が出土した。

C区・F区の第３遺構面からは弥生時代の土壙、溝跡、水田跡を検出した。

これらの遺構、遺物の図化作業、取り上げを行い10月下旬に機材を撤収し調査を終了した。

第19地点

北島遺跡第19地点の発掘調査は、第12次調査を平成11年４月８日から平成12年３月24日、及び第15次調査を平成12年４月８日から平成12年12月28日まで行なった。調査面積は合計で73,050㎡である。

今回報告するしがらみ状遺構と中央水路中にある堰跡については平成11年度に、河川跡、護岸跡及び畠跡については平成15年度にそれぞれ調査した。

発掘調査の経緯は、以下のとおりである。

[平成11年度　第12次調査]

平成11年度４月当初より調査事務所の設置及び調査区の囲柵工事を行い、重機による表土除去に着手した。表土除去は、調査区の湧水対策のため内側幅10ｍを内周に沿うように削平をすることより行なった。調査区西側の浅い位置より江戸時代の丸樋跡や平安時代の緑釉陶器等が多量に出土したため急遽、西側より本格調査に取りかかった。

調査区西側では、古代の遺物を多量に含む包含層が見つかり、小グリッドを設定し遺物の取り上げを行なった。その後、古代の遺構面の調査に移行した。その結果、二重に区画溝を巡らし、東に四脚門を持つ古代の［居宅］あるいは［館］と推定される遺構を検出した。

調査区北東側では古代の遺構とともに古墳を検出した。古墳は８基確認され、特に第２・５号古墳では墳丘盛土の一部を残し、墳丘の周囲に埴輪列が巡ることが明らかとなった。

南側では、他の場所と比べて遺構が相対的に少なく古代の溝跡が中心であった。

調査区の西側、北東側、南側の調査過程で下層より古墳時代前期、弥生時代中期の遺物が出土したので、古代の遺構、古墳の調査が終了後、重機により遺構面を掘り下げ、古墳時代前期及び弥生時代中期の遺構確認を行なった。その結果、方形の溝で囲まれた古墳時代前期の集落、弥生時代中期の集落を検出した。また、調査区中央部分を北西から南東に縦断する弥生時代中期から古墳時代前期にかけての水路跡を検出した。

この水路跡を調査していたところ北端より、弥生時代中期の堰跡を伴う大規模な水利施設が発見され、多方面から注目を集めた。中央水路部分からも古墳時代前期以降の堰跡が３ヶ所検出された。中央水路部分の堰跡については、図面の作成及び遺物の取り上げを行い、調査を終了した。

また、調査期間中の10月23日の土曜日には埼玉県立埋蔵文化財センターによる遺跡見学会が開催され、500人を超す見学者があり、大盛況であった。

[平成12年度　第15次調査]

先年度未了であった弥生時代中期の住居跡・堰跡等の遺構の調査に着手した。これと並行して、調査区北側の未買収地及び西側スロープ部分の表土除去及び調査を実施した。

調査区北側は、他に比べ遺構密度が低かったものの、古代の遺構面の下層から古墳時代前期の畠跡、方形周溝墓等の多くの遺構が検出され、集中的に調査された。

また、西側のスロープ部分では、先年度調査された古代の集落が広がっていることが分かり、さらに下層からは古墳時代前期・弥生時代中期と合計３面に亘る遺構面が確認された。

ここでは、古墳時代前期及び弥生時代中期の遺構面から河川跡が検出された。調査は、河川跡に直行するようにトレンチを設定し行なった。調査区が狭いのと河川跡のため覆土に多量の水分を含み、調査は難航した。河川跡中央付近から河川に沿うように堤状の盛土（護岸跡）が検出された。河川跡については、1.8ｍほど掘り下げたが底には至らなかった。壁の崩壊の危険があるためそれ以上の調査は行なわなかった。

調査区の北西側では、同様に河川跡及びこれに伴う護岸跡を検出した。ここは、先に述べたスロープ部分にまして地盤が軟弱で調査は困難であった。河川跡は、スロープ部分と同様にトレンチ調査を重点的に行い川幅と深さを把握した。

護岸跡に関しては、調査の途中でムシロ状の敷物が検出されたので、これの調査を重点的に行なった。遺存状態等が良好ではないので、10cmのメッシュを張った1×1mの木枠を作り、これをムシロ状の敷物の上におき、写真撮影を行い、これをもとに図化作業を行なった。

こうして弥生時代を含むすべての遺構の調査を終了し12月下旬に遺物・図面類の搬出、機材の撤収を行い調査事務所の撤去を完了した。

第21地点

北島遺跡第21地点の発掘調査は、第15次調査を平成12年7月19日から平成12年9月29日まで行なった。調査面積は2,250㎡である。

調査区の囲柵工事を行い重機により表土除去を開始した。調査範囲が道路幅であり狭かったが、掘削深度が深いため十分に法面をとり表土を除去した。第9地点での成果を基に慎重に表土除去をした結果、上下2面の遺構面が認められた。

第1遺構面は、古墳時代後期から平安時代を主体としていた。溝跡に関しては、第9地点との整合性を考慮して調査を行なった。遺構は残りが悪く、浅いものが多く、且つ切り合いが激しかった。河川跡に関しては、調査範囲が狭いためと、地盤が軟弱のことから、東側の肩部の調査を中心に行なった。その他の部分については、溝幅を確定することを目的としてトレンチ調査を行なった。

出水に悩まされながらも、図面作成、遺物の取り上げ等を終了し、再び重機により掘削を行なった。上面で確認された河川跡の西側では河川の氾濫原のためか遺構は検出できなかった。そのため、第2遺構面では調査区東側のみ調査を行なった。

その結果、古墳時代前期の住居跡とともに畠跡を検出した。住居跡の遺存状態はあまり良くなく、遺物は出土しなかった。遺構の図化、遺物の取り上げ終了後、機材を撤収した。調査区の埋戻しを行いすべての作業を終了した。

（2）整理・報告書の作成

整理報告書の作成事業は、平成16年度4月から開始し、平成16年度3月をもって完了した。

4月・5月　遺物の水洗、注記を行い、順次、接合復原作業に着手した。これと並行して各地点の全体図、遺構の二次原図の作成を行なった。

6月　第17地点の接合、復原の終わった遺物の実測に着手する。特に住居跡においては出土遺物が少なかったが、遺物が時期を決定する大きな要因になるので、細かなものでもできるだけ復原実測を試みた。遺構の二次原図のトレースを始めた。

7月～9月　第17地点の遺物実測とともに第19・21地点の遺物の実測を開始した。また、第17地点の木器の実測を開始した。遺物の写真撮影に備えて石膏入れ、色つけを行なった。遺構図は、全体図・住居跡・土壙のトレースがほぼ終了し、堰跡・遺物出土状態図・水田跡・畠跡のトレースを始めた。

10月　遺物実測を終了し、トレースを開始するとともに拓影の必要のあるものについて採拓を行なった。各種計測表，及び遺物観察表を作成するとともに原稿の執筆を始めた。

11・12月　遺物のトレースを終了し、版組を始めた。遺物の写真撮影を行なうとともに、遺構写真の選び出しを行なった。遺構図のトレースの微調整を行なった。12月上旬に図版作成、原稿執筆を終了し、割付を行なった。

1月～3月　入札後、3回の校正を経て、報告書を印刷、刊行した。各地点の図面、写真、遺物等を整理・分類し、収納作業を行なった。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（1）**発掘調査**（平成10～12年度）

平成10年度

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木　進
管理部	
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	長滝美智子
主任	腰塚雄二
専門調査員兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	菊池　久
調査部	
調査部長	谷井　彪
調査副部長	水村孝行
調査第二課長	杉崎茂樹
統括調査員	小野美代子
統括調査員	宮井英一
主任調査員	新屋雅明
主任調査員	田中広明
主任調査員	福田　聖

平成11年度

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓
管理部	
管理部副部長兼経理課長	関野栄一
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久
調査部	
調査部長	増田逸朗
調査部副部長	水村孝行
主席調査員（調査第二担当）	今井　宏
主席調査員（調査第五担当）	小野美代子
統括調査員	利根川章彦
統括調査員	若松良一
統括調査員	細田　勝
統括調査員	富田和夫
統括調査員	鈴木孝之
統括調査員	石井伸明
主任調査員	黒坂禎二
主任調査員	吉田　稔
主任調査員	村田章人
主任調査員	田中広明
主任調査員	福田　聖
主任調査員	岩田明広
主任調査員	渡辺清志

平成12年度

理事長	中野健一
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木卓
管理部	
管理部副部長	関野栄一
主席（庶務担当）	阿部正浩
主席（施設担当）	野中廣幸
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池久
調査部	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	石岡憲雄
主席調査員（調査第三担当）	小野美代子
統括調査員	宮井英一
統括調査員	鈴木孝之
統括調査員	赤熊浩一
主任調査員	吉田稔
主任調査員	大谷徹
主任調査員	君島勝秀
主任調査員	山本靖
主任調査員	福田聖

（2）整理・報告書刊行

平成16年度

理事長	福田陽充
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	中村英樹
管理部	
副部長	村田健二
主席	田中由夫
主任	江田和美（～6月30日）
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	菊池久
主事	海老名健（6月1日～）
主事	石原良子（6月1日～）
調査部	
調査部長	宮崎朝雄
調査副部長	坂野和信
上席調査員（資料整理担当）	磯崎一
統括調査員	鈴木孝之
主任調査員	山本靖
調査員	宅間清公

Ⅱ　遺跡の立地と環境

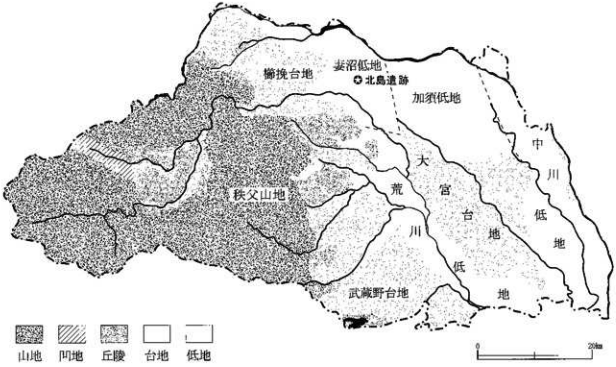
1．地理的環境

北鳥遺跡は、熊谷市大字上川上字天神森上317番地61ほかに所在する。遺跡は、ＪＲ高崎線熊谷駅の北東約３㎞に位置する。熊谷市は、埼玉県北部に位置し、現在、鉄道や国道などの幹線道路が交差する交通の要所であるとともに、政治経済をリードする中核都市である。

市域の南側には、秩父山地に源を発する荒川が東流し、新荒川扇状地（熊谷扇状地）を形成している。熊谷扇状地は、西端と南端をそれぞれ洪積扇状地の櫛挽台地と江南台地の崖線により区切られている。一方、北縁から北東縁にかけては利根川によって、形成された妻沼低地が広がっている。つまり、荒川と利根川に挟まれ、自然堤防と後背湿地とが入り組む複雑な地勢となっている。

遺跡周辺に目を転ずると、周辺は、扇状地末端部分特有の湧水点を基点とした小河川が幾筋も見られ、それにより形成された帯状の自然堤防が数多く点在する。北鳥遺跡は、これらの中の星溪園付近を湧水点とし、東流する星川の左岸の自然堤防上に立地している。現在、遺跡周辺は平坦な地形であり、田園風景が広がっているが、古代以前は、大小の河川の氾濫により侵食と堆積を繰り返し複雑な微地形を形成していたものと考えられる。

北鳥遺跡は、数次の調査により当初の遺跡の範囲を大きく上回り広がることが判った。現在は熊谷スポーツ文化公園用地内及びその周辺を含めた東西約1,500ｍ、南北約1,000ｍの広大な範囲が認知されている。従来、他遺跡として認識されてきた天神東、田谷遺跡と同一の遺跡群として今後捉えていく必要がある。



第１図　埼玉県の地形

2．歴史的環境

北島遺跡が所在する熊谷市周辺では近年多くの遺跡が調査されている。従来から行なわれてきた台地上の調査とともに、低地部での調査も進みその実態が徐々に明らかになってきている。

これまでの調査により北島遺跡では、弥生時代中期後半に本格的な集落が営まれたことが分かっている。その後も多少の空白時期はあるが、古墳時代前期、古代と大規模な集落が営まれる。

まず始めに、北島遺跡に本格的な集落が営まれる以前の周辺状況から見ていくこととする。旧石器時代では櫛挽台地の籠原裏遺跡で黒曜石製の尖頭器が出土しているだけである。

縄文時代草創期から早期にかけても遺跡の分布は希薄である。縄文時代前期になると行田市馬場裏遺跡のように本格的な集落が営まれる。その後、中期から後期にかけて、櫛挽台地の縁辺部や自然堤防上に集落遺跡が営まれるようになる。

縄文時代後期から晩期にかけては、前代と比べ相対的に遺跡数は減少するが、自然堤防上に進出した遺跡が目立つようになる。北島遺跡周辺では、池上遺跡、諏訪木遺跡、古宮遺跡が営まれる。特に諏訪木遺跡では堀之内式から安行Ⅲｃ式までの各型式が見られる。その中で最も興隆する時期は安行Ⅱ式から安行Ⅲａ式期で、豊富な土器とともに土偶・耳飾・土版・石棒などの祭祀具も出土している。石囲いの炉を持つ住居跡も多数検出され、拠点的な集落として機能していたようである。古宮遺跡は諏訪木遺跡より若干新しい安行Ⅲａ式から安行Ⅲｄ式を主体とする。住居跡は未検出だが遺物集中区からは有段口縁の粗製深鉢や天神原式土器が出土している。これらの有段口縁の粗製深鉢の多くは内面に帯状の炭化物が付着しており、当時の食料と調理方法を考える上で重要である。

晩期終末では前中西遺跡で包含層中や他時期の遺構からではあるが、浮線文土器が出土している。浮線文土器は深谷市の上敷免遺跡においても多数出土している。これらの後期から晩期を通じて見られる遺跡立地の現象は本格的な弥生時代が始まる以前に人々が低地に進出したもので興味深い。また、上敷免遺跡からは本県初となる遠賀川式土器の胴部上半の破片が出土していることも合わせて興味がもたれる。

その後は、弥生時代中期に至り、多数の遺跡が営まれる。熊谷市域では、二ヶ尻上古遺跡、平戸遺跡、横間栗遺跡が知られ、深谷市では上敷免遺跡、妻沼町では、飯塚遺跡、飯塚南遺跡、飯塚北遺跡などが知られている。飯塚遺跡を除きいずれも再葬墓群である。横間栗遺跡では一部前期末にさかのぼる資料も存在する。

池上式期になると、水稲農耕を基盤とした本格的な集落が営まれる。特に池上・小敷田遺跡では土坑墓とともに新たな墓制として方形周溝墓が採用される。また、南東北地方の南御山２式や北陸地方の小松式など遠隔地の土器が持ち込まれ、他地域との交流が盛んになる。古宮遺跡でも小松式土器が見られ、住居跡からは管玉、丸玉とともにヒスイ製の勾玉も出土している。これも他地域との交流を示すものであろう。

中期後半では熊谷市域では北島遺跡のほかに、前中西遺跡がある。またほぼ同時期の遺跡として、深谷市の宮ヶ谷戸遺跡、上敷免遺跡で住居跡が検出されている。前代で認められた他地域との交流も引き続き見られる。特に中部高地との関係がより強くなる。

北島遺跡では中期後半で集落は廃絶してしまい後期には続かないが、前中西遺跡では中期後半から後期にかけて継続して集落が営まれる。また、北島遺跡で住居跡内から小児用と考えられる土器棺墓が見つかっているが、他の墓制は不明である。一方、前中西遺跡では壺棺墓、方形周溝墓、木棺墓と異なる

第2図　周辺の遺跡

第1表　北島遺跡周辺の遺跡地名表

1	北島遺跡	10	天神遺跡	19	古宮遺跡	28	長安寺遺跡
2	田谷遺跡	11	八幡上遺跡	20	池上遺跡	29	長安寺北遺跡
3	中条条理遺跡	12	出口上遺跡	21	小敷田遺跡	30	鵜森遺跡
4	中条古墳群	13	出口下遺跡	22	藤の宮遺跡	31	奈良東耕地遺跡
5	天神東遺跡	14	肥塚古墳群	23	皿尾遺跡	32	上江袋古墳群
6	大塚古墳	15	上之古墳群	24	池守遺跡	33	原島古墳群
7	東沢遺跡	16	諏訪木遺跡	25	斉条古墳群	34	石原古墳群
8	鎧塚古墳	17	前中西遺跡	26	清巻古墳群	35	村岡古墳群
9	女塚遺跡	18	平戸遺跡	27	光屋敷遺跡		

三種類の墓制が認められる。木棺墓は中部高地との関連であろうか。出土土器は櫛描文を施文する土器が優位に立つことから中部高地、北関東との関係がより強くなったと思われる。

後期中ごろから終末にかけては、遺跡は少なく行田市池守遺跡や小敷田遺跡で遺構に伴わず吉ヶ谷式土器が少量出土している。

古墳時代前期になると遺跡数が増える。熊谷市では中耕地遺跡、根絡遺跡、横間栗遺跡、一本木前遺跡、池上遺跡、東沢遺跡、深谷市では明戸東遺跡、東川端遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、上敷免遺跡、行田市では池守遺跡、小敷田遺跡、妻沼町では弥藤吾新田遺跡が知られる。特に一本木前遺跡では、住居跡とともに方形周溝墓が4基検出されている。方形周溝墓はいずれも巨大で、一辺が11.72～17.40mを測る。第2号方形周溝墓の上体部からは、緑色凝灰岩製の管玉とともにヒスイの勾玉が出土している。東川端遺跡でも巨大な方形周溝墓が検出され、第2号方形周溝墓からは東海地方のパレス壺が出土している。

東海地方にその系譜が求められるパレス壺や高坏は北島遺跡でも数多く見られ、周辺遺跡と比べても抜きに出ている。田谷遺跡では、北陸系の甕が溝跡中より出土している。

また多くの遺跡で吉ヶ谷系の壺及び甕が土器組成の中で一定程度認められ、これとともにS字状口縁台付甕が多く認められる。妻沼低地におけるS字状口縁台付甕の定着は埼玉県内でも目立って高い。これらのことは東海地方との関係とともに弥生時代後期からの伝統で北関東との関係の強さをより一層認めることができる。

中期になると不明の点が数多くなるが、再び中期後半からは、大規模な集落が営まれるようになる。深谷市森下遺跡では和泉式期の住居跡が8軒検出された。そのうち7軒はほぼ同一時期で、大型住居跡を中心に配置されている。

後期になると遺跡はさらに増加する。熊谷市域では、櫛挽台地上の樋の上遺跡、上辻遺跡、下辻遺跡、二ヶ尻中学校遺跡、三ヶ尻天王遺跡が、妻沼低地では、一本木前遺跡、天神下遺跡などが知られる。同様に、深谷市、妻沼町域でも数多くの遺跡が認められる。一本木前遺跡では300軒以上の住居跡が検出され、住居跡同士の切り合いも激しい。河川跡の氾濫にもかかわらず、同じところに継続して集落が営まれている。また、これだけ多数の竪穴住居跡が検出されているにもかかわらず掘立柱建物跡が一棟も確認されていない。

このような古墳時代後期の大規模な集落は、その後も奈良・平安時代を通じて営まれる傾向がある。

この時期になると古墳も北島遺跡周辺で数多く造営されるようになる。北島遺跡の北には、中条古墳群が存在する。その中の一つである全長43.8mの鎧塚古墳は、帆立貝式古墳で5世紀末から6世紀初頭に築造されたと考えられる。後円部の北東側と南東側からは、墓前祭祀跡が検出されている。同様に帆立貝式古墳の女塚古墳も5世紀末から6世紀初頭に築造された古墳と考えられる。

北島遺跡の東側には、7世紀前半の築造と考えられる中条大塚古墳が存在する。過去二回にわたり調

査が行われ、径59mの基壇上に径35mの墳丘を構築した円墳であり、主体部は角閃石安山岩削石積の胴張複室構造であることが分かっている。また、隣接地で調査された田谷遺跡の古墳群とともに群を形成することが分かった。

律令国家体制が成立してくると遺跡周辺でもこれらに関する特徴的な遺跡が見られる。遺跡周辺は、武蔵国幡羅郡に属すると考えられている。幡羅郡は、現在の熊谷市西部、深谷市東部、妻沼町を含む範囲と想定されている。深谷市東部の幡羅遺跡では郡家の正倉と推定される総柱建物が検出されている。建物配列の実態こそ不明であるが、7世紀末に掘立柱建物群として整備され、8世紀中頃に礎石建物へ変わり、その後10世紀前半に再び掘立柱建物へと変遷したと考えられている。このことから成立から廃絶まで郡家が他に移転することなく存在したと考えられている。

また同遺跡の東側には、7世紀末創建とされる西別府廃寺が位置し、周辺が幡羅郡の中心域であることが分かっている。このほかには、小敷田遺跡で出挙について記された木簡が出土している。池上遺跡から9世紀代の掘立柱建物跡が検出されている。

また、市内の西別府祭祀遺跡（旧湯殿神社祭祀跡）では、遺構は検出されていないが、古墳時代後期末から平安時代末までの祭祀跡が検出された。人形・馬形・剣形・有孔円板等の石製模造品をはじめ、墨書土器などの土器が多数出土している。水場に関する祭祀のようで時代とともに地点を変えている。同様に諏訪木遺跡でも8世紀ごろの水場に関する祭祀が検出されている。奈良三彩を始め、被熱した銅鋺などの遺物が出土している。

平安時代末期から中世に入ると武蔵七党や在地武士団の館跡である中条氏館跡、成田氏館跡、熊谷氏館跡、市田氏館跡、久下氏館跡などの館跡が点在する。

北島遺跡では、各時代にわたる大規模な集落跡及び古墳が検出されたが、それ以外に大きな特徴が2つある。それは豊富な木製品の出土と治水、水利施設の検出である。これらについて周辺遺跡の様子を見てみる。

木製遺品は、池守遺跡、池上遺跡、小敷田遺跡、諏訪木遺跡、一本木前遺跡、東沢遺跡などで出土している。

これらの木製品は、河川跡や溝跡等から出土しているので、細かい時期が特定できないことが難点である。しかし種類は多様で、農具が多いのが各時代を通じての特徴である。池守遺跡では沼跡から膝柄と二又鍬身がセットで出土している。実際の使用方法を知るうえで貴重な資料である。

農具以外で特筆されるのが池守遺跡、小敷田遺跡、諏訪木遺跡から出土した壺鐙である。池守遺跡，諏訪木遺跡は古墳時代後期の、小敷田遺跡は奈良時代から平安時代の所産と考えられる。

建築材に関するものでは、池上遺跡、小敷田遺跡、諏訪木遺跡から、扉もしくはそれに関する木製品が出土している。池上遺跡では国分式期の井戸枠として扉板が再利用されている。小敷田遺跡では、古墳時代後期の溝跡中より扉板が出土している。諏訪木遺跡では、扉板と柵が河川跡から出土している。

堰跡を検出した遺跡としては諏訪木遺跡、やや離れるが、同じ妻沼低地内の岡部町岡部条理遺跡がある。諏訪木遺跡では、河川跡中から堰跡が3ヶ所検出されている。古墳時代後期の所産と考えられる。補強のために粘土とムシロ状の敷物を互層にしている点など北島遺跡の堰跡の構造と共通する。

岡部条里遺跡では平安時代の堰跡が2ヶ所検出されている。二つの堰跡は同時に機能していたと考えられている。

このように、妻沼低地一帯では、律令社会成立以前から堰跡を伴うような、治水・水利施設が少なからず認められるようになってきている。これが律令社会成立後に当地域に大規模な条里制がしかれる基盤となったのであろう。

Ⅲ　遺跡の概要

北島遺跡は、これまで熊谷市教育委員会と埼玉県埋蔵文化財調査事業団により合計22地点が発掘調査され、縄文時代から江戸時代にわたる複合遺跡であることが分かっている。また、遺跡内には河川跡が検出されており、これらの河川跡を推定ルートで結ぶと北島遺跡は現状で大きく３地点に分けられる。

第９・21地点で検出された南西から北東に延びる河川跡の北西側、第19地点を中心とする北東側、第13・14・16地点を中心とする南側である。これらを便宜上、北西区、北東区、南区と呼称する。

弥生時代では、北東区の第19地点で灌漑施設を伴う大規模な集落が検出されている。集落が営まれる以前の時期では南区の第14地点で再葬墓が検出されている。また、遺構は検出されていないが、縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器が出土している。北西区では遺構は見つかっていない。

弥生時代後期の集落は、今のところ未検出であるが、第17・19地点から水田跡や水路に伴い土器が見られることから、周辺に集落が存在すると考えられる。

古墳時代前期では北東区の第19地点で方形の溝で区画された集落が検出され、水路を挟んだ対岸では方形周溝墓群が検出されている。

南区では第12地点で住居跡が検出されている。道路幅の調査であるため全貌はつかめていないが、住居跡に切り合いが見られることから、かなりの数の住居跡が存在するであろう。また、これとは別に４～５軒を一単位とする住居跡群が第17地点などで検出されている。北西区ではほとんど遺構は見つかっていない。

古墳時代中期では該調査部分全体で住居跡は数軒に過ぎない。

古墳は北東区で検出されているだけである。その初現は第19地点第８号墳で、周溝から出土した土師器から前期後半ないし末葉に比定される。多くは、６世紀代の築造であると考えられている。

古墳時代後期鬼高式期の遺構は、他の時期に比べ少ない。これは、この少ない住居群から古代以降の大集落が形成されるのか、あるいは他の未調査地点に大規模な集落が営まれるのかは今後の調査に負うところが大きい。

７世紀から９世紀になると北西区では住居跡とともに掘立柱建物跡が検出されている。さらに細かく見てゆくと７世紀代は第４・５・７地点で主体的な集落が営まれる。８世紀から９世紀にかけては、第２～８地点にかけて住居跡と掘立柱建物跡からなる集落が営まれる。第３地点では、掘立柱建物跡は伴わず東側で住居跡のみが検出されている。このように時期により集落の中心部分が多少移動している。

北東側では、７世紀代後半以降住居跡、掘立柱建物跡ともに増え９世紀後半まで持続する。７世紀末から８世紀前半には第19地点の南側に道路跡が築かれる。９世紀代には二重の溝で方形に区画された館跡が築かれる。この区画溝には四脚門が伴う。

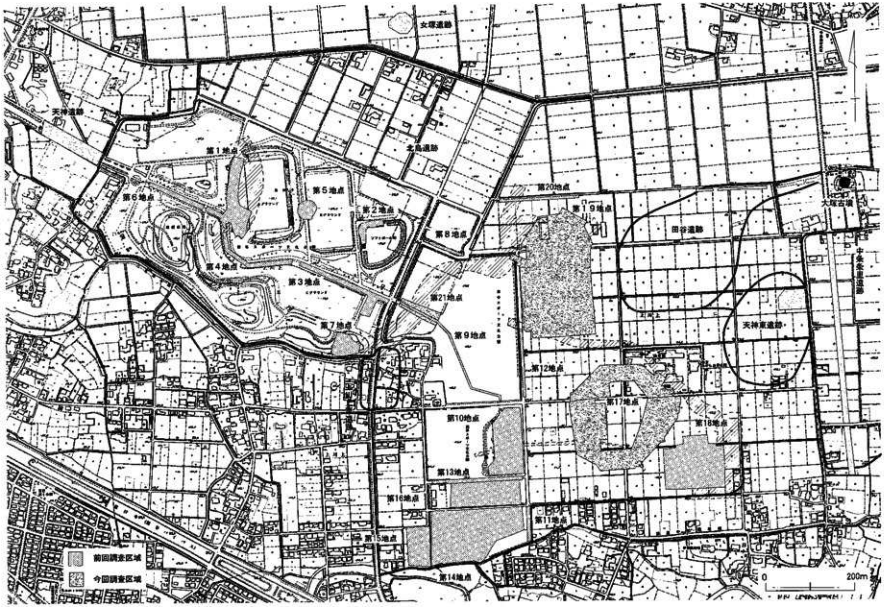
南側の第13・14・16地点でも８世紀以降掘立柱建物跡と住居跡が検出されている。掘立柱建物跡は、コの字に配置されている。

10世紀以降は、北東区で少数の住居跡と土壙、溝跡が検出されている。

これらの遺構のほかに、第17地点では、弥生時代中期後半、弥生時代後期から古墳時代前期及び平安時代の水田跡が検出されている。第18地点では、平安時代以降の水田跡が検出されている。

第17・19・20・21地点では、古墳時代前期以降の畠跡が検出されている。また低地という特性から各地点から豊富な木製品と、古代以降の井戸跡が多数検出されている。

以上のように北島遺跡ではその集落跡だけでなく墓域、生産域が検出され、当時の暮らしが立体的に復原できる貴重な遺跡である。



第3図　北島遺跡及び周辺遺跡のこれまでの調査

Ⅳ　第17地点の調査

1．第17地点の概要

第17地点において検出された遺構は、弥生時代中期後半から近世に及ぶが、本報告では、古墳時代前期の遺構と遺物に限り掲載する。弥生時代中期の遺構と遺物については、『北島遺跡Ⅶ』で既に報告されている。古墳時代後期以降の遺構と遺物については『北島遺跡XII』に報告されるのでそれぞれ参考にしてもらいたい。

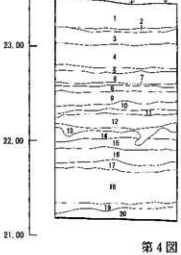
本地点は、第19地点の南東側に位置し、陸上競技場建設に先立ち調査された。スタンド等の構造物部分の調査を主体とし、中央のフィールド部分を除外した略楕円形の調査区となっている。第19地点とは、東流する河川跡により立地を異にする。この河川跡は、F区でその右岸が検出されている。南側には、第18地点が位置し、調査から古墳時代前期は沼沢地であることが分かっている。つまり本地点は、東西に細長く延びる自然堤防上に立地している。調査区内には、若干の起伏があるが概ね北から南に向かい傾斜している。後述のように第107号溝跡付近に谷が東西方向に入り、その南側が高くなっている。本地点の標高は23.60m前後である。

調査区内の基本土層は20層からなる。所々に火山灰が認められることから大まかな時代が把握できる。本報告に直接かかわる部分は第8～13層である。第8・9層では、榛名二ツ岳起源の火山灰が認められる。第11層は、洪水層で浅間C火山灰を含む。間の第10層では、古墳時代前期の遺物とともに弥生時代後期の土器破片が出土しているが、これは洪水などでもたらされたものと考えられる。第11層が明確に調査区全域で確認されたわけではないが多くの遺構は、この層の下より検出された。

検出された遺構は、住居跡15軒、竪穴状遺構1基、土壙32基、ピット57基、溝跡32条、堰跡2ヶ所、河川跡1ヶ所、水田跡、畠跡である。

遺構の多くは、調査区北側及び東側のA区、C区、F区に集中している。南側のD区、E区では、住居跡と溝跡が少数認められる。西側のB区に至っては南端で住居跡と、土壙が少数認められるのみである。

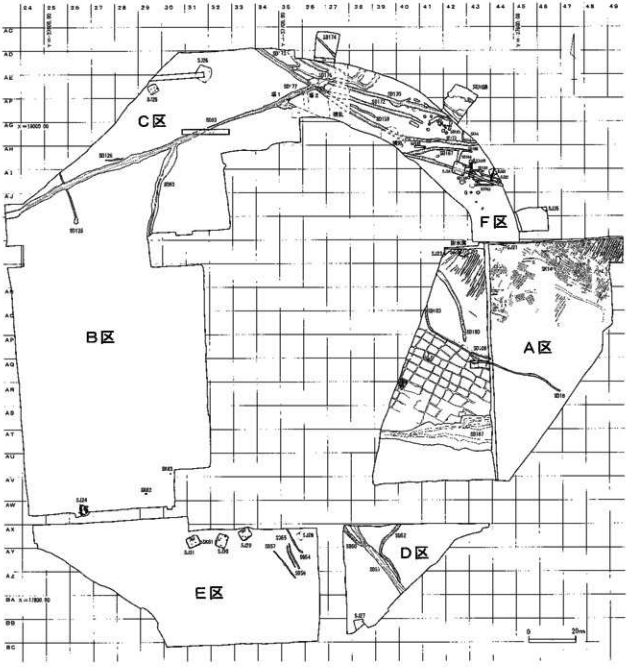
住居跡は、調査区の北東側と南西側の二つの分布がみとめられる。住居跡の平面形態も異なる。特にE区で検出された住居跡3軒は、他の区に比べ遺存状況が良好である。土壙及び溝跡は、C区及びF区を中心に検出された。水田跡と畠跡はA区、F区で検出された。遺構の分布が希薄な部分をはさみ分かれて分布している。



基本土層

1	黄褐色土	浅間A火山灰多量、表土
2	暗灰黄色土	浅間A火山灰層
3	淡褐色土	中近世水田層
4	オリーブ褐色土	中世鉄滓層
5	黄灰色土	浅間B火山灰多量
6	灰オリーブ色土	浅間B火山灰2次堆積層
7	黄灰色土	古代遺構埋土層
8	暗灰色土	鼠土質シルト、榛名二ツ岳火山灰含む
9	暗灰色土	榛名二ツ岳火山灰多量
10	褐灰色土	
11	黄灰色土	洪水層、浅間C火山灰多量
12	暗灰色土	水田土壌
13	黄灰色土	洪水層、弥生時代中期～後期包含層
14	灰色土	洪水層、弥生時代中期包含層
15	灰色土	弥生時代中期水田十畦(上面)
16	灰色土	弥生時代中期水田土畦(床土含む)
17	灰色土	洪水層
18	暗色土	
19	暗緑灰色土	
20	灰色土	

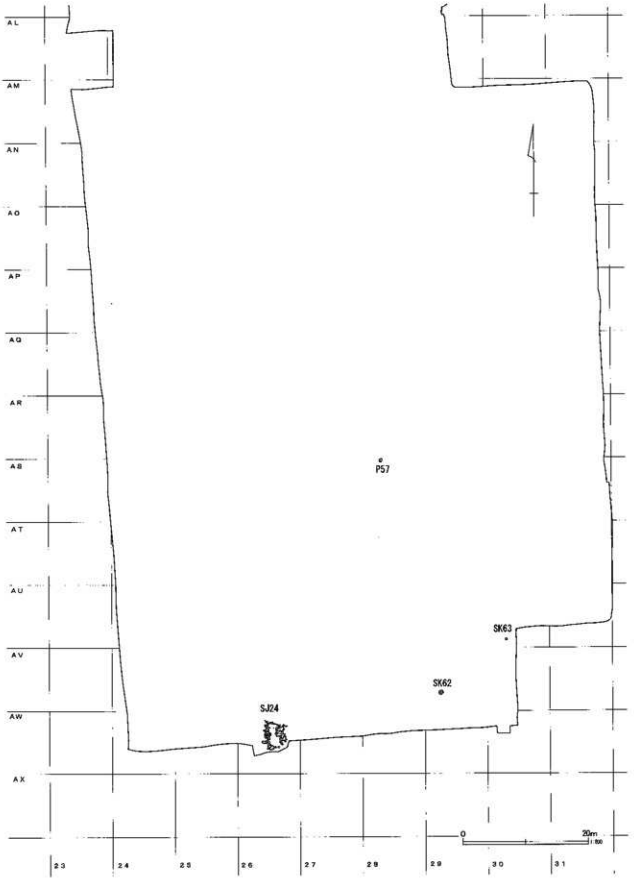
第4図　第17地点基本土層



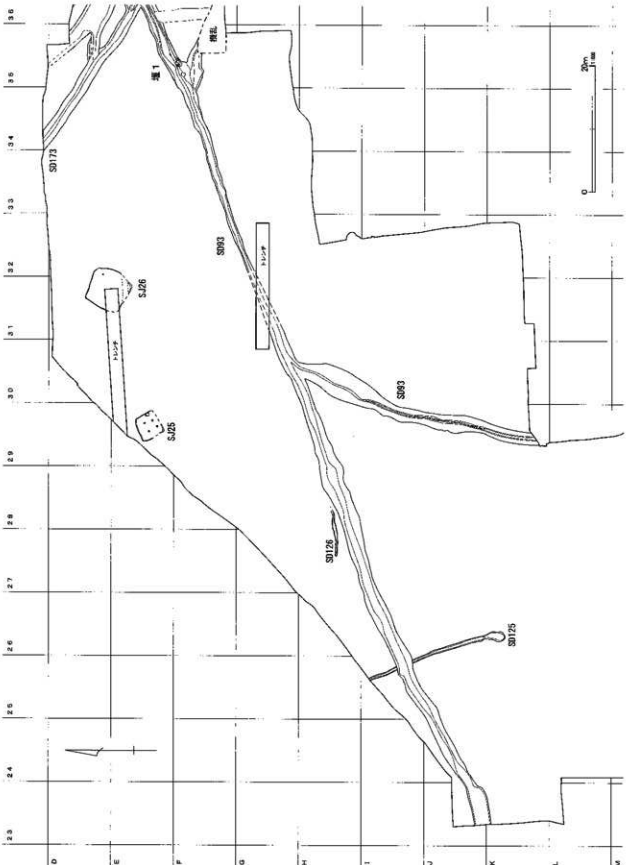
第５図　第17地点全体図

39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
AJ
AK
AL
AM
AN
AO
AP
AQ
AR
AS
AT
AU
AV
AW
AX
SJ23
SJ22
SJ21
SK14
SD180
SD103
SD108
SD18
SD107
0
20m

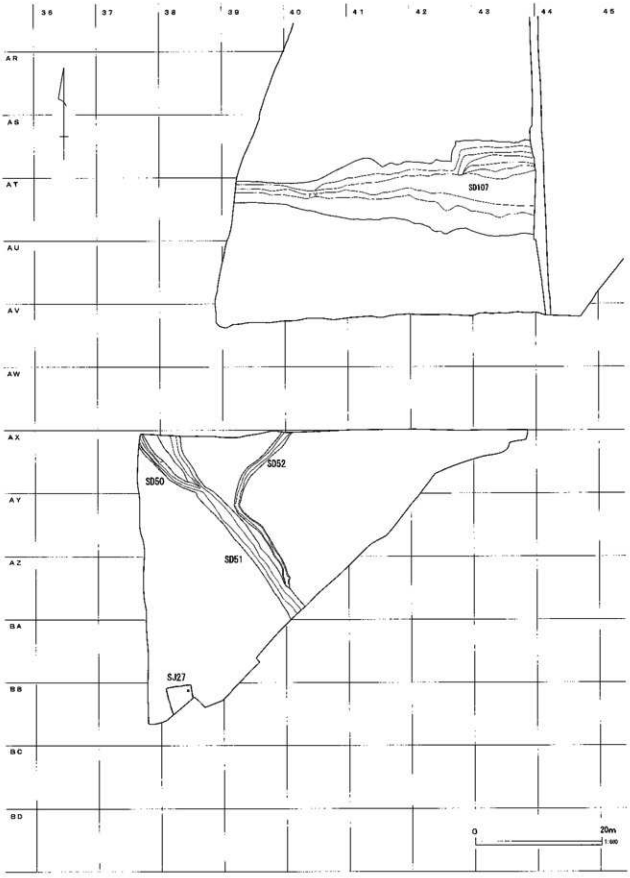
第6図　A区全体図


AL
AM
AN
AO
AP
AQ
AR
AS
AT
AU
AV
AW
AX
P57
SK63
SK62
SJ24
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
20m
1:100

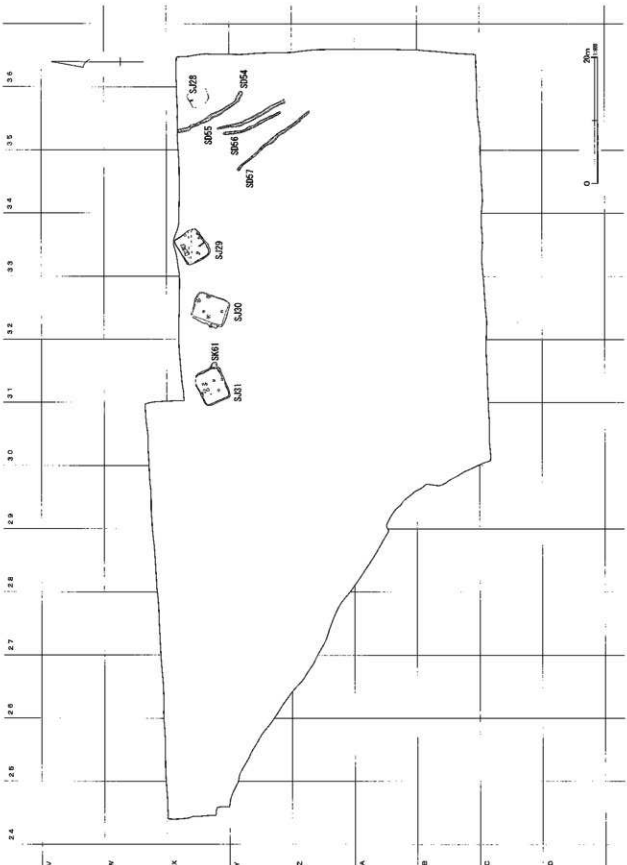
第７図　Ｂ区全体図


AD
AE
AF
AG
AH
AI
AJ
AK
AL
AM
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
SB173
SB126
SB125
SB093
SB063
SB125
SB126
SB125
堀1
PAL
トレンチ
トレンチ
0
20m
1:100

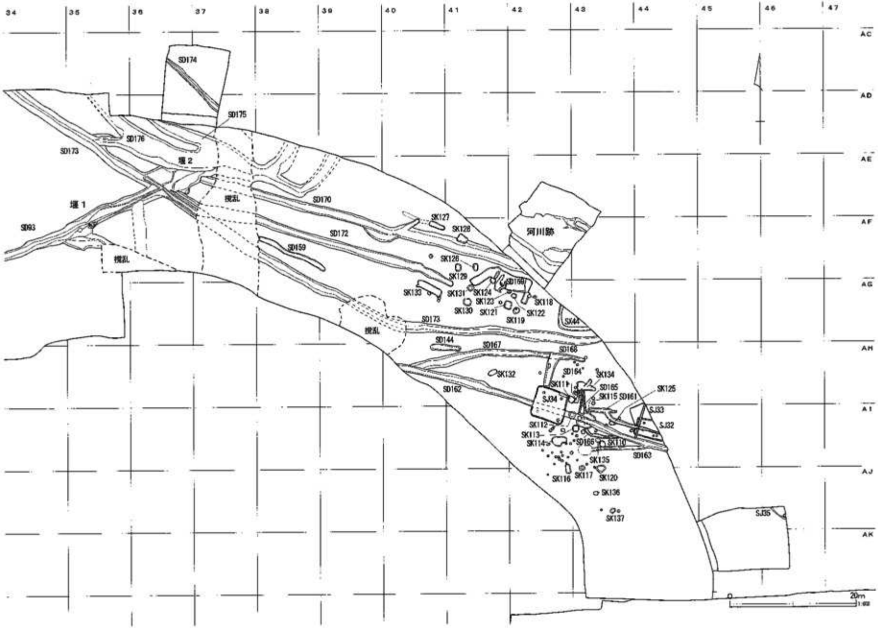
第8図　C区全体図


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
AR
AS
AT
AU
AV
AW
AX
AY
AZ
BA
BB
BC
BD
SD107
SD50
SD52
SD51
SJ27
0
20m
1:400

第9図　D区全体図


SJ28
SD54
SD55
SD56
SD57
SJ29
SJ30
SK61
SJ31
0
20m
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
AV
AW
AX
AY
AZ
BA
BB
BC
BD

第10図　E区全体図


34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
AC
AD
AE
AF
AG
AH
AI
AJ
AK
SD174
SD175
SD176
SD173
堰2
堰1
SD93
撹乱
SD170
SD172
SD159
SK127
SK128
河川跡
SK126
SK129
SD160
SK133
SK131
SK124
SK123
SK118
SK130
SK121
SK122
SK119
SX44
SD144
SD167
SD168
SD164
SK132
SK134
SD165
SK115
SD161
SK125
SD162
SJ34
SJ33
SJ32
SK112
SK113
SK114
SD166
SK110
SD163
SK135
SK116
SK117
SK120
SK136
SK137
SJ35
20m

第11図　F区全体図

2．古墳時代前期の遺構と遺物

（1） 竪穴住居跡

第21号住居跡（第12図）

第21号住居跡は、A区北側のＡＬ44グリッドで検出された。僅かに南東隅部が捉えられたに過ぎず、大半は調査区外である。そのため平面形態・規模等は不明である。

ピット・ｶﾏ等も確認されていないが、壁溝を持つことから住居跡と認識した。壁溝は、南壁側の一部で確認され、幅0.15ｍ、深さ0.06ｍである。

図示できる遺物は出土していない。

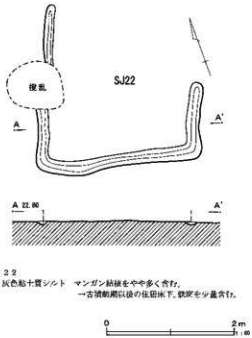
第12図 第21号住居跡

第22号住居跡（第13図）

第22号住居跡は、A区北端のＡＬ42グリッドで検出された。後世の攪乱により、壁が壊されているので壁溝のみの確認である。

壁溝は全周せず、北側と東側の一部で確認できない。壁溝は北西側でやや細くなる以外は幅、深さともに一定で、それぞれ0.10ｍと0.04ｍを測る。壁溝から推定される住居跡の規模は、長軸2.80ｍ以上、短軸2.80ｍで、南北に長い長方形を呈すると考えられる。ｶﾏ、ピット等は確認できなかった。

図示できる遺物は出土していない。



第13図 第22号住居跡

第２表 第17地点 住居跡・竪穴状遺構新旧対応表

区	新番号	旧番号	グリッド	区	新番号	旧番号	グリッド
A	ＳＪ21	ＳＪ46	ＡＬ44	E	ＳＪ29	ＳＪ49	ＡＸ33
A	ＳＪ22	ＳＪ54	ＡＬ42	E	ＳＪ30	ＳＪ50	ＡＸ32
A	ＳＪ23	ＳＪ55	ＡＬ41・42	E	ＳＪ31	ＳＪ51	ＡＸ31
B	ＳＪ24	ＳＪ52	ＡＷ26	F	ＳＪ32	ＳＪ72	ＡＩ44
C	ＳＪ25	ＳＪ53	ＡＥ29	F	ＳＪ33	ＳＪ73	ＡＩ43・44
C	ＳＪ26	ＳＪ57	ＡＤ・ＡＥ31	F	ＳＪ34	ＳＪ74	ＡＨ・ＡＩ42
D	ＳＪ27	ＳＪ47	ＢＢ38	F	ＳＪ35	ＳＪ75	ＡＪ46
E	ＳＪ28	ＳＪ48	ＡＸ35	F	ＳＸ44	ＳＸ6	ＡＧ42・43

第23号住居跡（第14図）

第23号住居跡は、A区北端のＡＬ42グリッドで検出された。南東隅付近を検出したに過ぎず大半は調査区外である。壁溝が検出されたことから住居跡と認識した。

図示できる遺物は出土していない。

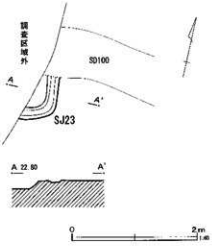
第24号住居跡（第15図）

第24号住居跡は、B区南端のＡＷ26グリッドで検出された。住居跡からやや離れた西側で土壙が、北東側でピットが見られる以外は該期の遺構は検出されていない。

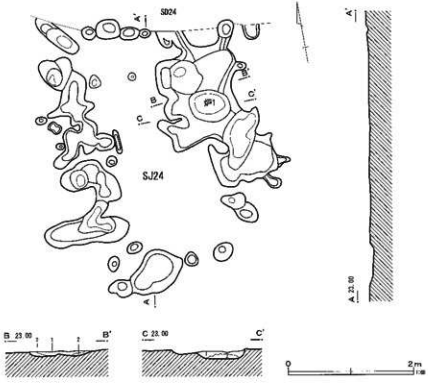
壁や壁溝は確認されず、掘方のみの検出である。炉を持つことから住居跡と認識した。掘方の規模は、4.22×4.00ｍほどである。

炉は西側で検出され、0.64ｍ×0.50ｍほどで地山を掘り込み構築されたものである。炉床は被熱し、赤化している。

図示できる遺物は出土していない。

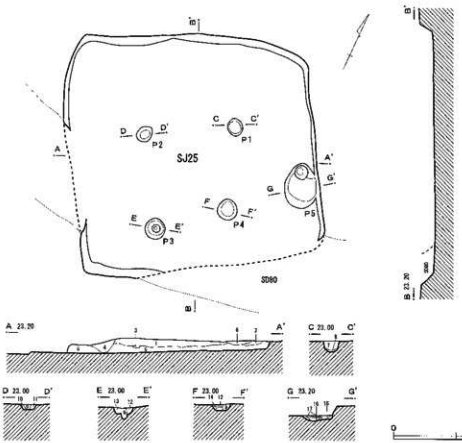


第14図　第23号住居跡



ＳＪ２４
1　赤橙色シルト　砂がまじる。炉床、地山を埋う。
2　褐灰色シルト　軽上がまじる。炉床下の地山が被熱した部分。

第15図　第24号住居跡



SJ25

1	暗褐色土	コーヒー色に近い鉄斑を多量に含む。灰褐色粘質土をやや多く含む。微土、炭化物を少量含む。やや砂質だがしまりよい。	7 暗灰褐色土 鉄斑を多量に含む。灰褐色粘質土(2層土か?)を塊状に多量に含む。マンガン結核を少量含む。
2	暗灰褐色土	鉄斑をやや多く含む。地土を少量含む(一部ブロック状)。やや砂質でしまりよい。	8 灰褐色土 鉄斑をややを含む。
3	暗灰褐色土	鉄斑、地土をやや多く含む。やや砂質でしまりよい。	9 灰褐色土 鉄斑を多量に含む。黒褐色土をやや多く斑状に含む。やや砂質でしまりよい。
4	褐黄色土	鉄斑を多量に含む。マンガン結核を少量含む。やや粘性あり。	10 暗灰褐色土 鉄斑をやや多く含む。灰褐色土を少量含む。粘性ややあり。
5	暗灰褐色土	コーヒー色に近い鉄斑を多量に含む。やや砂質。地土、炭化物をやや少量含む。やや粘性あり。	11 灰褐色土 鉄斑、黒褐色土を少量含む。粘性ややあり。
6	褐褐色土	鉄斑を多量に含む。地土をやや多く含む。やや砂質だがしまりよい。	12 灰黄色土 灰色粘土ブロックと黄褐色シルトブロックの混合層。
			13 灰色土 3層よりブロック大きいが基本は同じ。
			14 地山の黄色シルト
			15 灰色粘質シルト A＝C様石、鉄、マンガン結核、炭化物を少量含む。
			16 灰黄色粘土質シルト A＝C様石、炭化物を少量含む。
			17 黄灰色シルト質粘土 地山土、鉄、マンガン結核を少量含む。

第16図　第25号住居跡

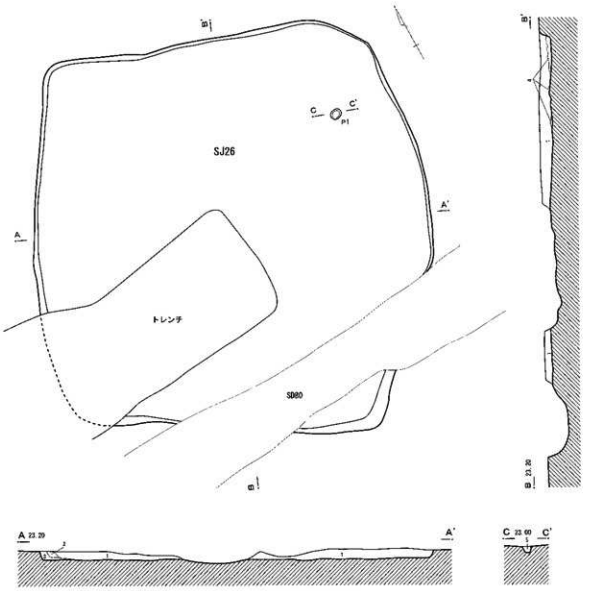
第25号住居跡（第16図）

第25号住居跡は、C区中央北側のＡＥ29グリッドで検出された。第80号溝跡により東南壁と南西隅部を切られる。第26号住居跡の西側、約18mのところに位置している。

平面形態は、北壁が緩い弧状を描くが、概ね長方形を呈する。規模は、長軸3.96m、短軸3.75m、深さ0.21mで長軸方位はN－15°－Wである。壁は平坦な床面から垂直に立ち上がる。壁溝・カ|は確認できなかった。

ピットは５ヶ所で確認され、P1が径0.25m、深さ0.17m、P2が径0.25m、深さ0.10m、P3が径0.32m、深さ0.18m、P4が径0.34m、深さ0.10m、P5が0.72×0.56m、深さ0.08mである。掘り込みは浅いがP1～P4が配置から考えて主柱穴であろう。P5は平面形と壁際に位置することから貯蔵穴の可能性がある。床面直上から少量の土師器片が出土している。

図示できる遺物は出土していない。



第17図　第26号住居跡

第26号住居跡（第17図）

第26号住居跡は、C区北側のＡＤ・ＡＥ31グリッドで検出された。試掘トレンチにより南西隅部を、第80号溝跡により南東隅付近をそれぞれ壊されている。第25号住居跡の東側、約18ｍのところに位置している。

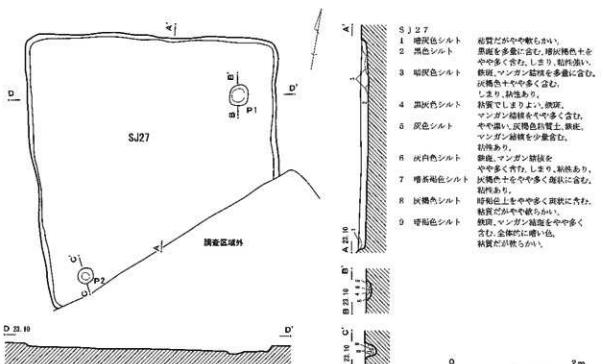
平面形態は、不整方形で北東壁が弧を描くように張り出す。規模は、4.76×4.50ｍほどである。北東隅付近で、径0.16ｍ、深さ0.10ｍのピットが確認されている。壁溝・竈は確認できなかった。

遺物は、１～３が出土した（第18図）。１は口縁部だけの残存であるが、台付甕であると思われる。口唇部を平坦に仕上げている。２は甕で口縁部が肥厚する。３は高坏の脚部で外側に短く屈曲する。

第18図　第26号住居跡出土遺物

第３表　第26号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(16.0)	[4.7]	－	H	不良	にぶい橙色	5以下	外面胴部縦位ハケ　内面胴部工具ナデ
2	土師甕	(12.8)	[4.2]	－	K H	普通	浅黄橙色	5	¥o3　内面に折り返し部分有り
3	土師高坏	－	[2.9]	(8.0)	A E	普通	にぶい橙色	5以下	¥o3　脚部　薄手



第19図　第27号住居跡

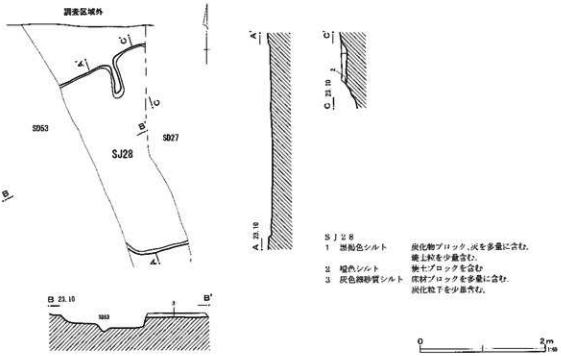
第27号住居跡（第19図）

第27号住居跡は、Ｄ区南側端のＢＢ38グリッドで検出された。南側は調査区外へと延びる。周辺には該期の住居跡は確認されていない。

平面形態は、長方形を呈し、規模は、長軸4.40ｍ、短軸4.00ｍで、深さ0.12ｍである。長軸方位はＮ－30°－Ｗである。

ピットは北東隅付近と南西隅付近の２ヶ所で確認され、P1が径0.30ｍ、深さ0.07ｍ、P2が径0.25ｍ、深さ0.19ｍである。炉・壁溝は、確認できなかった。

図示できる遺物は出土していない。



第20図　第28号住居跡

第28号住居跡（第20図）

第28号住居跡は、E区北東端のAX35グリッドで検出された。第29・30・31号住居跡群の東側に位置する。古代の第27・53号溝跡に半分以上を切られているため平面形態、規模は不明である。

北壁付近の床面で焼土ブロックと炭化物の集中が認められる。近くに炉があった可能性がある。ピット・壁溝などは、確認されていない。

図示できる遺物は出土していない。

第29号住居跡（第21図）

第29号住居跡は、E区北側のAX33グリッドで検出された。本跡と第30・31号住居跡は、それぞれ6mほどの距離を保ち存在する。本跡は、その一番東側に位置する。

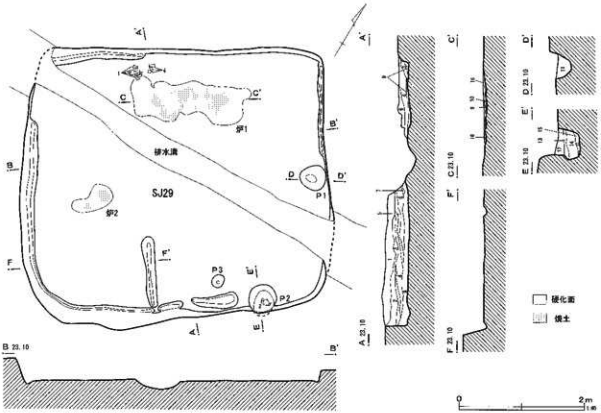
平面形態は、長方形を呈する。規模は長軸4.92m、短軸4.14m、深さ0.40mである。壁は南隅付近が斜めに立ち上がる以外は、ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－30°－Wである。

壁溝は、北西壁側、東側隅、南西壁側の一部で途切れ、全周しない。総じて北東壁側の壁溝が幅狭である。また、南東壁中央やや西側に壁溝に直交する溝が認められる。間仕切りのための溝と考えられる。ピットは、3ヶ所で認められ、P1が径0.42m、深さ0.23m、P2が径0.46m、深さ0.38m、P3が径0.22m、深さ0.18mである。配置から見ても、主柱穴と呼べるものではない。P1、P2は住居の出入りの施設に関するピットと考えられる。

炉は、2基確認された。いずれも不整形を呈する。炉2では浅いが皿状の掘込みが認められるが、炉1は、掘込みが認められない。炉1では焼土ブロック、灰、炭化物が集中する部分を、大まかに炉と捉えた。

硬化面は炉の周辺を中心に住居の北西側に認められる。

遺物は、1～4が出土した（第22図）。1は青ヶ谷系の甕で、胴部下半以下を欠損する。残存する全面に単節LRを横位に施文する。2は樽系の小型の甕で、口縁部が波状を呈する。口縁直下から胴部上半に6本一単位の櫛描波状文が逆時計回りに下から上へ施文される。3は台付甕の口縁部である。4は



SJ29

1	灰色砂質シルト	鉄滓を多量に含む。火山灰、炭化物、マンガン結核を少量含む。
2	灰～暗灰色シルト	マンガン結核を多量に含む。炭灰を少量含む。
3	灰色シルト	火山灰をやや多く含む。炭化物、鉄滓を少量含む。マンガン結核を多量に含む。
4	暗灰色シルト	火山灰、炭化物をわずかに含む。
5	灰～暗灰色シルト	焼土、炭化物、鉄滓、マンガン結核を少量含む。火山灰混合にやや多く含む。鉄滓、マンガン結核を少量含む。
6	灰色シルト	火山灰、炭化物、鉄滓、マンガン結核を少量含む。
7	灰～ビンク灰色火山灰	神尾に近い A ～ C。
8	黒灰色シルト	炭化物を多量に含む。焼土、火山灰を少量（A　C）含む。
9	黒色シルト	焼土を少量含む。炭化物主体の炉覆土。地山小ブロックまじる。
10	黒色シルト	炭化物のみから成る層に焼土ブロックがまじる。覆土
11	炭色粘土質シルト	地山ブロックと炭色シルト、赤土ブロックの混合層。炭化物を少量含む。
12	暗灰色粘土質シルト	地山ブロック、炭化物を多量に含む。A s　C火山灰を少量含む。覆土2～3層の入り込んだもの。
13	炭色粘土質シルト	地山ブロックと炭色シルトブロックの混合層。鉄滓を多量に含む。炭化物を少量含む。
14	炭灰色粘土質シルト	地山ブロックに炭色シルト小ブロックがまじる。鉄滓を多量に含む。炭化物を少量含む。
15	黒灰色粘土質シルト	地山ブロックに黒色土（炭化物主体で炭色シルトを少量含む）が多量にまじる。鉄滓を少量含む。
16	オンジ色粘土質シルト	焼土化した粘土。良好に被熱している。しまりあり。

第21図　第29号住居跡

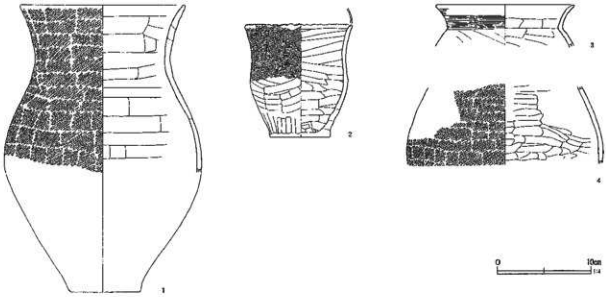
1と同じく青ヶ谷系の甕の胴部破片である。単節LRを横位に施文する。

第30号住居跡（第23・24図）

第30号住居跡は、E区北側のAX32グリッドで検出された。本跡と第29・31号住居跡は、それぞれ6mほどの距離を保ち存在する。本跡はその中央に位置する。北隅は調査区外のため調査できなかった。

平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸5.57m、短軸4.44m、深さ0.53mである。主軸方位はN－22°－Eである。北西壁で住居の立ち上がりが、崩落のため緩やかになる以外は垂直に近く掘り込みも深い。

ピットは、2ヶ所で確認され、P1が0.51×0.42m、深さ0.48m、P2が0.46×0.38m、深さ0.26m。両ピットともやや不正円形である。東壁付近に位置するP1は、覆土の下層から火山灰と思われる灰白色粘質土が検出されている。P1、P2ともに柱痕は認めら



第22図　第29号住居跡出土遺物

第４表　第29号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(16.1)	[18.0]	－	DEH	不良	にぶい黄橙色	15	古ヶ谷系　単節ＬＲ
2	土師甕	(11.8)	12.4	6.3	AD	不良	にぶい橙色	50	No20　樽系　６本一単位　波状文見づらい
3	土師壺	(14.8)	[4.5]	－	AEH	普通	にぶい褐色	5以下	外面横位ハケ
4	土師甕	－	[8.6]	－	DE	良好	にぶい黄橙色	5	古ヶ谷系　単節ＬＲ

れないことから、柱は抜かれたものと考えられる。

貯蔵穴は、北東隅付近で検出された。規模は長軸0.68ｍ、短軸0.50ｍ、深さ0.64ｍである。覆土中から炭化米が出土している。

炉は、西壁よりと、南壁よりの２ヶ所から検出された。炉１が0.64×0.59ｍ、炉２が0.47×0.41ｍで、いずれも不整形で皿状の浅い掘り込みである。焼土は少なく底面もあまり硬化していない。炉２の直上から甕（７）が出土している。壁溝は、認められない。

遺物は、１～15が出土した（第25・26図）。１は吉ヶ谷系の壺の胴部破片である。単節ＲＬを帯状に施した後、外面全面を赤彩している。２は器壁が非常に薄い鉢の口縁部であると考えられる。内外面赤彩される。３は有段口縁の壺の口縁部で内外面が赤彩される。４は小型壺の胴部から底部にかけての破片で丁寧にミガキを施す。５は甕で口唇部に縄文を施文する。６は鉢の底部で内外面が赤彩される。７は甕で胴部下半に輪積痕が明瞭に残る。赤彩時のミガキによりハケ目がつぶれて見づらいところがある。

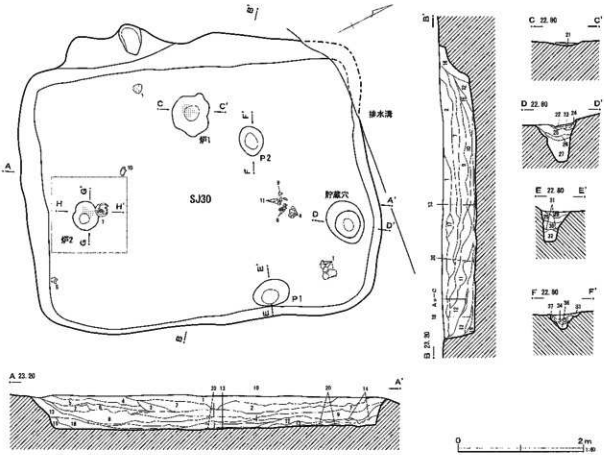
８・９・11～14は吉ヶ谷系の破片である。９・11・12は同一個体と考えられる。14は壺の胴部上半の破片であろう。10は壺の胴部破片で網目状文を施文する。無文部は赤彩される。

15は台石と考えられる。中央部分に使用痕が残る。扁平な断面形を呈する。

第31号住居跡（第27図）

第31号住居跡は、Ｅ区北側のＡＸ31グリッドで検出された。本跡と第29・30号住居跡は、それぞれ６ｍほどの距離を保ち存在する。本跡はその一番西側に位置する。南東隅部分を第61号土壙に切られる。

平面形態は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸5.41ｍ、短軸4.44ｍ、深さ0.46ｍである。主軸方位



SJ30

1 灰色シルト質細砂　マンガン結核を多量に含む。FA(?)。
シルトブロック、鉄斑を少量含む。

2 灰色細砂質シルト　シルトブロックと地山ブロックの混合層。
鉄斑を多量に含む。マンガン結核を少量含む。

3 オリーブ灰色細砂質シルト　多量の地山ブロックと少量のシルトブロックの混合層。
鉄斑を多量に含む。マンガン結核を少量含む。

4 灰色シルト質細砂　地山ブロック主体の混合層。マンガン結核を多量に含む。シルトブロック、鉄斑を少量含む。

5 灰色シルト質細砂　地山ブロック主体の混合層。シルトブロック、鉄斑、マンガン結核を少量含む。

6 灰色細砂質シルト　多量のシルトブロックと少量の地山ブロックの混合層。鉄斑を多量に含む。

7 灰色細砂質シルト　地山ブロック主体の混合層。シルトブロック、鉄斑を多量に含む。

8 オリーブ灰色シルト質細砂　As－C火山灰、シルトブロックを多量に含む。

9 灰色細砂質シルト　地山ブロックを少量含む。黒色シルトの斑状堆積あり。

10 灰色シルト　As－C火山灰、As－C軽石を多量に含む。
As－C火山灰を含む。

11 灰色シルト　地山ブロックを多量に含む。As－C軽石を少量含む。黒色シルトの斑状堆積あり。

12 オリーブ灰色シルト　As－C火山灰、As－C軽石を多量に含む。
シルト中に地山ブロックの崩落上あり。

13 暗灰色シルト　As－C火山灰、As－C軽石を多量に含む。
焼熱落ち?炭化粒子を多量に含む。
As－C火山灰を含む。

14 灰色シルト　炭化粒子をやや多く含む。As－Cを少量含む。

15 暗灰色シルト　炭化物をやや上部に密集に多量に含む。
As－C斑状にやや多く含む。

16 灰色シルト　焼熱落ち?鉄斑をやや多く含む。

17 灰～暗灰色シルト　鉄斑を多量に含む。FA?状のハロ状粒子を
斑状にやや多く含む。マンガン結核を少量含む。

18 灰色粘土質シルト　地山小ブロック、鉄斑を多量に含む。炭化物を少量含む。

19 灰色粘土質シルト　地山ブロックと暗灰色シルトブロックからなる層。
炭化物を少量含む。

20 黒色土　火山灰まじり炭化物層。
炭化物層上面にAs－C火山灰堆積層。

21 黒色土　炭化物と炭を主とした粘質土。
底面付近に焼土混多い。やや軟らかい。

22 暗灰～黒灰色シルト　炭化土粒子、鉄斑をやや多く含む。

23 暗灰色シルト　灰色粘土、鉄斑をやや多く含む。マンガン結核を少量含む。

24 灰褐色シルト　灰色十(火山灰?)を多量に含む。鉄斑がやや多く含む。
黒色土粒子を少量含む。しまりあり。

25 灰色シルト　鉄斑、マンガン結核を多量に含む。
炭化物、黒色土粒を少量含む。

26 暗灰～灰色シルト　炭化物をやや多く含む。灰色粘質十粒子。
鉄斑を少量含む。

27 黒色土　炭と炭化物を主体とした粘質土。黒炭色粘土を多量に含む。
炭化物中には炭化米、植物繊維等が多量に含まれる。
水が大量に含まれ、やや膨潤あり。粘りもある。

28 暗灰色シルト　灰色粘土質(火山灰かり)粒子を多量に含む。
鉄斑、炭化物をやや多く含む。

29 灰～暗灰色シルト　鉄斑を多量に含む。暗灰色土をやや多く含む。
マンガン結核を少量含む。

30 暗灰色シルト　1層より黒い。炭化物、灰色粘土質を少量含む。
鉄斑、マンガン結核をごく少量含む。

31 灰褐色土　黒色土粒、鉄斑を少量含む。

32 黒灰～暗灰色土　炭化物、焼土を少量含む。層の中ほどに
火山灰斑の白色粘質土の斑状堆積あり。

33 黒灰色シルト質土　炭化物を多量に含む。灰色土粒子(火山灰か?)。
灰褐色土をやや多く含む。鉄斑、マンガン結核を少量含む。

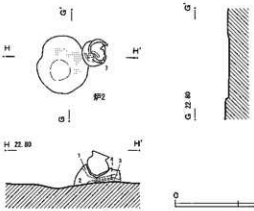
34 暗灰色シルト　炭(炭)色粘質土を多量に含む。鉄斑、
マンガン結核をやや多く含む。

35 黒色シルト　炭化物を多量に含む。暗灰色粘質土を少量含む。

36 灰褐色シルト　暗灰色土、鉄斑をやや多く含む。マンガン結核を少量含む。

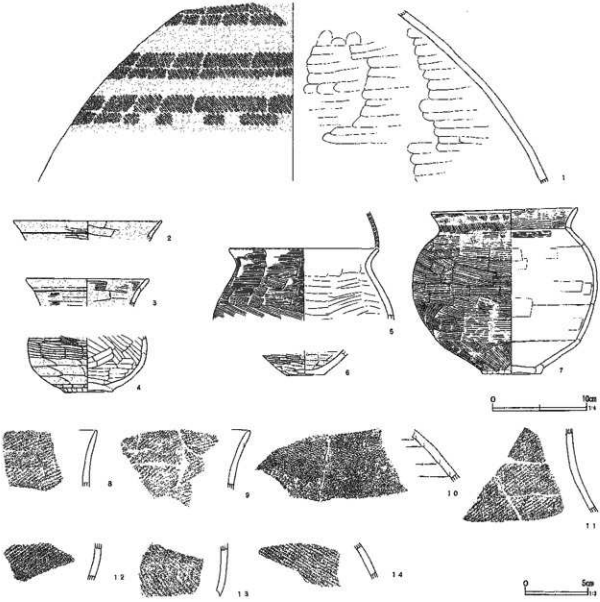
37 灰色シルト　マンガン結核を多量に含む。地山か?黒色土粒子、
鉄斑を少量含む。

第23図　第30号住居跡

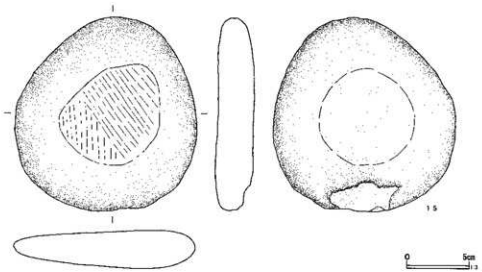


SJ30 壁のトの覆土
1 灰色シルト　黒色土を少量含む。鉄斑、マンガン結核を少量含む。粘性強い。住居十層の9層に対応か？
2 暗灰色シルト　鉄斑、マンガン結核をやや多く含む。炭色土を少量含む(大山灰？)。住居十層の13層に対応か？
3 黒色シルト質　炭化物を多量に含む。炭色土(大山灰？)。鉄斑を少量含む。粘性やや強い。
4 黒灰色シルト　炭化物、炭色土(大山灰)を少量含む。粘性やや強い。

第24図　第30号住居跡炉2



第25図　第30号住居跡出土遺物（1）



第26図　第30号住居跡出土遺物（2）

第５表　第30号住居跡出土遺物観察表（第25・26図）

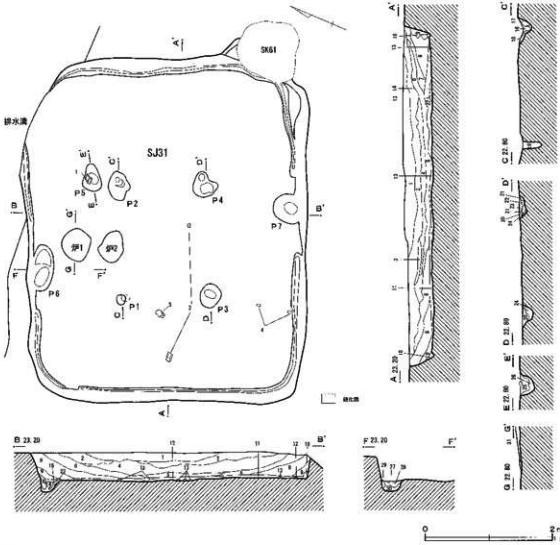
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	—	[18.8]	—	A H	良好	浅黄橙色	10	No.20　単節ＲＬ　全面赤彩　内面横位のナデ
2	土師鉢	(16.0)	[2.1]	—	H	良好	浅黄橙色	5以下	床面直上　有段口縁　外面横位ミガキ　内外面赤彩
3	土師ほ口壺	(13.2)	[2.9]	—	A E H	普通	にぶい黄橙色	5以下	床面直上　Ｐ2付近　折り返し状口縁　内外面赤彩
4	土師壺	—	[5.8]	4.8	D H	良好	明褐灰色	15	No.17　外面赤彩　横位ハケ調整ミガキ
5	土師甕	(16.0)	[7.5]	—	G H	普通	にぶい橙色	5	No.1　縄文施文　外面全面　横位ハケ調整　内面工具ナデ
6	土師鉢	—	[2.6]	4.0	A E H	普通	にぶい黄橙色	10	No.1　内外面赤彩
7	土師甕	15.5	17.5	6.3	E G I J L	良好	橙色	85以上	外面全面及び口縁部内面赤彩
8	土師甕	—	—	—	C E H	普通	明赤褐色		No.18　単節ＬＲ　縄の端部が見える内面強いヨコナデ
9	土師甕	—	—	—	E H	普通	明褐色		No.18　単節ＬＲ　口縁部一番最後に施文
10	土師壺	—	—	—	E J	普通	橙色		No.6　赤彩　内面に４段の外面横ミガキ　輪積痕が残る内面ナデ
11	土師甕	—	—	—	E H	普通	明褐色		No.18　単節ＬＲ　縄の端部が見える
12	土師甕	—	—	—	G H K	良好	明褐色		単節ＬＲ　貯蔵穴出土
13	土師甕	—	—	—	A E G J	良好	にぶい橙色		単節ＲＬ　０段多条　内面横ナデ
14	土師壺	—	—	—	B E H	良好	明褐色		単節ＲＬ　貯蔵穴出土
15	白石	—	—	—					No.7　閃緑岩　長さ15.3cm　幅14.4cm　厚さ3.1cm　重さ1020ｇ

は、Ｎ－64°－Ｅである。壁は北東壁、南東壁がやや緩やかに立ち上がる以外はほぼ垂直に立ち上がり掘り込みも深い。

壁溝は、北壁側の中央やや西側と南壁側の中央部分で途切れる。途切れた部分の中央にはそれぞれ浅いピットが存在した。P7は位置から考えて出入口部に関する跡と考えられる。

ピットは、前述のものを含め７ヶ所確認された。規模は、P1が径0.17ｍ、深さ0.30ｍ、P2が0.46×0.36ｍ、深さ0.20ｍ、P3が0.38×0.32ｍ、深さ0.19ｍ、P4が径0.38ｍ、深さ0.09ｍ、P5が0.46×0.29ｍ、深さ0.22ｍ、P6が0.72×0.34ｍ、深さ0.18ｍ、P7が径0.48ｍ、深さ0.16ｍである。極端に深いP1を除き掘り込みは概して浅いが、配置から考えてP1～P4が主柱穴にあたるであろう。柱痕は、確認できなかった。ピットは平面形が乱れるものや、テラスを持つものがあることから、柱を抜き取るときに形が変わった可能性がある。

炉は、２基確認された。いずれもP1とP2をむすんだラインの北側に位置する。炉１が0.51×0.43ｍ、



SJ31

1 オリーブ灰色シルト質細砂 FA(?)、鉄斑、マンガン粒状を多量に含む。地山ブロック(オリ・ブ灰色シルト)を少量含む。

2 暗灰色細砂質シルト シルトブロックと地山ブロックのまじる混合層。鉄斑を少量含む。

3 暗灰色細砂質シルト シルトブロックと地山ブロックの混合層。鉄斑を少量含む。

4 オリーブ灰色細砂質シルト シルトブロックが地山ブロックにまじる混合層。鉄斑を少量含む。

5 灰色シルト シルトブロックに地山ブロックのまじる混合層。鉄斑を少量含む。

6 オリーブ灰色シルト シルトブロックと地山ブロックの混合層。A s－C火山灰を少量に含む。A s－C軽石、鉄斑を少量含む。

7 オリ ブ灰色シルト シルトブロックに地山ブロックのまじる混合層。A s－C火山灰を多量に含む。A s－C軽石、鉄斑を少量含む。

8 灰色シルト シルトを下位に地山小ブロックのまじる混合層。炭化物を多量に含む。

9 オリーブ灰色シルト シルトブロックのまじる地山崩落土。

10 暗灰色シルト 硬材炭化材、有機質を含む。

11 黒色土 炭化物を多量に含む。炭土、火山灰をブロック状に少量含む。鉄斑を少量含む。

12 褐灰色シルト 鉄斑、マンガン粒状をやや多く含む。植土、炭化物、火山灰を少量含む。軟性強い。

13 灰色シルト 灰褐色粒質し(炭層の上か?)、鉄斑、マンガン粒状をやや多く含む。

14 暗灰シルト 灰褐色土と黒色土が縞状に混じる。炭化物、鉄斑を少量含む。

15 暗灰色シルト 灰褐色土、鉄斑を少量含む。

16 暗灰色シルト質土 炭化物、鉄斑、マンガン粒状を多量に含む。炭色結質を少量含む。

17 暗灰～黒灰色シルト質土 炭化物を多量に含む。炭色結質土、鉄斑を少量含む。

18 灰色シルト 炭色結質土を多量に含む。鉄斑を多量に含む。黒色土を少量含む。

19 黒灰色粘質土 炭化物、鉄斑をやや多く含む。

20 暗灰～黒灰色シルト 炭化物をやや多く含む。火山灰、炭色土を少量含む。

21 暗灰色シルト 炭化物をやや多く含む。黒色土を含む。炭色土、鉄斑を少量含む。

22 灰色シルト 鉄斑、マンガン粒状をやや多く含む。炭化物を少量含む。

23 暗灰色シルト 炭化物を多量に含む。黒色土、鉄斑粒状をやや多く含む。

24 灰褐色シルト 鉄斑、マンガン粒状を多量に含む。

25 暗灰色シルト質 炭化物を多量に含む。灰褐色土、鉄斑、マンガン粒状をやや多く含む。

26 灰色シルト 地山土(?)、鉄斑、マンガン粒状を多量に含む。

27 暗灰シルト マンガン粒状をやや多く含む。火山灰、黒色土を少量含む。

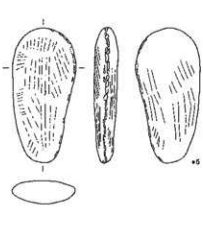
28 灰シルト マンガン粒状をやや多く含む。炭化物、鉄斑を少量含む。

29 灰～暗灰シルト 炭化物をやや多く含む。鉄斑、マンガン粒状を少量含む。

30 灰褐シルト 鉄斑、マンガン粒状を多量に含む。炭化物を少量含む。

31 黒色シルト質 炭化物を非常に多量に含む。植土を少量含む。やや軟らかい。

第27図 第31号住居跡



第28図　第31号住居跡出土遺物

第６表　第31号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(13.2)	[6.1]	—	AH	良好	明褐灰色	5	№20　縦位ハケ後ナデ
2	土師壺	—	[12.5]	(9.8)	ADE	普通	明褐灰色	5	内面ナデ　底部ヘラナデ　外面赤彩
3	土師台付甕	—	[5.9]	9.8	ABCDG	良好	明褐灰色	15	№6　台部　底部充填
4	土師高坏	—	[6.5]	—	AB	良好	浅黄橙色	60	№3　1mをこえる石英を多量に含む　内外面赤彩
5	磨石	—	—	—				100	砂岩　長さ10.7cm　幅5.1cm　厚さ1.9cm　重さ131g

炉２が0.48×0.41ｍで、平面形態は、共に楕円形を基調とする。掘り込みは浅い皿状である。炉周辺には硬化面が認められる。

遺物は、１～５が出土した（第28図）。１は壺の口縁部である。２は壺の胴部から底部にかけての破片である。外面が赤彩される。３は台付甕の台部で、端部はハケ調整される。４は高坏の接合部で外面全体と坏部内面が赤彩される。

５は磨石で側面に敲打痕が見られる。

第32号住居跡（第29図）

第32号住居跡は、Ｆ区南東端のＡＩ44グリッドで検出された。第161号溝跡に切られ、第33号住居跡を切る。東側は調査区外へと続く。

平面形態は、長方形を呈する。規模は、長軸4.21ｍ以上、短軸3.00ｍ、深さ0.27ｍである。長軸方向を主軸と考えるとその方位は、Ｎ－16°－Ｅである。床面には若干の凹凸が見られる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝は全周すると考えられる。幅は、北壁側で広く、西壁側では狭い。深さは0.05ｍほどである。

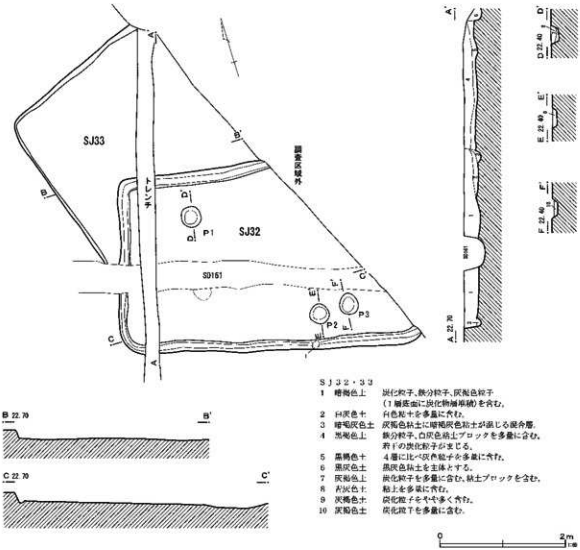
柱穴は３ヵ所で確認され、P1が径0.34ｍ、深さ0.14ｍ、P2が径0.34ｍ、深さ0.06ｍ、P3が径0.33ｍ、深さ0.6ｍである。炉は確認できなかった。

遺物は、１の壺の底部が出土した（第30図）。底部外面に木葉痕がある。

第33号住居跡（第29図）

第33号住居跡は、Ｆ区南東端のＡＩ43・44グリッドで検出された。南側を第32号住居跡に切られる。東側は調査区外へと続く。

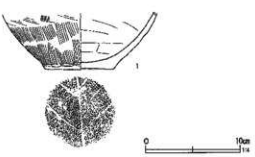
平面形態は、長方形を呈すると考えられる。規模は、長軸2.91ｍ以上、短軸2.80ｍ以上、深さ0.20ｍである。西壁側を主軸と仮定すれば、その方位はＮ－20°－Ｗである。床面には若干の凹凸が見られる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット・壁溝・炉



第29図　第32・33号住居跡

第７表　第32号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	—	[6.0]	7.4	DEH	普通	にぶい黄橙色	5	No.1 底面木葉痕　外面縦位ハケ　内面上良ナデ



第30図　第32号住居跡出土遺物

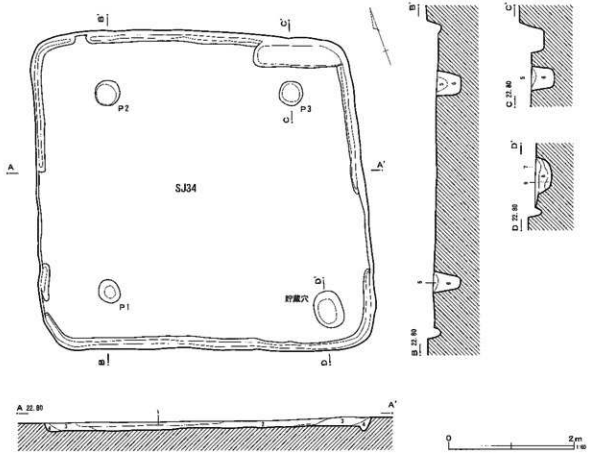
は、確認できなかった。

図示できる遺物は出土していない。

第34号住居跡（第31図）

第34号住居跡は、F区南側のＡＨ・ＡＩ42グリッドで検出された。第162号溝跡を切る。

平面形態は、東側辺が歪むがほぼ方形を呈する。規模は、長軸5.28ｍ、短軸5.04ｍ、深さ0.14ｍである。長軸方向を主軸とするとその方位は、N－71°－Wである。壁はほぼ水平の床面から垂直に立ち上が



SJ34

1 灰褐色土　炭化粒子、炭色粘土粒子を少量含む。
2 灰褐色土　炭化粒子、明灰色粘土粒子を少量含む。
3 暗灰黒色土　炭化粒子、明灰色粘土粒子を多量に含む
4 暗灰褐色土　炭化粒子を微量含む。
　明灰色粘土小ブロックを少量含む。
5 灰褐色土　明灰色粘土粒子を少量含む。
　炭化粒子を微量含む。
6 灰褐色土　明灰色粘土粒子を多量に含む。
　炭化粒子を少量含む。
7 暗灰褐色土　炭化粒子を少量含む。
8 明灰褐色土　暗灰色粘土小ブロックを少量含む。
　炭化粒子を微量含む。
9 明灰黒色土　暗灰色粘土が層状に堆積する。

第31図　第34号住居跡

る。

壁溝は、幅、深さともに一定で、それぞれ0.15m、0.08m前後である。全周せず、所々で途切れる。特に東西辺の中央から南側にかけて大きく途切れる。どちらかが入口部であろう。

ピットは、3ヶ所で確認された。ほぼ円形で、直径0.40m、深さ0.40m前後である。柱痕が確認できないことから、柱は抜き取られたものと考えられる。

貯蔵穴は、平面的な位置からP1～P3と共に主柱穴と考えられたが、他の3つの柱穴と比べ、規模が大きいことと、擂鉢状の掘り込みであることから貯蔵穴と判断した。規模は0.60×0.46m、深さ0.27mである。

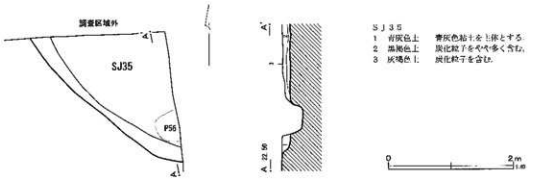
住居跡の北東隅で深さ0.20mほどの長方形の掘り込みが認められる。住居に伴うものであるが性格は不明である。炉は確認できなかった。

図示できる遺物は出土していない。

第35号住居跡（第32図）

第35号住居跡は、F区南端のAJ46グリッドで検出された。深さは、0.13mである。大部分が調査区外へ続くので規模や主軸方位は不明である。壁溝などの住居跡に伴う施設は、確認できなかった。

図示できる遺物は出土していない。



第32図　第35号住居跡

（2） 竪穴状遺構

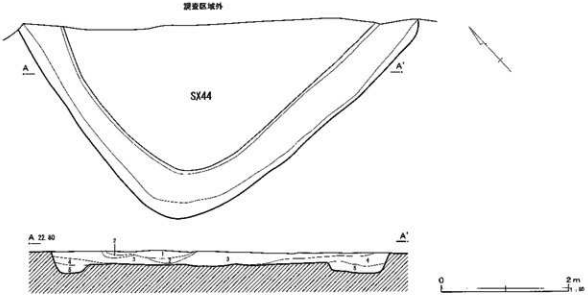
第44号竪穴状遺構（第33図）

第44号竪穴状遺構は、F区中央東端のAG42・43グリッドで検出された。全体の半分以上が、調査区外であり、南西隅が検出されたに過ぎない。ただ、南壁を見ると南東側が僅かながらも丸みを持つことからコーナーが近いと考えられる。壁は、斜めに直線的に立ち上がる。

検出された規模は、東西4.90m、南北3.60m、深さ0.48mである。

竪穴の中には壁に沿って幅0.70m、深さ0.20mの溝がめぐる。床面は、やや凹凸がみられる。住居跡の掘方の可能性が高い。

図示できる遺物は出土していない。



第33図　第44号竪穴状遺構

（3） 土壙

第14号土壙（第34図）

第14号土壙は、A区北側のＡＬ46グリッドで検出された。平面形態は西側がやや乱れる長方形で、規模は長軸3.04ｍ、短軸1.80ｍ、深さ0.71ｍである。掘り込みは、平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はＮ－0°を示す。

遺物は、１の高坏の脚部が出土した（第38図）。器壁が肉厚である。

第61号土壙（第34図）

第61号土壙は、E区中央北側ＡＸ31グリッドで検出された。第31号住居跡を切って構築されている。平面形態は不整円形で、規模は長軸0.92ｍ、短軸0.90ｍ、深さ0.72ｍである。掘り込みは、丸みのある底面から擂鉢状に立ち上がる。長軸方位はＮ－3°－Ｗを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第62号土壙（第34図）

第62号土壙は、B区南側のＡＶ29グリッドで検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸0.70ｍ、短軸0.68ｍ、深さ0.74ｍで、柱穴状に掘り込まれている。長軸方位はＮ－90°－Ｗを示す。

遺物は、底面より２が出土した（第38図）。２は古ヶ谷系の小型の壺形土器で胴部上半に単節ＲＬの帯縄文が施文され、外面が全面赤彩される。

第63号土壙（第34図）

第63号上壙は、B区南東隅付近のＡＵ30グリッドで検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸0.38ｍ、短軸0.36ｍ、深さ0.05ｍで、浅く皿状に掘り込まれている。長軸方位はＮ－0°を示す。

図示できる遺物は出土していない。

第110号土壙（第34図）

第110号土壙は、F区中央付近のＡＩ43グリッドで検出された。南端を第163号溝跡に切られている。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸0.96ｍ、短軸0.90ｍ、深さ0.36ｍで、浅く皿状に掘り込まれたものである。長軸方位はＮ－23°－Ｗを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第111号土壙（第34図）

第111号上壙は、F区中央西側のＡＨ42・43グリッドで検出された。平面形態は不整台形を呈する。規模は長軸1.38ｍ、短軸1.06ｍ、深さ0.52ｍで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はＮ－22°－Ｗを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第112号土壙（第34図）

第112号土壙は、F区中央付近のＡＩ42・43グリッドで検出された。上面を第162号溝跡により切られる。平面形態は不整円形で、規模は長軸1.10ｍ、短軸1.08ｍ、深さ0.74ｍである。平坦な底面からやや丸みをもちながら立ち上がる。長軸方位はＮ－90°－Ｗを示す。

図示できる遺物は出土していない。

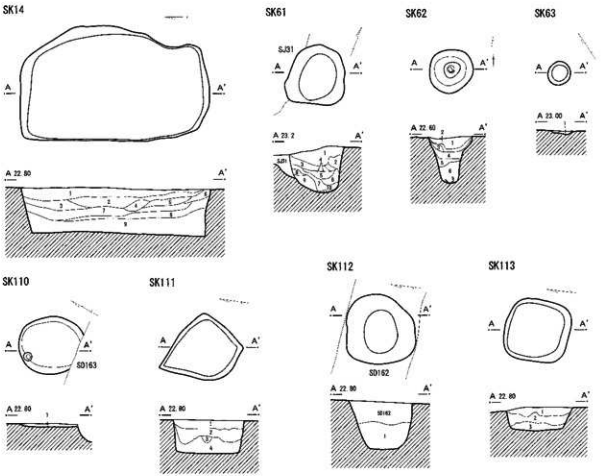
第113号土壙（第34図）

第113号土壙は、F区中央付近ＡＩ42・43グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸1.04ｍ、短軸0.98ｍ、深さ0.36ｍで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はＮ－0°を示す。

図示できる遺物は出土していない。

第114号土壙（第35図）

第114号土壙は、F区中央付近のＡＩ42グリッドで検出された。平面形態は南側が張り出す不整形を呈する。規模は長軸2.45ｍ、短軸1.50ｍ、深さ0.38ｍで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はＮ－90°－Ｗを示す。



SK14
1 灰白色土　マンガン、酸化鉄の集積著しい、A s－B を含む。
灰白色粘土ブロック（φ2～5mm）を少量含む。
2 褐灰色土　酸化鉄の凝集著しい、A s－B を含む。
炭灰色粘土ブロック（φ5～8mm）をまばらに含む。
3 黒灰色土　灰白色粘土ブロック（φ5～8cm）をまばらに含む。
締め成しか、A s－B、炭化粒子を微量に含む。
4 灰白色土　暗褐灰色土との混土層。灰白色土を主体とする。
A s－B を少量含む。
5 灰色土　灰白色粘土粒（φ1～2mm）同ブロック
（φ2～3mm）をまばらに含む。
6 黒灰色土　灰白色粘土ブロック（φ1～2cm）を多量に含む。
A s－B をまばらに含む。
7 青灰色土　灰白色粘土ブロック（φ3～8mm）をまばらに含む。
8 暗青灰色土　淡青灰色粘土ブロック（φ3～5mm）をまばらに含む。
9 淡灰色土　灰白色粒子（φ2～3mm）、マンガン集積を
多量に含む。

SK61
1 灰色土シルト質　地山ブロック、鉄斑を多量に含む。
A s－C火山灰を少量含む。
2 灰オリーブ色
シルト質土　地山崩落土。
3 灰色シルト質土　A s－C火山灰、A s－C軽石を多量に含む。
（鉄粉混在）地山小ブロック、鉄斑を少量含む。
4 灰白～
赤白色土火山灰　A s－C火山灰純層、堆積層厚。
5 暗灰色シルト質土　地山小ブロックを多量に含む。鉄斑を少量含む。
6 灰オリーブ色
シルト質土　地山崩落土。
7 灰色土シルト質　シルトブロックと地山崩落土の混土。
8 灰色セシルト質　シルトブロックと地山小ブロックの混土。
9 暗灰色土粉土質シルト　シルトに地山ブロックを少量含む。
10 黒色土　炭化した有機物層。

SK62
1 黒色土　炭化物層。
2 黒色土　炭化物層。
3 灰色土細砂質シルト　盤層崩壊土。
4 暗灰色土細砂質シルト　炭化粒子を多量に含む。
A s－C火山灰を少量含む。
5 灰土粘土質シルト　鉄斑、シルトブロックを多量に含む。
A s　C火山灰を少量含む。
6 灰オリーブ色土　中細砂まじりシルト、A s　C火山灰、
炭化粒子を少量含む。

SK63
1 灰色シルト質土　A s－B火山灰、炭化粒子を少量含む。

SK110
1 灰白シルト質土　鉄分粒子を含む。

SK111
1 灰色土　鉄分粒子、炭化粒子を含む。
2 暗灰褐色土　炭化粒子をやや多く含む。
3 灰白褐色土　2層よりやや明るく灰白色粘土を含む。
4 灰白褐色土　粘土を主体とする。

SK112
1 灰白褐色土　粘土を主体とする。

SK113
1 黒褐色土　鉄分粒子、炭化粒子を含む。
2 暗灰褐色土　炭化粒子をやや多く含む。
3 灰白褐色土　粘土を主体とする。

0　2m
1:60

第34図　土壙（1）

図示できる遺物は出土していない。

第115号土壙（第35図）

第115号土壙は、F区中央付近AI43グリッドで検出された。中央部分を第162号溝跡により切られている。平面形態は不整形を呈する。規模は長軸2.70m、短軸2.38m、深さ0.22mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－22°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第116号土壙（第35図）

第116号土壙は、F区中央付近AI・AJ42グリッドで検出された。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.52m、短軸0.80m、深さ0.38mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－10°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第117号土壙（第35図）

第117号土壙は、F区南側AJ43グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形で、規模は長軸0.90m、短軸0.72m、深さ0.58mである。掘り込みは、丸みのある底面から擂鉢状に立ち上がる。長軸方位はN－90°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第118号土壙（第35図）

第118号土壙は、F区中央のAG42グリッドで検出された。北東隅付近をピットにより切られている。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.94m、短軸0.90m、深さ0.36mで、箱状に掘り込まれている。底面は南側に傾斜している。長軸方位はN－26°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第119号土壙（第35図）

第119号土壙は、F区中央のAG42グリッドで検出された。平面形態は略円形を呈する。規模は長軸1.04m、短軸0.93m、深さ0.30mで、箱状に掘り込まれている。底面の北側が浅くピット状に掘り込まれている。長軸方位はN－90°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第120号土壙（第35図）

第120号土壙は、F区南側のAJ43グリッドで検出された。平面形態は不整台形を呈する。規模は長軸1.30m、短軸1.22m、深さ0.42mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－50°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第121号土壙（第35図）

第121号土壙は、F区中央のAG41・42グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸1.24m、短軸1.20m、深さ0.22mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－19°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第122号土壙（第35図）

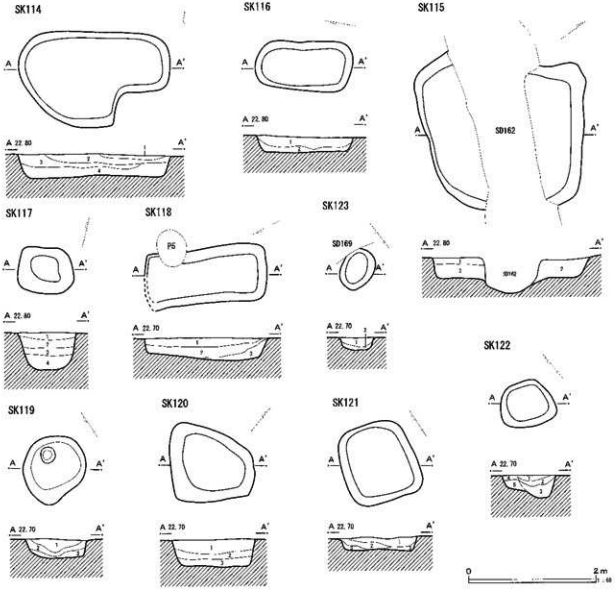
第122号土壙は、F区中央東側のAG42グリッドで検出された。土層の観察から土壙の重複あるいは、掘り返して再利用したと考えられる。平面形態は不整方形で、規模は長軸0.96m、短軸0.72m、深さ0.36mである。底面は南側が深くなっている。長軸方位はN－50°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第123号土壙（第35図）

第123号土壙は、F区中央東側のAG42グリッドで検出された。北端を第169号溝跡により切られる。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸0.76m、短軸0.50m、深さ0.20mで、皿状に掘り込まれている。長軸方位はN－56°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。



SK114
1 黄褐色土　鉄分粒子、炭化粒子を含む。
2 黄灰色土　鉄分粒子、炭化粒子を含む。炭褐粘土を混入する。
3 黄灰色土　炭化粒子、鉄土粒子を含む。
4 白灰色土　粘土を主体とする。鉄塩の炭化粒子を含む。

SK115
1 灰褐色土砂質土　鉄分粒子を含む。
2 灰褐色土砂質土　鉄分粒子を含む。

SK116
1 灰褐色土　炭化粒子を帯状に堆積する。
2 暗灰褐色土　明灰色粘土を ブロック状に含む。炭化粒子を微量に含む。

SK117
1 灰褐色土　灰色粘土、鉄分を多量に含む。
2 暗灰褐色土　炭化粒子を微量に含む。
3 暗灰褐色土　炭化粒、炭色粘土を少量含む。
4 暗灰色土　粘土、炭化粒子を少量含む。

SK118
1 灰褐色土　鉄分を多量に含む。
　灰白色粘土を少量含む。
　炭化粒子を微量に含む。
2 暗灰褐色土　炭化粒子、赤灰色粘土小ブロックを少量含む。
3 暗灰褐色土　青灰色粘土小ブロックを多量に含む。
　炭化粒子を微量に含む。

SK119
1 暗灰褐色土　灰白色粘土粒子を少量含む。
　炭化粒子を微量に含む。
2 暗灰褐色土　青灰色粘土が帯状に堆積する。
　炭化粒子を少量含む。
3 青灰色土　粘土、暗灰色粘土をブロック状に含む。

SK120
1 暗灰褐色土　明灰色粘土小ブロックを少量含む。
　炭化粒子を微量に含む。
2 明灰褐色土　砂土を帯状に堆積する。
3 暗灰色土　粘土、炭化粒子を微量に含む。

SK121
1 暗灰褐色土　炭化粒が帯状に堆積する。
2 暗灰褐色土　炭化粒子、灰白色粘土粒子を少量含む。
3 明灰色粘土

SK122
1 暗灰褐色土　鉄分を多量に含む。
　炭化粒子を少量含む。
2 暗灰褐色土　灰白色粘土を少量含む。
　炭化粒子を微量に含む。
3 暗灰褐色土　青灰色粘土粒子を多量に含む。
　鉄分粒子を微量に含む。
4 灰褐色土　炭化粒子、灰白色粘土粒子を少量含む。
5 灰褐色土　青灰色粘土粒子を少量含む。
　炭化粒子を微量に含む。

SK123
1 暗灰褐色土　炭化粒子を多量に含む。
2 暗灰褐色土　青灰色粘土小ブロックを少量含む。
3 暗灰褐色土　炭化粒子を微量に含む。
　青灰色粘土小ブロックを少量含む。

第35図　土壙（2）

第124号土壙（第36図）

第124号土壙は、F区中央東側のAF41グリッドで検出された。第169号溝跡を切って構築されていた。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸0.98m、短軸0.80m、深さ0.26mで、皿状に掘り込まれている。長軸方位はN－10°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第125号土壙（第36図）

第125号土壙は、F区中央付近のA143グリッドで検出された。北側を第161号溝跡により切られている。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.06m、短軸0.54m、深さ0.36mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－90°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第126号土壙（第36図）

第126号土壙は、F区中央のAF41グリッドで検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.82m、深さ0.18mで、皿状に掘り込まれている。長軸方位はN－8°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第127号土壙（第36図）

第127号土壙は、F区中央北側のAF40グリッドで検出された。平面形態は長楕円形を呈する。規模は長軸2.68m、短軸0.82m、深さ0.18mで、皿状に掘り込まれている。長軸方位はN－67°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第128号土壙（第36図）

第128号土壙は、F区中央北側のAF41グリッドで検出された。第170号溝跡を切って構築されている。平面形態は不整形で、規模は長軸1.62m、短軸1.30m、深さ0.24mで、皿状に掘り込まれている。長軸方位はN－55°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第129号土壙（第36図）

第129号土壙は、F区中央北側のAF41グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸1.17m、短軸0.96m、深さ0.28mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－0°を示す。

図示できる遺物は出土していない。

第130号土壙（第36図）

第130号土壙は、F区中央のAG41グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸1.22m、短軸1.16m、深さ0.25mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－75°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第131号土壙（第36図）

第131号土壙は、F区中央のAG41グリッドで検出された。平面形態は方形を呈する。規模は長軸0.90m、短軸0.86m、深さ0.36mで、箱状に掘り込まれている。長軸方位はN－50°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第132号土壙（第36図）

第132号土壙は、F区中央のAH41グリッドで検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.48m、短軸0.76m、深さ0.06mで、皿状に掘り込まれている。長軸方位はN－64°－Eを示す。

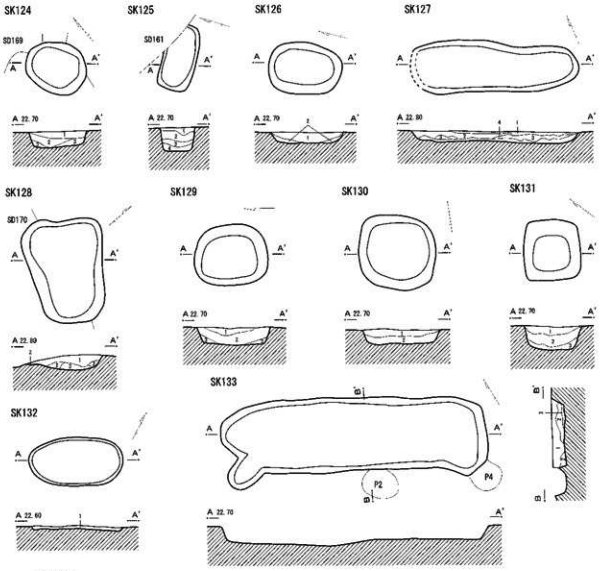
図示できる遺物は出土していない。

第133号土壙（第36図）

第133号土壙は、F区中央のAG40グリッドで検出された。平面形態は不整長方形を呈する。規模は長軸4.28m、短軸1.20m、深さ0.29mで皿状に掘り込まれている。底面にはやや凹凸が見られる。長軸方位はN－60°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第134号土壙（第37図）



SK124
1 暗灰褐色土　古灰色鉄土小ブロックを少量含む。
2 暗灰褐色土　青灰色粘土小ブロックを多量に含む。
　　炭化粒子を微量に含む。
3 暗青灰色土　青灰色粘土粒子を多量に含む。
　　炭化粒子を微量に含む。

SK125
1 暗灰褐色土　炭化粒子を微量に含む。
2 黒灰色土　鉄分粒子を含む。炭化粒子を微量に含む。
3 暗灰色土　炭化粒子、暗灰色粘土ブロックを含む。
4 白灰色土　白色粘土に鉄分粒子を含む。

SK126
1 暗灰褐色土　白色微粒子、炭化粒子を少量含む。
2 暗青灰色土　青灰色粘土を多量に含む。

SK127
1 暗灰褐色土　炭化粒子を少量含む。粘性あり。
2 明黒灰色土　酸＋鉄化物が帯状にうすく堆積している。粘性あり。
3 古灰色土　暗灰褐色土を斑状に含む。
4 青灰色土　3層に似る が暗灰褐色土を含まない。

SK128
1 暗灰褐色土　粘性あり。
2 古灰色砂質土　暗灰褐色土を斑状に含む。
3 青灰色砂質土

SK129
1 灰褐色土　炭化粒子、明灰色鉄土粒子を少量含む。
2 暗灰褐色土　炭化粒子、青灰色粘土ブロックを少量含む。
3 青灰色土　粘土、暗灰色粘土を少量含む。

SK130
1 暗灰褐色土　炭化粒子、灰色粘土ブロックを少量含む。
2 暗灰褐色土　炭化粒子、明灰色粘土小ブロックを少量含む。

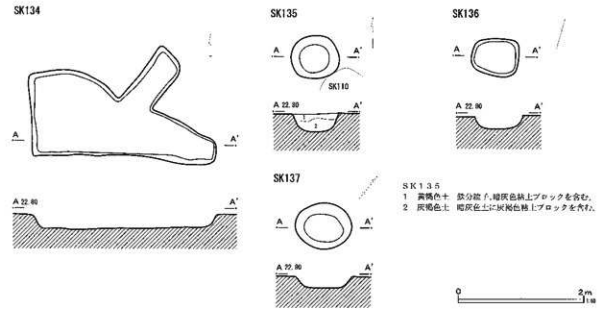
SK131
1 暗灰褐色土　炭化粒子を微量含む。明灰色粘土を少量含む。
2 暗灰褐色土　炭化粒子、青灰色粘土小ブロックを少量含む。
3 暗青灰土　炭色砂土と青灰色粘土の混合層。

SK132
1 暗灰褐色土　炭化粒子を多量に含む。粘土粒子を少量含む。

SK133
1 暗灰褐色土　炭化粒子を多量含む。
2 古灰色土　暗灰褐色土ブロックを少量含む。
3 青灰色土　2層に似る が暗灰褐色土ブロックを含まない。

0　2m
1:60

第36図　土壙（3）



第37図　土壙（4）

第134号土壙は、F区中央東側のＡＨ43グリッドで検出された。平面形態は不整形を呈する。規模は長軸2.92ｍ、短軸1.36ｍ、深さ0.22ｍで、皿状の掘り込みである。長軸方位はＮ－90°－Ｅを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第135号土壙（第37図）

第135号土壙は、F区南側のＡＩ43グリッドで検出された。平面形態は略円形で、規模は長軸0.76ｍ、短軸0.70ｍ、深さ0.28ｍである。掘り込みは、平坦な底面から擂鉢状に立ち上がる。長軸方位はＮ－0°を示す。

図示できる遺物は出土していない。

第136号土壙（第37図）

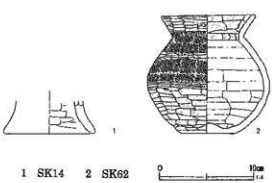
第136号土壙は、F区南側のＡＪ43グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸0.74ｍ、短軸0.62ｍ、深さ0.18ｍで、皿状の掘り込みである。長軸方位はＮ－90°－Ｅを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第137号土壙（第37図）

第137号土壙は、F区南側のＡＪ43グリッドで検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸0.91ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.19ｍで、皿状の掘り込みである。長軸方位はＮ－55°－Ｅを示す。

図示できる遺物は出土していない。



1　SK14　2　SK62

第38図　土壙出土遺物

第８表　土壙遺物観察表（第38図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師高坏	－	[3.4]	(9.8)	ＡＥＨ	普通	橙色	5	脚部の端部は丸みをもつ
2	土師壺	(10.1)	[12.7]	5.7	ＡＤＥ	良好	にぶい橙色	60	SK62　№1　平部ＲＬ　胴下半部ミガキ　外面赤彩

第9表　第17地点土壙新旧対応表

区	新番号	旧番号	グリッド	区	新番号	旧番号	グリッド
F区	SK110	SK128	AI43	F区	SK122	SK140	AG42
F区	SK111	SK129	AH42・43	F区	SK123	SK141	AG42
F区	SK112	SK130	AI42・43	F区	SK124	SK142	AG41
F区	SK113	SK131	AI42・43	F区	SK125	SK143	AI43
F区	SK114	SK132	AI42	F区	SK126	SK144	AF41
F区	SK115	SK133	AI43	F区	SK127	SK145	AF40
F区	SK116	SK134	AI42　AJ42	F区	SK128	SK146	AF41
F区	SK117	SK135	AJ43	F区	SK129	SK147	AF41
F区	SK118	SK136	AG42	F区	SK130	SK148	AG41
F区	SK119	SK137	AG42	F区	SK131	SK149	AG41
F区	SK120	SK138	AJ43	F区	SK132	SK150	AH41
F区	SK121	SK139	AG41	F区	SK133	SK151	AG40

(4)　ピット

調査では各時代を通して数多くのピットが検出された。ピットは出土遺物が少ないため、検出された遺構面を時期決定の第一の目安とした。ここで掲載するピットは古墳時代前期（五領式期）の遺構が確認された第3面で検出されたものが中心である。但し、上面の確認面で見落としたピットも若干含まれることを断っておく。ピット番号は整理作業中に新たに付けたもので総数は57基を数える。

ピットは当該期の遺構が数多く分布するF区で検出されたものがほとんどである。唯一の例外はB区で検出されたP57である。本ピットは遺物が出土したことから該期のピットとして認識した。

第10表　第17地点ピット一覧表（第39～41図）

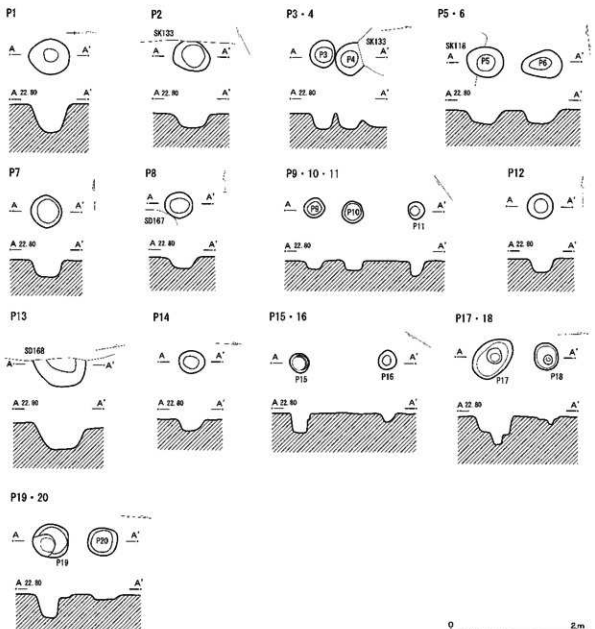
番号	グリッド	長径	短径	深さ	平面図	備考
1	AF40	0.62	0.52	0.46	第39図	
2	AG40	0.60	0.45	0.24	第39図	SK133と重複
3	AG40	0.44	0.40	0.23	第39図	
4	AG40	0.55	0.35	0.26	第39図	SK133と重複
5	AG42	0.60	0.48	0.22	第39図	SK118を切る
6	AG42	0.64	0.32	0.24	第39図	
7	AG41	0.52	0.50	0.28	第39図	
8	AH43	0.46	0.42	0.18	第39図	
9	AH43	0.31	0.30	0.14	第39図	
10	AH43	0.34	0.34	0.13	第39図	
11	AH43	0.28	0.28	0.20	第39図	
12	AH43	0.42	0.40	0.18	第39図	
13	AH43	0.80	0.45	0.35	第39図	SD167と重複
14	AH42	0.42	0.36	0.17	第39図	
15	AH42	0.32	0.30	0.31	第39図	
16	AH42	0.30	0.28	0.13	第39図	
17	AH43・AI43	0.42	0.38	0.12	第39図	
18	AH43・AI44	0.74	0.50	0.46	第39図	
19	AH43	0.50	0.44	0.08	第39図	
20	AH43	0.58	0.50	0.37	第39図	
21	AI42	0.32	0.32	0.22	第40図	
22	AI42	0.38	0.34	0.19	第40図	
23	AI42	0.48	0.46	0.24	第40図	
24	AI42	0.68	0.50	0.21	第40図	
25	AI43	0.76	0.54	0.04	第40図	
26	AI42	0.28	0.26	0.17	第40図	
27	AI43	0.42	0.40	0.05	第40図	
28	AI42・43	0.32	0.30	0.25	第40図	
29	AI42	0.30	0.28	0.18	第40図	
30	AI42	0.34	0.32	0.14	第40図	
31	AI42	0.54	0.24	0.24	第40図	
32	AI42	0.36	0.32	0.23	第40図	
33	AI42	0.52	0.48	0.26	第40図	
34	AI42	0.30	0.30	0.33	第40図	
35	AI42	0.40	0.28	0.18	第40図	
36	AI42	0.30	0.26	0.20	第40図	
37	AI42	0.36	0.34	0.29	第40図	
38	AI42	0.32	0.30	0.24	第40図	
39	AI42	0.32	0.30	0.10	第40図	
40	AI42	0.40	0.38	0.21	第40図	
41	AI42	0.40	0.38	0.20	第40図	
42	AI42	0.30	0.26	0.09	第40図	
43	AI42	0.26	0.24	0.09	第40図	
44	AI42	0.30	0.26	0.12	第40図	
45	AJ42	0.28	0.26	0.16	第40図	
46	AI43	0.26	0.26	0.07	第40図	
47	AI43	0.38	0.30	0.05	第40図	
48	AI43	0.36	0.30	0.05	第40図	
49	AI43	0.36	0.32	0.21	第41図	
50	AI43	0.56	0.26	0.18	第41図	
51	AI43	0.44	0.40	0.20	第41図	
52	AI43	0.45	0.30	0.11	第41図	SD162と重複
53	AI43	0.38	0.32	0.17	第41図	
54	AJ43	0.32	0.30	0.25	第41図	
55	AJ43	0.48	0.40	0.24	第41図	
56	AJ46	0.50	0.25	0.35	第41図	調査区外へ続く
57	AR28	0.60	0.50	0.22	第41図	遺物出土

ピットの形状は多岐に渡る。P2、P13、P24、P50のような土壌に近いもの。P15、P17、P18、P19のように柱穴状になるものなどがある。また、P24、P25、P31、P56のように平面形態が、方形、楕円形、不整形になるものが見られる。

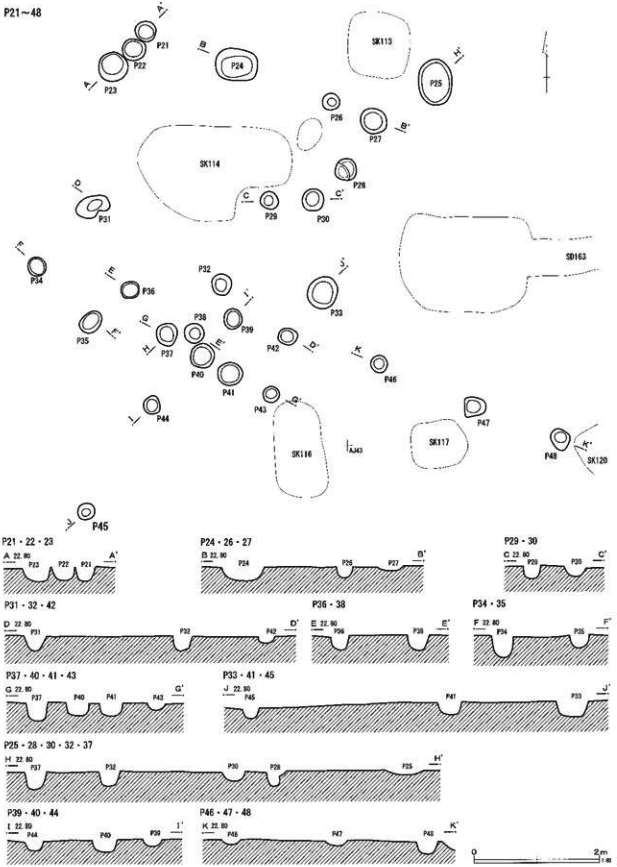
ピットは多くは単独で検出され、他のピットと関連性が不明なものが多い。但し、第40図に示したようにP21～P48は群集して検出された。等間隔にピットが並ぶもの（エレベーションラインK－K'）、等間隔ではないが一直線状に多数のピットが存在するところ（エレベーションラインG－G'、H－H'）、ピットが間隔をおかず連続するところ（A－A'）などが見られる。これらは複数のピットで柵列などの機能を果たしていたと考えられる。

第57号ピット出土土器（第42図1）

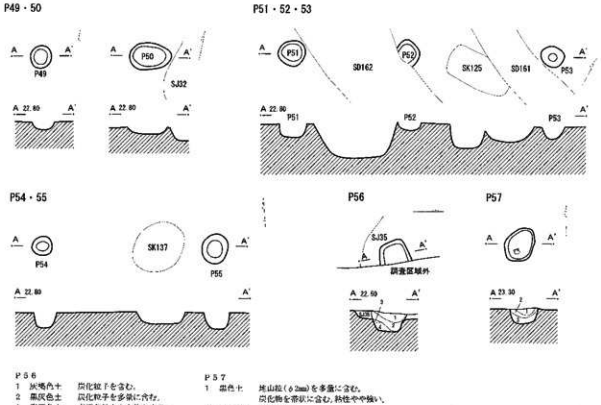
ピットの底面やや上から出土した。小型の広口壺である。頸部外面に強いヨコナデを施す。二次的に火を受けた跡がある。



第39図　ピット（1）


P21～48
SK113
SK114
SD163
SK116
SK117
SK120
P21・22・23
P24・26・27
P29・30
P31・32・42
P36・38
P34・35
P37・40・41・43
P33・41・45
P25・28・30・32・37
P39・40・44
P46・47・48
0
2m

第40図　ピット（2）



第41図　ピット（3）

第11表　ピット出土遺物観察表（第42図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	7.5	7.8	3.7	ADE	普通	にぶい黄橙色	100	P57 No.1 外面横位ミガキ 内面横位ハケ→縦位ミガキ

第42図　ピット出土遺物

(5) 溝跡

第18号溝跡（第43・44図）

第18号溝跡は、A区AQ・AR44～47グリッドで検出された。東西方向に延びる溝跡である。西側で第103号溝跡と水田跡を切る。それより西側では溝跡の掘り込みを確認することはできなかったが、本来はさらに西側に延びていたと考えられる。

検出した規模は、長さ40.6m、幅0.50m、深さ0.15mで、皿状に掘り込まれている。水田廃絶後の新たな土地利用に関する区画溝と考えられる。

遺物は、1が出土した（第45図）。1はS字状口縁台付甕である。口縁部が肉厚で、胴部最大径も胴部中ほどになる。在地で製作されたものと考えられる。

第50号溝跡（第49図）

第50号溝跡は、D区AX37・38グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝跡である。AX38グリッドで第51号溝跡と合流する。北西側は調査区外へと延びる。

検出した規模は、長さ12m、幅1.40m、深さ0.40mで、U字形に掘り込まれていた。北側の一部にテラスを持つ。溝底は北西側から東南側に向かい緩やかに傾斜している。合流地点での溝底は、第51号溝跡のそれとほぼ同じ高さである。以上のことから第51号溝跡の枝溝として同時に機能していたと考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第51号溝跡（第49図）

第51号溝跡は、D区AX～AZ38～40グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝跡である。AX38グリッドで第50号溝跡と合流する。両端は調査区外へと延びる。

検出した規模は、長さ35.80m、幅2.60m、深さ0.45mで、掘り込みは、底面から緩やかに立ち上がる。溝底は、第50号溝跡と同様に、北西側から南東側に向かい緩やかに傾斜している。

排水用の溝として機能していたと考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第52号溝跡（第49図）

第52号溝跡は、D区AX～AZ39～40グリッドで検出された。北東から南西方向に走った後、L字に屈曲し、第51号溝跡と並行した後、重複する。新旧は不明である。北東側は調査区外へと延びる。

検出した規模は、長さ30m、幅1.10m、深さ0.20mで、皿状の掘り込みである。溝底は、第50・51号溝跡とは逆に南側から北側に緩やかに傾斜している。

図示できる遺物は出土していない。

第54号溝跡（第50図）

第54号溝跡は、E区AX・AY35グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝跡である。北西側は調査区外へと続く。南側の第57号溝跡とほぼ並行する。

検出した規模は、長さ12.80m、幅0.55m、深さ0.07mで、浅い皿状の掘り込みである。溝底に傾斜は見られない。

図示できる遺物は出土していない。

第55号溝跡（第50図）

第55号溝跡は、E区AX・AY35グリッドで検出された。北東から南東に延びる溝跡である。南側の第56号溝跡と並行する。

規模は、全長11.60m、幅0.45m、深さ0.06mで、浅い皿状の掘り込みである。溝底に傾斜は見られない。

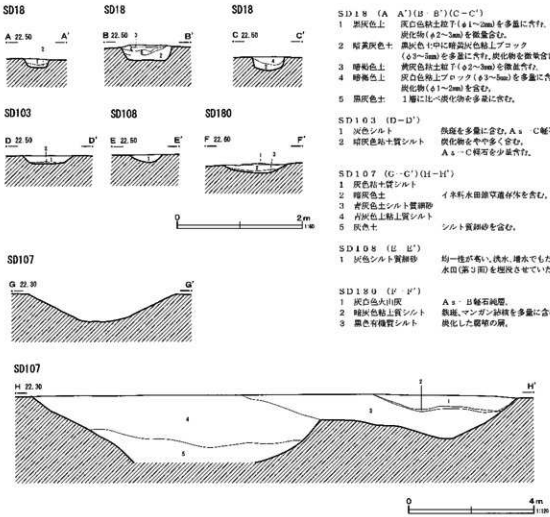
図示できる遺物は出土していない。

第56号溝跡（第50図）

第56号溝跡は、E区AX・AY35グリッドで検出された。北東から南東に延びる溝跡である。北側に

41
42
43
SJ21
SJ22
SJ23
AM
AN
AO
AP
AQ
SD103
D
D'
F
F'
SD180
E
E'
SD108
A
A'
SD18
B
B'
C
C'
排水溝
H
H'
G
G'
SD107
0
10m
40

第43図　A区溝跡（1）



第44図　A区溝跡（2）

第55号溝跡と並行する。

規模は、全長9.90m、幅0.40m、深さ0.05mで、浅い皿状の掘り込みである。溝底に傾斜は見られない。

図示できる遺物は出土していない。

第57号溝跡（第50図）

第57号溝跡は、AY・AZ34・35グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝跡である。北側の第54号溝跡とほぼ並行する。

規模は、全長14.60m、幅0.50m、深さ0.06mで、浅い皿状の掘り込みである。溝底に傾斜は見られない。

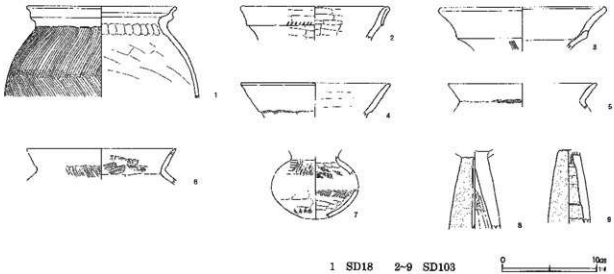
図示できる遺物は出土していない。

第93号溝跡（第46・47図）

第93号溝跡は、C区からF区にかけて検出された。F区では調査時に第173号溝跡として扱っていたが、ここでは本跡と同一のものとして記述する。

調査区の北側を北東から南西に流れる大溝跡である。検出された長さは、本溝の部分で144.30m、枝溝の部分で36.20mである。AI25グリッドで第125号溝跡と重複するが新旧は不明である。AH30グリッドで南北方向に走行方位をとり、B区へと延びる枝溝と分岐する。

枝溝は、本溝と分岐したのち、掘方が乱れ幅広になる。南に向かうにつれ、溝幅も一定となり1.83mを測る。断面形は、狭い底面からV字状に短く立ち上がった後、テラスを持ち緩やかに立ち上がる。



第45図　A区溝跡出土遺物

第12表　A区溝跡出土遺物観察表（第45図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(16.0)	[9.6]	—	ADE	普通	にぶい黄橙色	20	S字状口縁　斜位ハケ調整　6本1単位ハケ状工具
2	土師壺	(16.0)	[3.6]	—	AEH	普通	にぶい黄橙色	5以下	折り返し口縁　口縁下端に工具による刺突列
3	土師壺	(18.0)	[4.6]	—	EI	普通	にぶい褐色	5以下	有段口縁の壺　外面は丁寧なナデ
4	土師壺	(16.0)	[3.7]	—	AE	普通	にぶい橙色	5以下	複合状の口縁
5	土師台付甕	(16.0)	[2.5]	—	AE	普通	にぶい褐色	5以下	ハケ目わずかに残る
6	土師甕	(16.0)	[3.3]	—	AEH	不良	にぶい橙色	5以下	脚部外面縦位ハケ　口縁部内面横位ハケ
7	土師小型丸底	—	[6.5]	—	AE	普通	にぶい橙色	5以下	No1.2.3.　内面横位ハケ　外面ミガキ
8	土師高坏	—	[8.2]	—	AEH	普通	にぶい橙色	5以下	脚部　外面縦位のミガキ 剥落が激しい　一部赤彩が残る
9	土師高坏	—	[7.4]	—	AEH	普通	明赤褐色	5	柱状脚　内外面赤彩

枝溝は、B区では確認されていないので、調査区外へ延びた後、方向を変えたようである。おそらく水田が展開するA区の方向に転じたと思われる。

本溝は枝溝と違い幅に多少の増減はあるがほぼ一定で1.5mを測る。走行も直線的である。断面は広めの底面から緩やかに立ち上がる。深さは、セクションラインE－E'で0.95mを測る。溝低は西から東に向けて緩やかに傾斜している。

後述するように、本跡中からは2ヶ所で堰跡が確認されている。このことから幹線水路として機能していたと考えられる。

遺物は1～7が出土した（第48図）。1・2は第1号堰跡出土である。3～7は覆土中から出土した。1・2については第1号堰跡の項で述べる。3は坩である。口縁部と底部を欠く。4は壺の口縁部破片である。内外面ともに細かいミガキが施される。5～7は台付甕である。5は口縁部破片で、2種類のハケ目状工具を用いて調整したものである。6は台部の器壁が薄い。7は底部内面が折返し状になる。

第103号溝跡（第43・44図）

第103号溝跡は、A区AN41～AP43グリッドで検出された。北から南へ走った後、南東方向へ流れを変える。北側は調査区外へと延びる。南東端は開放し水田へと注ぐ。

検出された規模は、長さ33.10m、幅0.83m、深さ0.07mで、浅い皿状の掘り込みである。水田に水を引き入れるための溝跡と考えられる。

遺物は2～9が出土した（第45図）。2～4は壺の口縁部破片である。2は口縁下端にヘラ状工具で刺突がなされる。5・6は甕の口縁部破片である。6は細かいハケ目が残る。7は小型の丸底土器で、内面にユビオサエの痕が残る。8・9は高坏の脚部である。棒状を呈し赤彩される。ともに遺存状態は悪い。

第107号溝跡（第43・44図）

第107号溝跡は、A区AT39～44グリッドで検出された。東西に延びる溝跡である。東西側ともに調査区外へと続く。

検出した規模は、長さ50.90m で、幅は一定ではなく西側で狭く3.95m、東側で広く15.50m である。深さは、最深部で2.21m を測るが、溝底の検出には至っていない。断面の観察から、東側の幅広の部分はのち再削平されたものである。再削平の時期は北側の水田跡を切ることから、古墳時代前期後半以降と思われる。

本跡は、北側に展開する水田跡の微地形から推測して、もともと谷状に落ち込んだ部分に削平されたものである。

削平時期の下限は、弥生時代中期にさかのぼる可能性がある。覆土下層には洪水起源であるシルト質細砂層が厚く堆積している。このことから弥生時代中期以降、堆積と削平を繰り返し断続的に使用されたものであろう。

水田面の標高が本跡に向かい傾斜していること、溝の南側に水田域が続かないことから、水田の排水溝及び区画溝として機能したものと考えられる。

第108号溝跡（第43・44図）

第108号溝跡は、A区中央のAP43グリッドで検出された。東西に延びる溝跡である。

規模は、全長8.50m、幅0.40m、深さ0.08m で、丸みを持つ溝底から緩やかに立ち上がる。

図示できる遺物は出土していない。

第125号溝跡（第46図）

第125号溝跡は、C区AI～AK25・26グリッドで検出された。北西から南に延びる溝跡で、北西側は調査区外へ続き、南端は膨らみを持つ。第93号溝跡と重複するが新旧は不明である。

検出した規模は、長さ22.80m、幅0.44m、深さ0.13m で、膨らみ部は、幅1.54m、深さ0.13m である。溝の端部が膨らむ形状と、北西側の溝底が若干高いことから、膨らみ部に水を溜めたものと考えられる。

遺物は、南端の膨らみ部分で8が出土した（第48図）。8は高坏の破片で内湾する坏部の形態をとる。

第126号溝跡（第46図）

第126号溝跡は、C区AH27・28グリッドで検出された。東西に延びる溝跡である。

規模は、長さ7.30m、幅0.40m、深さ0.10m である。断面は、凹凸のある溝底から緩やかに立ち上がる。

遺物は、9が出土した（第48図）。9は壺の口縁部から胴部上半の破片である。部分的にナデ以前のハケ目が残る。

第144号溝跡（第54・55図）

第144号溝跡は、F区中央付近のAH40・41グリッドで検出された。東西に延びる溝跡である。

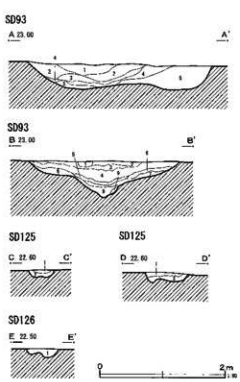
規模は、長さ4.60m、幅0.76m、深さ0.20m である。断面は、丸みを持つ溝底から緩やかに立ち上がる。溝低は緩やかに東側から西側に傾斜している。

図示できる遺物は出土していない。

第159号溝跡（第54・55図）

第159号溝跡は、F区中央のAF38グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝跡である。南側の第173号溝跡に沿うように並行している。

規模は、全長11.80m、幅0.75m、深さ0.10m で、浅い皿状の掘り込みである。第173号溝跡に付随す



SD93 (A－A')

1 青褐色～灰色小礫砂　鉄斑，シルトブロックを多量に含む。
　　A_3－C軽石を少量含む。
2 青灰色粘土　鉄斑を多量に含む，A_3－C軽石を少量含む。
3 青灰色～黄褐色粘土　鉄斑を多量に含む。
4 青灰色～
　黒灰色粘土質シルト　炭化物ブロック，青灰色粒子小ブロックを多量に含む。
5 黒灰色粘土質シルト　炭化物をやや多く含む。

SD93 (B－B')

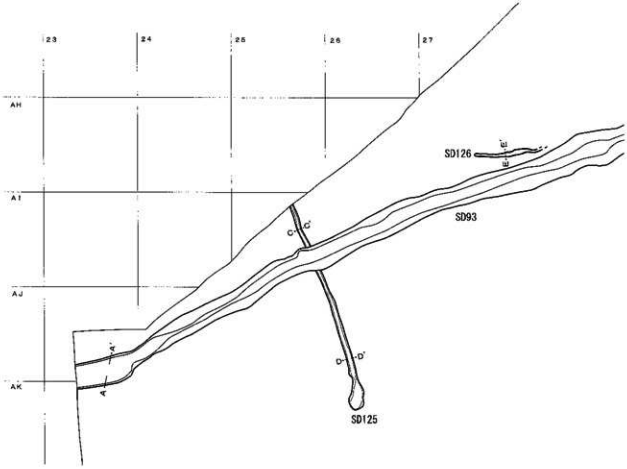
1 暗灰色粘質土　灰色粘土を多量に含む，鉄斑をやや多く含む。
2 暗灰色粘質土　1層よりやや淡い，灰白色粘質土を斑状にやや多く含む。
3 灰白色粘質土　鉄斑，マンガン斑点を多量に含む。
　　暗灰色土を斑状に少量含む。
4 灰色土　粘質のある暗灰色土を主体とする。
　　灰白色土をやや多く含む，黒色土を少量含む。
5 黒色粘質土　白色砂質シルトをブロック状に含む（A_3－C?）。
　　腐物の熟化した痕跡が多い。
6 暗灰色土　白色砂質シルト（A_3－C?）を斑状に少量含む。
7 灰白色粘質土　暗灰色土を斑状にやや多く含む。
8 青黒灰色粘質土　地山の青灰色土を主体とし，暗灰色土，灰色土を少量含む。
　　粘性やや強い。
9 灰白色粘質土　崩落土の堆積か?6層と同様の白色の土。

SD126 (C－C')(D－D')

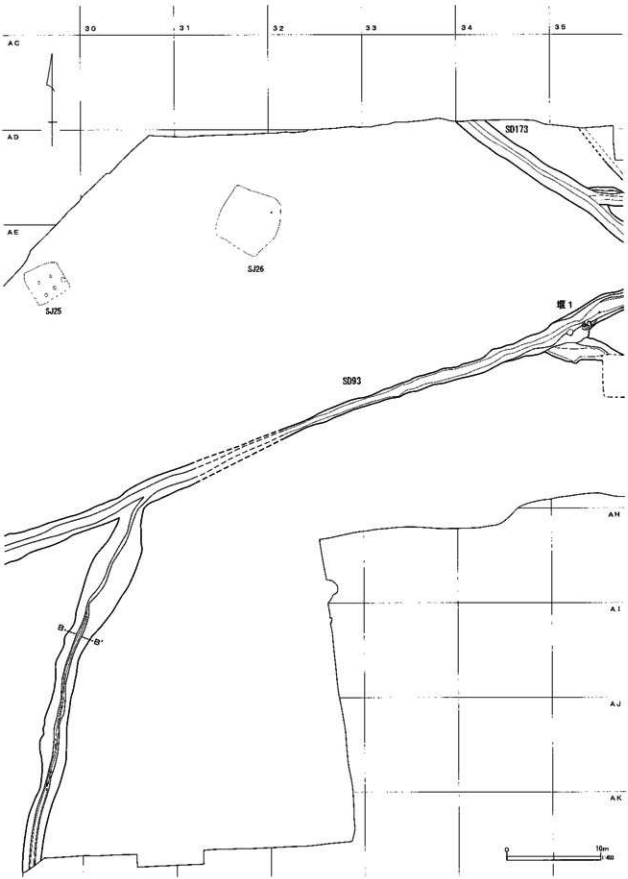
1 暗灰色シルト質細砂　炭化物を少量含む，灰色シルトブロックを少量含む。
　　下層に炭化物層があるところもある。
2 暗灰色シルト　炭化物をやや多く含む，鉄斑を少量含む。

SD126 (E－E')

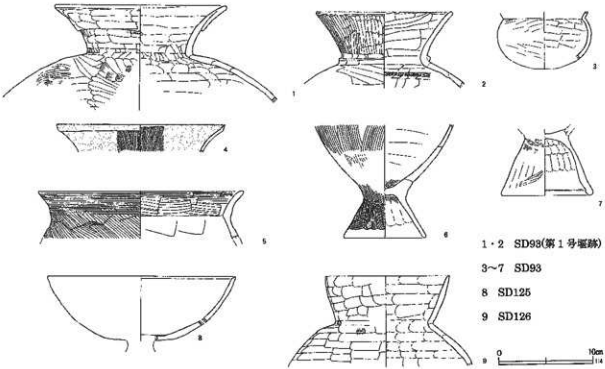
1 褐灰色シルト　灰色シルトブロックと灰褐色シルトブロックの混上，
　　鉄化鉄斑を多量に含む。



第46図　C区溝跡（1）


30
31
32
33
34
35
AC
AD
AE
SD173
SJ26
SJ25
堰1
SD93
AH
AI
AJ
AK
B
B'
0
10m
40

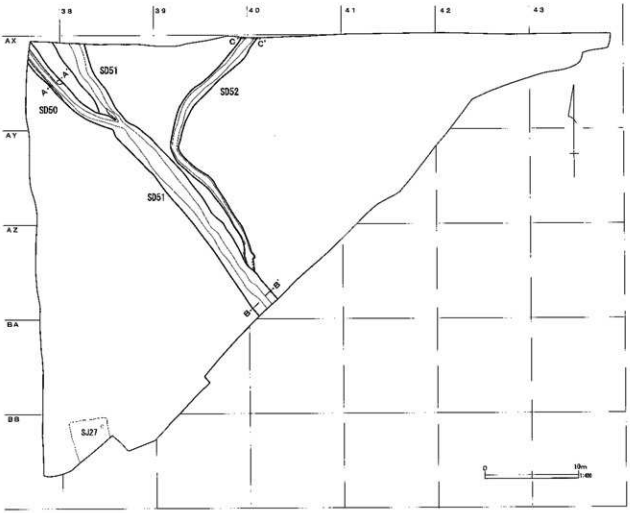
第47図　C区溝跡（2）

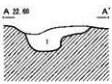


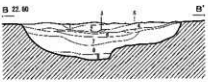
第48図　C区溝跡出土遺物

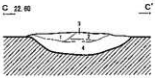
第13表　C区溝跡出土遺物観察表（第48図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	18.2	[11.1]	－	ABDG	普通	橙色	15	堰跡　折り返し口縁　内外面ナデ
2	土師壺	14.4	[8.1]	－	ABC	普通	にぶい褐色	10	堰跡　頸部貼付突帯
3	土師坩	－	[5.0]	－	AE	普通	橙色	20	№2.3　薄手　器面が荒れているが内外面丁寧なナデ
4	土師広口壺	(18.0)	[3.0]	－	EH	普通	にぶい黄橙色	5以下	№4　内外面赤彩　縦位ミガキ　折り返し状口縁
5	土師甕	(22.0)	[5.1]	－	H	普通	にぶい橙色	10	№1　外反口縁　内面6本1単位粗いハケ 口縁外面粗いハケ→横位細かいハケ
6	土師台付甕	－	[11.9]	8.8	AE	普通	にぶい橙色	5	№1　細かいハケ縦位ナデ　台付外面 胴下半部外面　粗い縦位ハケ　鉈状工具ナデ
7	土師台付甕	－	[7.0]	(9.3)	AE	普通	橙色	5以下	台部　台部内面折り返し
8	土師高坏	(20.0)	[6.9]	－	AEH	普通	にぶい橙色	5	№4　口唇部内面状　薄手の作り
9	土師壺	13.2	[9.6]	－	AE	良好	にぶい橙色	10	ハケ後、内外面左から右へのナデ









SD50 (A−A')

1 炭色シルト	酸化鉄を多量に含む、炭化粒子、地山ブロックを少量含む。

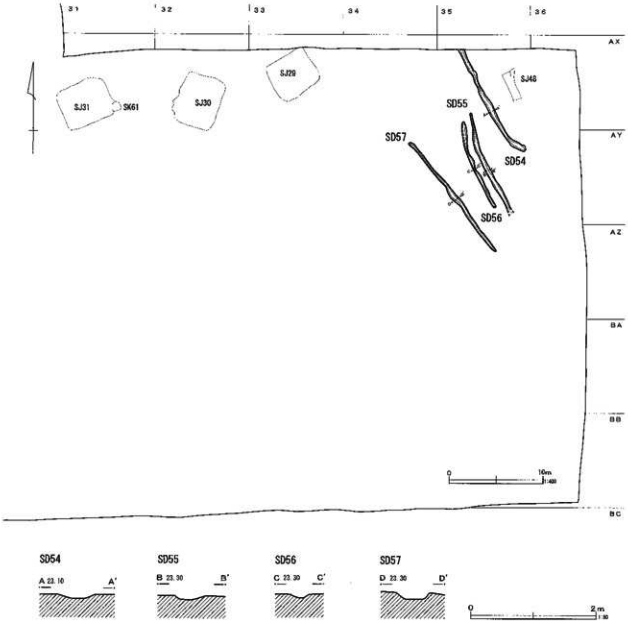
SD51 (B−B')

1 黒炭色シルト	FA、鉄斑を多量に含む、As−C火山灰、マンガン斑を少量含む。
2 暗炭色十火山灰 黒色シルト	As−C火山灰、鉄斑を多量に含む。マンガン斑、有機物、炭化物を少量含む。
3 灰黄色土 火山灰	As−C火山灰と礫石を含む。堆積層厚。
4 灰色粘土質シルト	炭化粒子を多量に含む。
5 炭色粘土質シルト	シルトブロックを多量に含む、地山小ブロックを少量含む。
6 炭色粘土質シルト	黒色シルトと地山ブロックからなる、炭化物を多量に含む。
7 黒色粘土質シルト	黒色シルトと灰色シルトが縞状に堆積する、よどんだ水泥にあり。
8 灰色粘土質シルト	灰色シルトと黒色有材質が縞状に堆積する。
9 黒色十	炭化物と礫層、部ピート化。

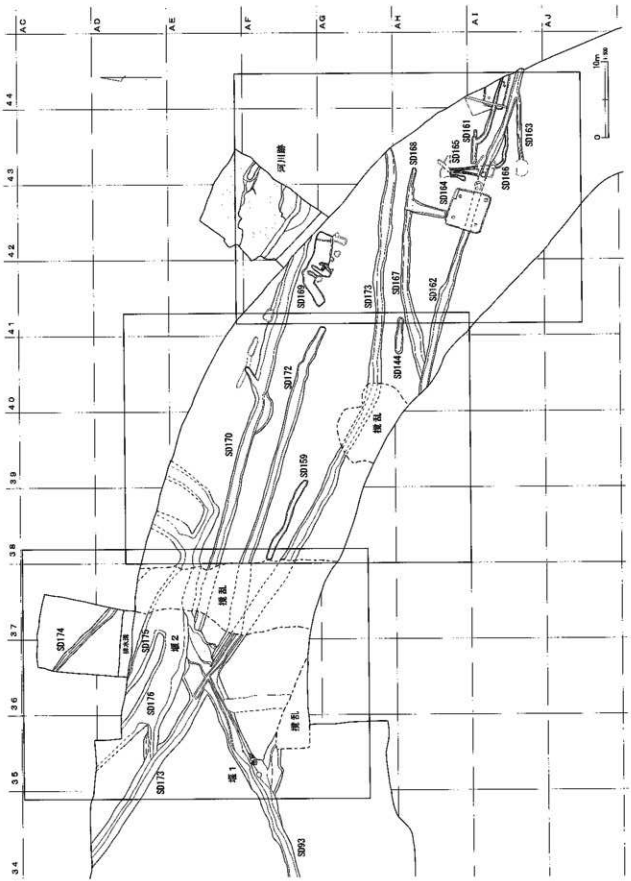
SD52 (C−C')

1 褐炭色粘土質シルト	鉄斑を多量に含む、炭化物、FAを少量含む。
2 黒色粘土質シルト	黒色シルトと灰色シルト小ブロックからなる。鉄斑を多量に含む。
3 灰色粘土質シルト	黒色シルトと地山ブロックからなる。炭化物、As−C火山灰を多量に含む。
4 炭色粘土質シルト	黒色シルトと地山ブロックからなる、炭化物を多量に含む。

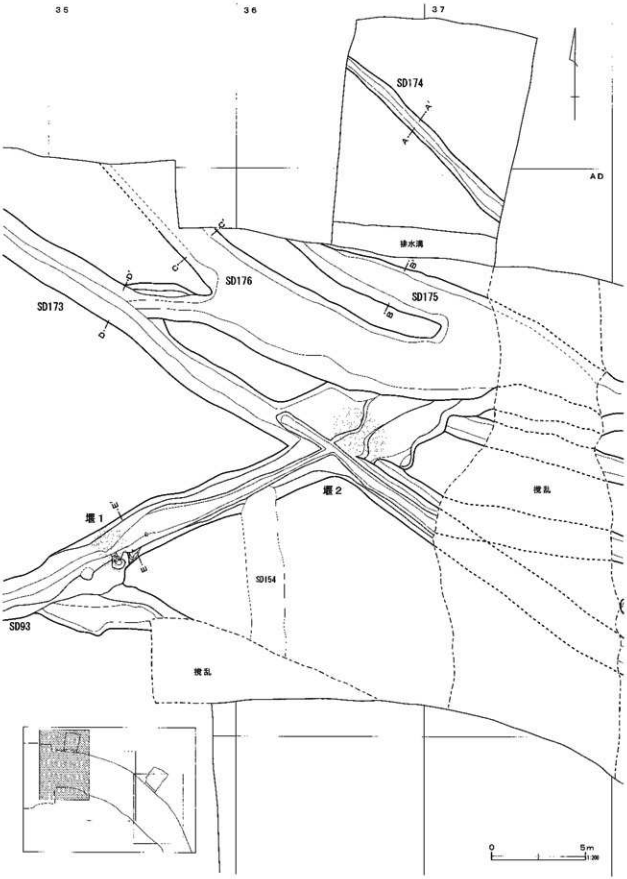
第49図　D区溝跡


31
32
33
34
35
36
AX
AY
AZ
BA
BB
BC
SJ31
SK61
SJ30
SJ29
SJ48
SD55
SD57
SD54
SD56
0
10m
1:400
SD54
A 23.10
A'
SD55
B 23.30
B'
SD56
C 23.30
C'
SD57
D 23.30
D'
0
2m
1:80

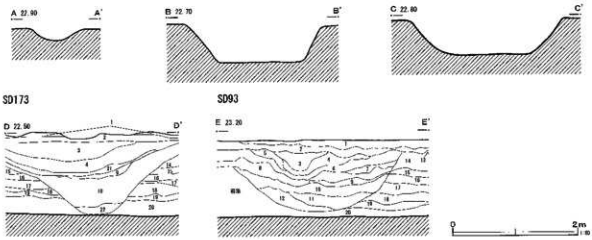
第50図　E区溝跡



第51図　F区溝跡区割図


35
36
37
SD174
A
A'
AD
排水溝
B
B'
SD176
C
C'
SD175
SD173
D
D'
堰2
撹乱
堰1
E
E'
SD154
SD93
撹乱
0
5m
1:200

第52図　F区溝跡（1）



SD93・173 (D−D')(E−E')

1	褐灰色細砂質シルト	マンガン結核を多量に含む。
2	暗灰色細砂質シルト	白色砂、鉄結核を少量含む。
3	黒灰色有機質粘土質シルト	鉄結核、マンガン結核を多量に含む。
4	灰オリーブ色粘土質シルト	炭化物とシルトが縞状に堆積する。 マンガン結核を多量に含む。鉄結核を少量含む。
5	炭褐色シルト	炭化物とシルトが縞状に堆積する。 鉄結核を少量含む。
6	炭粘色シルト	鉄結核、マンガン結核を少量含む。
6	暗灰色有機質シルト質中細砂	炭化物と灰オリーブ色シルトが 縞状に堆積する。 鉄結核、マンガン結核を少量含む。
7	炭色シルト質細砂	炭化物と灰オリーブ色シルトが縞状に堆積する。 一部でブロック状に堆積する。 鉄結核、マンガン結核を少量含む。
8	黄灰色中細砂	シルトと中細砂が縞状に堆積する。 鉄結核を少量含む。
9	炭色粘土	炭化物を多量に含む。鉄結核を少量含む。
10	暗灰色粘土	炭化物を多量に含む。木片、鉄結核を少量含む。
11	灰黄色中礫砂	シルトと中礫砂が縞状に堆積する。鉄斑全体につく。
12	灰色中礫砂	鉄斑が多い。
13	暗灰色細砂質シルト	6層に対する古墳時代の耕土？
14	暗灰色シルト	Aｓ Cまじる。鉄結核を多量に含む。 マンガン結核を少量含む。
15	黄灰色シルト質細砂	弥生後期〜Aｓ C以前の遺水砂。
16	黄褐色シルト質細砂	15層の変色したものか？
17	暗灰色シルト	弥生後期の耕土？炭化物を多量に含む。
18	青灰色シルト質細砂	弥生中期の遺水砂？
19	暗灰色粘土質シルト	弥生中期の耕土？炭化物を多量に含む。
20	灰色粘土質シルト	鉄斑を多量に含む。
21	灰オリーブ色細砂	8層にともなう細砂層、均一性が高い。
22	灰色粘土質シルト	暗灰色16層ブロックと20層ブロックのまじる層。

第53図　F区溝跡（2）

る溝跡と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第161号溝跡（第56・57図）

第161号溝跡は、F区南側のＡＩ43グリッドで検出された。南東から北西に延びる溝跡である。北西端が東西に分岐する。重複する二本の溝の可能性もあるが溝底が同じ高さなので同一の溝跡と考えた。第32・33号住居跡を切っている。東側は調査区外へと延びる。

検出した規模は、長さ13.70m で、幅0.60m、深さ0.15m の浅い皿状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第162号溝跡（第54〜57図）

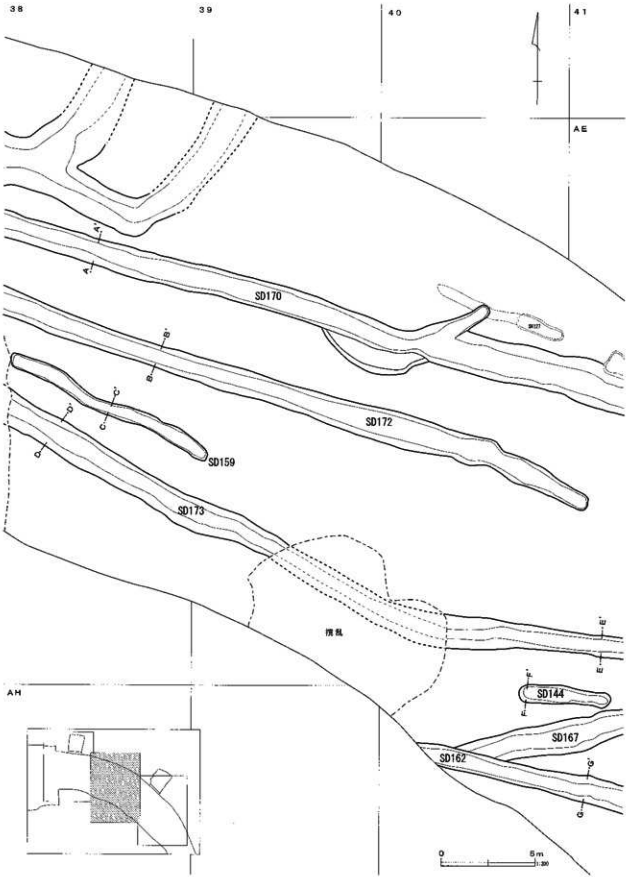
第162号溝跡は、F区南側のＡＨ40〜ＡＩ43グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝跡である。第163・165・166・167号溝跡、第34号住居跡、第115号土壙と重複する。第34号住居跡に切られ、第115号土壙を切る。溝跡との新旧は不明である。北西側、南東側ともに調査区外へと延びる。

検出した規模は、長さ43.6m、幅0.90m、深さ0.10m でU字状に掘り込まれたものである。

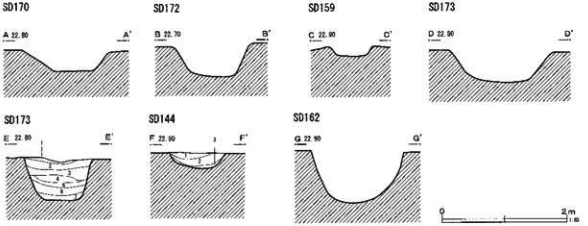
図示できる遺物は出土していない。

第163号溝跡（第56・57図）

第163号溝跡は、F区南側のＡＩ43・44グリッドで検出された。東西に延びる溝跡である。西側を古代の土壙に切られる。東側で第162号溝跡と合流する。


38
39
40
41
AE
AH
SD170
SD172
SD159
SD173
SD144
SD167
SD162
撹乱
0
5m
1:200

第54図　F区溝跡（3）



SD144 (F'－F')
1 明灰褐色土 明灰色粘土粒子を少量含む、炭化粒子を微量に含む。
2 暗灰褐色土 明灰色粘土粒子、炭化粒子を少量含む。
3 灰褐色土 明灰色粘土粒子を多量に含む、炭化粒子を微量に含む。

SD173 (E－E')
1 暗褐色土 炭化粒子を含む。
2 青灰色シルト 炭化粒子、粘土粒子、砂粒子を含む。
3 青灰色上シルト 砂粒子を多量に含み、粘土ブロックを混入する。
4 茶褐色砂質土 砂粒子を多量に含む。
5 暗灰褐色シルト 青灰粘土ブロック、炭化物を含む。
6 黒灰色土シルト 炭化粒子を含む。
7 黒灰色上シルト 炭化粒子を微量に含む。

第55図 F区溝跡 (4)

検出された規模は、長さ11.80m、幅0.55m、深さ0.20mで、箱状に掘り込まれたものである。溝底は西から東に緩やかに傾斜する。

図示できる遺物は出土していない。

第164号溝跡 (第56・57図)

第164号溝跡は、F区南側のAH42・43グリッドで検出された。南北に延びる溝跡である。北側部分は第134号土壙と重複するが新旧は不明である。南端は上壙状に膨らむ。

検出した規模は、長さ2.10m、幅0.35m、深さ0.10mでU字状に掘り込まれている。

図示できる遺物は出土していない。

第165号溝跡 (第56・57図)

第165号溝跡は、F区南側のAH・AI43グリッドで検出された。南北に延びる溝跡である。北側部分は第134号上壙と重複するので不確かであるが、くの字に屈曲すると考えられる。南側では、第133号土壙に切られ、北側では第166号溝跡に切られる。

検出した規模は、長さ3.60m、幅0.26m、深さ0.10mで、浅い皿状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第166号溝跡 (第56・57図)

第166号溝跡は、F区南側のAH・AI43グリッドで検出された。南北方向、東西方向にL字形に延びる溝跡である。北側では第134号土壙に切られ、第165号溝跡を切る。L字にクランクした北側では第133号土壙、第162号溝跡に切られる。東側では再び第162号溝跡に切られる。

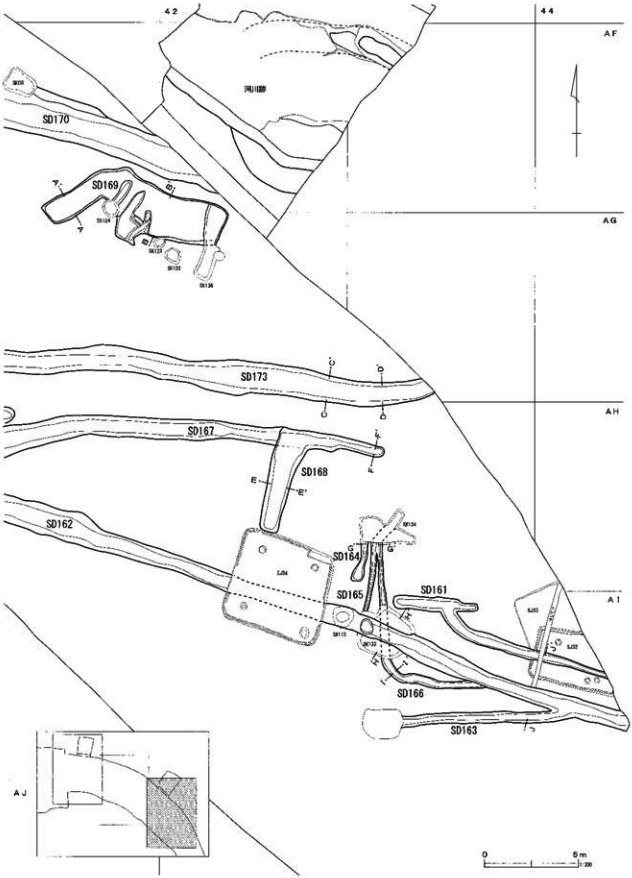
検出した規模は、長さ11.10m、幅0.30m、深さ0.09mで、浅い皿状の掘り込みである。住居跡などを取り囲む排水溝或いは、区画溝と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

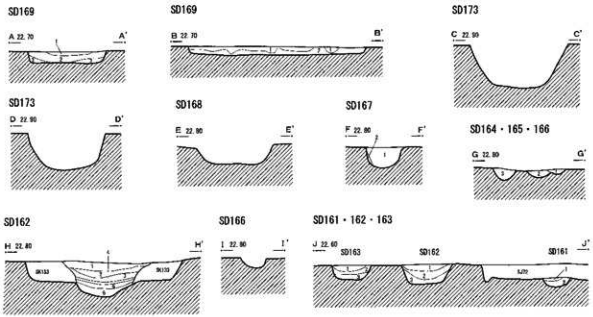
第167号溝跡 (第54・56・57図)

第167号溝跡は、F区中央付近のAH40～42グリッドで検出された。東西にやや弧状に延びる溝跡である。東側で第168号溝跡と重複するが新旧は不明である。西側では第162号溝跡と交わる。

検出した規模は、長さ19.0m、幅1.20m、深さ


42
44
AF
AG
AH
AI
AJ
SD170
SD169
SD173
SD167
SD168
SD162
SD164
SD165
SD161
SD166
SD163
0
5m

第56図　F区溝跡（5）



SD161 (J－J')
1 暗灰色土　炭化粒子を含む。
2 白灰色土　白灰色粘土を主体とする。

SD162 (H－H')
1 黄褐色土　炭化粒子を含む。
2 暗褐色土　炭化粒子を多量に含む。鉄分粒子、灰褐色粘土含む。
3 灰褐色土　2層に比べ灰色粘土多量に含む。
4 黒褐色土　炭化粒子を多量に含み、白色粘土を混入。
5 灰白色土　灰白色粘土を多量に含む。
6 灰褐色土　砂質土を多量に含む。

SD163 (I－I')
1 黄褐色土　黄褐色土に青灰色粘土を含む。
2 灰褐色土　灰褐色土に青灰色粘土を含む。
3 青灰色土　粘土を主体とし微量の炭化粒子を含む。

SD164・165・166 (G－G')
1 灰褐色土　鉄分粒子、炭化粒子を微量含む。
2 灰褐色土　1層にしろっぽい粘土を多量に含む。
3 暗灰色土　鉄分粒子、暗灰色粘土ブロックを含む。

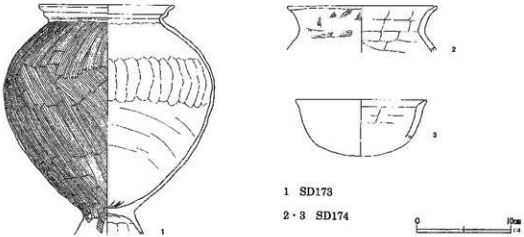
SD167 (F－F')
1 黒褐色土　炭化粒子微量、白灰色粘土、鉄分粒子を含む。
2 黒灰色土　粘土質、微量の炭化粒子を含む。

SD169 (A－A')
1 暗褐色土　酸化鉄粒子を多量に含む。粘性あり。
2 明黒褐色土　酸化鉄粒子を多量に含む。暗褐色土ブロックを含む。粘性あり。
3 青灰色土　砂質、2層の土を含み、やや粘性あり。

SD169 (B－B')
1 暗褐色土　酸化鉄粒子を多量に含む。粘性あり。
2 明黒褐色土　酸化鉄粒子を多量に含む。暗褐色土ブロックを含む。粘性あり。
3 青灰色土　砂質、2層の土を含み、やや粘性あり。

0　2m
1:80

第57図　F区溝跡（6）



第58図　F区溝跡出土遺物

第14表　F区溝跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師台付甕	14.4	[24.2]	—	AE	普通	にぶい黄橙色	90	S字状口縁　5本1単位ハケ
2	土師甕	(16.0)	[5.0]	—	DE	普通	明褐灰色	5以下	口縁部丸みをもつ　外面ハケ目　内面工具ナデ
3	土師鉢	(14.0)	[4.2]	—	DH	普通	淡赤橙色	5	椀状の鉢　口縁部内側状

0.44mで、U字形に掘り込まれている。

図示できる遺物は出土していない。

第168号溝跡（第56・57図）

第168号溝跡は、F区南側のAH42・43グリッドで検出された。東西方向、南北方向にL字状に延びる溝である。L字状にクランクする部分で第167号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。第167号溝跡と重複した後、溝幅を減ずる。

検出した規模は、長さ5.50m、幅1.18m、深さ0.40mで、浅い皿状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第169号溝跡（第56・57図）

第169号溝跡は、F区中央東側のAG41・42グリッドで検出された。東西に延びる不整形な溝跡である。東側で第136号土壙と重複するが、新旧は不明である。

検出した規模は、長さ10.50m、幅2.01m、深さ0.18mで、浅い皿状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第170号溝跡（第54～56図）

第170号溝跡は、F区中央のAE・AF38～42グリッドを中心に検出された。北西から南東に延びる溝跡である。第172号溝跡とほぼ並行する。北西側では第93号溝跡と重複する。その先第175・176号溝跡により壊されているが、おそらく第173号溝跡とつながると考えられる。東側は河川跡へと注ぐ。検出された長さは52.50mを測る。AF39とAF40グリッドの境付近で南辺テラス、北側に枝溝が見られる。このところを境に溝幅に違いが見られる。東側では幅2m前後で、上端のラインがやや蛇行する。西側は幅1.50mとほぼ一定で直線的である。断面形態は、平坦な溝底から斜めに直線的に立ち上がる。深さは0.3mである。溝底は西から東へ傾斜している。

図示できる遺物は出土していない。

第172号溝跡（第54・55図）

第172号溝跡は、F区中央のAF38～41グリッド

で検出された。北西から南東に延びる溝跡である。第170号溝跡とほぼ並行する。北西端は第93号溝跡から分岐する。南東端はＡＦ41グリッドで緩やかに立ち上がり終わる。

検出した規模は、長さ28.65ｍ、幅1.28ｍ、深さ0.50ｍで、箱状の掘り込みである。後述のように、第93号溝跡中の第２号堰跡により堰き止められた水を流し込んだ溝跡と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第173号溝跡（第52～57図）

第173号溝跡は、Ｃ区ＡＤ34～Ｆ区AG43グリッドで検出された。Ｆ区を北西から南東へと横断する溝跡である。北西から南東へ延びたのちＦ区中央付近で方向を変え、東に延び調査区外へと続く。第93・172号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

検出された規模は、長さ60.90ｍ、幅は北西側が広く2.08ｍ、南東側が狭く1.46ｍである。深さはセクションポイントＤ－Ｄ'ラインで1.50ｍを測り、丸味をもつ溝底からＶ字状に立ち上がる。中ほど以降は壁が崩落したためか立ち上がりの角度が緩やかになる。

第19地点の中央水路から分岐したものと考えられる。

遺物は１が出土している（第58図）。１はＳ字状口縁台付甕で脚部の一部を欠損する。口唇部が丸みを帯びる。胴部は最大径が上半にあり、この部分を境にハケ目の方向を変えている。

第174号溝跡（第52・53図）

第174号溝跡は、Ｆ区北側のＡＣ・ＡＤ36・37グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝跡である。両端は調査区外へと続く。

検出された規模は、長さ13.4ｍ、幅0.75ｍ、深さ0.18ｍで、浅い掘り込みである。

遺物は２・３が出土した（第58図）。２は甕の口縁部破片で、口唇部が丸みを帯びる。３は鉢の口縁部破片で、内彎する器形になる。

第175号溝跡（第52・53図）

第175号溝跡は、Ｆ区北側のＡＤ36・37グリッドで検出された。西側は調査区外へと続く。東側はＡＤ37グリッドで第176号溝跡と合流する。その先ＡＥ38グリッドで北東方向に折れる。さらにその東側でも同様である。直角に近い角度で溝の走行方向が変わるので区画溝の可能性が高い。

検出された規模は、長さ8.10ｍ、幅2.17ｍ、深さ0.55ｍで箱状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第176号溝跡（第52・53図）

第176号溝跡は、Ｆ区北側のＡＤ・ＡＥ35～37グリッドで検出された。北西から南東方向に延びる溝跡である。西側は二股に分岐し一方は調査区外へと続き、もう一方は第173号溝跡と交わる。東側はＡＤ37グリッドで、第175号溝跡と合流する。

検出された規模は、長さ11.80ｍ、幅4.16ｍ、深さ0.64ｍで、平坦な溝底から直線的に斜めに立ち上がる。溝底は北西から南東へ傾斜している。

図示できる遺物は出土していない。

第177号溝跡（第52図）

Ｆ区で検出された溝跡である。調査時には番号を付したが報告書では第93号溝跡と同一のものとして扱う。

第180号溝跡（第43・44図）

第180号溝跡はＡ区ＡＭ42～ＡＰ42グリッドで検出された。北から南に延びる溝跡である。北側は調査区外へと続く。検出された規模は長さ33.40ｍ、幅1.22ｍ、深さ0.22ｍで浅い掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

(6) 堰跡

第1号堰跡（第59図）

第1号堰跡は、C区東側のAE35・AF35グリッドに位置し、第93号溝跡中に構築されたものである。

第93号溝跡は前述のように、溝底は南西から北東に向かい傾斜している。つまり南東から北東に流れる水を本跡により堰き止め、水位を上昇させ、第93号溝跡の枝溝に水を引き入れたと考えられる。枝溝は調査区外へと続くため不明であるが、おそらく水田跡が存在するA区の西側に延びていると考えられる。

本跡が構築されたところでの第93号溝跡の断面は、溝の中ほどにテラスを持つ。堰の骨組みの杭は溝底とテラス部分に打ち込まれている。

堰跡の遺存状態は、部材の抜き取り、流失などによるためか、良好ではない。基礎部分と考えられる杭列のみが遺存し、盛土などは確認できない。

杭列は二列確認され、溝に対して直交するように平行して打ち込まれたと考えられる。杭列間は約2mである。ここでは水の流れを考えて、西側の杭列を前列、東側の杭列を後列と呼称する。

前列は、残存長1.82mで、溝底とテラス部分に間隔をあまりあけずに杭が打ち込まれている。溝底では、水流に対して斜めに打ち込まれたものと、垂直に打ち込まれたものの二種類が認められる。斜めに打ち込まれた杭の角度は45°程である。テラス部分の杭は垂直に打ち込まれたものだけである。残存する杭の溝掘方からの長さは、溝底で0.30～0.40m、テラス部分で0.10m程である。杭の多くは途中で折れていたり、端面に折れた痕が見られる。

前列のテラス部分には、不整形のピットが見られるが、これは杭を抜き取った跡と考えられる。横木などは残っていない。

後列は、残存長1.70mで、前列と同様、溝底とテラス部分に杭が打ち込まれている。前列と違い杭は密集することなく、ある程度の間隔を持って打ち込まれている。また、溝掘方からの杭の長さも前列に比べ短く、0.10m程である。基本的に垂直に打ち込まれた杭だけで、端面に折れた痕が見られないのも前列との大きな違いである。

堰の高さは、第93号溝跡の溝底と枝溝の溝底の差が0.50mほどあることから考えて、少なくとも0.50mから0.60mほどあったものと考えられる。この高さは、第93号溝跡の溝底から確認面の高さまでを上回ることから、溝の掘り込み面はさらに高かったことであろう。

遺物は、溝底より出土している（第48図1・2）。1は、折返口縁の壺である。頸部の屈曲が強い。2は、壺の口縁部で頸部に貼付突帯がめぐる。

第2号堰跡（第60図）

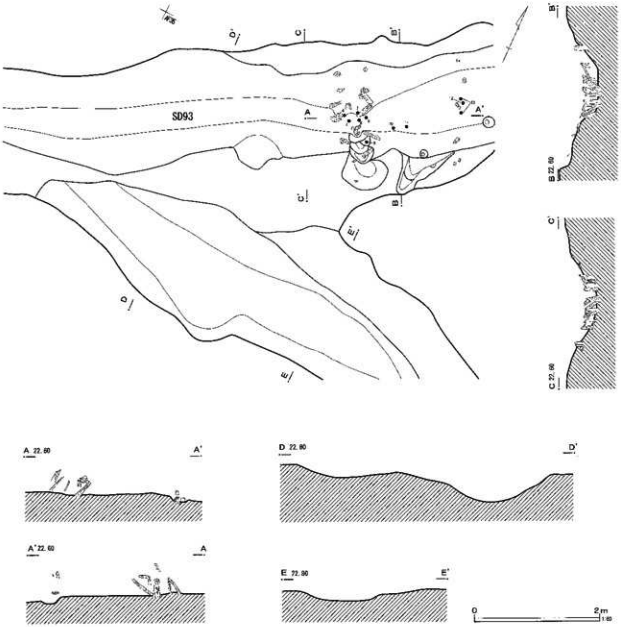
第2号堰跡は、F区西端のAE36グリッドに位置し、第93号溝跡中に構築されている。第1号堰跡の北東、15m程のところに位置する。本跡が第1号堰跡同時に機能していたかどうかは不明である。

本跡の南西側を北西から南東に走る第173号溝跡により第93号溝跡、第172号溝跡が壊されている。そのため不確かなところもあるが、第1号堰跡と同様に、第93号溝跡を流れる水を本跡により堰き止め、第172号溝跡に水を引き入れたと考えられる。また、本跡の南西側で第93号溝跡は、幅を大きく広げる。特に本跡の北東部では広いテラスがみとめられることから、この部分に水を溜める役割も果たしていたと考えられる。

本跡も第1号堰跡と同様に、第93号溝跡に直交するように、並行する杭列を基本としている。残存しているところでの規模は、3.50×1.50m程である。第1号堰跡では残存していなかった杭列間に盛土が見られるのが大きな特徴である。

盛土は粘土と敷物を交互に敷き詰めて構築されている。確認できた敷物は全部で4面に亘る。

杭列は、前列後列ともに垂直に打ち込むことを基本としている。杭の全長の三分の一から半分くらい

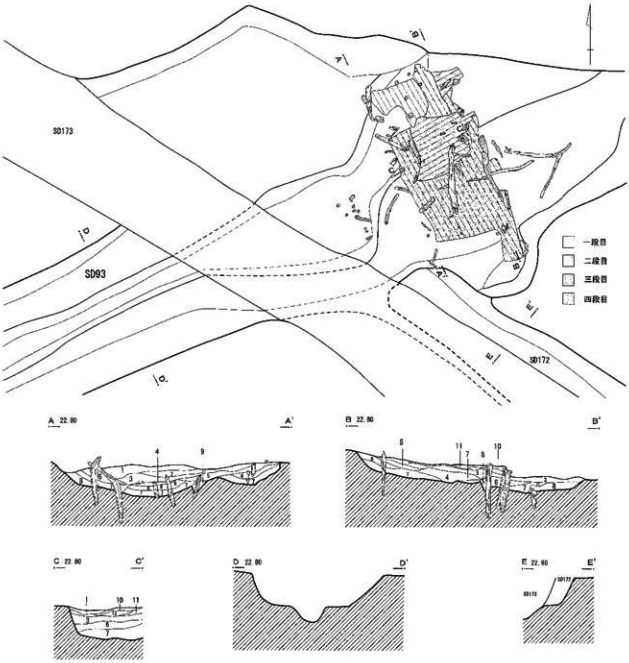


第59図　第1号柵跡

を打ち込んでいるようである。横木はみられない。杭は下端を尖らせたものが多く、上端は強い力が加わり折れたものや変形したものが見られた。

並行する杭列のほかに、敷物の上から打ち込まれている杭がある。これらの杭は総じて細くて短い。

堰の高さは第93号溝跡の溝底と第172号溝跡の溝底の差が0.30mあることからそれ以上あると考えられる。



SD93　堰2

1　暗灰褐色土　上面に一段目の敷物がある。細砂粒を多量に含む。
2　暗灰褐色土　上面に一段目の敷物がある。中位及び下面に三段目の敷物がある。
　　褐い砂粒子、植物繊維を多量に含む。
3　灰褐色土　上面に　段目の敷物がある。褐い粒子を多量に含む。
4　暗灰色土　上面に四段目の敷物がある。白色粘土、暗灰色粘土を含む。
5　暗灰褐色土　上面に四段目の敷物がある。炭化粒子を多量に含む。
　　細砂粒子、白色粘土を少量含む。
6　灰褐色粘土　下面に四段目の敷物がある。暗灰色粘土を主体に灰色粘土を含む。
7　灰褐色粘土　灰色粘土を下部に暗灰色粘土を含む。
8　灰褐色粘土　暗灰色ブロックを含む。
9　暗灰褐色粘土　暗灰色粘土を主体に明灰色粘土粒子を多量に含む。炭化粒子を少量含む。
10　暗褐色土　上面に一段目の敷物がある。細砂粒、植物繊維を少量含む。
11　暗褐色土　下面に二段目の敷物がある。細砂粒、植物繊維、炭化粒子を少量含む。

第60図　第2号堰跡

（7） 河川跡（第61～64図）

河川跡は、F区北側のＡＥ・ＡＦ42・43グリッドで検出された。走行方位はＮ－55°－Ｗである。既に『北鳥遺跡Ⅶ』で指摘されているように、本跡は第19地点南端を東流する河川跡（第７号溝跡）の下流部分に相当する。本跡の北西の調査区外では雨水管埋設工事に伴う立会い調査で弥生時代中期の溝跡に切られることが確認されており、河川が一定期間堰き止められていたことが予想されている。

これらのことから河川跡は人為、自然を問わず断続的にその流路を変えていたことが想定される。このことは断面観察より堆積と侵食を繰り返した跡が見られたことと、出土遺物が弥生時代中期から古代にわたることからも追認できる。本来、河道自体はさらに幅広であったが、古墳時代前期以降は堤状の遺構を築いて、ある程度川幅と流れを制御していたものと考えられる。

堤は、河川を二つの流路に分かつように河道中に築かれている。すでに報告されたように弥生時代中期においては、河川は広い幅を有していた。しかし、堤が築かれた古墳時代前期には、流路が二つに分かれ、その間が中州のようになっており、それを利用して堤を築いたと考えられる。

堤が機能していた時期の河道は、南側で幅6.30ｍ、北側で4.20ｍ以上である。南側の河底は、セクションラインＢ－Ｂ′で見ると第22層下端であると考えられ、丸みを帯びる河底から緩やかに立ち上がる。断面観察から、人為的に河底を掘り下げたと思われる。北側は幅広の河底で、出土遺物が少なく、断面観察からも、明確な掘り込みを確認することはできない。このことから、堤の築かれた南側がメインの河川（水路）として機能していたと考えられる。

堤は、灰色粘土ブロックと黒色土を用いて版築され、残存する高さ0.40ｍで台形状を呈する。堤部分は流失や削平により、遺存状態は悪いが検出された長さは８ｍ以上になる。西側部分が若干南側に切り込むようになっている。

堤の北西側では杭を打ち込んで補強がなされている。杭は基本的に0.80ｍの幅で、２列打ち込まれている。杭列は杭間の間隔をあけずにほぼ垂直に打ち込まれている。また、杭列間にはランダムに杭が少数打ち込まれている。断面の観察からは、堤状の盛土が杭列を越え構築されていることが分かる。このことから杭列は堤が河川の氾濫などにより倒壊したときの補強材として打ち込まれたものであろう。

杭に使用された部材は自然木のほかに面取りした角材、端部を削りこんだもの、梯子から転用したものが見られる。上端は何らかの力により折られたものが見られることから、本来はもっと長かったのであろう。

また、河川跡中には大きさ2.45×1.40ｍほどの敷物が検出された。第２号堰跡で見られたものと同様に細い杭が打ち込まれている。分岐する溝が見られないことから堰跡としてとらえることはできない。おそらく堤の一部をなすものと考えられる。

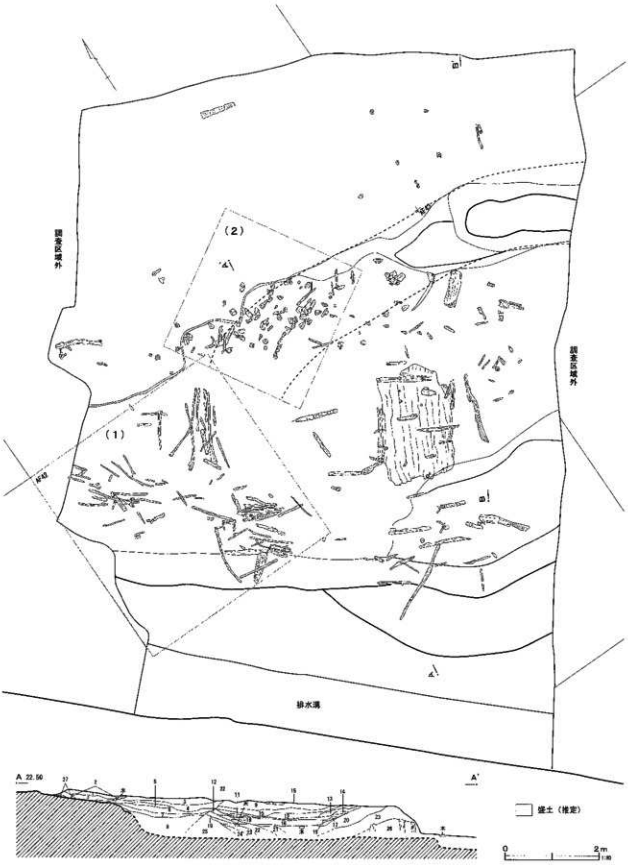
堤の前面では土器とともに多量の木が検出された。多くは自然木であるが、その中に混じり農具を中心とした木器が出土している。多くは破損し完形で出土したものはない。おそらく上流で廃棄され流されたものであろう。

第65図からもわかるように木器は平面的には広範囲にわたり分布し、集中するようなことはない。出土した高さは河川の底から出土しているものと中層からのものとに二分することができ、若干の時期差が伺える。

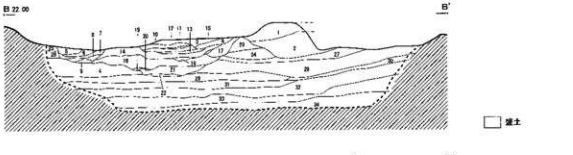
土器、木器以外には、覆土中から栗が出土している。

河川跡出土遺物（第66～68図）

１～16は壺である。１は折返し口縁部分に羽状縄文を施文している。施文縦位は下から上である。外面頸部以下及び内面が赤彩される。２・４は口縁部破片で端部が上方に突出する。４は口唇部が丸みを帯びる。３・５は口縁部が折り返される。６は口縁



第61図　河川跡（1）



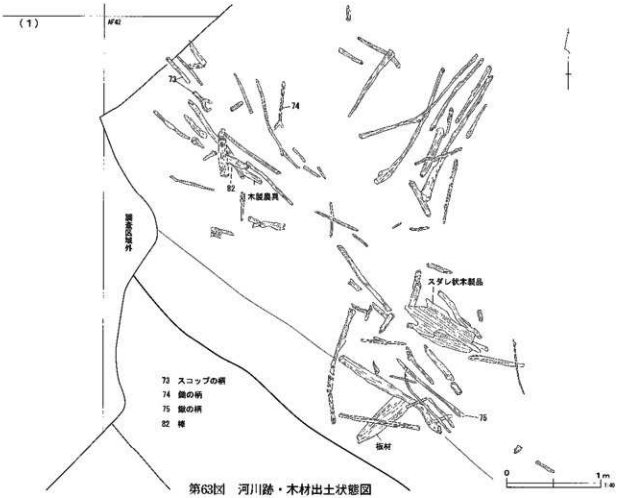
河川跡　(A－A')

1　黒褐色十　黒褐色粘質土を主体とし、暗灰色砂を含む。
2　黒色砂　黒色砂を主体とする。
3　黒褐色土　1層に似る。暗灰色砂を多量に含む。
4　暗灰色砂　暗灰色砂を主体とし、黒褐色粘質土を含む。
5　暗オリーブ黒色土　暗オリーブ黒色粘質土を主体とし、黒色砂を多量に含む。
6　暗オリーブ黒色土　5層に比べ砂量は少ない。
木枝、木の皮などの植物片、炭化粒子を多量に含む。
7　褐暗赤灰色砂　褐暗灰色砂を主体とし、暗オリーブ黒色土、
木枝などの植物片を少量含む。
所々に炭化物が薄く堆積している。
8　暗黒色土　5、6層に似る。粘性強い。
9　黒褐色土　木枝などの植物片、炭化粒子を多量に含む。
10層との境目に薄く炭化物が堆積している。
10　黒褐色十　9層に似る。11、12層との境目に薄く
炭化物が堆積している。粘性強い。
11　黒褐色土　10層に似る。褐暗赤灰色砂を多量に含む。
12　褐暗灰色砂　暗褐灰色砂を主体とする。黒褐色土を少量含む。
木枝などの植物片、炭化物を多量に含む。
13　黒褐色十　10層に似る。炭化粒子を少量含む。
14　褐暗青灰色砂　12層に似る。粗　性が高い。
15　黒褐色土　粘性極めて強い。
16　黒色砂　黒色砂を主体とする。黒褐色土を少量含む。
木枝などの植物片を多量に含む。
17　黒色砂　粗い同砂を主体とする。
18　黒色砂　10層に似るが黒褐色土を多量に含む。
19　黒褐色土　黒褐色砂質土を主体とする。褐暗青灰色砂を多量に含む。
20　暗褐青灰色砂　褐暗青灰色砂粗い同砂を主体とする。
黒褐色粘質土を少量に含む。木片などの植物片、
炭化粒子を多量に含む。φ1cm大の小石を少量含む。
21　黒色砂　黒色砂を主体とする。
22　黒色砂　21層に似るが、黒褐色粘質土を多量に含む。
23　褐暗青灰色砂　粗い同砂を主体とする。φ1cm程の小石を少量含む。
24　暗茶褐色土　粘性極めて強い。
25　青灰色シルト質土　粘性極めて強い。
26　黒色土　護岸工事に伴う人為的盛土。或列を成りように土手状に
堆積している。木枝などと植物片を下位に多量に含む。
27　青灰色砂

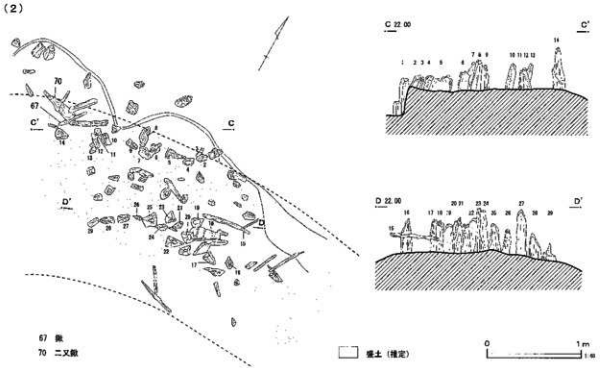
河川跡　(B－B')

1　黒褐色上粘土　炭化粒子、青灰色粘土粒子を含む。
2　黒褐色上粘土　1層に比べ青灰色粘土粒子を多量に含む。
炭化粒子を含む。こまり、粘性あり。
3　暗黒褐色粘質土　暗黒褐色土、青灰色粘土粒子を含む。
炭化粒子を含む。全体の3割砂が砂粒子である。
4　暗黒色粘質土　3層に比べ砂粒子が少ない。青灰色粘土粒子、
炭化粒子を含む。しまり強い。粘性ややあり。
5　黒褐色砂質土　まめの細い砂粒子を主体とし黒褐色土を含む。
6　黒褐色粘質土　黒褐色土に多めの細かい砂粒子を1割程全体に含む。
炭化粒子を含む。
7　黒褐色砂質土　5層に似る。0.1～2cm程の小砂利を含む。
8　黒褐色粘質土　6層に似る。砂粒子を含む。
9　黒褐色砂質土　6層に似る。7層より小砂利が多量に見られる。
10　黒褐色粘質土　青灰色粘土と黒色土が並平に堆積する。
炭化炭子、砂粒子を含む。
11　暗灰色粘質土　青灰色粘土を主体とし、帯平に堆積。
炭化粒子、砂粒子を含む。
12　黒褐色粘質土　10層に似る。黒色土が並平に堆積する。
青褐色粘土ブロック、青灰色粘土、炭化粒子、砂粒子を含む。
13　暗灰色十　11層に似る。青灰色粘土を主体とし並平に堆積する。
炭化粒子、砂粒子を含む。
14　暗黒色粘質土　炭化粒子、木片、植物質片を含む。
暗黒褐色十に砂粒を3割混合む混合層である。
15　暗灰色粘質土　炭化粒子を含む。しまり、粘性強い。
16　暗褐色粘質土　まめの細かい砂粒子を主体とする。
炭化粒子、暗黒褐色土を含む。
17　黒褐色粘質土　青灰色粘土ブロック粒子を多量に含む。
炭化粒子、砂粒子を含む。23層の熱層堆積土の可能性あり。
18　暗黒褐色粘質土　炭化粒子、木片、植物質片を含む。
暗褐色十に砂粒を1割混合む混合層である。
19　暗黒褐色粘質土　砂粒子、炭化粒子を含む。18層に比べやや弱くる粘性強い。
20　暗褐色砂質土　きめの細かい砂粒子を十体とする。
21　暗黒褐色粘質土　炭化粒子、砂粒子、木片、植物質片を含む。
22　暗褐色砂質土　きめの細かい砂粒子を主体とし21層の暗黒褐色土を含む。
23　黒褐色粘土　青灰色粘土粒子、黒色粒子、炭化粒子を含む。しまり強い。
24　黒褐色粘土　23層に比べ青灰色粘土ブロックを多量に含む。
しまり粘性あり。
25　黒褐色粘土　炭化粒子、青灰色粘土粒子を含む。
26　青灰色粘土層　27層に似る。やや緑灰色の粘土層である。
炭化粒子、黒色粒子を含む。
27　青灰色粘土　やや緑灰色を帯びる。炭化粒子、黒色十粒子を含む。
28　黒灰色粘土　緻密な炭化粒子を含む。青灰色粘土粒子を含む。
しまり、粘性あり。
29　青灰色粘土　やや緑灰色を帯びる。黒色粒土粒子を含む。
しまり、粘性あり。
30　青灰色粘土　29層に比べやや薄い。黒色粘土粒子を多量に含む。
しまり、粘性あり。
31　黒褐色粘土　黒色土粒子、青灰色粘土粒子を含む。しまり、粘性あり。
32　暗青灰色粘土層　青灰色粘土、黒褐色粘土を含む。しまり、粘性あり。
33　黒褐色粘土　黒色土粒子、青灰色粘土粒子を含む。しまり、粘性あり。
34　青灰色粘土　炭化粒子を微少含む。黒色粒子を部点状に含む。
しまり強い。粘性あり。

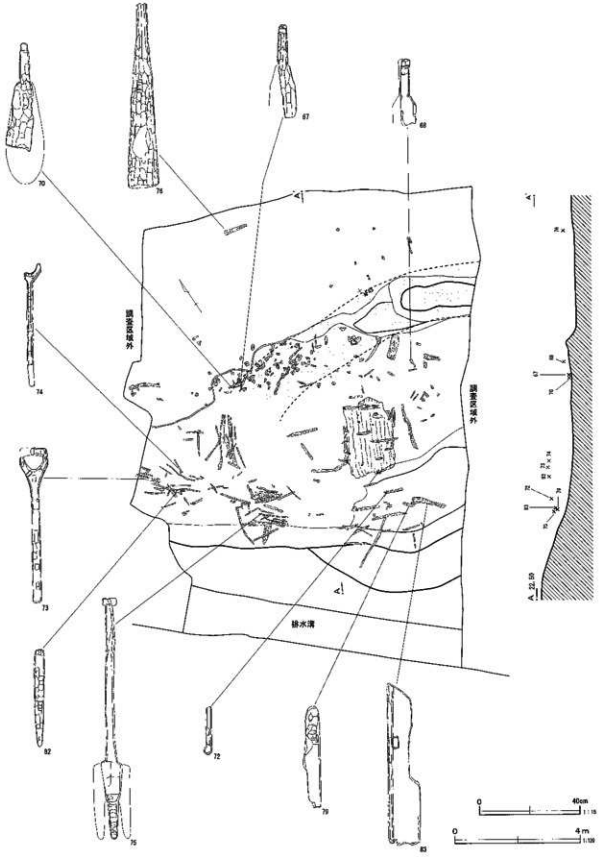
第62図　河川跡（2）



第63図　河川跡・木材出土状態図



第64図　河川跡杭列



第65図　木製品出土状態図

端部が内側に屈曲する。7～9は小型の壺で赤彩される。10は胴部破片でユビオサエの痕が明瞭で器面に凹凸がある。11～16は底部破片である。12は底部外面に木葉痕がある。

17～33は甕である。17は台部を欠く。内外面ともに入念にハケ調整がなされる。18・20はS字状口縁を呈する。外面を斜位にハケ調整し、内面にはユビオサエの痕が残る。18は台部に幅1.5cmほど帯状の黒斑が器面を一回りする。台部を切り埋め込んで使用した痕跡であろう。19・21～27は口縁部破片である。27を除いていずれも頸部が強く屈曲する。口縁部は外反するもの（19・23・24・26）と直線的に外傾するもの（21・22）直立気味なもの（25）がある。27は口縁部が肥厚する。ハケ目の粗いもの（21）、細かいもの（23・24）が認められる。28～33は台部である。33は底部を先に作った後、台部を接合し、粘土を充填し底部を補強している。28・32も底部が台部に先立ち作られたものであろう。

34～48は高坏である。内湾気味に立ち上がるもの（34・35・37・38・39・40）と直線的に立ち上がるもの（46・48）がある。外面と坏部内面は丁寧に磨かれている。36・39・42～45は脚部に円形の透孔が開けられている。36・39・42・45は4孔で、43・44は3孔である。透孔は同じ高さで等間隔にあけることを基本としている。但し、43は1孔が他の2孔に比べ低い位置にあけられている。38・45は赤彩される。

49・50は埦である。49は頸部がくびれ、口縁部が外傾する。外面に煤が付着している。50は底部から内湾気味に立ち上がる。内外面とも非常に細かいミガキが施される。51は坏で、底部が上げ底気味に作られている。

53・54は器台の口縁部であろう。口縁端部が短く直立する。内面は細かいミガキが施される。52・55～58は坩もしくは小型の壺である。52はミガキを行わずハケ調整のままである。57・58は内外面に細かいミガキが施される。56は胴部破片であるが器形が球形に近い。底部は欠損するが丸底になると思われる。59・60はミニチュア土器で、手捏で成形されたと考えられる。

61は椀系の甕の胴部破片である。残存する部分で波状文が4段認められる。62は壺の胴部破片である。帯状に縄文を施文し無文部にミガキが施される。63は壺の胴部上半である。いわゆるパレス壺で、櫛歯状の工具による平行線文の下に竟描の連続山形文を施文する。搬入品と考えられる。64は壺の胴部上半である。粗雑な網目状文を施文する。65はパレス壺の口縁部破片であろう。下端に櫛歯状工具による刺突が見られる。66は63と同一個体と思われるパレス壺の胴部破片である。

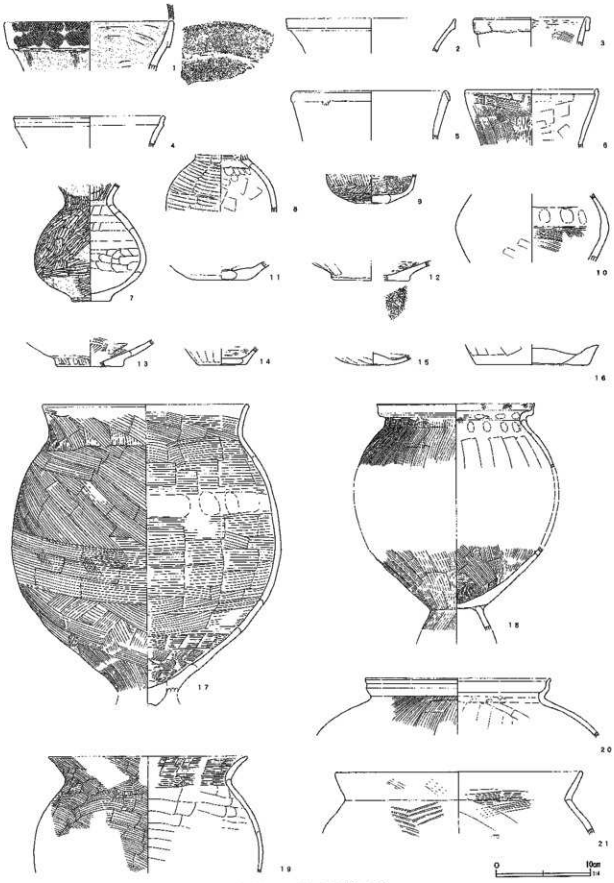
河川跡出土の木製品（第69～74図）

67は軸部と刃部の一部が残存する鍬身である。残存長36.9cmである。軸部は刃部に向かうにつれ幅を増す。軸頭は端部側から深く削り込んでいる。端部は丸く仕上げられている。全体的にケズリの痕が明瞭である。刃部は垂直近い短い肩部を持ったあと緩やかに直線的に広がる。刃先に向かうにつれやや厚みを減ずる。

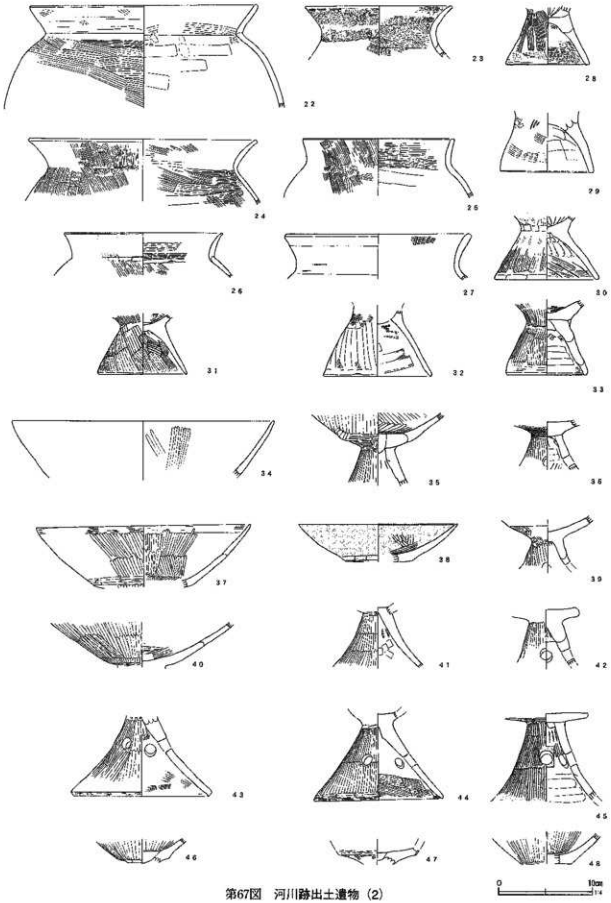
68は軸部と刃部の一部が残存する鍬身である。残存長26.4cm、残存幅は軸部で3.6cm、刃部で5.9cmである。着柄軸の幅はほぼ一定で、断面は蒲鉾状を呈する。軸頭は端部側から水平に削り込んでいる。端部は丸味を持つ。刃部はハの字に開く肩部から、軸線と並行する側面へと移行する。中央部分が厚く側面に近づくにつれ薄くなる。

69は又鍬身である。刃部の片側が残存する。推定長32.7cmである。側面は外側が内側に比べ、薄く仕上げられている。刃部先端に目立った加工は見られない。

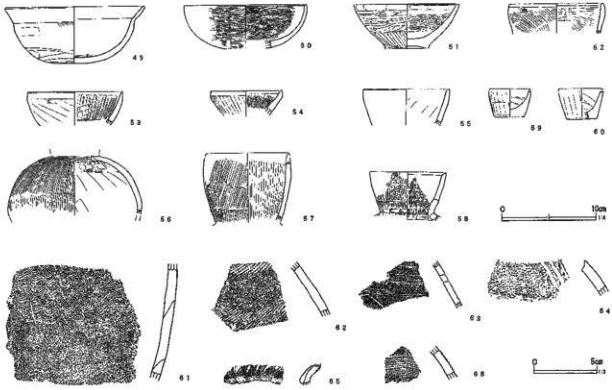
70は鍬身である。軸部と刃部の一部が残存する。着柄軸は刃部に向かうにつれ幅を増す。断面は蒲鉾状を呈する。軸頭は端部側から水平に削りこみ側面も削り込んでいる。端部は丸味を持つ。刃部は側面の角度から見て、短く水平に開いた肩部から、丸味



第66図　河川跡出土遺物（1）



第67図　河川跡出土遺物（2）

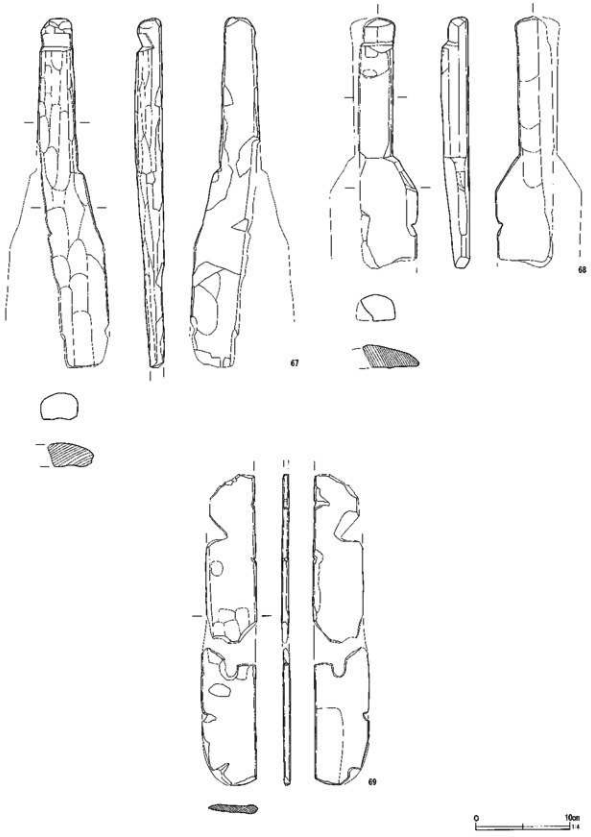


第68図　河川跡出土遺物（3）

第15表　河川跡出土遺物観察表（第66～74図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(18.0)	[5.2]	－	E J	普通	にぶい橙色	5以下	口唇部平節L R施文　口縁外面に羽状縄文を施文
2	土師壺	(18.0)	[3.5]	－	A B	普通	灰黄色	5以下	内外面ナデ　乳白色小礫含む
3	土師壺	(12.0)	[3.0]	－	A E J	普通	にぶい黄橙色	5以下	折り返し口縁　内外面ハケ
4	土師壺	(16.0)	[3.4]	－	A B	良好	橙色	5以下	口唇部丸みをもつ　内・外面強いヨコナデ
5	土師壺	(16.0)	[5.2]	－	E I	普通	灰白色	5以下	折り返し口縁　内外面ナデ
6	土師壺	(14.0)	[6.0]	－	B E G I	普通	橙色	5以下	外面ハケ　内面ナデ
7	土師壺	－	[12.2]	(4.0)	B	良好	明褐灰色	85	全面赤彩ナデ整形後ミガキ　頸部内面も赤彩
8	土師壺	－	[6.0]	－	E H	良好	灰黄色	20	胴部上半　外面赤彩
9	土師壺	－	[3.1]	3.2	A B	普通	にぶい黄橙色	10	胎土緻密　外面赤彩
10	土師壺	－	[7.1]	－	G J	普通	にぶい黄橙色	5以下	内面にユビオサエの痕が明瞭　乳白色小礫含む
11	土師壺	－	[2.0]	6.0	B J	普通	にぶい黄橙色	5以下	底部
12	土師壺	－	[2.1]	(8.0)	J	普通	にぶい黄橙色	5以下	底部木葉痕
13	土師壺	－	[2.8]	(7.0)	B E J	普通	黒褐色	5以下	内面のハケ目が明瞭　底部外面ナデ
14	土師壺	－	[1.9]	5.0	D I	良好	にぶい黄橙色	5以下	底部
15	土師壺	－	[1.2]	(3.0)	C E	普通	黄灰色	5以下	底部
16	土師壺	－	[2.1]	11.8	D G H J	不良	灰白色	5以下	底部
17	土師甕	(21.9)	[31.5]	－	B E J	普通	にぶい橙色	60	ハケ目の間隔は広く浅く施す ハケ→外面の一部をナデ
18	土師甕	(17.1)	－	－	A E J	普通	浅黄色	20	S字状口縁　ハケ目の幅が広い 内面ユビオサエ明瞭
19	土師甕	(21.2)	[12.2]	－	A C G	普通	にぶい黄橙色	5	全面煤付着
20	土師甕	(19.6)	[6.2]	－	A E G	普通	灰黄色	5以下	S字状口縁　口唇部丸みをもつ　ハケ目深い
21	土師	(26.0)	[6.6]	－	E H J	普通	橙色	5以下	条痕のような太いハケ目
22	土師甕	(24.0)	[10.9]	－	E J	普通	にぶい褐色	10	外面ハケ　内面頸部直下ユビオサエにより凹凸がある

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
23	土師甕	(15.8)	[5.2]	—	EGHJL	良好	にぶい黄色	5以下	内外面細かいハケ
24	土師甕	(17.0)	(6.9)	—	IJ	普通	にぶい橙色	5以下	7本1単位の細かいハケ目
25	土師甕	(16.0)	[6.2]	—	AH	良好	外—黒褐色 内—灰黄褐色	5以下	緻密な胎土
26	土師甕	(24.0)	[4.7]	—	GH	良好	にぶい黄橙色	5以下	口縁部内外面強いヨコナデ、煤滅が激しい
27	土師台付甕	(19.4)	[4.7]	—	AEH	普通	灰白色	5以下	口縁部内面にハケ目痕が一部残存
28	土師台付甕	—	—	(9.0)	K	良好	にぶい黄橙色	5以下	台部
29	土師台付甕	—	[6.3]	10.0	AEI	普通	にぶい橙色	5	台部　内面は丁寧に調整されて凹凸がなく滑らかである
30	土師台付甕	—	[6.7]	11.2	DEH	普通	灰黄色	10	No.11　台部のみ残存　外面ハケ　内面工具ナデ抑え及びハケ
31	土師台付甕	—	[6.7]	9.6	EJ	普通	にぶい黄橙色	5以下	台部　台部は完存する
32	土師台付甕	—	[7.0]	10.6	AE	普通	灰褐色	5以下	土器を砕いたものを含む　内面が丁寧に調整される
33	土師台付甕	—	[7.9]	8.8	EJ	普通	灰黄褐色	5	台部　内面下端部の凹凸が激しい
34	土師高坏	(14.0)	[6.0]	—	G	良好	灰白色	5以下	杯部　胎土緻密　器面は非常に滑らかである
35	土師高坏	—	[7.7]	—	AGJ	普通	淡黄橙色	40	内外面ミガキ
36	土師高坏	—	[5.0]	—	AI	良好	にぶい橙色	25	外面細かいミガキ
37	土師高坏	(23.0)	[6.5]	—	EGL	良好	橙色	5	内面丁寧なミガキ
38	土師高坏	(17.0)	[4.0]	—	AEGJ	普通	にぶい黄橙色	10	坏部　内外面赤彩 内器面があれているため赤彩がわかる所は部分的である 透孔はほぼ等間隔に4ヶ所
39	土師高坏	—	[5.1]	—	ABEJ	普通	橙色	25	透孔はほぼ等間隔に4ヶ所
40	土師高坏	—	[4.8]	—	AE	普通	にぶい黄橙色	20	杯部
41	土師高坏	—	[6.5]	(12.0)	EIJ	普通	にぶい赤褐色	30	脚部
42	土師高坏	—	[6.0]	—	EFHJ	普通	明赤褐色	20	透孔は4ヶ所　基本的に均等に位置するが一つだけずれる
43	土師高坏	—	[8.4]	15.0	AEGHJ	良好	にぶい黄橙色	50	脚部　透孔3ヶ所ほぼ等間隔 1孔がほかの2孔のより少し下方にあけられている
44	土師高坏	—	[9.3]	13.8	EIJ	普通	橙色	25	坏部　円形の透孔が等間隔で3ヶ所 透孔の内面側に刺落がみられる　砂っぽい
45	土師高坏	—	[9.3]	—	EGI	良好	灰褐色	40	脚部　脚部から坏を押し込んで坏部と接合した粘土痕がよくわかる 外面赤彩
46	土師高坏	—	[2.5]	—		良好	にぶい褐色	10	坏部　坏部の立ち上がり方が外反しながら立ち上がる場所と直線ぎみになるなど若干のちがいがある
47	土師高坏	—	[1.8]	—	AEHJ	普通	にぶい黄橙色	15	坏部　脚部から粘土をつめこんで脚部と坏部を接合している
48	土師高坏	—	[3.1]	—	CE	普通	にぶい橙色	5以下	坏部　滑石（φ2～3mm）を含む
49	土師壺	(14.6)	6.0	3.0	H	普通	にぶい黄橙色	40	
50	土師壺	(13.0)	[4.5]	—	J(1mm以下)	良好	にぶい黄橙色	20	胎土緻密
51	土師杯	(11.4)	4.7	4.6	EHJ	普通	にぶい黄橙色	60	外内面とも細かいヨコミガキ
52	土師壺	(10.0)	[3.2]	—	ABEG	普通	灰黄色	5以下	口縁部
53	土師器台	(10.0)	[3.5]	—	EGH	良好	橙色	5以下	胎土緻密
54	土師器台	(7.6)	[2.6]	—	CEJ	良好	にぶい赤褐色	5以下	口縁部
55	土師甕	(9.0)	[3.8]	—	BE	普通	褐灰色	5以下	外面調整不明瞭
56	土師甕	—	[6.2]	—	EGJ	普通	にぶい黄橙色	15	内面凹凸が激しい
57	土師甕	—	[6.7]	—	AG	良好	明赤褐色	5以下	外面斜位に細かいミガキ　内面縦位に細かいミガキ
58	土師甕	(8.0)	[5.1]	—	ABCJ	良好	にぶい黄橙色	5	内面細かいミガキ
59	土師ニチュア土器	(4.4)	[3.0]	(3.1)	ACL	良好	橙色	85	口縁部欠損　内外ともに丁寧にナデているため凹凸が少ない
60	土師ニチュア土器	4.8	[3.2]	(3.2)	ABEL	良好	黄灰色	30	外面はなめらか、内面凹凸が激しい
61	土師壺	—	—	—	ABEG	普通	にぶい橙色		櫛系の壺　5本1単位の櫛描　胴部中位から下位
62	土師壺	—	—	—	AJ	良好	橙色		胴部上半　縄文施文→ヨコミガキ（磨り消し）
63	土師壺	—	—	—	BE	良好	淡黄橙		在地の胎土　焼成後外側より穿孔　浅い櫛描
64	土師壺	—	—	—	IJ	良好	にぶい橙色		沈線3本　乱れた綱目状文　瑪を多量に含む
65	土師壺	—	—	—	AEJ	良好	にぶい橙色		櫛描工具による列点　在地の胎土
66	土師壺	—	—	—	ABE	普通	明褐灰色		東海系パレス壺　胴部上半の破片



第69図　河川跡出土遺物（4）

を帯びる杓文字形になると考えられる。厚みは軸部に近いほうが厚く、刃部先端に向かうにつれ薄くなる。前面が被熱している。

71は木錘である。全長15.1㎝、最大幅5.6㎝である。断面がやや扁平な楕円形の芯持材を用いている。括れ部は両側から中心部に向け浅く削り込み、作り出している。括れ部の幅は4.8㎝で最大幅との差があまりない。両端は、折断されたままと、端部に向かい削り出している部分とが見られる。

72は鎌の柄である。残存長19.1㎝、幅2.3㎝、厚さ1.8㎝である。身の装着孔部分は欠損している。柄の基部下端には滑り止め用の突起がある。樹種は、スギである。

73は一本鋤の柄である。刃部は残存しない。残存長は61.2㎝である。把手は逆三角形状を呈し、同形の孔があいている。柄部の幅3.5～3.7㎝、厚さ2.1㎝とほぼ一定で、断面は扁平な楕円形を呈する。

74は一本鋤の柄である。刃部は残存しない。残存長は48.8㎝である。把手は残存する部分が少ないが、73と同様に逆三角形状を呈する。柄部は幅、厚さともに2.5㎝程であり、断面は隅丸方形に近い。側面にあまり加工はみられず、表裏面に軸方向にケズリを施す。

75は三叉鋤である。残存長は94.6㎝である。把手はT字状を呈する。柄部の幅、厚さは、刃部との境が若干幅広になる以外は一定で、3.6㎝であり、断面はほぼ円形である。肩部は柄部からほぼ垂直に広がり、その後軸線とほぼ並行する刃部側面に至ると考えられる。刃部は先端に行くにつれ薄くなっている。先端は丸味を持つ。中央部分だけで両側が欠損しているので不確かであるが、刃と刃の間が幅狭であることと、先端からの切込みが浅いと考えられる。

暫定的に三叉鋤として図化したが、切込みが短いく狭いことから、欠損した鋤を加工し再利用したものかもしれない。樹種は、クヌギ節である。

76は竪杵の未製品である。片方の搗部を欠損する。残存長は73.4㎝である。芯の部分を残さない部材を用いて作られている。荒削りの段階で、破損し廃棄されたものであろうか。搗部を軸線方向にケズリを施したのちに握部を削り込んでいる。搗部の断面形は楕円形を呈するが、握部は円形に近い。搗部の先端はまだ加工されずに切り出されたときのままのようである。樹種は、クヌギ節である。

77は、丸木弓である。残存長は72.0㎝、弭は両側から削り込んで弦かけ部を作り出している。削り込みは弓幹に対して鈍角に削られ、左右の深さ、角度はほぼ同じである。弭長1.2㎝、厚さ0.5㎝である。樹種は、カヤである。

78は、丸木弓である。残存長は47.3㎝、弭は両側から削り込んで弦かけ部を作り出している。削り込みは弓幹に対して鈍角に削られ、左右で深さ、角度が異なる。そのため、弭が弓幹の中央部分から若干片側にずれている。弭長1.3㎝、厚さ0.5㎝である。弓幹の一部が被熱し炭化している。

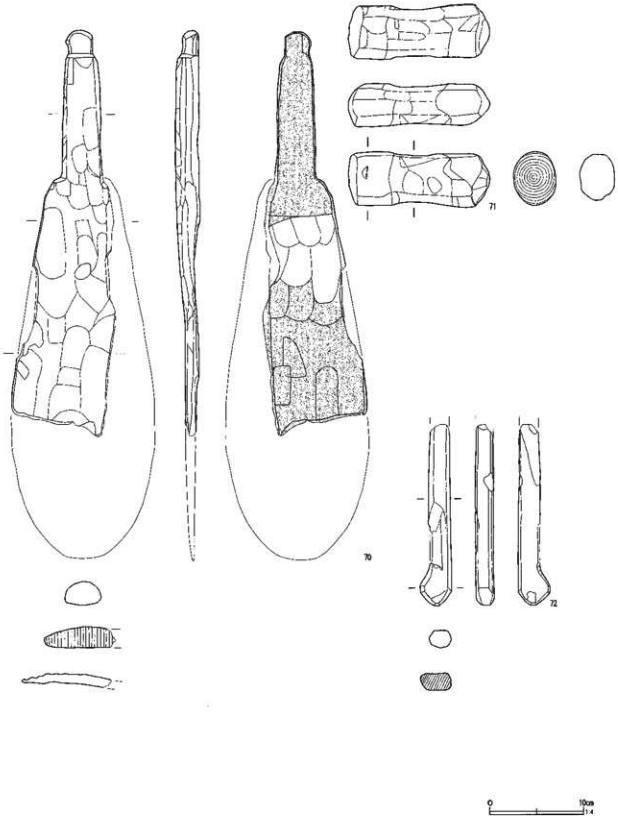
79は不明木製品である。残存長40.4㎝、最大幅6.9㎝である。側面から見ると鳥の頭のようにみえる。

80は加工痕のある木である。残存長56.3㎝、最大幅3.5㎝、厚さ2.7㎝である。自然木に僅かに加工を加えている。

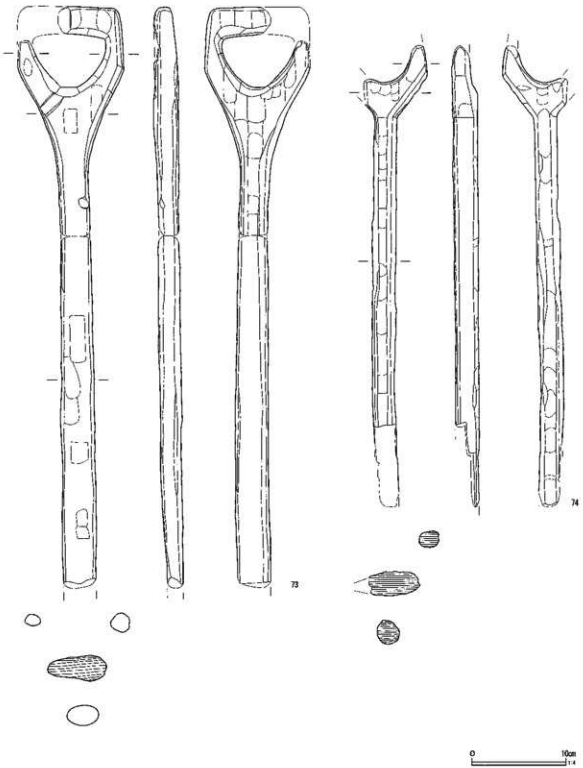
81は杭である。残存長42.0㎝、幅3.2㎝、厚さ2.1㎝で、断面は薄鉾状を呈する。本来は断面が円形の杭が、破損し、被熱したと考えられる。その後、再び先端を加工し、杭として再利用したものであろう。

82は加工痕のある棒である。全長38.3㎝、最大幅4.3㎝である。先端に向かうにつれ幅、厚さともに減じる。掘棒のようなものとして用いられたものと考えられる。

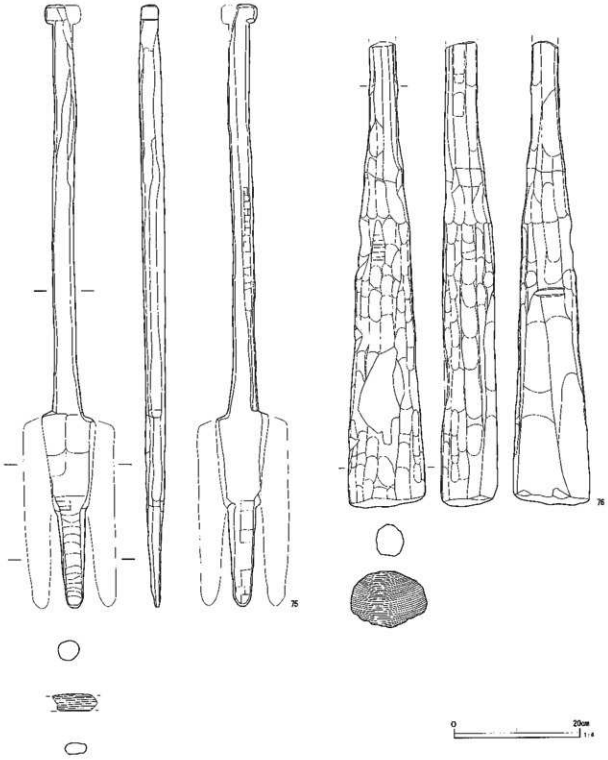
83は建築部材である。残存長64.0㎝、最大幅12.8㎝、厚さ2.4㎝で、断面はL字状を呈する。全面に加工痕が見られ、枘穴が穿たれている。



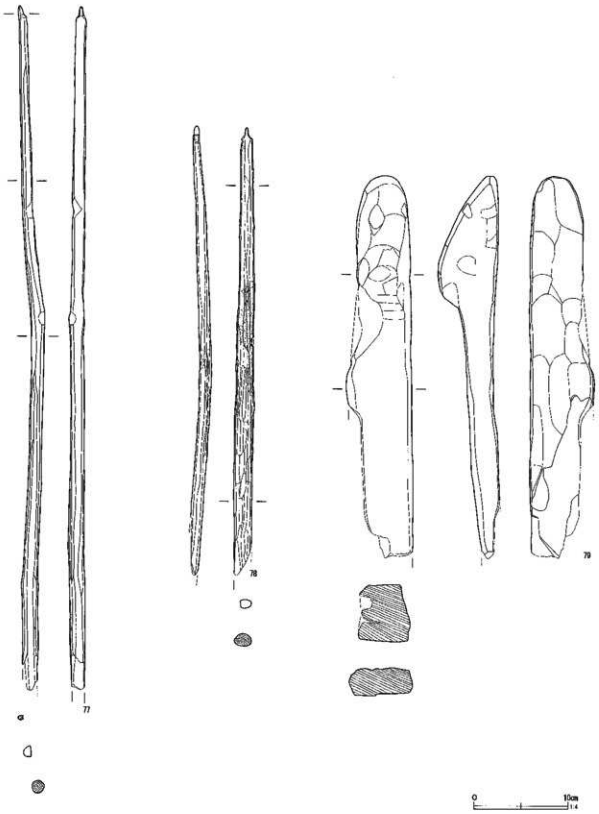
第70図　河川跡出土遺物（5）



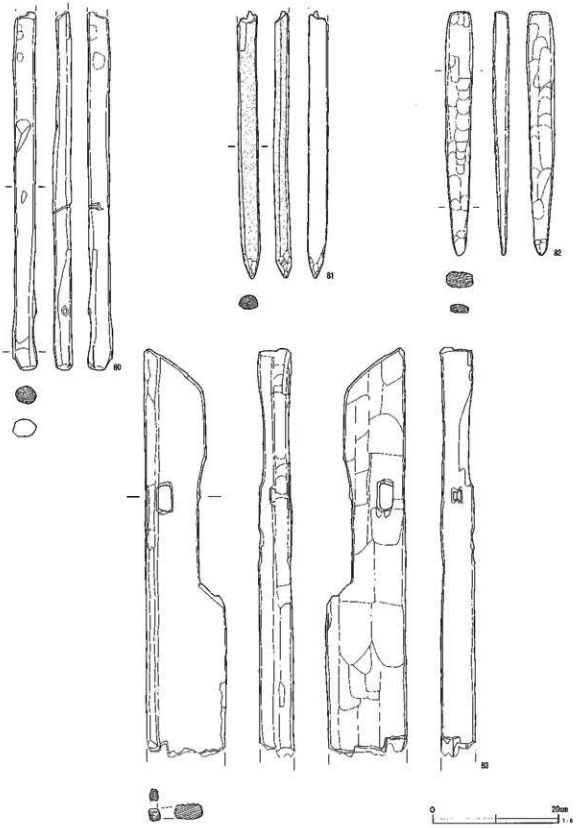
第71図　河川跡出土遺物（6）



第72図　河川跡出土遺物（7）



第73図　河川跡出土遺物（8）



第74図　河川跡出土遺物（9）

（8） 水田跡（第75～83図）

水田跡は、A区のＡＯ～ＡＳ40～43グリッドを中心に検出された。取水溝と考えられる第103号溝跡と、排水溝と考えられる第107号溝跡の間に位置する。A区東側はメインスタジアムの建設変更に伴い下面の調査は行なわなかったので不明であるが水田が展開していたと思われる。また、西側の調査区外も同様であろう。

水田面は、基本土層の第12層で検出された。上層の第11層では古墳時代初頭乃至中期に降灰したとされる、浅間Ｃ火山灰が認められる。すでに報告された第15・16層の弥生時代中期後半の水田跡とは第13・14層をはさみ明確に区別できる。第13・14層は洪水層と考えられ、弥生時代中期後半から後期の土器片を若干含む。これらのことから水田跡の大まかな時期を捉えることができる。すなわち弥生時代後期から古墳時代前期にかけての水田跡である。

水田域の地形は、北東側から南西側に向かい緩やかに傾斜している。エレベーションＢ－Ｂ'のラインで見ると約35ｍで18㎝低くなっている。南東及び南西の一部で水田跡の一部を確認できなかった。これは洪水により畦畔が流失したことによると考えられる。

水田跡は、全部で66枚検出した。平面形態は基本的には北西－南東方向に長い長方形を呈する。一部に北東－南西に長い長方形を呈するもの（ＳＮ50・63）や、台形状（ＳＮ13・31）、菱形状（ＳＮ51）になるものが存在する。いずれにせよ水田域の微地形に沿った地割であると考えられる。

検出した水田の総面積は1153㎡、畦畔部分を引いた面積は886.05㎡である。全形を確認できたのは66枚中37枚で、最小のものは、ＳＮ42の7.04㎡、最大のものは、ＳＮ51で24.45㎡、平均15.70㎡である。検出された水田跡の中心部分（AQ・AR42グリッド付近）に小さい区画が存在し、南側にやや大きな区画が存在する傾向が見られる。但し、相対的には、区画は小さく、いわゆる小区画水田と分類されるものである。

主軸方位（ここでは真北に対してどのくらい傾いているかを言う）も一定で、Ｎ－24°－ＥからＮ－34°－Ｅの範囲に収まる。

畦畔は、幅0.50ｍ、高さ0.10ｍで箱型をしている。南側の一部で幅広の畦畔が認められる。例えば、ＳＮ54の南側やＳＮ57の南側の畦畔などのことである。それぞれ幅2.60ｍ、1.20ｍで通常のものと比べて2.4～5.2倍である。所謂、人畦畔の可能性も想定されるが、部分的で水田域を大きく区画するものではないので、通常の畦畔と考えたい。

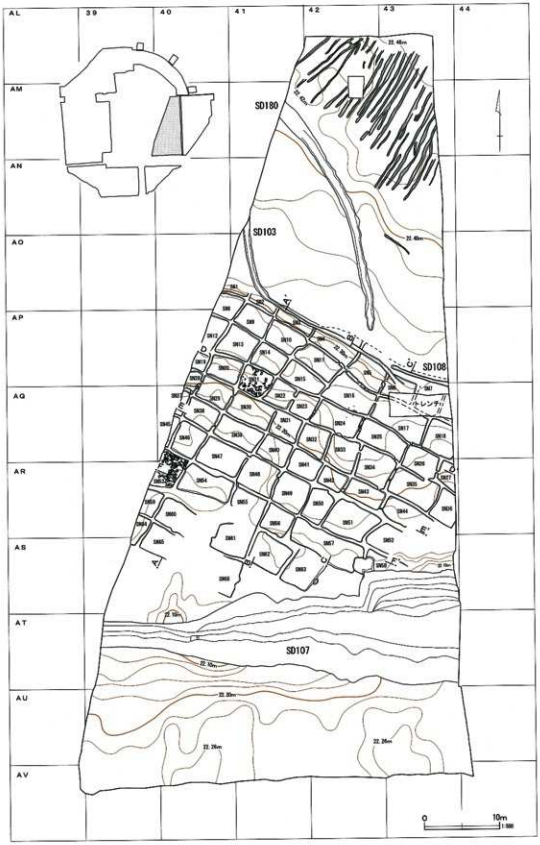
水口は、23ヶ所で確認されている。南北方向に伸びる畦畔で15ヶ所、東西方向に伸びる畦畔で8ヶ所確認されている。水口は畦畔の中央部に取り付けられたところ（ＳＮ23西側・ＳＮ29）、西側ややコーナーに寄ったところ（ＳＮ11北側・ＳＮ17西側等）、コーナー部分に取り付けられたところ（ＳＮ5西側・ＳＮ31西側）など様々である。

すべての水田に水口が取り付けてあるわけではないので、各水田に水を送るのは田越し、懸け流しの方法を用いたと考えられる。

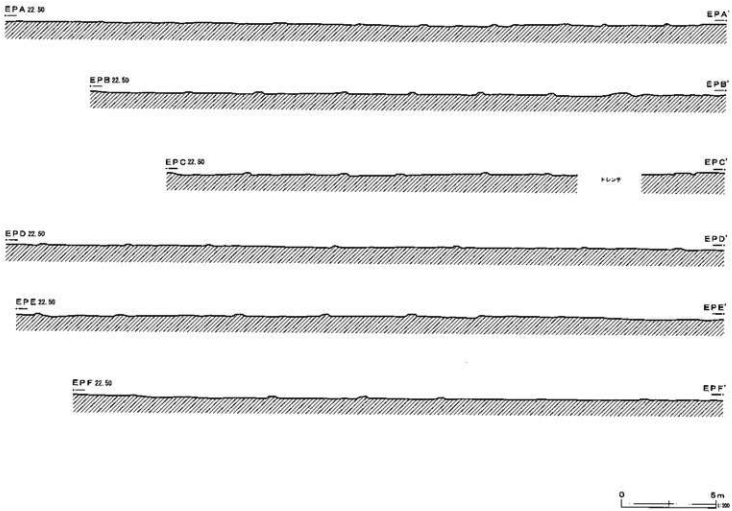
また、ＳＮ21・53で床面に細かい凹凸が認められる。規則的でないことから、田植えの痕跡ではなく、田起こしなどの痕跡と考えられる。

水田への用排水路としては、第93・107号溝跡がそれぞれ相当する。但し、これらの溝跡と水田跡の間には切り合いが見られることから、年毎に水田区画を微妙に変化させていたと考えられる。

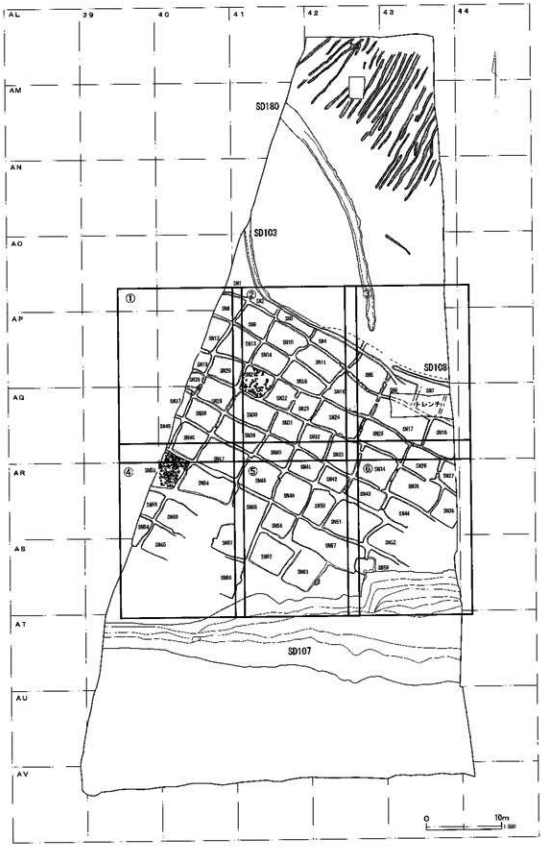
遺物は、１～３が出土した（第84図）。１・２はＳＮ16の畦畔付近で出土した。１は頸部が緩やかにくびれ、胴部中ほどが最大径になる器形の甕である。口唇部にキザミを施す。２は同様に頸部が緩やかにくびれる器形の甕である。頸部から口縁部にかけて９段の輪積痕を残し外面装飾としている。口縁部内面にキザミを有する。３は小型の丸底土器である。



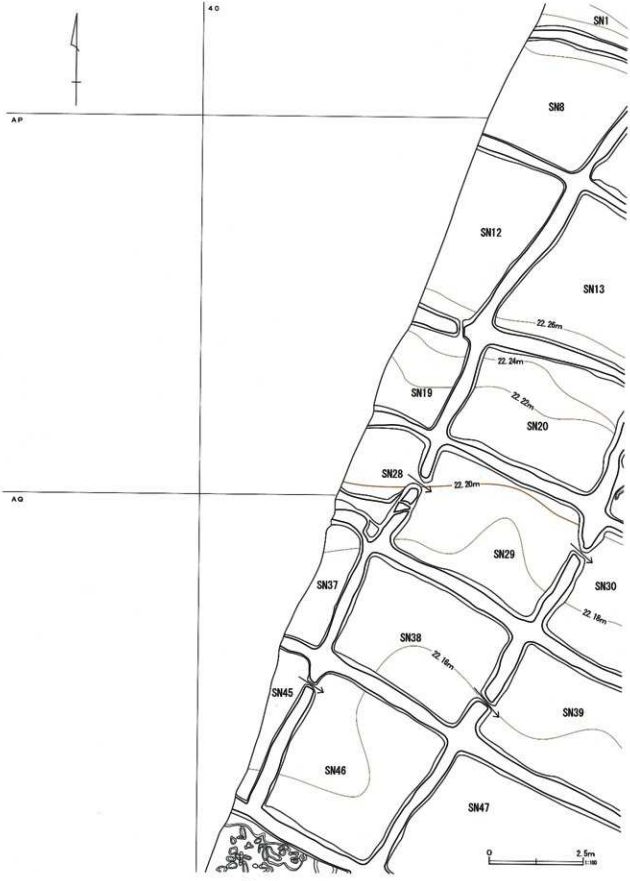
第75図　A区水田跡全体図



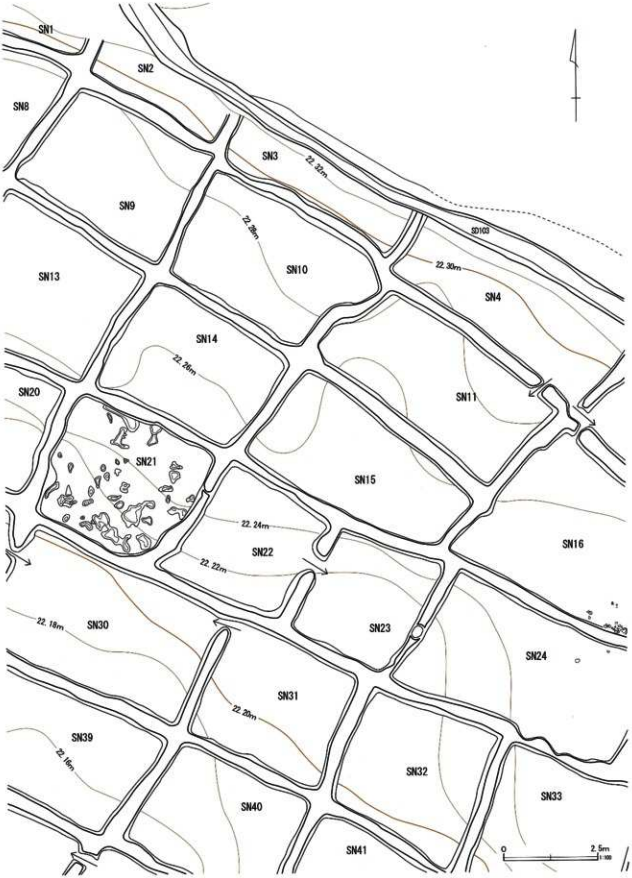
第76図　A区水田層エレベーション



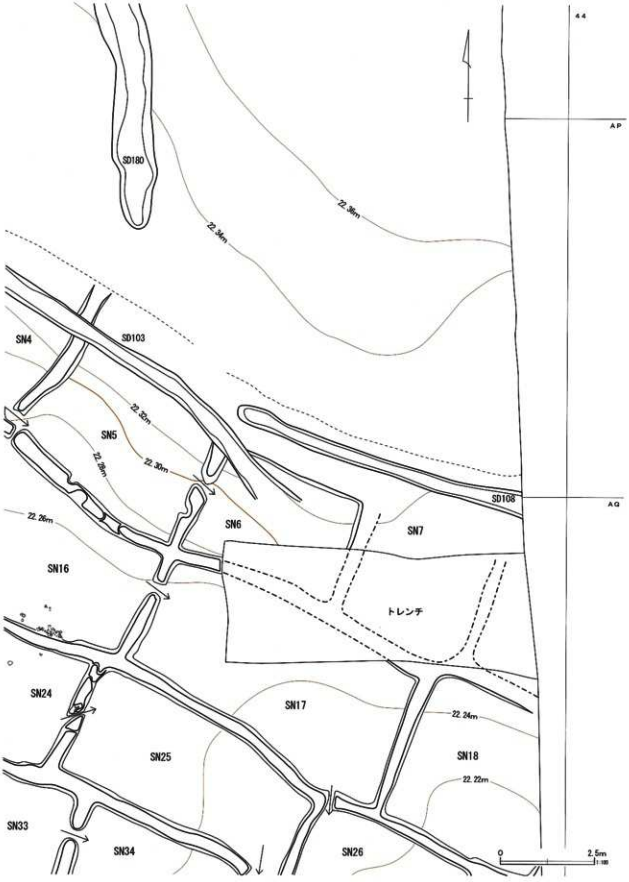
第77図　A区水田跡区割図


4O
AP
AQ
SN1
SN8
SN12
SN13
22.26m
22.24m
22.22m
SN19
SN20
SN28
22.20m
SN29
SN30
22.18m
SN37
SN38
22.16m
SN45
SN39
SN46
SN47
0
2.5m
1:100

第78図　A区水田跡（1）


SN1
SN2
SN3
SN4
SN8
SN9
SN10
SN11
SN13
SN14
SN15
SN16
SN20
SN21
SN22
SN23
SN24
SN30
SN31
SN32
SN33
SN39
SN40
SN41
22.32m
22.28m
22.30m
22.26m
22.24m
22.22m
22.18m
22.20m
22.16m
0
2.5m
1:100

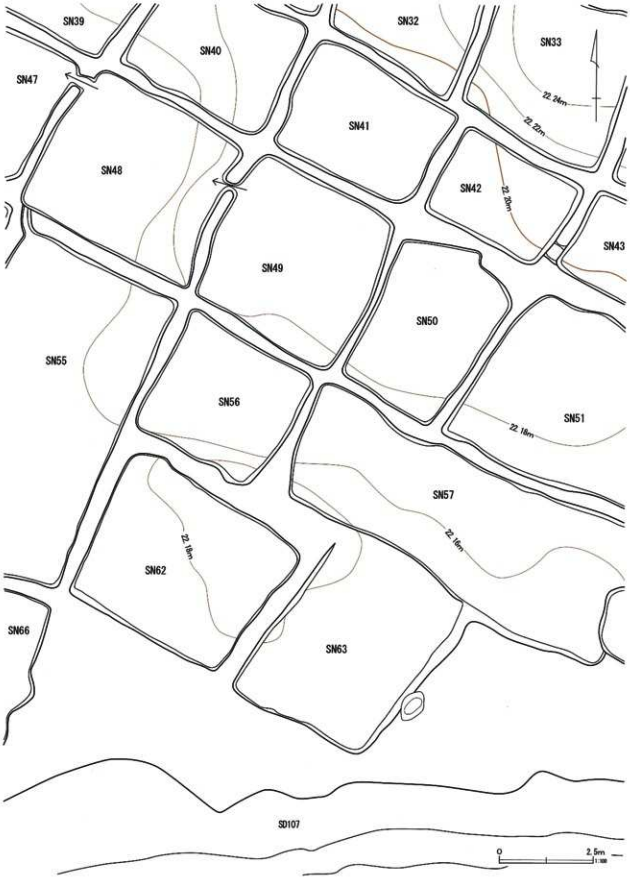
第79図　A区水田跡（2）


44
AP
AQ
SD180
SD103
SD108
SN4
SN5
SN6
SN7
SN16
SN17
SN18
SN24
SN25
SN26
SN33
SN34
トレンチ
22.36m
22.34m
22.32m
22.30m
22.28m
22.26m
22.24m
22.22m
0
2.5m
1:100

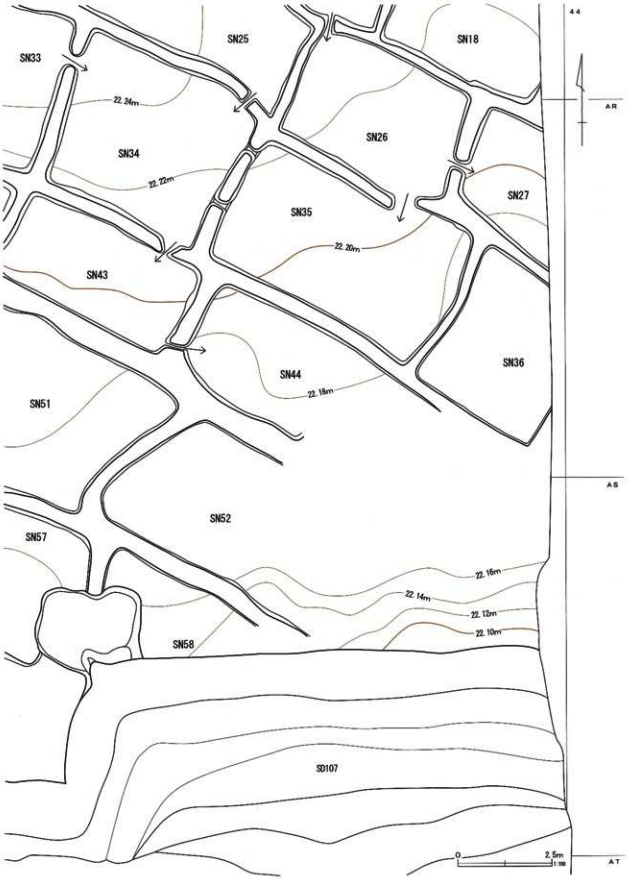
第80図　A区水田跡（3）

40
AR
AS
SN46
SN47
SN53
SN54
SN55
SN59
SN60
SN61
SN64
SN65
SN66
22.14m
22.12m
22.10m
22.14m
0
2.5m
1:100

第81図　A区水田跡（4）


SN39
SN40
SN32
SN33
SN47
SN41
SN48
SN42
SN43
SN49
SN50
SN55
SN56
SN51
SN57
SN62
SN63
SN66
SD107
22.24m
22.22m
22.20m
22.18m
22.16m
22.18m
0
2.5m
1:100

第82図　A区水田跡（5）

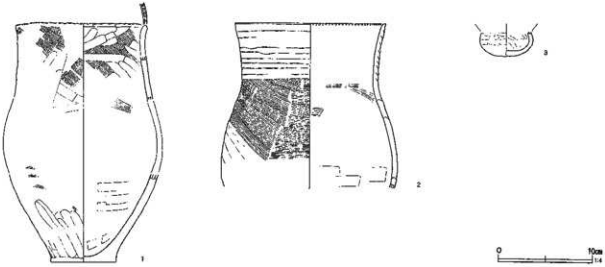

SN33
SN25
SN18
SN34
SN26
SN27
SN35
SN43
SN36
SN44
SN51
SN52
SN57
SN58
SD107
22.24m
22.22m
22.20m
22.18m
22.16m
22.14m
22.12m
22.10m
A4
AR
AS
AT
0
2.5m
1:100

第83図　A区水田跡（6）

第16表　水田計測一覧表

新SN	旧SN	面積(㎡)			長辺(m)	周辺(m)	長辺/短辺	主軸方位	中央	東	南	西	北	水口の位置
1	108	(2.01)			—	—		N-25°-E	—	—	22.30	—	—	
2	109	(5.36)	+α	(3.70)	—	—		N-27°-E	—	—	22.32	—	—	
3	110	(5.95)	+α	(4.90)	—	—		N-30°-E	22.33	22.33	22.30	22.33	—	
4	111	(12.67)	+α	(5.22)	—	—		N-34°-E	22.31	22.28	22.28	22.28	—	南辺、南東隅
5	112	(14.34)	+α	(4.90)	(2.84)	—		N-34°-E	22.29	22.29	22.29	22.29	—	南西隅、東辺
6	113	(10.64)	推定	(3.94)	(2.62)	—		N-23°-E	22.28	—	—	22.29	—	西辺
7	114	(11.36)	推定	(3.06)	(3.40)	—		N-26°-E	22.31	—	—	—	—	
8	115	(9.31)	+α	—	(3.20)	—		N-25°-E	22.27	22.28	22.27	—	22.27	
9	116	12.25		4.36	3.18	1.37		N-30°-E	22.26	22.28	22.24	22.27	22.28	
10	117	13.35		4.81	2.90	1.66		N-30°-E	22.28	22.30	22.25	22.30	22.27	
11	118	14.08		5.64	2.62	2.15		N-34°-E	22.27	22.26	22.26	22.28	22.28	北辺
12	119	(8.76)	+α	—	(4.42)			N-24°-E	—	—	—	22.26	—	南辺
13	120	14.84		4.42	3.24	1.36		N-28°-E	22.26	22.25	22.21	22.25	22.25	
14	121	11.65		4.02	2.60	1.55		N-26°-E	22.26	22.24	22.24	22.24	22.26	
15	122	13.07		5.58	1.41	3.96		N-30°-E	22.25	22.24	22.24	22.24	22.25	
16	123	21.02		6.58	2.78	2.37		N-27°-E	22.25	22.24	22.21	22.24	22.29	東辺
17	124	(22.76)	推定	(7.92)	(2.78)			N-27°-E	22.22	22.25	22.22	22.25	—	西辺
18	125	(14.85)	+α	(4.12)	(3.82)			N-25°-E	22.22	—	22.20	22.24	22.22	
19	126	(4.02)	+α	—	(2.50)			—	—	—	—	22.26	—	北辺
20	127	10.81		4.04	2.54	1.59		N-24°-E	22.22	22.22	22.21	22.22	22.26	
21	128	11.72		3.76	3.28	1.15		N-27°-E	22.24	22.28	22.25	22.27	22.28	
22	129	9.11		3.29	2.64	1.25		N-30°-E	22.22	22.23	22.20	22.23	22.25	東辺
23	130	8.31		3.04	2.52	1.21		N-24°-E	22.19	22.22	22.20	22.22	22.23	西辺
24	132	17.42		6.16	2.96	2.08		N-25°-E	22.23	22.24	22.24	22.24	22.26	東辺
25	133	16.83		6.42	2.84	2.26		N-30°-E	22.25	22.27	22.23	22.23	22.27	西辺、南辺
26	134	13.42		4.20	2.70	1.56		N-30°-E	22.21	22.24	22.21	22.25	22.24	北西隅、東辺、南辺
27	135	(5.32)	+α	—	(2.32)			N-30°-E	22.20	—	22.18	22.21	—	西辺
28	136	(3.20)	+α	—	(2.52)			—	—	—	—	22.20	—	東辺
29	137	11.30		4.08	2.86	1.43		N-26°-E	22.18	22.18	22.18	22.20	22.22	西辺、東辺
30	138·139	17.30		5.78	3.02	1.91		N-27°-E	22.18	22.20	22.17	22.20	22.21	西辺、北東隅
31	140	10.13		3.72	3.01	1.24		N-26°-E	22.20	22.21	22.20	22.21	22.21	北西隅
32	141	11.28		3.48	3.06	1.14		N-25°-E	22.23	22.23	22.22	22.22	22.25	
33	142	14.31		4.05	3.76	1.08		N-25°-E	22.26	22.27	22.23	22.27	22.21	東辺
34	143	18.39		4.20	4.10	1.02		N-26°-E	22.23	22.23	22.21	22.26	22.30	西辺、北辺、南辺
35	144	20.84		5.90	3.28	1.80		N-30°-E	22.19	22.19	22.19	22.23	22.23	北辺
36	145	(11.19)	+α	(3.91)	(3.41)			N-34°-E	22.18	—	22.18	22.18	22.20	
37	146	(3.16)	+α	—	(3.06)			—	—	—	—	22.19	—	
38	147	11.02		4.22	2.70	1.56		N-25°-E	22.17	22.17	22.16	22.19	22.17	
39	148·149	16.26		5.68	2.62	2.17		N-25°-E	22.17	22.16	22.17	22.16	22.18	
40	150	12.01		3.78	2.70	1.40		N-30°-E	22.17	22.18	22.18	22.18	22.20	
41	151	12.20		3.74	2.52	1.48		N-25°-E	22.19	22.22	22.21	22.22	22.22	
42	152	7.04		3.28	2.12	1.55		N-25°-E	22.18	22.21	22.18	22.21	22.22	
43	153	11.13		4.80	2.14	2.24		N-26°-E	22.20	22.22	22.18	22.21	22.22	北辺
44	154	(13.25)	推定	(4.99)	(2.36)			N-30°-E	22.18	22.20	22.20	22.17	22.17	
45		(2.09)	+α	—	(4.11)			—	—	—	—	22.16	—	
46	155	13.19		3.86	3.04	1.27		N-25°-E	22.16	22.16	22.11	22.18	22.16	
47	156·157	19.95		5.58	3.50	1.59		N-26°-E	22.16	22.18	22.16	22.18	22.20	東辺
48	158	18.44		4.82	3.86	1.25		N-27°-E	22.16	22.18	22.16	22.18	22.20	西辺、東辺、南西隅
49	159	17.20		4.14	3.88	1.07		N-27°-E	22.19	22.22	22.19	22.20	22.22	西辺
50	160	12.05		3.89	2.59	1.50		N-27°-E	22.20	22.21	22.22	22.22	22.21	
51	161	24.45		5.56	4.47	1.24		N-27°-E	22.18	22.23	22.18	22.22	22.22	
52	162	(24.51)	推定	(6.29)	(3.64)			N-25°-E	22.17	22.16	22.15	22.19	22.20	
53	163	(13.84)	+α	—	(4.15)			N-25°-E	22.16	22.18	22.16	—	22.20	
54	164·165	19.09		6.58	2.64	2.49		N-23°-E	22.15	22.16	22.14	22.15	22.16	
55	166	(17.71)	推定	(4.34)	(2.36)			N-26°-E	22.16	22.16	—	22.18	22.16	北西隅
56	167	11.28		3.60	3.26	1.10		N-27°-E	22.17	22.18	22.16	22.20	22.20	
57	168	(29.80)	推定	9.95	2.58	3.86		N-25°-E	22.16	22.16	22.14	22.18	22.20	
58	131	(5.95)	+α	—	—			N-30°-E	22.17	—	—	—	22.21	
59	169	(5.60)	+α	—	(3.24)			N-26°-E	22.15	22.15	—	—	22.15	
60	170	(23.29)	推定	(6.95)	(3.04)			N-29°-E	22.15	—	22.15	22.17	22.16	
61	172	(17.19)	推定	(4.58)	(3.12)			N-25°-E	22.17	22.18	22.15	22.16	22.18	
62	173	18.27		5.02	3.72	1.35		N-30°-E	22.17	22.19	22.14	22.16	22.19	
63	174	19.71		4.88	3.62	1.35		N-32°-E	22.15	22.19	22.15	22.18	22.18	
64	175	(5.01)	+α	—	(3.70)			N-22°-E	22.14	22.15	—	—	—	
65	176	(26.59)	推定	(7.70)	3.56			N-26°-E	22.18	—	22.18	22.18	22.18	
66		(21.60)	推定	(4.80)	4.14			N-25°-E	22.15	22.15	—	—	22.17	

α＝未測部分
（　）＝推定



第84図　A区水田跡出土遺物

第17表　A区水田跡出土遺物観察表（第84図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(13.9)	(25.1)	7.0	A I	普通	橙色	50	S N16・24　口縁部キザミ　内外面ハケ　胴部上半煤付着
2	土師甕	(16.0)	[17.3]	—	A B E J	普通	灰褐色	20	S N16・24　No.1　No.2 外面胴部細かいハケ目（11～13本　単位）　内面ナデ
3	土師小型丸底	—	[2.6]	1.5	E H	普通	明赤褐色	30	No.5　内面丁寧ナデ

(9) 畠跡（第86・87図）

畠跡は、A区北側とF区の西側で検出された。

A区では畝の長さ、方向から概ね以下の4群に分けることができる。

第1群は、AL42・43、AM42・43グリッドを中心にする部分である。畝の長さが比較的長く11.10mで、その方位はN－35°－Eである。畝幅、畝間の幅がともに狭い。

第2群は、AM44・45グリッドを中心にする部分である。畝の方向は、N－35°－E、N－75°－E、N－30°－W、N－70°－Wと一定しないが、畝の長さ、幅から同一群として捕らえる。畝の長さは短く、4～5m前後である。畝幅、畝間の幅ともに広い。

第3群は、AM46・47グリッドを中心にする部分である。畝の長さが20m以上と長く、その方位はN－55°－Wである。畝幅は広いが、畝間幅は比較的狭い。

第4群はAL48・49グリッドを中心にする部分である。畝が格子状になるが最大の特徴である。畝の走行方位はN－35°－E、N－55°－Wでほぼ直角に交わる。畝間の幅に多少のばらつきが見られるが概ね等間隔の幅で四方を畝で区切られた場所の面積もほぼ同じである。

F区もA区に比べ残りはよくないが、同様に群として捕らえることが可能である。

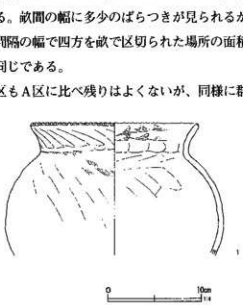
第1群は、AG41・42グリッドを中心とする部分である。畝が途中で途切れるものあるが基本的には長く、9mほどである。方位はN－35°－Eである。南側で畝が方向を変えるがこれは溝等の遺構により発生したと考えられる。

第2群は、AH43グリッドを中心とする部分である。遺存状態があまりよくないが、畝が格子状になると考えられる。畝の走行方位はN－35°－EとN－55°－Wである。畝幅は狭い。畝間の幅は北西から南東に走る畝で広く、北東から南西に走る畝でやや狭いが全体的に幅広である。

第3群は、AJ45、AK45グリッドを中心とする部分である。多くは調査区外へと続くため、畝の長さは不明である。畝の走行方位はN－33°－Eである。畝幅、畝間の幅ともに狭い。

第4群は、AK43グリッドを中心とする部分である。多くが調査区外へと続くため不明であるが、畝の長さは比較的長いと考えられる。畝の走行方位はN－17°－Eである。畝幅、畝間の幅ともに狭い。

遺物は、1が出土した（第85図）。口唇部にキザミを有する甕である。

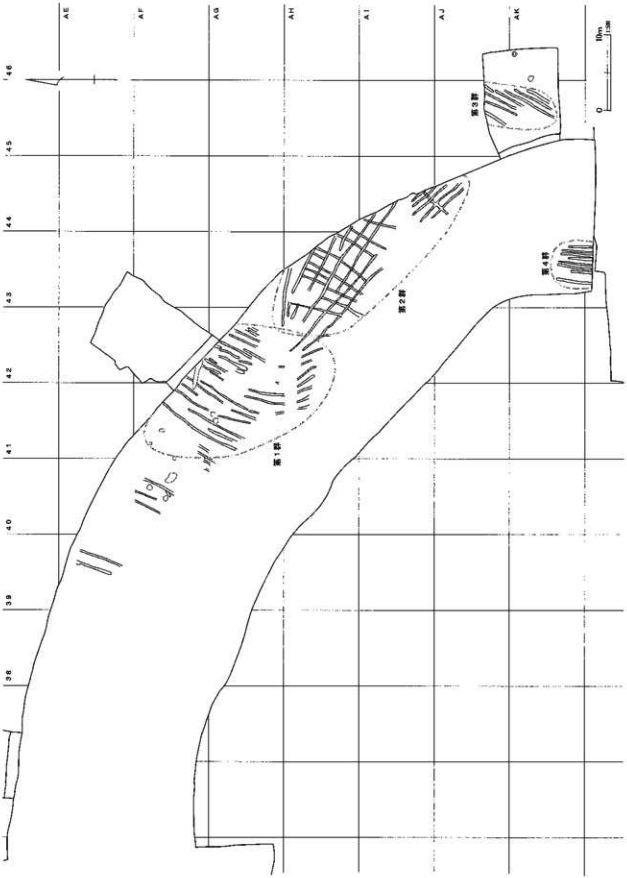


第85図　A区畠跡出土遺物

第18表　A区畠跡出土遺物観察表（第86図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(17.9)	[14.0]	－	AH	普通	にぶい赤褐色	20	口縁部内外面工具ナデ　胴部外面ハケナデ

第86図　A区遺跡全体図



第87図　F区扇跡全体図

(10) 表採及びグリッド出土遺物

ここでは区ごとに遺構確認時の出土遺物や他時期の遺構に紛れ込んだものを掲載する。

A区出土遺物（第88図）

1・2は壺の口縁部である。1は頸部をハケ調整した後、口縁部が折り返される。3・4は甕の口縁部である。3は口唇部にキザミを有する。4は口縁端部に向かうにつれ肥厚する。

C区出土遺物（第89図）

1はS字状口縁台付甕の口縁部である。口縁端部は肥厚する。2は外削状口縁部になる小型の鉢である。3・4は坩の胴部である。5は小型の鉢で内面が赤彩される。6は壺の底部である。7・8は高坏の脚部で等間隔に円形の透孔があけられる。

9は壺の胴部上半である。節の細かいRLが施文される。10・11はRLが施文される吉ヶ谷系の甕である。

F区出土遺物（第90・91図）

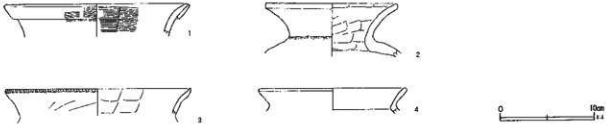
1は球胴形を呈する広口壺で外面が赤彩される。2は器壁が薄い有段口縁の壺である。3・5は壺の底部である。5は底部外面に木葉痕がある。4はS字状結節の縄文を施す壺の胴部上半である。

6～9は壺の口縁部である。6は頸部に突帯をめぐらしその上から焼成前穿孔している。7・8は口縁部が内彎する。

10は口縁部が直立気味の甕で、口縁部を強くヨコナデする。11は台付甕の台部である。12は坩で丸底を呈すると考えられる。13は鉢で外面に細かいミガキを施す。

14～17は高坏である。14は坏部で内位外面ともに細かいミガキを施す。15・17は脚部で等間隔の円形の透孔が4ヶ所あけられる。16は接合部で坏部内面に格子目状のミガキを施す。

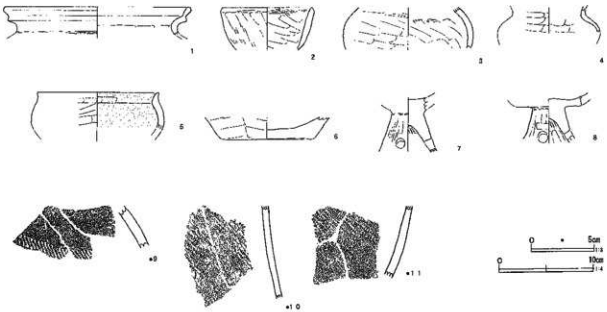
18・19は砥石である。18には敲打痕が残ることから台石に転用されたようである。



第88図　A区グリッド出土遺物

第19表　A区グリッド出土遺物観察表（第88図）

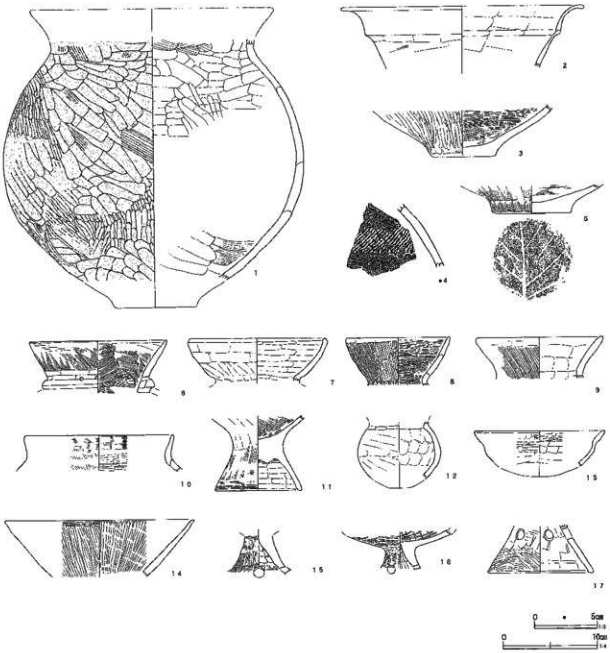
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(20.0)	[3.5]	－	DE	普通	にぶい赤褐色	5以下	ハケ後口縁部を折り返す　ハケ目の間隔が広い
2	土師壺	14.0	[5.5]	－	AE	不良	にぶい赤褐色	10	No21　胴部外面縦位ハケ→ナデ
3	土師甕	(20.0)	[2.8]	－	AH	普通	にぶい黄橙色	5以下	口唇部キザミ
4	土師甕	(15.9)	[2.7]	－	AEH	普通	褐色	5以下	口縁部内外面ヨコナデ



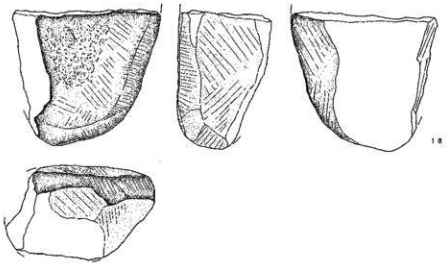
第89図　C区グリッド出土遺物

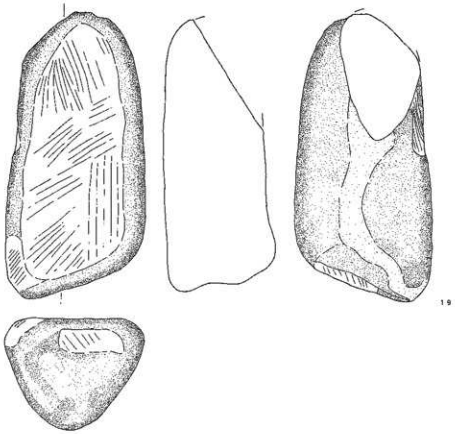
第20表　C区グリッド出土遺物観察表（第89図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(20.0)	[2.9]	—	ADF	普通	にぶい黄橙色	5以下	No5　S字状口縁
2	土師鉢	(10.0)	[4.5]	—	AEH	普通	暗灰色	5	粗製　外面工具ナデ　内面工具横ナデ
3	土師坩	—	[4.4]	—	ADE	普通	にぶい黄橙色	5以下	内外面ナデ
4	土師坩	—	[2.7]	—	DE	普通	浅黄橙色	5	薄手　器面が荒れている
5	土師鉢	(12.9)	[4.0]	—	ADE	普通	にぶい黄橙色	5以下	内面赤彩
6	土師甕	—	[2.3]	(10.0)	AH	普通	にぶい赤褐色	5以下	No1　木兼痕　剥落が激しい
7	土師高坏	—	[5.6]	—	AE	普通	にぶい橙色	20	脚部のみ残存　4孔の円形透し有り
8	土師高坏	—	[4.3]	—	ABE	普通	明褐灰色	5	脚部のみ残存　円形の透しが認められる
9	土師壺	—	—	—	AE	普通	にぶい黄橙色		胴部破片　単節RL　帯縄文
10	土師甕	—	—	—	AE	普通	にぶい橙色		単節RL　煤付着
11	土師甕	—	—	—	EH	普通	にぶい橙色		単節RL　煤付着



第90図　F区グリッド出土遺物（1）





0 5cm
1:3

第91図　F区グリッド出土遺物（2）

第21表　F区グリッド出土遺物観察表（第90・91図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師広口壺	—	[25.3]	—	H	普通	にぶい褐色	15	外面全体赤彩　ハケ→ミガキ
2	土師壺	(26.0)	[6.6]	—	AE	普通	橙色	5以下	有段口縁　器面の摩滅が著しい
3	土師壺	—	[5.4]	7.0	AE	普通	にぶい黄色	5以下	外面粗い縦位ミガキ　内面横位ハケ　底面ケズリ
4	土師壺	—	—	—	AGI	普通	にぶい橙色		胴部破片　単節LR帯構文　胴部ミガキ及び赤彩　構文部は赤彩せず
5	土師壺	—	[3.0]	8.4	AE	普通	にぶい黄橙色	5	外面縦位ハケ　内面横ナデ　木葉痕
6	土師壺	(14.6)	[5.5]	—	ADE	良好	にぶい黄橙色	5以下	頸部に貼付突帯
7	土師壺	(15.0)	[4.8]	—	BG	普通	にぶい橙色	5以下	内湾口縁　内外面丁寧な横位ミガキ
8	土師埦	11.2	[5.0]	—	EH	良好	にぶい黄橙	5	外面縦位ミガキ　内面横位ミガキ
9	土師壺	(13.6)	[4.5]	—	EH	普通	灰黄色	5以下	外面口縁斜位ハケ　内面工具横ナデ
10	土師甕	(16.0)	[4.0]	—	EH	良好	にぶい黄橙色	5以下	直立口縁　口縁部内外面ささら状工具ナデ　胴部ハケ
11	土師台付甕	—	[7.9]	9.2	AE	普通	灰褐色	5以下	台部　外面縦位ナデ　器部内面ハケ　内外面ナデ
12	土師埦	—	[6.0]	—	EH	普通	灰褐色	10	胴部の一部のみ残存
13	土師鉢	(14.0)	[3.8]	—	ADE	良好	赤橙色	5以下	有段口縁　口縁部内外面横位ミガキ　体部工具ナデ
14	土師高坏	(20.2)	[6.0]	—	EH	良好	橙	5以下	坏部　内外面縦位ミガキ
15	土師高坏	—	[4.7]	—	AE	良好	にぶい橙色	20	脚部　全周で4孔の円形透し有り
16	土師高坏	—	[3.8]	—	AE	良好	にぶい黄橙色	10	№3　3孔の円形透し有り
17	土師高坏	—	[5.0]	11.2	DE	普通	にぶい黄橙色	5以下	脚部　4孔の円形透し有り
18	砥石	—		—					安山岩　長さ10.8cm　幅11.7cm　厚さ7.4cm　重さ1144 g
19	砥石	—		—					安山岩　長さ22.7cm　幅11.0cm　厚さ8.9cm　重さ2820 g
									煤の付着から炉石としての使用も考えられる

V　第19地点の調査

1．第19地点の概要

第19地点は、弥生時代中期から近世に至るまでの遺構及びそれに伴う遺物が確認されている。各時代を通して遺構、遺物が膨大で北島遺跡の中でも中心をなす地点であると目される。すでに弥生時代中期については『北島遺跡Ⅵ』で、古墳については、『北島Ⅷ／田谷』で、古代以降については『北島遺跡Ⅴ』・『北島遺跡Ⅸ』で報告がなされている。ここではしがらみ状遺構、堰跡、河川跡及びそれに伴う護岸跡、畠跡について報告する。

本地点は、第17地点の北西側、第21地点の東側に位置し、屋内競技場の建設に伴い発掘調査が行われた。調査区はほぼ南北に長い長方形を呈する。

第17地点とは、調査区の南西端を東流する河川跡により、区切られている。本地点は、北側から南側に向かい緩やかに傾斜する自然堤防上に立地する。標高は、23m前後である。

調査区は、中央部分を北西から南東に縦断する中央水路によって東西に分けられる。中央水路の西側は、南西を河川跡により区切られ、西側から北西側を調査区に沿うように北流する河川跡により区切られている。護岸跡は、この北流する河川に沿って築かれている。しがらみ状遺構は、この河川跡と中央水路の境界付近に存在する。堰跡は、中央水路に築かれている。畠跡は、中央水路の北東側に広がり調査区外へと延びる。

護岸跡、しがらみ状遺構、堰跡は、それぞれ河川跡、中央水路中に存在することから、他時期の遺構により破壊されることなく存在する。しかし、洪水などの自然の営為により、破壊されたと見え、残りは良好ではない。畠跡は、古代の溝跡により破壊されているが、調査区北端部分は良好に遺存していた。

2．遺構と遺物

(1)　しがらみ状遺構（第93・94図）

しがらみ状遺構は、調査区北側のC19・D19グリッドで検出された。本跡付近で河川跡は河幅を狭める。後述するように、古墳時代前期以降、河川に沿うように堤が築かれ、これにより自然河道は人為的に制御され、中央水路へと注ぐ。中央水路が人為的に掘削された断面形を呈するのに対して、本跡付近では非常に緩やかな立ち上がりとなる。

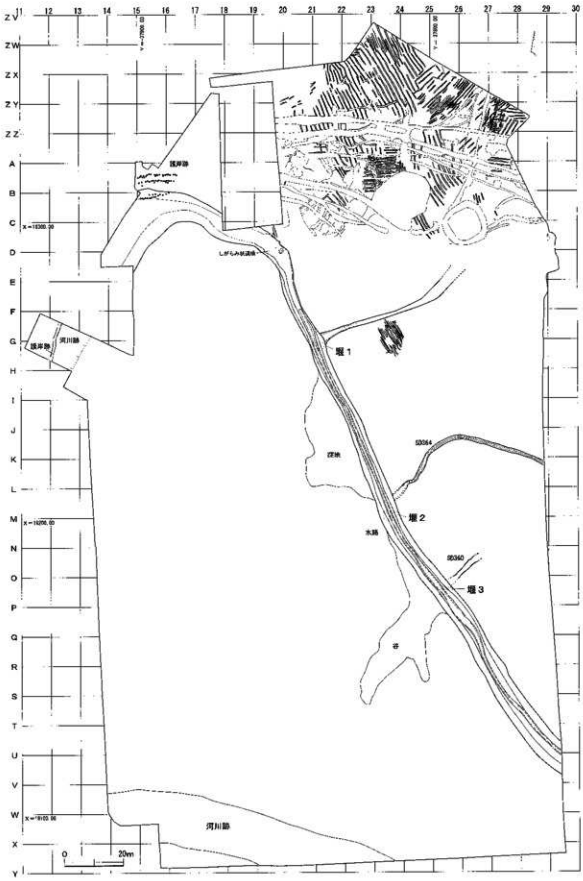
河川跡の中央付近に細い杭が数本打ち込まれていた。杭は方形にある範囲を区画したり、列状に並ぶ様子は見られない。抜き取られたり、流失したのであろう。

杭の周辺では、ムシロ状のものが検出された。ムシロ状のものは河川跡中央部分で流れに直行するように検出された。遺存状態はあまりよくなく、ところどころで確認できなかった。検出時では4つのブロックに分かれていた。ムシロ状のものは樹皮を使い編まれている。編み目の粗密はあるが編み方はほぼ同じである。このことから本来は、一連のものと思われる。おそらく、幅0.60m程で、全長は河底と等しい5m前後になると思われる。

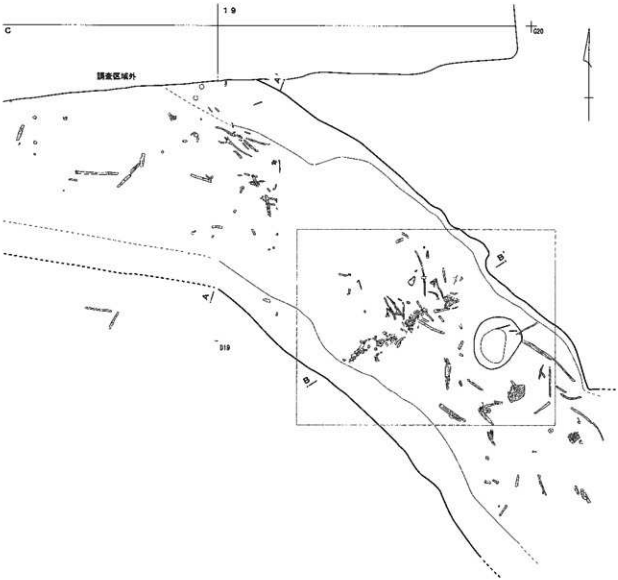
ムシロ状のものは面的に広がっているが、検出された高さもほぼ同じで、重畳するようなことはない。また、周辺には河川跡から分岐する溝跡も見られないので、堰跡とは考えられない。

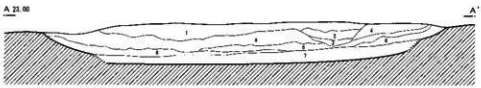
以上のことから築のような機能を果たしていたと考えられる。周辺からは流木などが検出されたが、本跡の構造材の一部であるかは不明である。

図示できる遺物は出土していない。



第92図　第19地点全体図



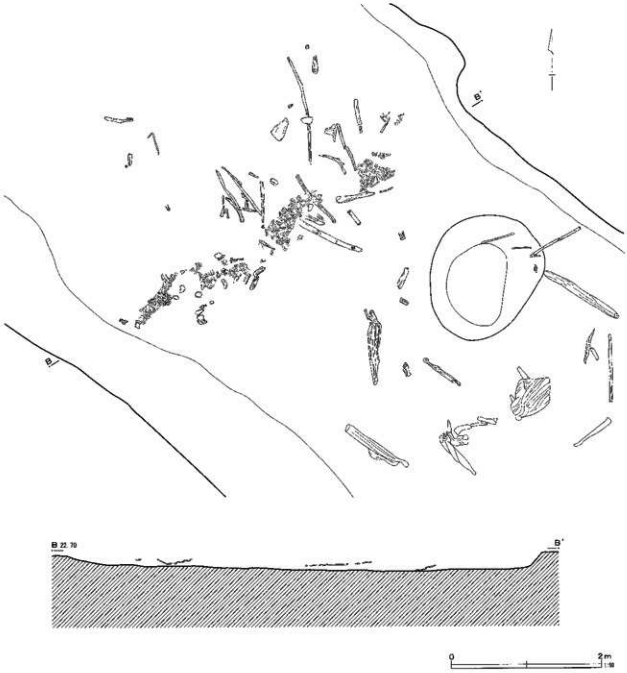


牧船遺跡下河川跡

1	灰色土	灰色及び白色粘土の混合層。炭化物を少量含む。しまりあり。粘性強い。
2	灰色土	1層に似る。炭化物を多量に含む。色調もやや暗い。
3	暗灰色土	部分的に白色粘土がブロック状に含む。炭化物を少量含む。しまり弱い。粘性非常に強い。
4	暗灰色土	炭化物（φ1cmほど）を多量に含む。細砂をブロック状に含む。しまりあり。粘性やや弱い。
5	青灰褐色砂	炭化物を少量含む。
6	黒灰色土	灰色粘土。炭化物、植物遺体を多量に含む。しまり弱い。粘性強い。
7	灰褐色砂	均一性が高い。

0 4m 1:80

第93図　しがらみ状遺構（1）



第94図　しがらみ状遺構（2）

（2） 堰跡

第1号堰跡（第95・96図）

第1号堰跡は、G21グリッドで検出された。中央水路に築かれた三つの堰跡の中で一番北側に位置する。本跡の築かれたところでの中央水路は幅5.52m、確認面から深さ0.86mを測る。溝底は幅広で西側が一段落ち込んでいる。全体的に溝底に凹凸が見られる。掘り込みは、西側では幅狭なテラスを持ちながら緩やかに立ち上がり、東側では直線的に斜めに立ち上がる。

杭の太さには、直径180mm、70mmの二種類が見られる。二種類とも断面はほぼ円形を呈する。杭は先端を加工し尖らせたものがほとんどである。反対側は強い力が加わり折られたものが見られる。特に、杭6・8・15等は折断痕が明瞭である。杭の打ち込みの深さは、杭の太さとはあまり関係なく0.3～1mである。ただ、水路の中央部分に位置する杭は、比較的深く打ち込まれている。

太い杭が比較的直線に並ぶ杭1～杭20を結んだラインが堰の中心をなすものと考えられる。杭9と杭10、杭13と杭20のように交差するように打ち込まれたところがあることから、このライン上に横木を渡していた可能性が高い。

想定中心ラインの前面には垂直に打ち込んだ杭が数本見られるが、列をなす様子はない。おそらく中心部を補強するための杭であろう。後側にも同様に杭列が見られる。調査時には橋の一部と考えたが、ここでは堰に付属するものと考えておきたい。

堰跡は、中心ラインを基準にすると中央水路とほぼ直行する。また、枝溝跡の中心ラインの延長線上に位置する。堰の構造部分は、中央水路の幅の三分の二ほどの長さであり、西側の1.5mほどは開放している。

本跡により堰き止めた水は、枝溝跡に流されたと考えられる。中央水路と枝溝跡との高低差は、溝底で0.50mである。このことから少なくとも堰跡の高さは0.50m以上あるものと思われる。

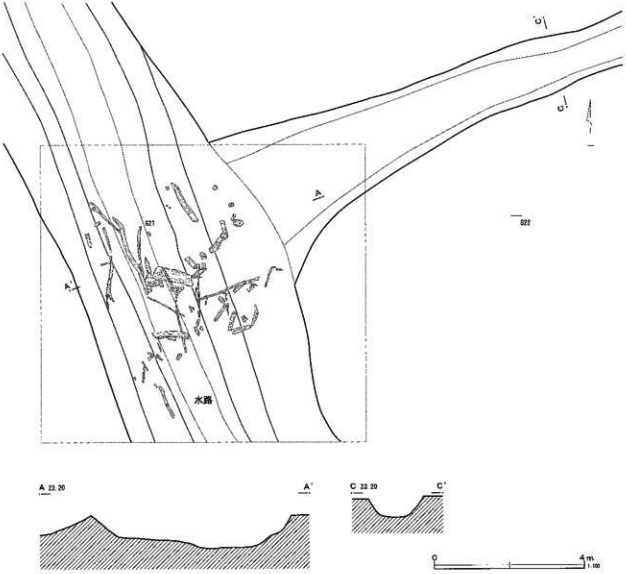
遺物は図示し得ない土器とともに鎌身が出土している。木製品に関しては、『北島遺跡XIII』にまとめて掲載するので、そちらを参考にしてもらいたい。以下第2号堰跡についても同様である。

第2号堰跡（第97～99図）

第2号堰跡は、M23グリッドで検出された。中央水路に築かれた三つの堰跡のうち中央に位置する。本跡の築かれたところでの中央水路は幅6.25m、確認面から深さ1.26mを測る。溝底はやや丸みを帯び、幅3.60mを測る。その溝底から西側では幅広のテラスを持ちながら立ち上がる。東側は斜めに直線的に立ち上がる。テラスの幅の違いを除けば、ほぼ第1号堰跡が築かれたところと同様である。

溝底の両端に太さ120mmほどの杭が垂直に打ち込まれている。その間には杭は見られない。西側のテラス部分には溝底の杭と比べてやや細い直径60mmほどの杭が垂直に打ち込まれている。杭自体は垂直に打ち込まれたものが多いが上端が欠損しているものが多い。この垂直に杭が打たれた列（A列）の南東側にも杭列が認められる（B列）。A列とB列の間の距離は1.50mを測る。B列の両端には交差するように斜めに打ち込まれた杭も存在する。これらのことからB列では横木が存在した可能性がある。また、B列の北西側にはこれに沿うように細い杭が等間隔に打ち込まれている。これらの杭列もB列に存在した横木を支える補助的な役割を果たしたものかもしれない。これらの杭列の周辺では長さ2m以上の木材が検出されている。これらの中に横木が存在する可能性がある。

本跡により堰き止められた水は、第364号溝跡に流されたと考えられる。第364号溝跡はすでに、弥生時代中期の溝跡として報告されている。しかし、溝跡の土層断面の観察から何度かの掘りなおしが見られる。また、少数ではあるが五領式土器以降の破片も出土している。これらのことから第364号溝跡



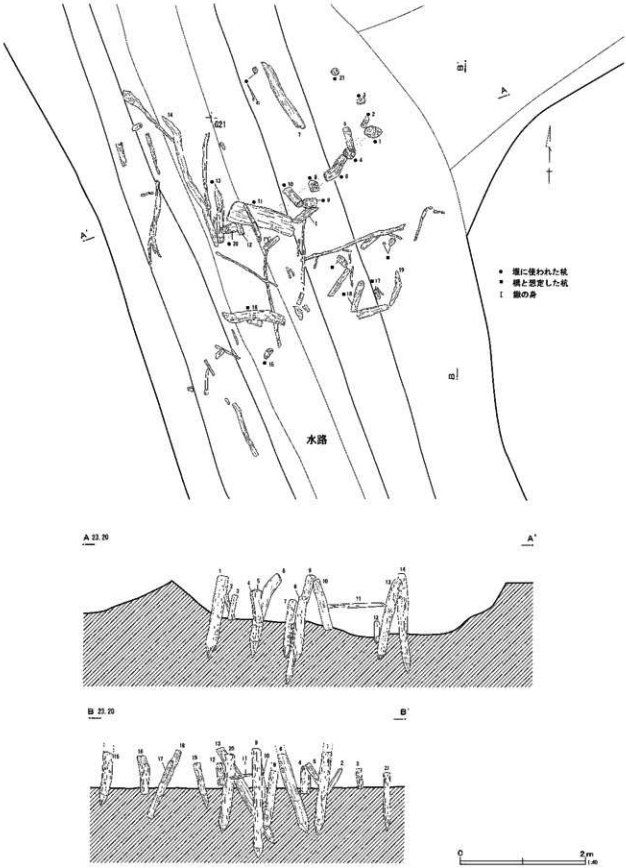
第95図　第１号燈跡（1）

はその初現が弥生時代中期に遡ることができるが、その後何度か埋没と掘りなおしを経て、多少の満幅や深さの変化はあろうが断続的に使用されたものと思われる。

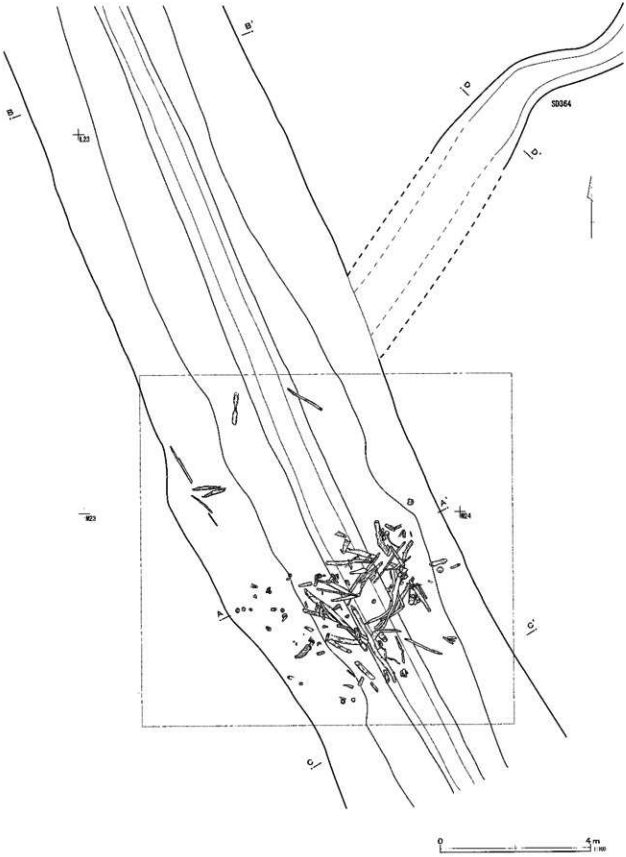
中央水路と第364号溝跡との高低差は溝底で0.50mである。このことから堰跡の高さは0.50m以上あると思われる。

遺物は、鍬身とともに１～13が出土した（第100図）。１～４はパレス壺の口縁部から胴部上半の破片である。１は外面が赤彩され、口縁部内面に矢羽根状の沈線が連続する。２は頸部破片で平行沈線の下に赤彩で連続山形文、あるいは「ハ」の字状の文様をめぐらすと考えられる。３・４はおそらく同一個体で平行沈線の下に連続山形文が施文される。

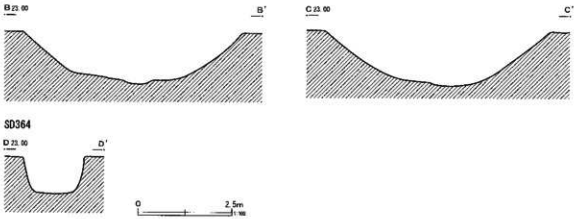
５は折返口縁の壺で器壁が肉厚である。口唇部は丸みを帯びる。６はミニチュア土器で口縁部は大きく外方に開く器形であろう。７は器台で脚部に等間隔に円形の透孔が４ヶ所あけられる。８・９は高坏



第96図　第1号堰跡（2）



第97図　第２号墳跡（1）



第98図　第２号堰跡（2）

である。８は脚部に３孔一組の円形の透孔が対角線上にあけられる。９は裾が広い脚部をもち、そこにほぼ等間隔に円形の透孔が４ヶ所あけられている。10は坩である。丸底を呈し、胴部外面はケズリが施される。10がやや新しいものと考えられるが１～10は古墳時代前期の所産である。

11は頸部が括れる平底の鉢である。12は小型の甕である。13は頸部が屈曲し、口縁部が直立する平底の鉢である。11～13は５世紀後半の所産である。

これらのことから本跡の使用時期の上限は５世紀後半であると思われる。

第３号堰跡（第101・102図）

第３号堰跡は、O25グリッドで検出された。中央水路に築かれた堰跡のうち一番南側に位置する。本跡の築かれたところでの中央水路は幅6.42ｍ、確認面から深さ1.48ｍを測る。第１・２号堰跡が築かれた水路部分の掘方とは明らかに異なり、丸みのある溝底から緩やかに立ち上がる。

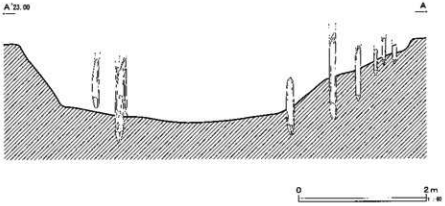
３ヶ所の堰跡のうち最も遺存状態が悪く、セクションラインＡ－Ａ'で杭列が一列見つかっているだけでほかに杭列は見られない。杭は垂直に打ち込まれたものと、やや斜めに打ち込まれたものがある。水路の中央部分の杭は太く、直径130㎜、縁側は細く、80㎜の杭が打ち込まれている。また、斜めに打ち込まれたものは太く、中央部分に多い。これは、第１・２号堰跡には見られない特徴である。

杭の下端は削りだされたものが多い。上端は第１・２号堰跡の杭と同様に強い力が加わり折れている。断面図からも分かるように太い杭は深く打ち込まれ、細いものは浅く打ち込まれている。これらのことから細い杭は補助的な杭であったのであろう。

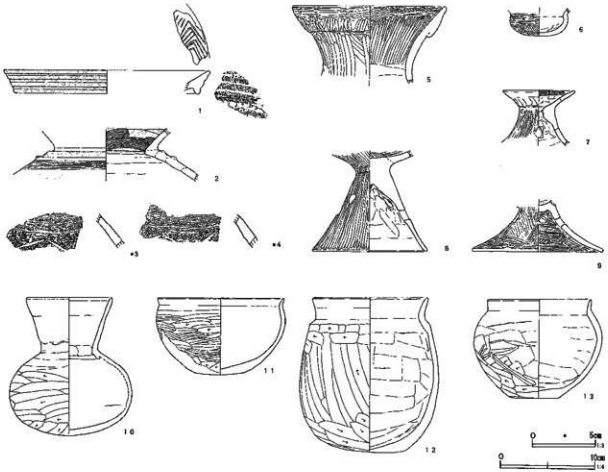
本跡により堰き止められた水は第360号溝跡に流されたと考えられる。中央水路と第360号溝跡の溝底での高低差は0.40ｍあることから堰跡の高さは0.40ｍ以上あるものと思われる。

遺物は１～３が出土した（第103図）。１は横傘坏で外面のケズリ痕が明瞭である。２は内湾口縁の坏で内外面が赤彩される。３は高坏で脚部を欠損する。これらの遺物は堰の使用時の上限をあらわす資料であろう。

前述のように本跡付近の溝底は緩やかであることから中央水路が水路としての機能を失いつつある時期の所産であると考えられる。このことから第１・２号堰跡より後出するものであろう。



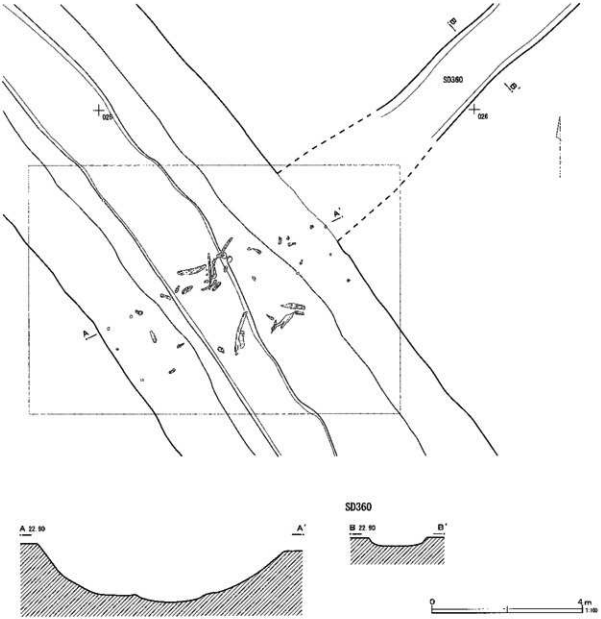
第99図　第2号煙跡（3）



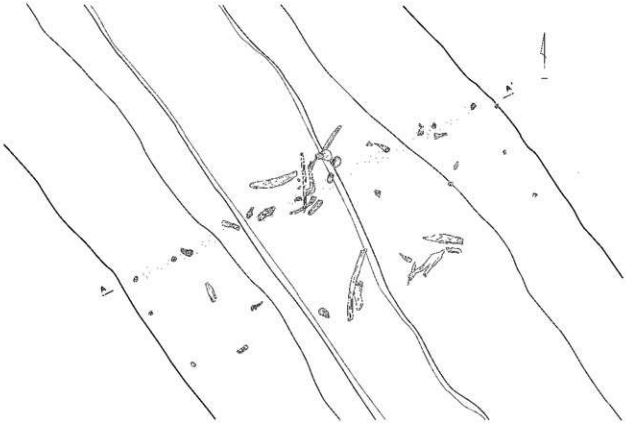
第100図　第２号壙跡出土遺物

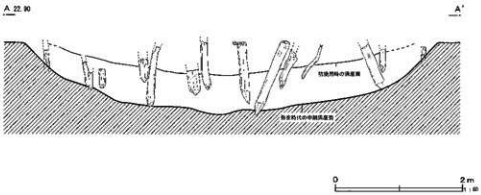
第22表　第２号壙跡出土遺物観察表（第100図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	—	[2.5]	—	BE	良好	にぶい橙色	5以下	パレス壺　外面赤彩
2	土師壺	—	[5.6]	—	AE	普通	にぶい赤褐色	10	内外面赤彩
3	土師壺	—	—	—	AE	普通	にぶい赤褐色		鋸歯文部分を赤彩
4	土師壺	—	—	—	AE	普通	にぶい赤褐色		斜面文部分を赤彩
5	土師壺	16.2	[8.2]	—	AE	普通	褐灰色	30	折り返し口縁　内外面ミガキ
6	土師ミニチュア壺	—	[3.0]	—	E	普通	褐灰色	60	外面細かいミガキ
7	土師器台	7.6	[5.8]	—	BE	普通	褐灰色	60	透孔４ヶ所　外面縦位ミガキ
8	土師高坏	—	[10.7]	(12.2)	BE	普通	褐灰色	65	脚部円形透孔3箇×２組
9	土師高坏	—	[5.4]	13.8	BG	普通	褐灰色	60	透孔４ヶ所　外面やや磨耗する
10	土師甕	(9.0)	14.6	—	ABDE	普通	橙色	90	No.7　内面調整不明瞭　輪積み痕　指頭痕 明瞭なヘラケズリ　丸底甕
11	土師鉢	(13.6)	8.1	5.2	BCGI	普通	にぶい橙色	60	No.6　内外面磨耗する
12	土師甕	12.0	16.3	9.0	ABDE	普通	にぶい橙色	80	No.6　小型甕　外面ケズリ
13	土師鉢	11.0	10.5	5.2	AB	普通	にぶい橙色	95	No.5　外面ケズリ→一部ミガキ



第101図　第３号墳跡（1）





第102図　第３号堰跡（2）

第103図　第３号堰跡出土遺物

第23表　第３号堰跡出土遺物観察表（第103図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏	12.8	5.1	－	B	普通	灰褐色	90	ヘラケズリ
2	土師坏	12.8	5.9	－	AB	普通	にぶい赤褐色	70	内外面赤彩　外面ケズリ
3	土師高坏	(16.0)	[5.7]	－	B	良好	褐灰色	30	外面縦位ミガキ

（３）　河川跡及び護岸跡

護岸跡は調査区の西側を沿うように南西方向から北東方向へ流れる河川跡に伴い検出された。同河川跡は弥生時代中期まではさらに北東側に延びていたと考えられる。古墳時代前期に至り、流路の付替えが行なわれ、堤を築いたため古墳時代前期以降は調査区の中央部分を縦断する水路跡に注ぎ込んだと考えられる。ここでは北側部分を第１号護岸跡、南側を第２号護岸跡と呼称する。両者はそれぞれ調査区外へと続くため推定の域を出ないが同一の護岸跡として築かれた可能性がある。

第１号護岸跡（第104～106図）

第１号護岸跡は、調査区北西端のＡ15、Ｂ15グリッドで検出された。本護岸跡が築かれた地点で北流してきた河川跡はその流路を大きく変え、弧を描くようにして南東に流れる。

護岸跡は３列の杭列を基本として築かれている。北側から第１杭列、第２杭列、第３杭列と呼称する。

一番南側の第３杭列は河川跡中に検出された。第１杭列と第２杭列が河川跡の上端とほぼ並行するのに対して本杭列は、並行せずやや趣を異にする。

第１杭列、第２杭列は緩やかな弧を描きながら並行し、杭列間約２ｍである。杭列間及びその周辺は、ムシロ状の敷物と砂や黒色土を主体とした土とを互層にして堤を構築している。ムシロ状の敷物は一部では編んだ痕跡が明瞭に認められたが、繊維質の束を一定方向に敷き詰めただけの場所も多く認められる。ムシロ状の敷物は断面の観察から、少なくとも４層以上が確認された。

堤の上面には河川の氾濫によりもたらされた砂が堆積することから堤の多くは河川の氾濫により流失したものと考えられる。

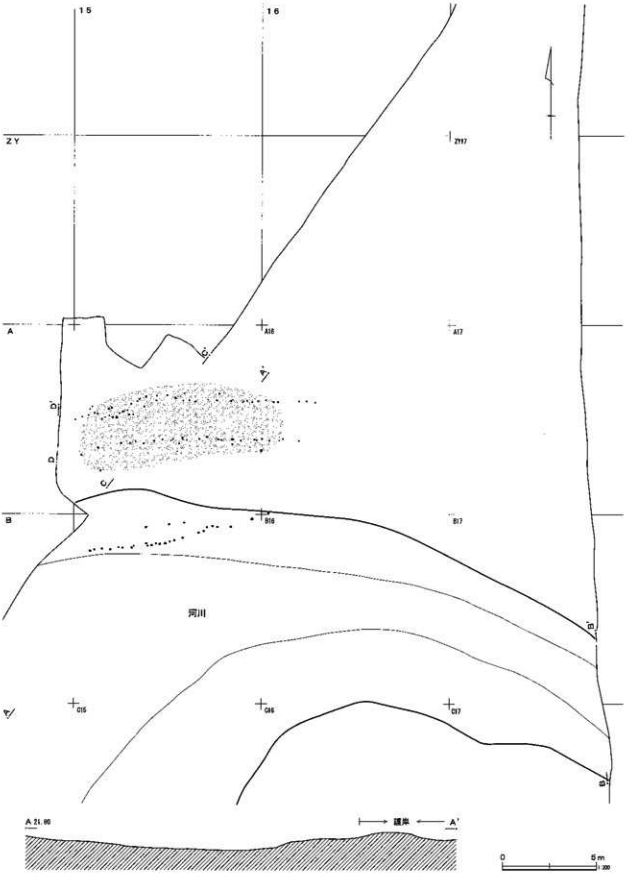
また、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ20グリッドに築かれた弥生時代中期の堰跡が古墳時代前期においても堤状の高まりとして機能していたようである。このことから第１護岸跡とつながる可能性がある。

堤の掘方や盛土の中からは遺物は確認できなかった。周辺からではあるが第108図３・４が出土している。ともに台付甕の台部である。

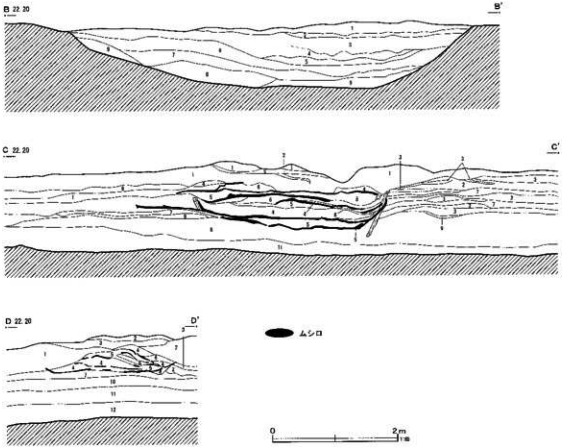
第２号護岸跡（第107図）

第２号護岸跡は、調査区西側のＦ13、Ｇ13グリッドで検出された。本地点での河川跡の幅は9.20ｍほどである。検出された長さは12.80ｍ、幅0.90ｍでやや蛇行する。高さ0.90ｍで、断面は台形状を呈する。

堤構築以前の河川幅はさらに幅広であった。そのことは、断面図を見ればわかるように、堤の下から第35層以下が安定して堆積していることからも判る。このことから堤は、河川の中ほどに築かれたことになる。



第104図　河川跡・第1号護岸跡（1）



河川断面 (B－B')
1 灰褐色砂 炭化物を含む。
2 暗茶色土 植物片を多量に含む砂層。
3 褐灰色土 植物片を多量に含む。砂と粘土のブロックがほぼ半々である。
4 暗灰色粘土 砂粒のブロック(φ3cm)を多量に含む。
5 乳黒色粘土 砂粒のブロック(φ1cm)、植物片を少量含む。
6 黒褐色粘土 砂粒のブロック(φ2cm)をやや多く含む。
7 暗灰黒色粘土 砂粒のブロック(φ3cm)を多量に含む。
8 明茶褐色土 鉄分のやや沈殿した砂層である。
9 黒灰色土 砂粒、植物片を少量含む。

護岸断面 (C－C')(D－D')
1 純砂層(河川による)自然堆積層。
2 砂と粘土のブロックの混土層(河川による)自然堆積層。
3 砂と粘土のブロックの混土層(河川による)自然堆積層。
4 黒色土 砂のブロック(φ3~5cm)を多量に含む。盛土(土質土)。
5 黒色土 砂のブロック(φ3cm)を含む。盛土(粘質土)。
6 砂と黒色土を各々ブロック状(φ3~5cm)に含む層。盛土(粘質土)。
7 出灰色土 炭化物を多量に含む。
8 褐灰色土 砂礫(φ1~2cm)を非常に多く含む。河川内の砂礫層。
砂礫(φ0.5~1cm)を少量含む。河川内の砂礫層。
砂礫(φ0.5~1cm)を微量含む。河川内の砂礫層。
9 木皮片を層状に多く含む土層。
10 黒灰色土 粘土層中に植物片を多量に含む。
11 暗黒灰色土 暗灰色粘土層。
12 明青灰色粘土層。

第105図 河川跡・第1号護岸跡 (2)

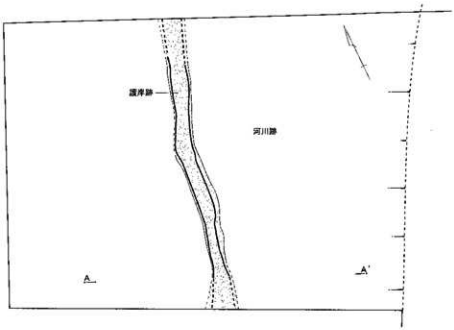
堤は暗褐色土と黒褐色土の盛土で築かれ、杭などによる補強は見られない。また、盛土中には黄灰色粘土ブロック、淡緑色粘土ブロックを含む。これの粘土は河川の堆積土に見られるものである。これらのことから堤は他所より運ばれた土に河底の粘土を混ぜて構築したものであろう。

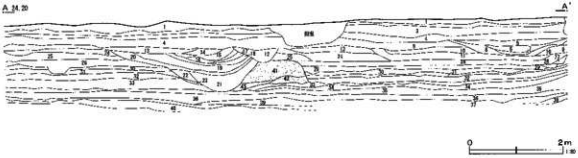
第30層以下の層序が堤の東西で安定していることから、堤は第30層が堆積した後に築かれたものであろう。このことは第31・32層に黄灰色粘土を多く含むことからも首肯できる。

現存する堤の高さは第30層の上面より、僅か0.20mしかない。実際にはより高かったと考えられる。

前述のように堤はおそらく、河川跡の中ほどに中州状になったところを基盤に築かれている。このことは堤構築時に水量が少なかったことを意味する。これらのことから、堤は河幅を狭めることにより、

第106図　第1号護岸跡・ムシロ状遺物検出状態図

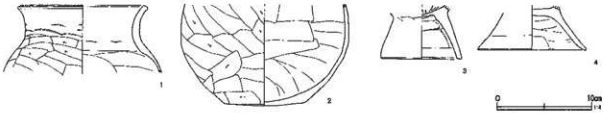




第２号護岸跡

1　灰褐色土　　火山灰Ａｓ－Ｃ軽石を多量に含む。
2　明黄色土　　火山灰Ａｓ－Ｃ軽石を含む。
3　灰褐色土　　火山灰Ａｓ－Ｃ軽石を少量含む。
4　暗褐色土　　火山灰Ａｓ－Ｃ軽石を微量に含む。
　　黒色土ブロックを少量含む。
5　黒褐色土　　炭化粒子を多量に含む。灰色粘土ブロックを少量含む。
6　黒色土　　灰色粘土、炭化粒子を多量に含む。
7　暗灰褐色土　灰褐色粘土中体に炭化粒子を多量に含む。
8　黒色土　　灰色粘土ブロック、炭化粒子を多量に含む。
9　黒褐色土　　炭灰色粘土塊状ブロック、炭化粒子、焼土粒子を多量に含む。
10　黒褐色土　　炭化粒子を多量に含む。
　　灰褐色粘土ブロック、焼土粒子を少量に含む。
11　黒褐色土　　炭化粒子、黄灰色粘土ブロックを多量に含む。
12　暗褐色土　　炭灰色粘土ブロック多量に含む。炭化粒子少量含む。
13　暗褐色土　　黄灰色粘土ブロックを少量含む。炭化粒子を微量に含む。
14　褐色土　　黄灰色粘土ブロックを多量に含む。
15　黒褐色土　　黄灰色粘土ブロックを多量に含む。炭化粒子を少量含む。
16　灰褐色土　　火山灰Ａｓ－Ｂ軽石層。
17　黒灰色土　　黄灰色粘土ブロックを多量に含む。
18　黒色土　　黄灰色粘土ブロック、炭化粒子を少量含む。
19　褐灰色土　　黄灰色粘土ブロックを少量含む。炭化粒子を含む。
20　褐灰色土　　炭灰色粘土ブロックを含む。
21　褐色土　　淡緑色粘土ブロックを少量含む。
22　暗褐色土　　淡緑色粘土ブロックを少量含む。
23　暗褐色土　　淡緑色粘土ブロックを多量に含む。
24　黒褐色土　　黄灰色粘土ブロックを少量含む。
　　炭化粒子を微量に含む。
25　暗褐色土　　黄灰色粘土粒子を少量含む。炭化粒子を微量に含む。
26　暗褐灰色土　炭化粒子、黄灰色粘土ブロックを少量に含む。
27　暗褐色土　　炭化粒子、黄灰色粘土を少量に含む。
28　暗褐灰色土　黄灰色粘土を少量に含む。炭化粒子を微量に含む。
29　暗褐色土　　炭化粒子を少量に含む。粗砂層。
30　黄灰色土　　黒色土ブロックを少量含む。炭化粒子を微量に含む。
31　暗黄灰色土　黄灰色粘土と炭化粒子の互層。
32　黄灰色土　　黄灰色粘土と炭化粒子の混土。
33　暗褐色土　　暗褐色粘土主体、炭化粒子と黄灰色粘土の互層。
34　黄灰色土　　炭灰色粘土と炭化粒子の互層。
35　褐緑灰色土　淡緑灰色シルト主体に褐灰色粘土ブロックを少量含む。
36　淡褐灰色土　淡褐灰色粘土主体に褐灰色粘土ブロックを少量含む。
37　淡灰色土　　シルト質。
38　黒灰色土　　淡緑灰色粘土ブロックと黄灰色土の混土。
39　黒灰色土　　淡緑灰色シルトブロックを少量含む。
　　炭化粒子を微量に含む。
40　淡緑灰色土　黄灰色粘土小ブロックを少量含む。
41　暗褐色土　　炭灰色粘土ブロックを含む。砂構築土。
42　黒褐色土　　淡緑色粘土ブロックを含む。砂構築土。
43　褐灰色土　　炭化粒子を少量含む。砂構築土。

第107図　第２号護岸跡



第108図　河川跡出土遺物

第24表　河川跡出土遺物観察表（第108図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(14.0)	[7.1]	—	A B	普通	にぶい黄橙色	30	G12グリッド　内外面摩滅
2	土師甕	—	[10.8]	8.4	A B	普通	にぶい黄橙色	30	G12グリッド　内外面摩滅
3	土師台付甕	—	[5.8]	8.6	A B D G	普通	にぶい褐色	5以下	台部外面摩滅
4	土師台付甕	—	[4.7]	(11.6)	A B	普通	にぶい橙色	5以下	台部外面摩滅

水深と水量を安定させるために築かれたものであろう。

遺物は河川跡の覆土中から第108図の１・２が出土した。１は甕の口縁部から頸部で、２は胴部下半から底部にかけてである。ともにケズリ痕が明瞭である。

水深と水量を安定させるために築かれたものであろう。

遺物は河川跡の覆土中から第108図の１・２が出土した。１は甕の口縁部から頸部で、２は胴部下半から底部にかけてである。ともにケズリ痕が明瞭である。

（４）　畠跡（第109～112図）

畠跡は調査区北側で検出された。本地点は弥生時代中期には河川の氾濫原であった。前述のように堤を築いて河川の流路を変えたことにより畠を開いたのであろう。畠跡の北側には第20地点が調査され、同様に下層から畠跡が検出された。このことから、畠の面積はさらに広い。

畠跡は畝の走行方位や長さから６群に分けることができる。第１群はＺＷ22～24、ＺＸ21～24、ＺＹ21～23グリッドを中心に検出された。６群に分けた中で一番面積が広い。畝の走行方位はＮ－30°－Ｗで畝の幅は0.40ｍ、畝間の幅は広く1.10ｍである。

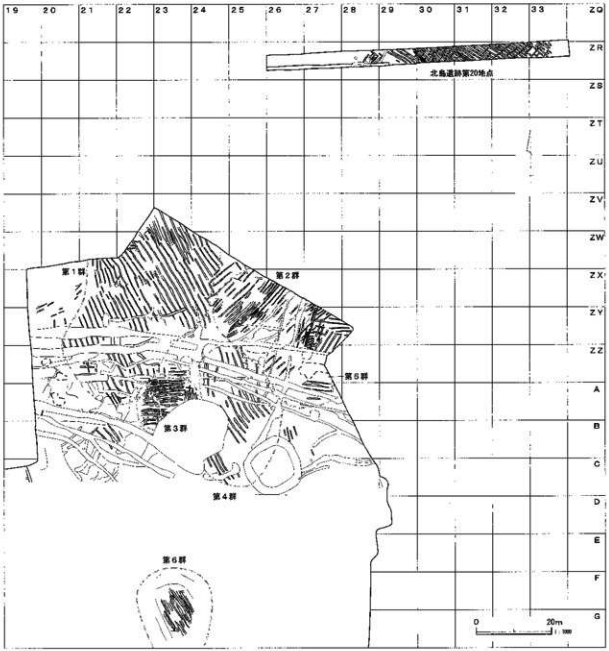
第２群はＺＸ25、ＺＹ25グリッドで検出された。畝の走行方位はＮ－42°－Ｅで、畝の幅は0.30ｍ、畝間の幅は狭く0.40ｍである。

第３群はＡ23、Ｂ23グリッドで検出された。畝の走行方位はＮ－83°－Ｅで、畝の幅は0.50ｍ、畝間の幅も同じく0.50ｍである。

第４群はＺＺ25、Ａ25、Ｂ25グリッドを中心に検出された。畝の走行方位はＮ－27°－Ｗで、畝の幅は0.40ｍ、畝間の幅は広く1.10ｍである。

第５群はＺＹ 26・27、ＺＺ 26・27グリッドで検出された。畝の走行方位はＮ－85°－Ｗ、Ｎ－45°－Ｅ、Ｎ－35°－Ｅと多数見られ、一定しない。畝の幅は0.30ｍで、畝間の幅は狭く0.40ｍである。

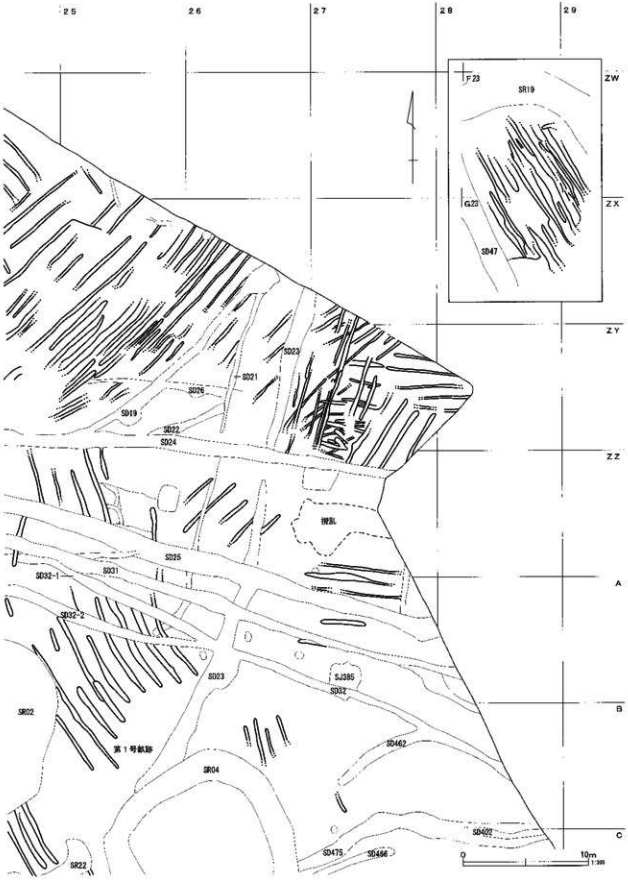
第６群はＦ23、Ｇ23グリッドで検出された。畝の走行方位はＮ－42°－Ｅで、畝の幅は0.30ｍ、畝間の幅は狭く0.40ｍである。

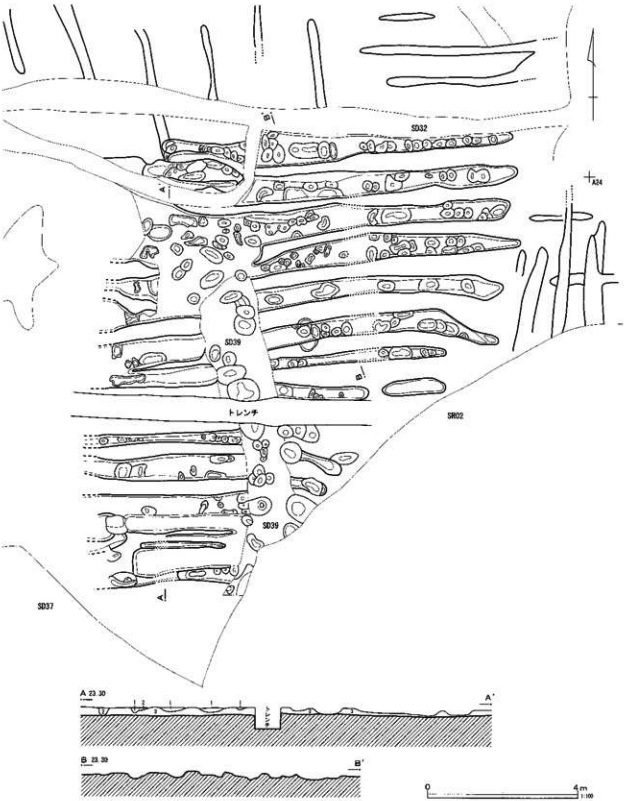


第109図　第19・20地点島跡全体図

20
21
22
24
ZW
ZZ
A
B
C
SD16
SD10
SD24
SD12
SD25
撹乱
SD447・448
SD31
SD31
撹乱
SD32
SD32
SD12
SD33
撹乱
第2号航跡
SD37
SR02
SD36
SD29
SD460

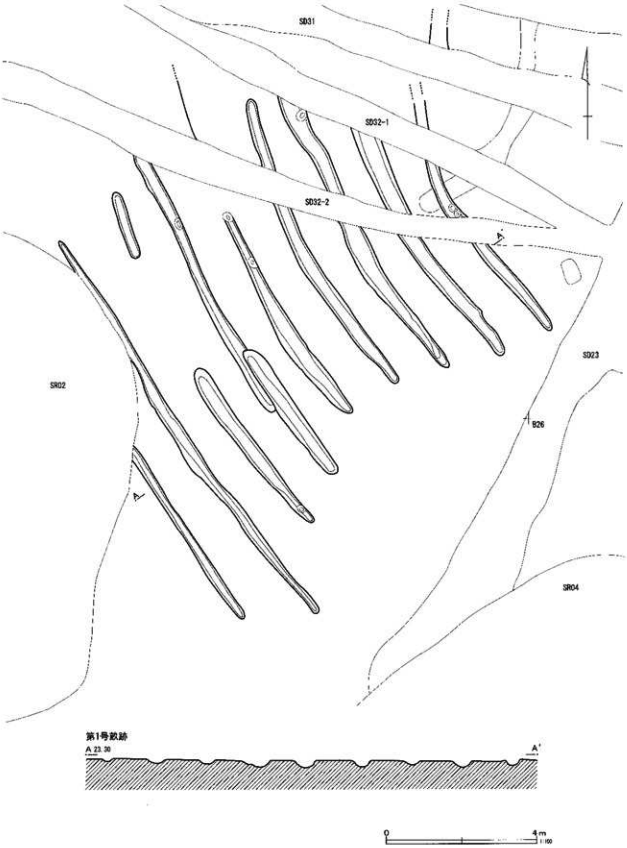
第110図　畠跡（1）


25
26
27
28
29
ZW
ZX
ZY
ZZ
A
B
C
F23
SR19
G23
SD47
SD23
SD21
SD26
SD19
SD22
SD24
SD25
SD32-1
SD31
SD32-2
SD23
SJ085
SD32
SR02
第1号軌跡
SD462
SR04
SD402
SD475
SD466
SR22
0
10m
1:300



第2号畝跡（A－A'）
1　灰色土　　炭化物を少量含む，オリーブ黄色の地山土を粒子状に含む。
2　灰オリーブ色土　　炭化物を少量含む，地山土を粒子状に多量に含む。
3　オリーブ黄色シルト質土　　鉄分を含む。

第111図　畠跡（2）

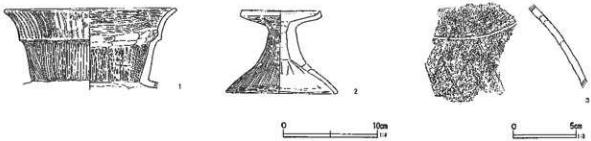


第112図　畠跡（3）

（5） 中央水路出土遺物（第113図）

ここでは中央水路一括で取り上げたものを図示する。

1は有段口縁の壺である。内外面ともに丁寧なミガキを施す。2は器台である脚部に2孔一組の円形の透孔が対角線上にあけられる。3は壺の胴部上半である。横沈線で区画した中を格子目状に沈線を施す。沈線で三角形あるいは菱形に区画された中を段違いに赤彩と黒彩を塗り分ける。



第113図　中央水路出土遺物

第25表　中央水路出土遺物観察表（第113図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(18.4)	[8.5]	－	E	普通	橙色	5以下	内外面ハケ→ミガキ
2	土師器台	8.2	8.7	(12.0)	A E	普通	にぶい橙色	50	透孔4ヶ所
3	土師壺	－	－	－	A	普通	にぶい黄橙色		外面赤色・黒色彩彩　内面磨耗

Ⅵ 第21地点の調査

1．第21地点の概要

第21地点の調査は、オーバーブリッジ建設に先立ち調査された。今回の国体関係調査の主要部分である第19地点の西側約200ｍの場所に位置し、過去に調査された第９地点を間に挟むような形で調査区が設定されている。

本地点の現状は、平坦な地形で、標高は23.8ｍほどである。ただし、遺構が築かれた時期には度重なる河川の氾濫により、自然堤防と後背湿地とが入り乱れる複雑な地形を呈していたと思われる。

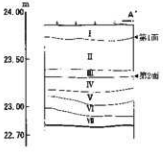
本地点の基本土層は、確認されたもので７層ある。第１層は近現代の耕作土層である。第２層は洪水によりもたらされたものと考えられる。第３層は少量の炭化物を含む層である。以下第７層まで確認することができた。遺構確認面は２面認められた。それぞれ第１面、第２面と呼称する。第１面は第１層直下で、第２面は第３層直下で確認された。それぞれ原表土から、0.10ｍ、0.50ｍ掘り下げたところで、標高は23.70ｍ、23.30ｍを測る。第１面は古墳時代後期以降の、第２面では古墳時代前期の遺構がそれぞれ確認されている。

検出された遺構は、竪穴住居跡４軒、土壙30基、溝跡35条、河川跡、ピット多数である。このほかに第２面では畠跡が確認されている。

遺構は第１面では調査区中央付近を南北に走る河川跡をはさみ、東西に分布している。河川跡の東側に分布する遺構は第19地点の遺構群の西端に、西側に分布する遺構は、第２・３地点の遺構群の東端に位置するものと考えられる。

第２面は、畠跡を中心に住居跡が２軒検出されただけであった。また、第１面で河川跡の確認された場所より西側では遺構はまったく確認できなかった。すなわち、河川の氾濫原であったと考えられる。

このことから古墳時代前期では本地点は住居域というよりは河川の氾濫原を利用した生産域として機能していたと考えられる。



基本土層
Ⅰ：暗褐色土　炭化粒子、砂分を少量含む、粘質あり。
Ⅱ：灰褐色土　砂分を非常に多量に含む、粘質あり。
Ⅲ：暗灰色土　砂分を非常に多量に含む、炭化粒子を微量含む、粘質あり。
Ⅳ：暗褐色土　粘質あり。
Ⅴ：暗褐色土ブロック（φ3～4cm）、砂分を少量含む、粘質あり。
Ⅵ：黒灰色土　炭化粒子、砂分を少量含む、粘質あり。
Ⅶ：暗青灰色土　粘質あり。

第114図　第21地点基本土層

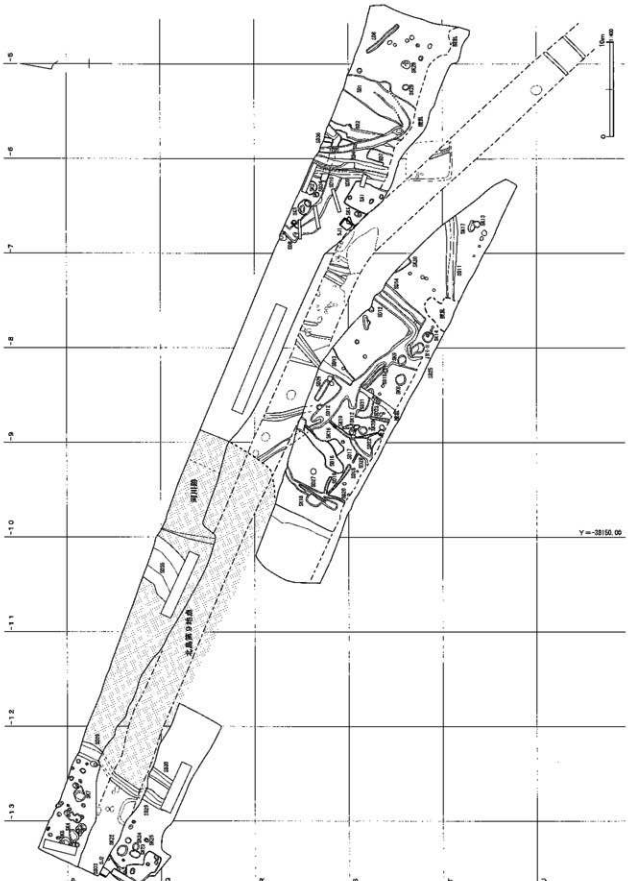
2．遺構と遺物

（1） 竪穴住居跡

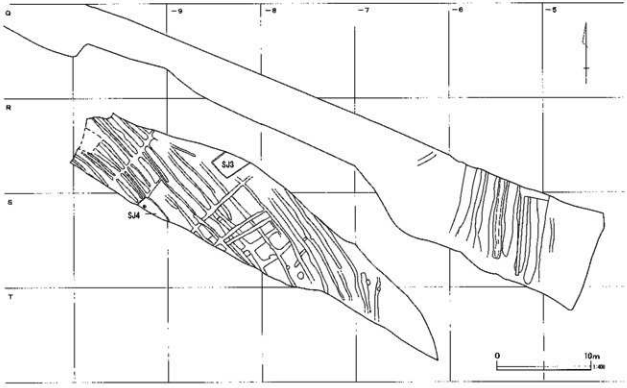
第１号住居跡（第117図）

第１号住居跡は、調査区北東側のＲ－７グリッドで検出された。大半は調査区外であり、北東隅部を検出したに過ぎない。そのため平面形、規模等は不明である。第１号土壙を切っている。

住居跡に伴う施設としては壁溝が確認されている。幅0.20ｍ、深さ0.10ｍでほぼ一定である。壁は床面



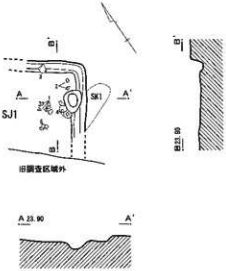
第115図　第21地点第１面全体図



第116図　第21地点第２面全体図

から垂直に立ち上がる。

遺物は床面直上及び覆土から出土した（第118図）。１は長胴甕の胴部の破片である。２は高坏の坏部で役部を欠損する。摩滅が激しい。３～５は坏である。３は口縁部が外反する。４は口縁部がやや内傾し、肥厚している。５は比企型坏で口縁部外面と内面が赤彩される。



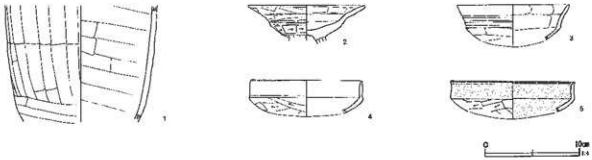
第117図　第１号住居跡

第２号住居跡（第119図）

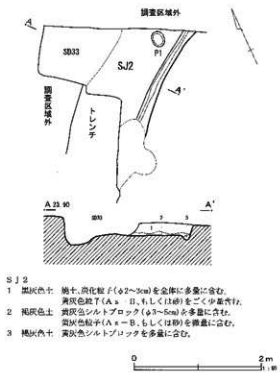
第２号住居跡は、調査区北西端のＰ－14グリッドで検出された。大半は調査区外であることと第33号溝跡に切られているため、平面形、規模等は不明である。壁溝を持つことから住居と認識した。壁溝は幅0.15ｍ、深さ0.05ｍでほぼ一定である。

第26表　第１号住居跡出土遺物観察表（第118図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	－	[12.3]	－	ＨＪ	普通	明橙色	10	№3　縦位ケズリ→横位ケズリ　黒斑あり
2	土師高坏	12.4	[3.7]	－	ＡＪ	普通	浅黄橙色	50	摩滅が激しい
3	土師坏	(11.8)	[4.4]	－	ＡＥ	普通	橙色	5	口縁部強いヨコナデで沈線状になる
4	土師坏	11.8	(3.8)	(12.0)	ＡＣＫ	普通	橙色	30	口縁部やや肥厚する　胴部ケズリ明瞭
5	土師坏	(13.2)	(4.0)	－	Ｊ	普通	橙色	5	比企型坏　口縁部内側直下に凹線あり　内・外面赤彩

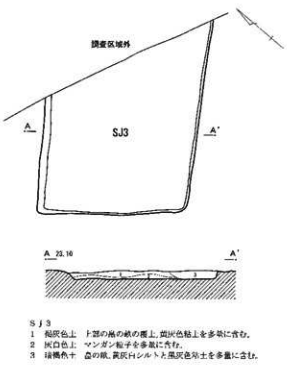


第118図　第１号住居跡出土遺物



ＳＪ２
１　黒灰色土　地土、焼化粒子（φ2～3cm）を全体に多量に含む。
　　黄灰色粘土（Ａｓ－Ｂ、もしくは砂）をごく少量含む。
２　褐灰色土　黄灰色シルトブロック（φ3～5cm）を多量に含む。
　　黄灰色粒子（Ａｓ－Ｂ、もしくは砂）を微量に含む。
３　褐灰色土　黄灰色シルトブロックを多量に含む。

第119図　第２号住居跡



ＳＪ３
１　褐灰色土　下部の崩の覆上、黄灰色粘土を多量に含む。
２　灰白色土　マンガン粒子を多量に含む。
３　暗褐色土　点の崩、黄灰白シルトと黒灰色粘土を多量に含む。

第120図　第３号住居跡

図示できる遺物は出土していないが、検出された面から考えて古墳時代後期以降の住居跡と考えられる。

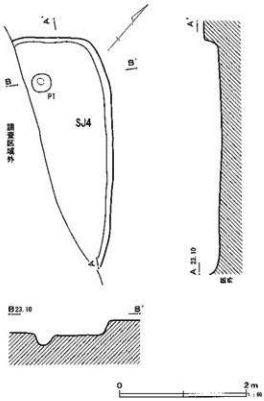
第３号住居跡（第120図）

第３号住居跡は、第２面の調査区北側のＲ－９グリッドで検出された。北側部分は調査区外である。

平面形態は長方形を呈すると考えられ、規模は、長軸3.00ｍ以上、短軸2.44ｍ、深さ0.37ｍである。掘り込みは、西壁側が緩やかであるが、他のところでは垂直に近い。

ピット・壁溝・炉などの住居跡に付属する施設は確認されていない。覆上の観察から上面を点の畝により壊されているので、本来の掘り込みはより深かったと考えられる。

図示できる遺物は出土していないが、住居跡が検



第121図　第４号住居跡

出された面から考えて、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

第４号住居跡（第121図）

第４号住居跡は、第２面の調査区南端のＳ－10グリッドで検出された。北側隅が検出されただけで大半は調査区外である。そのため平面形態は不明である。深さは0.20ｍを測る。床面はほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がる。

北側隅付近で径0.30ｍで深さ0.16ｍのピットが検出された。壁溝・かまは検出されなかった。

図示できる遺物は出土していないが、住居跡が検出された面から考えて、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

（２）　竪穴状遺構

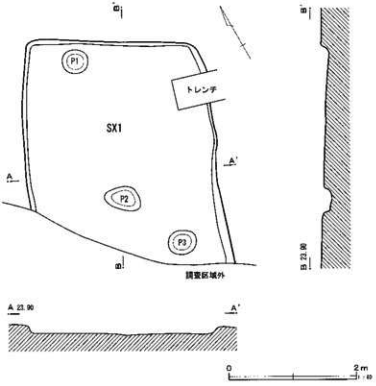
第１号竪穴状遺構（第122図）

第１号竪穴状遺構は、調査区北東側のＳ－７グリッドで検出された。第１号住居跡の東側に位置する。南西側は調査区外である。

平面形態は、東辺がやや乱れるが、長方形を呈すると考えられる。長軸3.20ｍ以上、短軸3.00ｍ、深さ0.17ｍである。長軸方位はＮ－33°－Ｅである。壁はほぼ水平の床面からほぼ垂直に立ち上がる。

ピットは３ヶ所で確認されP1が、径0.41ｍ、深さ0.10ｍ、P2が、長径0.58ｍ、短径0.37ｍ、深さ0.14ｍ、P3が、長径0.41ｍ、短径0.38ｍ、深さ0.09ｍであった。壁溝、カマドは検出されなかった。

図示できる遺物は出土していない。



第122図　第１号竪穴状遺構

（3） 土壙

第1号土壙（第123図）

第1号土壙は、北側調査区のS－7グリッドで検出された。西側を第1号住居跡に切られる。

平面形態は長楕円形を呈すると考えられる。検出した規模は長軸0.72m、短軸0.60m、深さ0.12mで、浅い皿状の掘り込みであった。長軸方位はN－66°－Eを示す。

遺物は坏が出土している（第126図1）。

第2号土壙（第123図）

第2号土壙は、北側調査区のR－7グリッドで検出された。北側をトレンチにより壊されている。同規模の第3号土壙の東側に位置する。

平面形態は不整円形で、規模は長軸1.46m、短軸0.96m、深さ0.12mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－50°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第3号土壙（第123図）

第3号土壙は、北側調査区のR－7グリッドで検出された。第8号溝跡と重複するが新旧は不明である。同規模の第2号土壙の西側に位置する。

平面形態は不整円形で、規模は長軸1.68m、短軸1.30m、深さ0.09mである。丸みを持つ底面から緩やかに立ち上がる。長軸方位はN－50°－Wを示す。

遺物は甕が出土した（第126図15）。胴中位がやや膨らむ円筒状の器形で一対の把手がつく。把手の片方は欠損している。

第4号土壙（第123図）

第4号土壙は、北側調査区北西端のP－14グリッドで検出された。第6号土壙と隣接し、周りにはピットが群集する。

平面形態は不整形で、規模は長軸1.54m、短軸0.96m、深さ0.18mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－50°－Eを示す。

遺物は、2～6が出土した（第126図）。2は坏で内面が黒色処理される。外面には煤が付着している。3は須恵器坏の底部破片である。4は脚部を欠損する高坏の坏部と思われる。5は甕の胴下半から底部にかけての破片である。6は土錘で断面は楕円形を呈する。

第5号土壙（第123図）

第5号土壙は、北側調査区北西端のP－14グリッドで検出された。第4号土壙と隣接し、周りにはピットが群集する。

平面形態は不整形で、規模は長軸1.12m、短軸0.82m、深さ0.66mで、柱穴状の掘り込みである。長軸方位はN－45°－Wを示す。

底面にピット状のくぼみが見られる。また土層の観察から柱が抜き取られた跡も確認された。以上のことから何度か柱を建て替えたものと考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第6号土壙（第123図）

第6号土壙は、北側調査区北西端のP－14グリッドで検出された。西側はトレンチにより壊されている。第4号土壙と隣接し、周りにはピットが群集する。

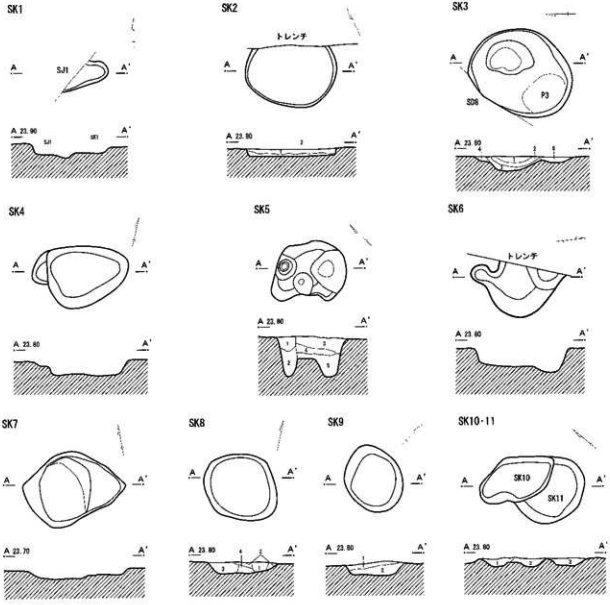
平面形態は不整形で南側が張り出す。規模は長軸1.30m、短軸0.76m、深さ0.27mで、箱状の掘り込みである。長軸方位はN－32°－Eを示す。底面には段差が見られる。

遺物は7・8が出土した（第126図）。いずれも長胴甕の破片で口縁部が強く外反し肥厚する。

第7号土壙（第123図）

第7号土壙は、北側調査区北西端のP－13グリッドで検出された。第4・5・6号土壙の東側に位置し、周りにはピットが群集する。

平面形態は不整形で、規模は長軸1.28m、短軸



ＳＫ２
1　暗褐色土　炭化粒子、微土粒子を少量含む。鉄分あり。
2　褐灰色土　炭化粒子、粘土ブロック（φ1cm）を少量含む。粘性あり。

ＳＫ３
1　黒褐色土　炭化粒子、粘土ブロック（φ1cm）を少量含む。
2　暗褐色土　粘土ブロック（φ2cm）やや多く含む。
炭化粒子を少量含む。
3　黒褐色土　炭化粒子、鐵十粒子を少量含む。粘土ブロック（φ1cm）を多量に含む。
4　暗褐色土　炭化粒子、粘土ブロック（φ1cm）をやや多く含む。
5　暗褐色土　粘土ブロック（φ2cm）を少量含む。

ＳＫ５
1　黒褐色土　炭化粒子、微土粒子をやや多く含む。
2　黒褐色土　炭化粒子を少量含む。
3　黒褐色土　鉄土粒子、地山ブロック（φ0.5～1cm）をやや多く含む。
炭化粒子を少量含む。
4　暗褐色土　地山ブロック（φ1～2cm）を多量に含む。
炭化粒子、微土粒子を少量含む
5　暗褐色土　粘土ブロック（φ2～3cm）をやや多く含む。
炭化粒子、微土粒子を少量含む。

ＳＫ８
1　暗褐色土　炭化粒子、地山ブロック（φ1cm）を少量含む。
2　暗褐色土　炭化粒子を微量に含む。
3　暗褐色土　炭化粒子、地山ブロック（φ2cm）を少量含む。
4　暗黄褐色土　炭化粒子を微量に含む。

ＳＫ９
1　暗褐色土　炭化粒子をやや多く含む。灰、地山ブロック（φ1cm）を少量含む。
2　黒褐色土　炭化粒子をやや多く含む。地山ブロック（φ2cm）を少量含む。

ＳＫ１０・１１
1　黒褐色土　炭化粒子をやや多く含む。地山ブロック（φ2cm）を少量含む。
2　暗褐色土　炭化粒子、地山ブロック（φ1cm）をやや多く含む。
3　暗黄褐色土　地山ブロック（φ0.5～1cm）をやや多く含む。
炭化粒子を少量含む。

第123図　土壙（1）

1.06m、深さ0.04mである。浅い皿状の掘り込みで、底面は段差がある。長軸方位はN－80°－Wを示す。

遺物は9～11が出土した（第126図）。9は坏で口縁部と胴部の境にヨコナデが施され凹線状になる。10も坏で、9と同様に口縁部が強くヨコナデされる。11は須恵器のハソウの口縁部である。

第8号土壙（第123図）

第8号土壙は、南側調査区のS－9グリッドで検出された。

平面形態は隅丸方形である。規模は長軸1.20m、短軸1.02m、深さ0.14mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－62°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第9号土壙（第123図）

第9号土壙は、南側調査区のS－9グリッドで検出された。第12号溝跡に上面を切られる。

平面形態は円形に近い。規模は長軸1.04m、短軸0.90m、深さ0.16mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－65°－Wを示す。

遺物は12・13が出土した（第126図）。12は甕の口縁部で口縁部が肥厚し、端部は丸みを帯びる。13は坏で口縁部と底部の境が明瞭である。

第10号土壙（第123図）

第10号土壙は、南側調査区のS－8・9グリッドで検出された。第12号溝跡、第14号土壙と隣接する。第11号土壙を切る。

平面形態は略楕円形を呈すると思われる。規模は長軸1.00m、短軸0.70m、深さ0.11mある。浅い皿状の掘り込みで、底面には凹凸が見られる。長軸方位はN－31°－Wを示す。

遺物は14が出土した（第126図）。器高が低い坏で、底部に凹凸がある。

第11号土壙（第123図）

第11号土壙は、南側調査区のS－8・9グリッドで検出された。第12号溝跡、第14号土壙に隣接する。第10号土壙に切られる。

平面形態は不整形を呈すると思われる。規模は長軸1.08m、短軸0.72m、深さ0.12mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－50°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第12号土壙（第124図）

第12号土壙は、南側調査区のS－9グリッドで検出された。第19号土壙に隣接する。第20号土壙に切られる。

平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長軸0.62m、短軸0.48m、深さ0.06mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－3°－Eを示す。

遺物は16～19が出土した（第126図）。16～18はいずれも高台付の坏である。底部に糸切り痕が残る。19は甕の口縁から胴部にかけての破片である。頸部を強くヨコナデする。

第13号土壙（第124図）

第13号土壙は、南側調査区南東端のT－7グリッドで検出された。第17号土壙と重複するが新旧は不明である。

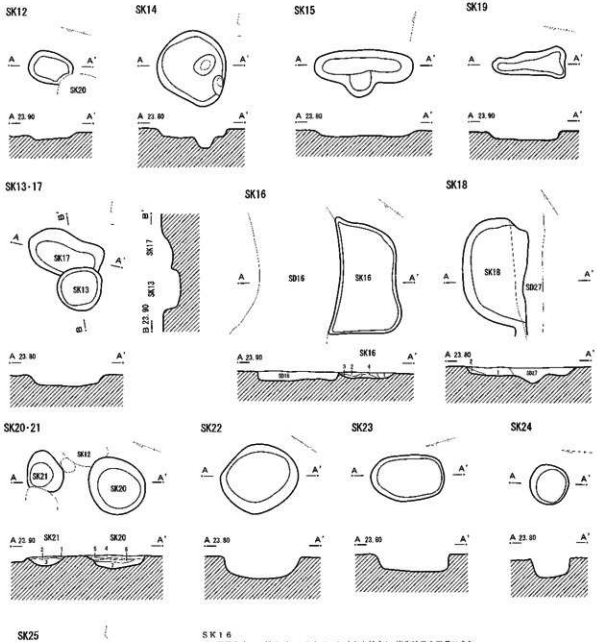
平面形態は円形を呈する。規模は長軸0.72m、短軸0.68m、深さ0.25mで、箱状の掘り込みである。底面はやや丸みを持つ。長軸方位はN－50°－Eを示す。

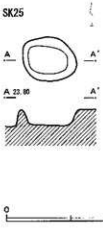
図示できる遺物は出土していない。

第14号土壙（第124図）

第14号土壙は、南側調査区のS－8グリッドで検出された。第10・11号土壙と近接する。

平面形態は円形に近い。規模は長軸1.16m、短軸1.12m、深さ0.33mで、浅い皿状の掘り込みである。底面にピット状の落ち込みが2ヶ所見られる。長軸方位はN－34°－Wを示す。





SK16
1 黒褐色土　地山ブロック（φ1～2cm）を少量含む，炭化粒子を微量に含む。
2 暗褐色土　地山ブロック（φ2～3cm）をやや多く含む，炭化粒子を少量含む。
3 暗黄褐色土　地山ブロック（φ3～4cm）をやや多く含む，炭化粒子を少量含む。
4 暗褐色土　地山ブロック（φ2～3cm）を多量に含む，炭化粒子を少量含む。

SK18
1 暗青灰色土　焼土ブロック（φ2～3cm）を多量に含む，炭化粒子を微量に含む。
2 暗黄褐色土　炭化粒子を少量含む。

SK20
1 暗褐灰色土　炭化粒子をやや多く含む，焼土粒子を少量含む。
2 黒褐色土　炭化粒子を少量に含む，焼土粒子をやや多く含む。
3 暗褐灰色土　炭化粒子をやや多く含む，地山ブロック（φ1cm）を含む，焼土粒子を少量含む。
4 暗黄灰色土　炭化粒子，地山ブロック（φ0.5～1cm）をやや多く含む，焼土粒子を少量含む。

SK21
1 暗青灰色土　炭化粒子をやや多く含む，焼土粒子を微量に含む。
2 暗青灰色土　炭化粒子，地山ブロック（φ2～3cm）を少量含む，焼土粒子を微量に含む。
3 暗褐灰色土　炭化粒子をやや多く含む。

第124図　土壙（2）

図示できる遺物は出土していない。

第15号土壙（第124図）

第15号土壙は、南側調査区のS－8グリッドで検出された。

平面形態は長楕円形で、南側が丸く張り出す。規模は長軸1.56m、短軸0.74m、深さ0.08mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－83°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第16号土壙（第124図）

第16号土壙は、南側調査区のR－9・10グリッドで検出された。第16号溝跡に北西側を切られる。

平面形態は不整長方形を呈すると考えられる。検出した規模は長軸1.74m、短軸0.84m、深さ0.08mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－51°－Eを示す。

遺物は20が出土した（第126図）。　甕の口縁部破片である。

第17号土壙（第124図）

第17号土壙は、南側調査区南東端のT－7グリッドで検出された。第13号土壙と重複するが新旧は不明である。

平面形態は不整長方形を呈する。規模は長軸1.20m、短軸0.66m、深さ0.17mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－67°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第18号土壙（第124図）

第18号土壙は、南側調査区のR－10グリッドで検出された。東側を第27号溝跡に切られる。

平面形態は円形を呈すると考えられる。規模は長軸1.62m、短軸1.00m、深さ0.13mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－32°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第19号土壙（第124図）

第19号土壙は、南側調査区のR・S－9グリッドで検出された。第12・20・21号土壙と隣接する。

平面形態は不整形を呈する。規模は長軸1.22m、短軸0.36m、深さ0.14mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－12°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第20号土壙（第124図）

第20号土壙は、南側調査区のS－9グリッドで検出された。第19・21号土壙と隣接する。第12号土壙を切る。

平面形態は円形である。規模は長軸0.96m、短軸0.84m、深さ0.18mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－75°－Eを示す。

遺物は21～23が出土している（第126図）。21・22は甕の底部破片である。底部外面も丁寧にケズリを施している。23は甕の口縁部から胴部上半にかけての破片で、口縁部が外反し肥厚する。

第21号土壙（第124図）

第21号土壙は、南側調査区のS－9グリッドで検出された。平面形態は略円形である。規模は長軸0.58m、短軸0.58m、深さ0.15mで、擂鉢状の掘り込みである。長軸方位はN－66°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

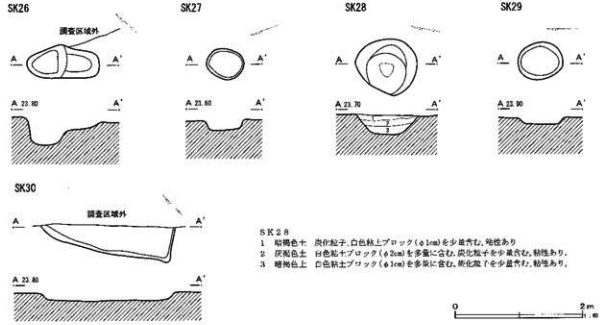
第22号土壙（第124図）

第22号土壙は、北側調査区北西端のP－14グリッドで検出された。平面形態は円形である。規模は長軸1.20m、短軸1.02m、深さ0.32mである。丸味を帯びる底面から緩やかに立ち上がる。長軸方位はN－55°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第23号土壙（第124図）

第23号土壙は、北側調査区北西端のP－14グリッ



第125図　土壙（3）

ドで検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.72m、深さ0.24mで、長軸方位はN－9°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第24号土壙（第124図）

第24号土壙は、北側調査区北西端のP－14グリッドで検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸0.62m、短軸0.62m、深さ0.33mで、柱穴状の掘り込みである。長軸方位はN－90°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第25号土壙（第124図）

第25号土壙は、北側調査区北西端のP－14グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.24mで、箱状の掘り込みである。長軸方位はN－74°－Wを示す。

遺物は24が出土した（第126図）。坏で口縁部を強くヨコナデしている。そのためナデ境が回線状になる。

第26号土壙（第125図）

第26号土壙は、北側調査区北西端のO－13グリッドで検出された。平面形態は不整形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.52m、深さ0.41mである。東側は浅く掘り込まれ、西側は柱穴状に深く掘り込まれている。長軸方位はN－42°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

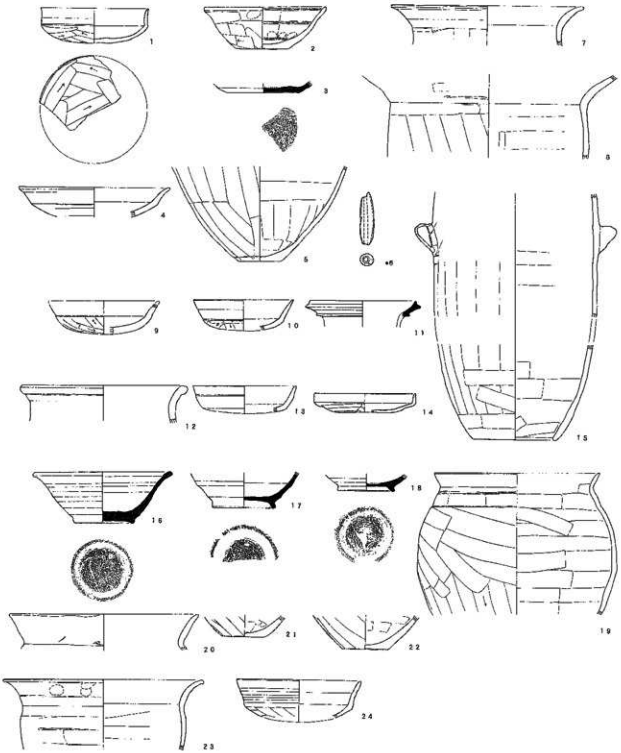
第27号土壙（第125図）

第27号土壙は、北側調査区北西端のP－13グリッドで検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.14mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－42°－Eを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第28号土壙（第125図）

第28号土壙は、北側調査区北東端のS－5・6グリッドで検出された。平面形態は略円形を呈する。規模は長軸1.00m、短軸0.84m、深さ0.44mで、擂鉢状の掘り込みである。長軸方位はN－0°を示す。



1 SK1　2～6 SK4　7・8 SK6　9～11 SK7　12・13 SK9　14 SK10
15 SK3　16～19 SK12　20 SK16　21～23 SK20　24 SK25

0　5cm　1:3
0　10cm　1:4

第126図　土壙出土遺物

第27表　土壙出土遺物観察表（第126図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調		残存率		備考
1	土師坏	(11.5)	3.6	－	ACEI	普通	橙色		30	SK1	口縁部外面強いヨコナデ
2	土師坏	12.4	4.5	5.5	BK	普通	淡黄色		70	SK4	口縁端部を強くヨコナデしている
3	須恵坏	－	[0.9]	(3.8)	EF	普通	灰色		5	SK4	回転糸切痕　南比金産
4	土師高坏	(16.0)	[3.1]	－	ABJK	普通	橙色		5以下	SK4	層清が激しい
5	上師甕	－	[10.0]	(4.5)	EJK	普通	橙色		15	SK4	底部　内外面ともに丁寧にケズリ仕上げている 内面は底部付近横位に、それ以外縦位にケズリを施す
6	上師	－	－	－	E	良好	にぶい橙色		95	SK4	端部を欠損する　全長4.2cm　厚さ1.1cm　孔径0.25cm
7	土師甕	(20.4)	[4.1]	－	EGJ	普通	橙色		5以下	SK6	口縁部内・外面ともにヨコナデ
8	上師甕	－	[8.9]	－	H	普通	明黄褐色		5以下	SK6	長胴甕　口縁部と胴部の境に工具痕あり
9	土師坏	(11.8)	(3.5)	－	BEHJ	普通	白灰色		20	SK7	全体的に肉厚　底部ケズリは摩滅していてわかりづらい
10	上師坏	(10.6)	(3.3)	－	BE	普通	黄橙色		20		
11	須恵ハソウ	(11.2)	[1.8]	－	EK	良好	白灰色		5以下	SK7	口縁部内面に釉がかかる　洞西産
12	上師甕	(17.0)	[3.7]	－	ABE	普通	淡黄橙色		5以下	SK9	口唇部丸みをもつ　口縁部内・外面ともにヨコナデ
13	土師坏	(11.0)	(2.9)	－	AEJK	普通	橙色		5以下	SK9	全体的に肉厚である　底部のケズリは不鮮明
14	土師坏	(10.8)	(2.0)	－	BEH	普通	にぶい橙色		15	SK10	内・外面ともに滑らかに整形されている
15	土師瓶	－	[26.0]	(8.0)	AEJ	普通	にぶい褐色		15	SK3	外面縦位のケズリ　底部付近横位ケズリ 1対の把手がつく　片方は欠損
16	須恵坏	(14.8)	5.4	6.5	ADE	普通	灰白色		80	SK12	№1　全面に煤付着　貼付高台　末野産
17	須恵坏	－	[3.7]	6.7	EFJ	普通	灰白色		30	SK12	№2　貼付高台　末野産
18	須恵坏	－	[1.8]	5.8	AJ	普通	褐灰色		20	SK12	№3　貼付高台　末野産
19	土師甕	(19.6)	[14.0]	－	A	普通	淡黄橙色		20	SK12	外面摩滅している　口縁部内外面ヨコナデ
20	土師甕	(20.0)	[3.8]	－	AEFHI	普通	淡黄橙色		5以下	SK16	口縁部に凹みがある　口縁部下端に工具痕が残る
21	土師甕	－	[2.3]	4.6	AJ	普通	淡黄橙色		5以下	SK20	内面整形痕が明瞭　底部外面ケズリを施す
22	上師甕	－	[3.6]	4.8	AEGH	普通	橙色		5以下	SK20	内面整形痕見づらい ケズリの後ナデ整形したためか？
23	上師甕	(21.0)	[7.5]	－	A	普通	橙色		5以下	SK20	器面にゆがみがある　外面強いヨコナデが施される 口縁部丸みをもつ
24	上師坏	(13.2)	(4.5)	－	DEJ	普通	明赤褐色		15	SK25	有段L縁坏　口縁部強いヨコナデ　IIP-14Pl3

図示できる遺物は出土していない。

第29号土壙（第125図）

第29号土壙は、北側調査区北東端のS－6グリッドで検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸0.72m、短軸0.60m、深さ0.07mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－5°－Wを示す。

図示できる遺物は出土していない。

第30号土壙（第125図）

第30号上壙は、南側調査区のS－8グリッドで検出された。大半は調査区外である。平面形態は長方形を呈すると考えられる。規模は長軸2.16m、短軸0.44m、深さ0.08mで、浅い皿状の掘り込みである。長軸方位はN－45°－Wを示す。

図示できる遺物は出上していない。

(4) ピット（第127・128図）

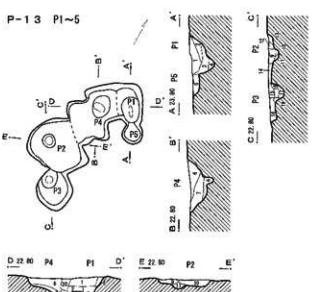
ピットは調査区の全域にわたり多数検出された。ここではその中から土層図のあるものと遺物が出土したピットの図面を個別に掲載した。その他のピットについては、全体図を参考にしてもらいたい。なお、ピットの番号は調査時に付した番号をそのまま使用している。

個別に掲載したピットは18基である。平面形態は、円形を基調とするものが多い。多くのピットは単独で出土していたが、P－13グリッドのP1～P5は群集して検出された。これらのピットは断面の観察から柱が抜き取られた跡が確認されている。また、P－13グリッドP15からは実際に柱の根本部分が出土した。R－7グリッドP1・P2、S－5グリッドP2も断面形や覆土の観察から柱穴であった可能性が高い。

各ピットからは出土遺物は少なく図示しえたものは第129図だけである。1は坩の口縁部破片である。細かいミガキが施され内外面が赤彩される。2は坏である。口縁部は直立し、端部は丸みを帯びる。3は甕の頸部から胴部上半の破片である。内面に輪積痕が残る。4は小型の甕である。口縁部直下の内面が凹線状にくぼむ。5・6は須恵器の坏である。底部に回転糸切り痕が見られる。6は箆描で「×」が描かれる。7は須恵器の甕である。8は土錘でユビオサエの痕が明瞭に残る。

第28表　第21地点ピット一覧表（第127・128図）

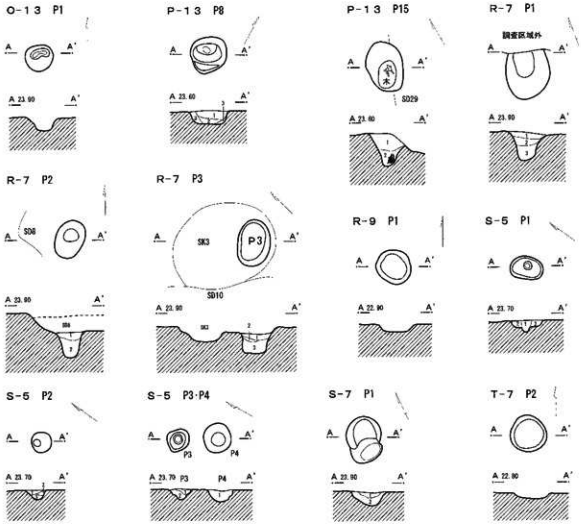
番号	グリッド	長径	短径	深さ	平面図	備考
1	O-13P1	0.46	0.32	0.20	第128図	
2	P-13P1	0.38	0.28	0.23	第127図	
3	P-13P2	0.20	0.18	0.08	第127図	
4	P-13P3	0.30	0.24	0.15	第127図	
5	P-13P4	0.32	0.28	0.08	第127図	
6	P-13P5	0.32	0.30	0.14	第127図	
7	P-13P8	0.62	0.56	0.36	第128図	
8	P-13P15	0.82	0.56	0.49	第128図	
9	R-7P1	0.72	0.70	0.40	第128図	
10	R-7P2	0.62	0.44	0.44	第128図	
11	R-7P3	0.72	0.52	0.32	第128図	
12	R-9P1	0.58	0.38	0.10	第128図	
13	S-5P1	0.54	0.36	0.17	第128図	
14	S-5P2	0.32	0.32	0.14	第128図	
15	S-5P3	0.34	0.34	0.17	第128図	
16	S-5P4	0.46	0.44	0.16	第128図	
17	S-7P1	0.72	0.48	0.27	第128図	
18	T-7P2	0.60	0.38	0.08	第128図	



P－13　P1～P5

1	黒褐色土	地土粒子、炭化粒子をやや多く含む。 地山ブロック（φ0.5～1cm）を少量含む。
2	黒褐色土	地山ブロック（φ1cm）を多量に含む。 焼土粒子、炭化粒子をやや多く含む。
3	暗褐色土	炭化粒子、焼土粒子を少量含む。
4	暗褐色土	炭化粒子、地山ブロック（φ1cm）を少量含む。
5	黒褐色土	炭化粒子をやや多く含む。 地山ブロック（φ0.5cm）を少量含む。
6	黒褐色土	炭化粒子を非常に多く含む。 焼土粒子、地山ブロック（φ0.5cm）を少量含む。
7	黒褐色土	炭化粒子を非常に多く含む。 焼土粒子、地山ブロック（φ0.5～2cm）をやや多く含む。
8	暗褐色土	炭化粒子を非常に多く　含む。 焼土粒子、荒山ブロック（φ2～3cm）を少量含む。
9	暗褐色土	地山ブロック（φ1～2cm）、炭化粒子を少量含む。
10	暗褐炭色土	地山ブロック（φ0.5～1cm）、炭化粒子を少量含む。
11	明褐炭色土	地山ブロック（φ0.5cm）層中に炭化粒子を少量含む。
12	暗褐色土	炭化粒子、焼土粒子を少量含む。
13	暗褐色土	炭化粒子、焼土粒子をやや多く含む。
14	暗褐炭色土	炭化粒子を多量に含む。
15	黒褐色土	炭化粒子をやや多く含む。焼土粒子を少量含む。
16	褐灰色土	地山ブロック（φ2～3cm）多量に含む。炭化粒子を少量含む。
17	暗褐色土	地山ブロック（φ2～3cm）を非常に多く含む。 炭化粒子を少量含む。
18	褐灰色土	焼土粒子、炭化粒子を少量含む。
19	明紫色土	粘土ブロック（φ0.5～1cm）、炭化粒子を少量含む。
20	暗褐色土	地山ブロック（φ1cm）、炭化粒子を少量含む。
21	暗褐色土	地山ブロック（φ1～2cm）、炭化粒子をやや多く含む。
22	暗褐炭色土	地山ブロック（φ1～2cm）を多量に含む。炭化粒子を少量含む。

第127図　ピット（1）



P-13 P8
1 黒褐色土　地土粒子、炭化粒子をやや多く含む。
　　地山ブロック（φ0.5～1cm）を少量含む。
2 黒褐色土　地土粒子、炭化粒子を多量に含む。
　　地山ブロック（φ1～2cm）を少量含む。
3 黒褐色土　地土粒子、炭化粒子をやや多く含む。
　　粘土ブロック（φ1～2cm）を少量含む。

P-13 P15
1 黒褐色土　炭化粒土ブロック（φ2～3cm）を多量に含む。
　　炭化物を少量含む。
2 黒褐色土シルト質土
　　炭錆灰色粘土ブロック（φ1cm）を多量に含む。

R 7 P1
1 暗褐色土　黄褐色粘土小ブロックを多量に含む。炭化粒子を少量含む。
2 暗褐色土　明灰色粘土を少量含む。炭化粒子を微量含む。
3 灰褐色土　灰色粘土と青灰色土の混合層。

R 7 P2
1 暗褐色土　明灰色粘土を少量含む。炭化粒子を微量含む。
2 灰褐色土　灰色粘土と青灰色土の混合層。

R 7 P3
1 暗褐灰色土　粘土ブロック（φ1～2cm）をやや多く含む。粘性あり。
2 暗褐色土　粘土ブロックを多量に含む。
3 暗褐色土　粘土ブロック（φ2～3cm）を多量に含む。
※ SK3の下層にて検出

S-5 P1
1 灰褐色土　砂質、炭化粒子を少量含む。
2 暗褐色土　炭化粒子、白色粘土ブロック（φ1cm）を少量含む。
　　粘性あり。

S 5 P2
1 暗褐色土　炭化粒子を少量含む。粘性あり。
2 暗灰色土　白色粘土粒子を少量含む。粘性あり。
3 暗褐色土　炭化粒子を少量含む。粘性あり。

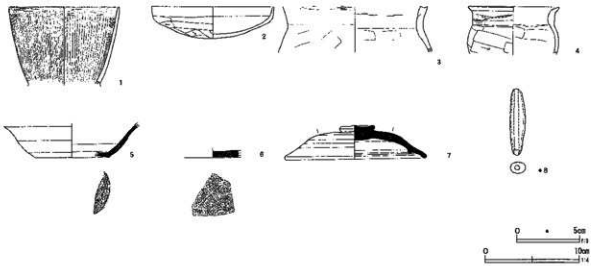
S 5 P3
1 暗褐色土　白色粘土粒子をやや多く含む。炭化粒子を少量含む。粘性あり。
2 灰褐色土　白色粘土粒子をやや多く含む。粘性あり。

S 5 P4
1 暗褐灰色土　炭化粒子を少量含む。粘性あり。

S-7 P1
1 黒色土　炭化粒子層中に　地土粒子、地山ブロック（φ1cm）を少量含む。
　　粘性あり。
2 褐灰色土　粘土ブロック（φ1cm）を多量に含む。粘性あり。

0　2m

第128図　ピット（2）



第129図　ピット出土遺物

第29表　ピット出土遺物観察表（第129図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坩	(11.6)	[8.3]	—	BEG	普通	橙色	10	T-7P2　内・外面赤彩　内・外面縦位のミガキ
2	土師坏	(13.0)	3.9	—	EGK	普通	にぶい橙色	30	O-13P1　器面に凹凸がある
3	土師甕	—	[4.8]	—	BHJ	普通	橙色	5以下	P-13P1　外面摩滅が著しい
4	土師甕	(9.4)	[5.0]	—	BH	普通	橙色	15	R-9P1　頸部強いヨコナデ　胴部横位→斜位にケズリ
5	須恵坏	—	[3.5]	(7.8)	EJ	良好	灰色	10	P-13P1　須恵器　末野産　底部に回転糸きり
6	須恵坏	—	—	—	FJ	良好	青灰色	5以下	P-13P1　底部に「X」印のヘラ痕あり　南比企産
7	須恵甕	(15.2)	3.6	—	E	普通	明青灰色	25	P-13P2　ヘラケズリ
8	土錘	—	—	—	AJ	普通	にぶい赤褐色	100	O-13P2　断面楕円形 中央部分が若干膨らみ　端部へ近づくほど円形にちかくなる 全長5.35cm　厚さ1.2cm　孔径0.35cm

(5) 溝跡

第1号溝跡（第131・132図）

第1号溝跡は、調査区北東側のR・S－6グリッドで検出された。南北に延びる溝で、両端は調査区外へと続く。第3号溝跡と重複するが新旧は不明である。

検出された規模は、長さ8.60m、幅2.78m、深さ0.10mである。溝幅は、北側に向かうにつれ狭まる。溝底は、平坦で南から北に向かい僅かに傾斜している。

遺物は溝の時期を示すものではないが、五領式の壺口縁部が出土している（第136図1）。頸部をハケ目調整した後、口縁部を折り返している。

第2号溝跡（第131・132図）

第2号溝跡は、調査区北東側のR・S－6グリッドで検出された。南北に延びる溝で、両端は調査区外へと続く。第3・34号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ7.60m、幅は南側で1.15m、北側6.10mである。深さ0.10mで、浅い皿状の掘り込みである。溝の掘り込みは東側で一部を除きほぼ直線的であるが、西側では蛇行している。そのため北側でクランク状になる。

遺物は長胴甕の口縁部が出土している（第136図2）。口縁部が強く屈曲し、端部を平坦に仕上げている。

第3号溝跡（第131・132図）

第3号溝跡は、調査区北東側のR・S－6グリッドで検出された。北西から南東に延びたのち、第1号溝跡と重複する地点でV字に折れ北東に延びる。第1号溝跡中に掘り込みを確認できるが、それも半ば以降は確認できない。北西側は調査区外へと続く。第1・2・10・34号溝跡と重複するが新旧は不明である。

検出された規模は、長さ15.25m、幅0.97m、深さ0.28mである。丸みを帯びる溝底から緩やかに立ち上がる。

遺物は甕が出土している（第136図3）。胴下半に帯状の黒斑がある。

第4号溝跡（第131・132図）

第4号溝跡は、調査区北東側のR・S－7グリッドで検出された。南北に延びる溝で、両端は調査区外へと続く。第7・9・34号溝跡と重複する。第9号溝跡を切る。その他の遺構との新旧は不明である。

検出された規模は、長さ8.68m、幅1.59m、深さ0.89mで、平坦な溝底から急角度で立ち上がる。東側に幅広のテラスを持つ。後述のように第9号溝跡とほぼ垂なり、同様の断面形態を呈することから、同種の溝と考えられる。

遺物は、S－7グリッドの調査区際で、上層より須恵器の壺が出土している（第136図12）。

第6号溝跡（第131・132図）

第6号溝跡は、調査区北東端のS－5グリッドで検出された。北西から南東へ延びる溝である。

規模は、全長4.43m、幅0.26m、深さ0.47mで、箱状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

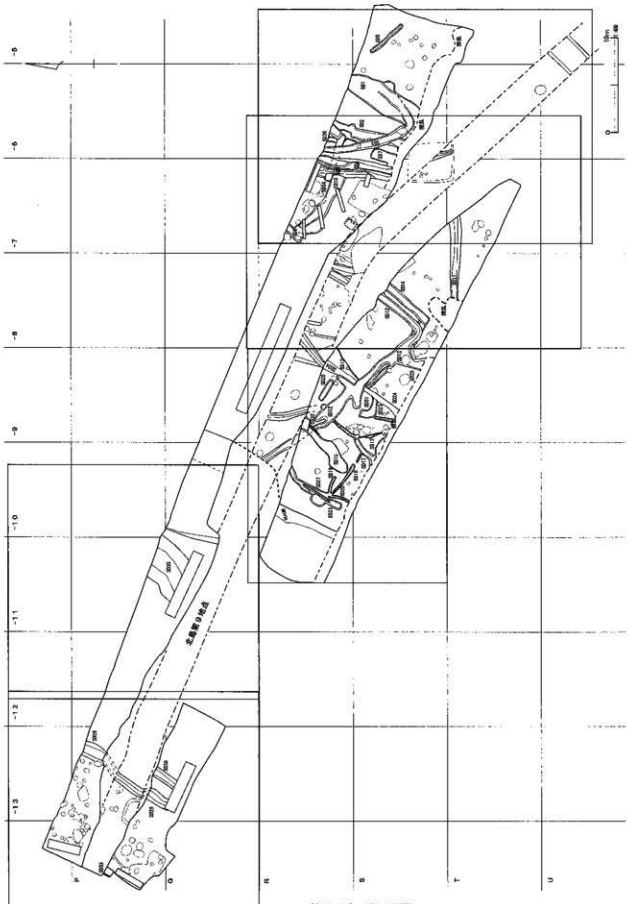
第7号溝跡（第131・132図）

第7号溝跡は、調査区北東側のS－6・7グリッドで検出された。調査区南端付近で西側に直角に折れ、第4号溝跡と重複する。新旧は不明である。第4号溝跡の西側に本跡が続かないことから、再び南側に曲がるものと思われる。

検出された規模は、長さ2.66m、幅1.06m、深さ0.16mで、浅い箱状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第8号溝跡（第131・132図）



第130図　溝区割図

第８号溝跡は、調査区北東側のＲ－７グリッドで検出された。南東から北に延びる溝である。北側は調査区外へと続く。南東側は第10号溝跡と重複する。新旧は不明である。

検出された規模は、長さ3.90ｍ、幅1.44ｍ、深さ0.23ｍである。掘り込みは直線的であるが、溝底には凹凸が見られる。

図示できる遺物は出土していない。

第９号溝跡（第131・132図）

第９号溝跡は、調査区北東側のＲ・Ｓ－７グリッドで検出された。南北に延びる溝である。北側は調査区外へと続く。南側は第４号溝跡に切られる。ほかに第10・34号溝跡と重複するが新旧は不明である。

検出された規模は、長さ5.44ｍ、幅0.88ｍ、深さ0.51ｍである。第４号溝跡と同様に平坦な底面から急角度に立ち上がるものと考えられる。第４号溝跡に先行する同種の溝と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第10号溝跡（第131・132図）

第10号溝跡は、調査区北東側のＲ－７グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝である。

検出された規模は、長さ6.06ｍ、幅1.30ｍ、深さ0.20ｍで、平坦な底面から緩やかに立ち上がる。

図示できる遺物は出土していない。

第11号溝跡（第133・134図）

第11号溝跡は、調査区南側のＴ－７・８グリッドで検出された。東西に延びる溝である。両端とも調査区外に続くと考えられる。

検出された規模は、長さ8.45ｍ、深さ0.35ｍで、Ｕ字状に近い掘り込みである。幅は東側が広く1.28ｍで、西側に向かうにつれ狭くなり、0.75ｍを測る。

遺物は甕の底部が出土している（第136図４）。

第12号溝跡（第133・134図）

第12号溝跡は、調査区南側のＳ－８～Ｒ－９グリッドで検出された。北東から南西に延びたのち、Ｓ－８グリッドの南西付近でほぼ直角に折れ、北西に延びる。北西側は調査区外へと伸び、第９地点の第29号溝跡につながると考えられる。同様に、北東側は第９地点の第１号溝跡に続くと考えられる。第14・15・16・25号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ20.60ｍ、深さ0.20ｍで浅い皿状の掘り込みである。溝幅は東側ではほぼ一定で0.80ｍである。西側は他の溝跡との重複や南北方向に伸びる枝溝のため不整形なプランで幅も一定しない。

遺物は５～８が出土している（第136図）。　５は甕である。口縁部から頸部を強くヨコナデする。６は甕の底部である。底部は完存し木葉痕が認められる。７は須恵器の高台付坏である。底部に回転糸切り痕が認められる。８は須恵器の壺で肩部付近に箆描が認められる。

第13号溝跡（第133・134図）

第13号溝跡は、調査区南側のＲ－９グリッドで検出された。南北に延びる溝である。

検出された規模は、長さ3.85ｍ、幅1.64ｍ、深さ0.16ｍで、浅い掘り込みである。途中から第24号溝跡と一体となる。

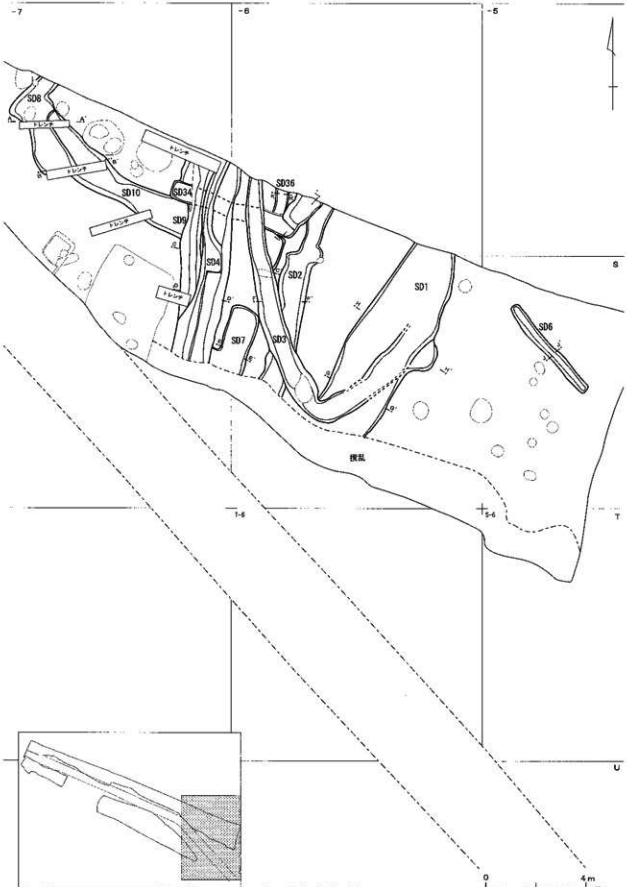
図示できる遺物は出土していない。

第14号溝跡（第133図）

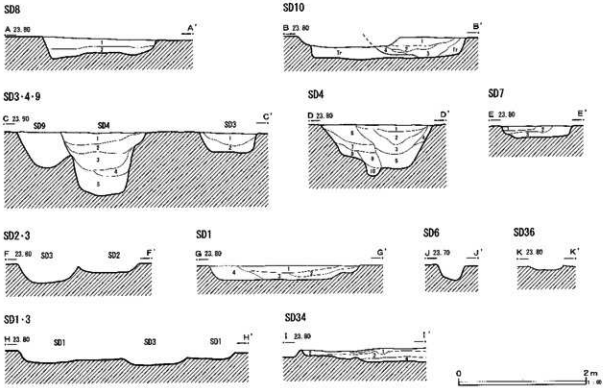
第14号溝跡は、調査区南側のＳ－８グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。第12号溝跡に並行し、南端で北西側に直角に折れ、同溝跡と交わる。

検出された規模は、長さ9.73ｍ、幅0.83ｍ、深さ0.14ｍである。

図示できる遺物は出土していない。



第131図　溝跡（1）



SD1 (G-G')
1 暗褐色土　褐土粒子、炭化粒子、粘土ブロック(φ1cm)を少量含む。粘性あり。
2 黒褐色土　粘分を多量に含む。鉄土粒子、炭化粒子、粘土ブロック(φ2cm)を少量含む。粘性あり。
3 暗褐色土　粘土ブロック(φ2cm)を多量に含む。粘土粒子、微分を少量含む。粘性あり。
4 暗褐灰色土　粘土粒子を多量に含む。炭化粒子を少量含む。

SD3 (C-C')
1 黒褐色土　粘土ブロック(φ1cm)、褐土粒子、炭化粒子を少量含む。
2 黒褐色土　炭化粒子を多量に含む。砂土粒子、褐土ブロック(φ0.5cm)をやや少量含む。粒土ブロック(φ0.5~1cm)を微量に含む。

SD4 (C-C')(D-D')
1 黒褐色土　炭化粒子を多量に含む。
2 暗褐色土　炭化粒子、砂土粒子を少量含む。
3 暗灰褐色土　黄褐色微粒子を少量含む。炭化粒子を微量に含む。
4 灰褐色土　炭化粒子を微量に含む。暗褐色土をブロック状に含む
5 暗灰褐色土　明灰色砂土粒子を少量含む。炭化粒子を微量に含む。
6 灰黄褐色土　黄褐色土粒子を少量含む。炭化粒子を微量に含む。
7 暗灰褐色土　炭化粒子を多量に含む。黄褐色土微粒子を少量含む。
8 灰褐色土　炭化粒子を多量に含む。炭化粒子を微量に含む。
9 暗灰褐色土　炭化粒子を少量含む。明灰色粘土をブロック状に含む。
10 暗青灰色土　炭色粘土を多量に含む。青灰色粘土をブロック状に含む。

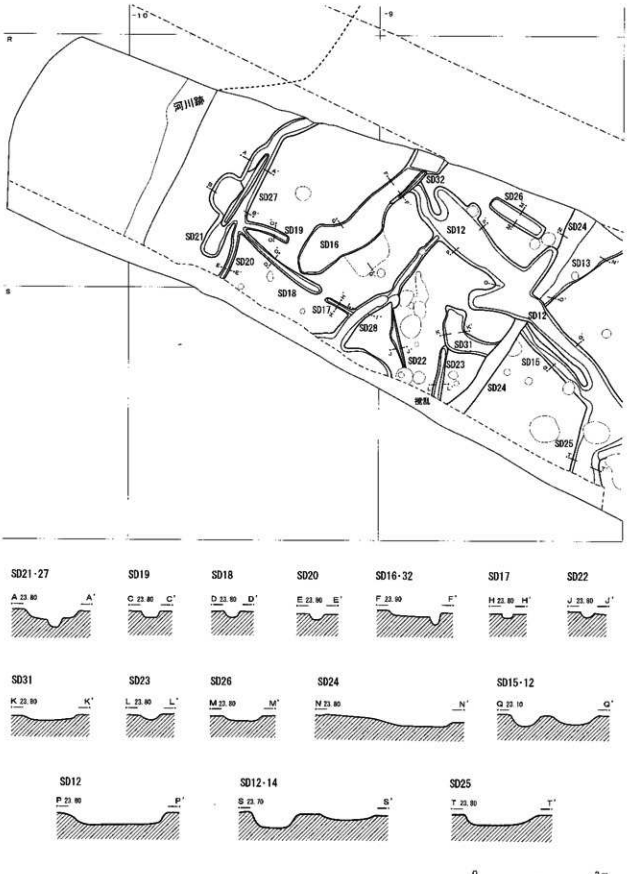
SD7 (E-E')
1 暗褐色土　炭化粒子、粘土ブロック(φ0.5cm)を少量含む。粘性あり。
2 炭褐色土　炭化粒子、粘土ブロック(φ3cm)を多量に含む。粘性あり。
3 暗灰色土　粘土ブロック(φ1cm)をやや多く含む。炭化粒子を少量含む。粘性あり。

SD8 (A-A')
1 青灰色土　黄褐色土をブロック状に含む。炭化粒子を少量含む。
2 暗灰褐色土　明灰色粘土ブロックを多量に含む。炭化粒子、粘土粒子を少量含む。

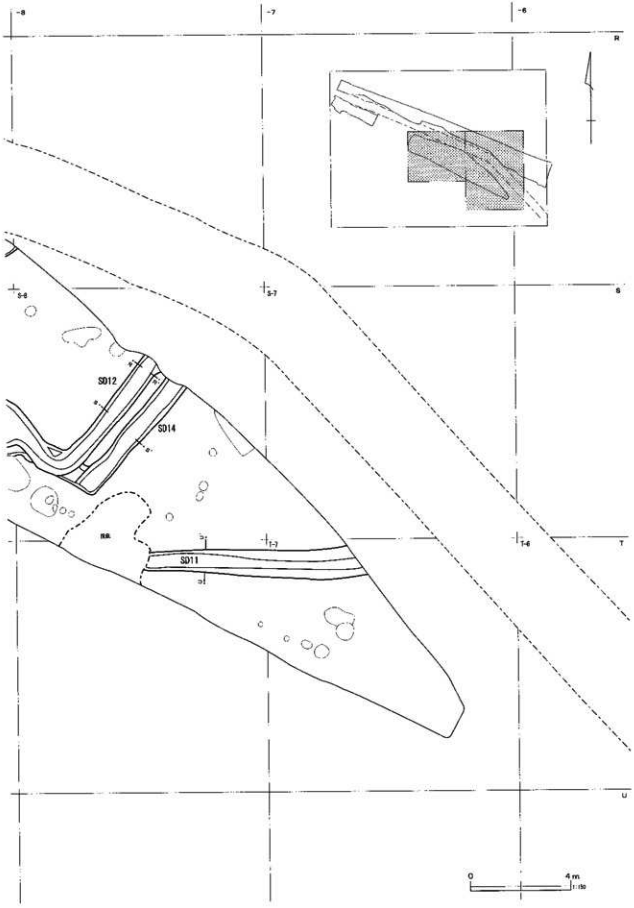
SD3 (B-B')
1 暗褐色土　炭化粒子、粘土ブロック(φ1cm)を少量含む。粘性あり。
2 褐灰色土　炭化粒子、粘土ブロック(φ3cm)を多量に含む。粘性あり。
3 暗褐色土　粘土ブロック(φ4~5cm)を多量に含む。炭化粒子を少量含む。粘性あり。
4 褐灰色土　炭化粒子を少量含む。粘土ブロック(φ3~5cm)を含む。粘性あり。

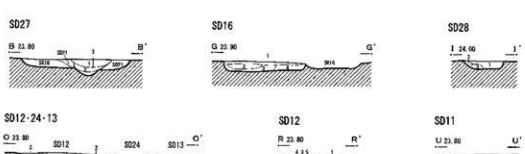
SD34 (I-I')
1 灰白色土　炭化粒子を少量含む。砂土粒子を微量に含む。粘性あり。
2 黒色土　炭化粒子層中に粘土ブロックを少量含む。粘性あり。
3 黒色土　炭化粒子と粘土ブロック(φ2~3cm)をやや多く含む。粘性あり。
4 灰黒色土　粘土ブロック(φ3~4cm)層中に炭化粒子を多量に含む。粘性あり。

第132図　溝跡 (2)


河川跡
SD27
SD21
SD19
SD20
SD18
SD17
SD16
SD02
SD12
SD26
SD24
SD13
SD28
SD22
SD31
SD23
SD16
SD24
SD25
SD21-27
A 23.80 A'
SD19
C 23.80 C'
SD18
D 23.80 D'
SD20
E 23.80 E'
SD16-32
F 23.90 F'
SD17
H 23.80 H'
SD22
J 23.80 J'
SD31
K 23.80 K'
SD23
L 23.80 L'
SD26
M 23.80 M'
SD24
N 23.80 N'
SD15-12
Q 23.10 Q'
SD12
P 23.80 P'
SD12-14
S 23.70 S'
SD25
T 23.80 T'
0 2m 1:80

第133図　溝跡（3）


-8
-7
-6
R
S-6
S-7
S
SD12
SD14
T-7
T-6
T
SD11
U
0
4m
1:100



SD11（U－U'）
1 黒褐色土　炭化粒子を少量含む地山ブロック（φ2～3cm）を若干含む。
2 暗褐色土　炭化粒子を含む、地山ブロック（φ1～2cm）を少量含む。
3 暗黄褐色土　地山ブロック（φ1～2cm）を多量に含む。
炭化粒子を微量に含む。

SD12（R－R'）（O－O'）
1 暗黄褐色土　地山ブロック（φ1cm）を少量含む。
2 暗褐色土　地山ブロック（φ1～2cm）、炭化粒子を少量含む。
3 暗褐色土　地山ブロック（φ2～3cm）をやや少量含む。
炭化粒子を微量に含む。
4 暗褐色土　地山ブロック（φ0.5～1cm）を少量含む。
炭化粒子を微量に含む。
5 黒褐色土　地山ブロック（φ1cm）をやや多く含む。
6 褐色土　地山ブロック（φ1cm）、炭化粒子をやや多く含む。

SD28（I－I'）
1 黒褐色土　炭化粒子をやや多く含む。
地山ブロック（φ1cm）を少量含む。
2 黒褐色土　炭化粒子をやや多く含む。
地山ブロック（φ0.5～1cm）を少量含む。
3 暗褐色土　地山ブロック（φ1cm）を多量に含む。
炭化粒子をやや少量含む。

SD16（G－G'）
1 黒褐色土　地山ブロック（φ1cm）、炭化粒子を少量含む。
2 暗褐色土　地山ブロック（φ1～2cm）をやや多く含む。
炭化粒子を微量に含む。
3 黒褐色土　地山ブロック（φ0.5～1cm）、炭化粒子を少量含む。
4 茶褐色土　地山ブロック（φ2～3cm）をやや多く含む。
炭化粒子を微量に含む。

SD27（B－B'）
1 暗褐色土　地山ブロック（φ1～2cm）をやや多く含む。
炭化粒子を微量に含む。
2 黒褐色土　地山ブロック（φ1～2cm）、炭化粒子を少量含む。
3 暗褐色土　炭化粒子を少量含む、地山ブロック（φ0.5～1cm）を若干含む。

第134図　溝跡（4）

第15号溝跡（第133図）

第15号溝跡は、調査区南側のS－9グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝で第12号溝跡と並行する。北西端は第24号溝跡と重複するが、その先には続かない。

検出された規模は、長さ3.50m、幅0.46m、深さ0.15mで、丸味を帯びる溝底から緩やかに立ち上がる。

図示できる遺物は出土していない。

第16号溝跡（第133・134図）

第16号溝跡は、調査区南側のR－9・10グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。第16号土壙、第12・32号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ6.26m、深さ0.15mである。浅い皿状の掘り込みである。幅は一定せず南側がふくらみを持つ。

遺物は9が出土した（第136図）。9は有段口縁の坏である。

第17号溝跡（第133図）

第17号溝跡は、調査区南側のS－10グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝である。

検出された規模は、長さ1.21m、幅0.18m、深さ0.06mで、U字状の掘り込みである。第18号溝跡と軸線が一致することから同一に機能していたことが考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第18号溝跡（第133図）

第18号溝跡は、調査区南側のR－10グリッドで検

出された。北西から南東に延びる溝である。北西端で第19・20・21号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ3.96m、幅0.41m、深さ0.08mで、U字状の掘り込みである。第17号溝跡と一体となり機能していた区画溝と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第19号溝跡（第133図）

第19号溝跡は、調査区南側のR－10グリッドで検出された。ほぼ東西に延びる溝である。西端で第18・20・21号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ1.90m、幅0.31m、深さ0.09mで、浅い箱状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第20号溝跡（第133図）

第20号溝跡は、調査区南側のR－10グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。南西側は調査区外へと続く。北西端で第18・19・21号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ2.26m、幅0.24m、深さ0.12mである。

図示できる遺物は出土していない。

第21号溝跡（第133図）

第21号溝跡は、調査区南側のR－10グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。第18・19・20号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ6.78m、幅0.85m、深さ0.16mである。

図示できる遺物は出土していない。

第22号溝跡（第133図）

第22号溝跡は、調査区南側のS－9グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝である。北西端は第28号溝跡と交わる。南東側は調査区外へと続く。

検出された規模は、長さ2.60m、幅0.22m、深さ0.10mで、U字状に掘り込まれたものである。

図示できる遺物は出土していない。

第23号溝跡（第133図）

第23号溝跡は、調査区南側のS－9グリッドで検出された。南北に延びる溝である。北端は第31号溝跡と交わる。南側は調査区外へと続く。

検出された規模は、長さ2.15m、幅0.33m、深さ0.07mである。

図示できる遺物は出土していない。

第24号溝跡（第133・134図）

第24号溝跡は、調査区南側のR・S－9グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。両端は調査区外へと続く。第12・13・31号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ9.23m、幅0.60mで浅い掘り込みである。

遺物は10が出土した（第136図）。10は甕で口縁部から頸部を強くヨコナデする。

第25号溝跡（第133図）

第25号溝跡は、調査区南側のS－9グリッドで検出された。南北に延びる溝である。北端は第12号溝跡と重複するが、新旧は不明である。南側は調査区外へと続く。

検出された規模は、長さ2.50m、幅1.14m、深さ0.15mで、浅い皿状の掘り込みである。

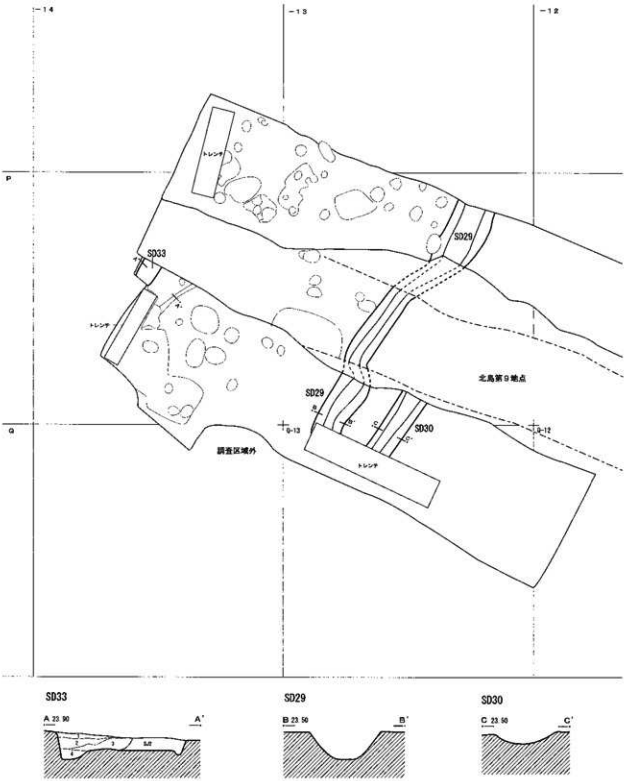
図示できる遺物は出土していない。

第26号溝跡（第133図）

第26号溝跡は、調査区南側のR－9グリッドで検出された。北西から南東に延びる溝である。

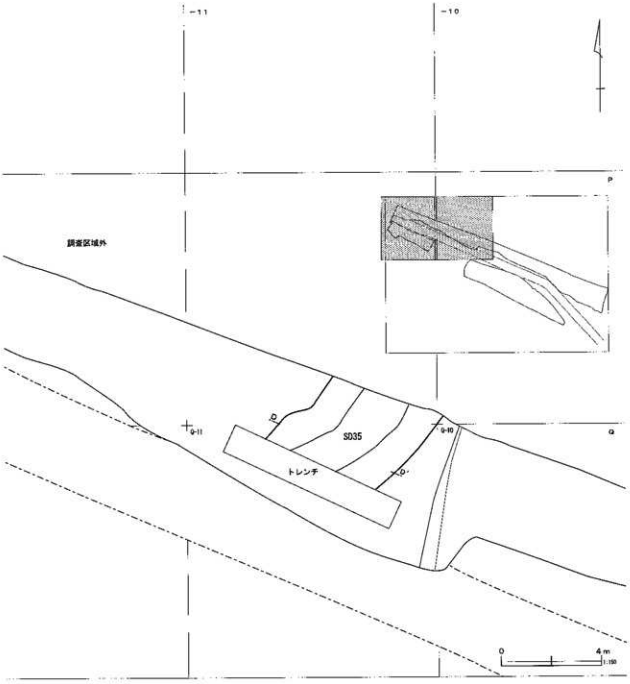
規模は、全長2.44m、幅0.62m、深さ0.13mで浅い箱状の掘り込みである。

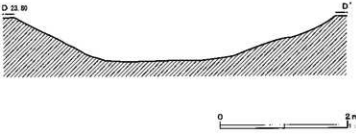
図示できる遺物は出土していない。



SD33 (A—A')
1 暗褐色土 炭化粒子(φ1~2cm),黄灰色粘土粒子(φ0.5~1cm)を少量含む。
2 暗褐色土 1層より暗い,炭化粒子(φ1~2cm),黄灰色粘土ブロック(φ2~3cm)をまばらに含む,鉄土粒子,灰白色粒子を少量含む。
3 暗褐色土 黄灰色粘土ブロック(φ2~3cm)を多量に含む,炭化粒子(φ1~2cm)を少量含む。
4 暗灰色土 灰白色粘土ブロック(φ2~3cm)を多量に含む,粘土質。

第135図 溝跡 (5)


-11
-10
P
調査区域外
D
SD35
G-11
G-10
Q
トレンチ
D'
0
4m
1:100


SD35
D 23.80
D'
0
2m
1:40

第27号溝跡（第133・134図）

第27号溝跡は、調査区南側のR－10グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。第21号溝跡の入れ籠状に確認されている。新旧は不明である。

規模は、全長3.47m、幅0.40m、深さ0.15mでU字状に掘り込まれている。溝底の標高が他の溝跡より若干低いのが気になるが、第17・18号溝跡とともに機能した区画溝と考えられる。遺物は11が出土した（第136図）。11は甕でケズリの方向が明瞭にわかる。

第28号溝跡（第133・134図）

第28号溝跡は、調査区南側のS－9・10グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。北端は第12・17号溝跡と重複する。他に第22号溝跡と重複するが、いずれも新旧は不明である。南側は調査区外へと続く。

検出された規模は、長さ6.28m、深さ0.13mである。幅は北側と南側で異なり、それぞれ0.34m、0.63mを測る。北側の幅狭の部分は本来は、南側にある第17号溝跡の一部をなし、第18・27号溝跡とともに方形の区画溝として機能したものかもしれない。

図示できる遺物は出土していない。

第29号溝跡（第135図）

第29号溝跡は、調査区北西側のP・Q－13グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。調査区を跨いで確認され、両端は調査区外へと続く。南側の調査区では、第30号溝跡と並行する。第9地点の第34号溝跡と同一と考えられる。

検出された規模は、長さ4.71m、幅1.40m、深さ0.49mである。掘り込みは、平坦な溝底から緩やかに立ち上がる。

図示できる遺物は出土していない。

第30号溝跡（第135図）

第30号溝跡は、調査区北西側のP・Q－13グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。両端は調査区外へと続く。第29号溝跡と並行することから、北側の調査区での検出が望まれたが、確認できなかった。第9地点においても確認されていないので途中で途切れるものと考えられる。

検出された規模は、長さ2.69m、幅1.02m、深さ0.14mで丸味のある浅い掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第31号溝跡（第133図）

第31号溝跡は、調査区南側のS－9グリッドで検出された。L字状を呈する溝である。第24号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ2.48m、幅0.75m、深さ0.07mで、浅い皿状の掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。

第32号溝跡（第133図）

第32号溝跡は、調査区南側のR－9グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝と思われる。南端で第12・16号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

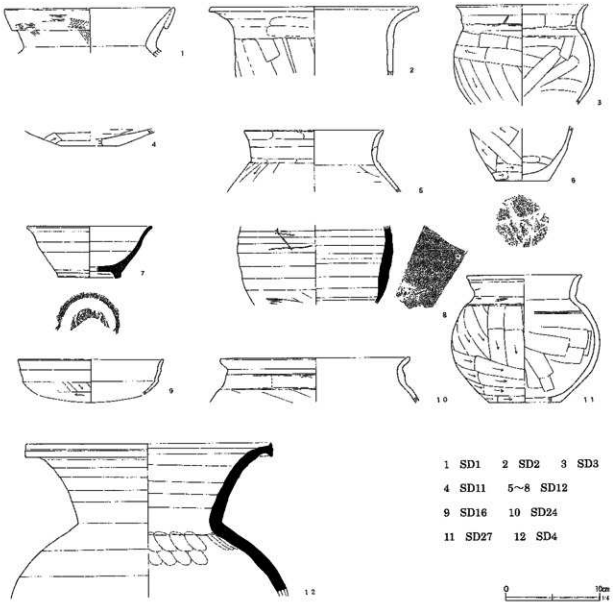
規模は、全長2.21m、幅0.21m、深さ0.17mでU字状の掘り込みである。第17・18・27号溝跡と同種の区画溝と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

第33号溝跡（第135図）

第33号溝跡は、調査区北西端のP－14グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。両端は調査区外へと続く。北側の調査区で確認されていないことから北西側に曲がるものと思われる。第2号住居跡を切る。

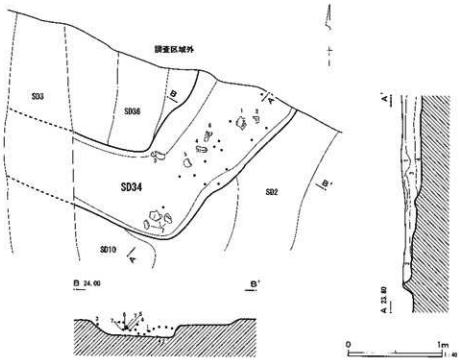
検出された規模は、長さ0.86m、幅0.80m、深さ0.39mである。掘り込みは、西側では溝底から直線的に急角度で立ち上がる。東側では短く立ち上がり、



第136図　溝跡出土遺物

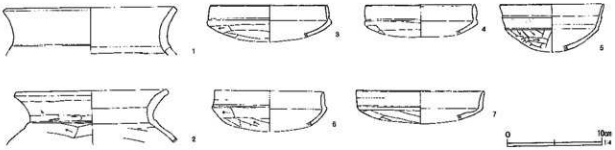
第30表　溝跡出土遺物観察表（第136図）

番号	器種	口径	器高・底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(18.0)	[4.6]	－	K J	普通	浅黄橙色	10	SD1　五領　ハケ目整形→ナデ ハケ目整形の痕がところどころに残る
2	土師甕	(22.2)	[7.4]	－	A J K	普通	橙色	5以下	SD2　口縁端部に面を持つヨコナデ　内面は平滑である
3	土師甕	14.0	[10.4]	－	A E J	普通	にぶい黄橙色	40	SD3　胴下半に帯状に黒斑がある 口縁部内外面ともに強いヨコナデ
4	土師壺	－	[1.9]	(6.0)	A H J	普通	灰黄褐色	5以下	SD11　壺底部　底部外面にケズリを施す 底部と胴部の境があまりはっきりしない
5	土師甕	14.6	[6.5]	－	A E G H J	不良	淡黄色	5以下	SD12　雲母微量　ケズリ→ヨコナデ 雲母を多く含むため、ケズリの単位がはっきりしている
6	土師甕	－	[5.5]	5.6	B E J	普通	淡黄色	5以下	SD12　底部付近に黒斑あり
7	須恵坏	(13.0)	5.4	－	K J	普通	灰白色	30	貼付高台　高台に摩滅した痕がみられる　末野産
8	須恵壺	－	[8.4]	－	K	良好	灰白色	5以下	SD12　肩部にヘラ描あり　湖西産
9	土師坏	(15.4)	(4.6)	－	B E	普通	灰黄褐色	5以下	SD16　模倣坏　口縁部内・外面ナデ整形
10	土師壺	(20.0)	[4.7]	－	A B E H	普通	灰白色	5以下	SD24　摩滅していて調整がわかりづらい
11	土師甕	(12.1)	13.6	(7.8)	K J	普通	にぶい黄橙色	40	SD27　口縁部内・外面ともに強いヨコナデ 胴下半から底部まで黒斑がある
12	須恵壺	26.0	[16.4]	－	J	良好	青灰色	30	SD4　内面アテ具の痕がよく残る 外面カキ目が見られる　末野産



SD34
1　灰白色土　炭化粒子を少量含む、焼土粒子を微量に含む、粘性あり。
2　黒色土　炭化粒子層中に粘土ブロックを少量含む、粘性あり。
3　黒色土　炭化粒子と粘土ブロック（φ2～3cm）をやや多く含む、粘性あり。
4　灰黒色土　粘土ブロック（φ3～4cm）層中に炭化粒子を多量に含む、粘性あり。

第137図　第34号溝跡遺物出土状態



第138図　第34号溝跡出土遺物

第31表　第34号溝跡出土遺物観察表（第138図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師甕	(17.8)	[5.2]	—	ABE	普通	灰黄褐色	5以下	口唇部平坦に仕上げてある
2	土師甕	(16.0)	[5.7]	—	BE	普通	灰白色	5以下	口縁部肥厚し、やや丸みをもつ 口縁部下端に工具or ツメ痕が残る
3	土師坏	(12.4)	(4.0)	—	ABG	普通	橙色	20	模倣坏　緻密な胎土 口縁部内・外面ともにヨコナデ　口縁部やや肥厚する
4	土師坏	(11.6)	[3.4]	—	BE	普通	橙色	15	口縁部肥厚する 口縁部内・外面ともにヨコナデ
5	土師坏	(11.0)	[5.1]	—	EG	普通	赤褐色	15	口縁部内外ともヨコナデ変形 外面風化処理　底部外面凹凸が激しい
6	土師坏	(11.6)	(4.3)	—	BE	普通	橙色	15	口縁部内・外面ともヨコナデ 最後に底部上端をヨコに削っている
7	土師坏	(13.6)	(3.4)	—	B	普通	灰黄褐色	20	口縁部と底部の境は段状になる 口唇部丸みをもつ　外面ケズリ層消してみづらい

中段にテラスを持ち緩やかに上端に至る。

図示できる遺物は出土していない。

第34号溝跡（第131・132・137図）

第34号溝跡は、調査区北東側のR－6・7グリッドで検出された。北西から南東に延びる後、L字状に北に曲がり調査区外へと続く溝である。第2・3・4・9・36号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ6.37m、幅0.96m、深さ0.17mである。

遺物は、調査区際でまとまって出土した（第138図）。出土層位は一定の場所に集中せず、溝底付近から覆土の上層まで各層にわたっている。1・2は甕である。口縁部が肥厚し、端部を平坦に仕上げる。3～7は坏で、口縁部が内傾し、肥厚するもの（3・4・6）、外傾するもの（7）、有段口縁になるもの（5）がある。胴部はケズリがなされる。

第35号溝跡（第135図）

第35号溝跡は、調査区中央付近のP・Q－11グリッドで検出された。北東から南西に延びる溝である。

両端は調査区外へと延びる。東側に位置する河川跡に沿うように並行する。

検出された規模は、長さ4.10m、幅5.09m、深さ0.68mで、幅広の平坦な溝底から緩やかに立ち上がる。

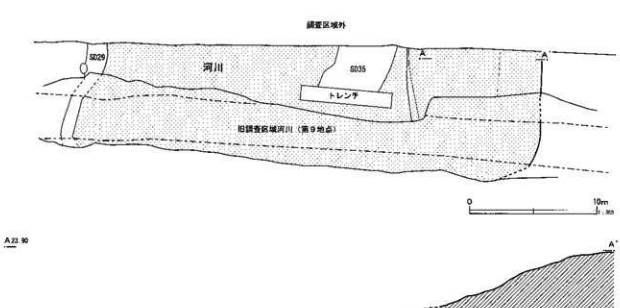
図示できる遺物は出土していない。

第36号溝跡（第131・132図）

第36号溝跡は、調査区北東側のR－6グリッドで検出された。南北に延びる溝である。北側は調査区外へと続く。南端は第34号溝跡と重複するが、新旧は不明である。

検出された規模は、長さ1.06m、幅0.50m、深さ0.04mで、浅い掘り込みである。

図示できる遺物は出土していない。



第139図　河川跡

（6）　河川跡（第139図）

河川跡は、調査区の中央のQ－10～P－12グリッドを中心に検出された。第9地点において確認されていたものと同様である。北東から南西方向に流路を取る。河川の東側は明確に捉えることができたが、西側は明確に捉えることができなかった。これは前述のように第2面において河川跡の東端以西は河川の氾濫原と思われ、洪水を起源とする上が堆積している。第1面の時期の河川跡の覆土と区別しづらいことに起因する。推定では第29号溝跡付近が西側の立ち上がりと考えられる。

確認した幅は35m以上で、深さ1.1mまで掘り下げたが溝底は確認できなかった。道路幅の調査であり、発掘区壁の崩壊の危険があるため河川の東側の肩部の調査を中心に行なった。その他の部分に関しては、重機によりトレンチをいれ調査を行なった。東側の肩部の調査から河川は緩やかに傾斜し河底に至ると考えられる。

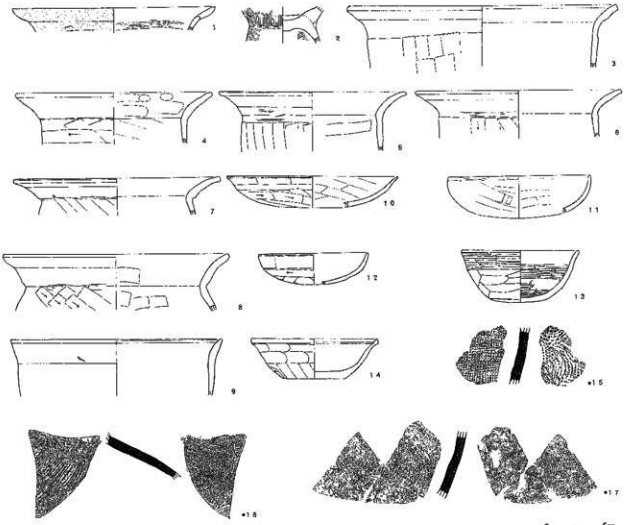
遺物は調査時には谷西側一括として取り上げたものを河川跡の遺物として掲載する（第140図）。遺物は古墳時代前期から平安時代までの遺物を含む。多くは河川の氾濫によりもたらされたものと考えられる。

1は壺の口縁部で有段口縁状になり、外面が赤彩される。2は台付甕の接合部である。台部を先に作っている。

3～9は甕である。3～6は口縁部が最大径で、胴部は直線的な器形になるものである。7・8は胴部がややふくらむ器形である。胴部はケズリ成形される。口縁部は角頭状になるものと丸みを持つものがある。9は口縁部が肥厚する。胴部の器壁が薄くなることから、底部近くが鉢形の器形になるかもしれない。

10～14は坏である。10は皿状に近く口縁部が強くヨコナデされる。11・12は内湾口縁の坏である。13は丸底に近い底部を持つ。口縁部から頸部の外面と内面に細かいミガキがなされる。14はユビオサエの後ヨコナデされる。器面に凹凸がある。

15～17は須恵器の甕である。15・16はタタキ目が明瞭である。



第140図　河川跡出土遺物

第32表　河川跡出土遺物観察表（第140図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(21.6)	[2.5]	—	BEHJ	普通	橙色	5以下	頸部に工具痕あり　赤彩されていた可能性あり
2	土師甕	—	[3.9]	—	AEGJ	普通	にぶい黄橙色	5以下	脚台部を作る→裳底部→接合部を粘土で補強
3	土師甕	(28.6)	[6.8]	—	AEHJ	普通	橙色	5以下	口唇部平坦　口縁部歪みあり
4	土師甕	(20.6)	[5.5]	—	KGJ	普通	橙色	5以下	口縁部丸みをもつ　強いユビオサエの痕
5	土師甕	(18.8)	[6.2]	—	EK	良好	橙色	5以下	口縁部強いヨコナデ　胴部のケズリ明瞭
6	土師甕	(21.6)	[5.1]	—	KGJ	普通	橙色	5以下	胴部との境に強いヨコナデ
7	土師甕	(21.6)	[4.0]	—	DGK	普通	橙色	5以下	ナデ→ケズリ
8	土師甕	(22.8)	[5.9]	—	BHJK	普通	橙色	5以下	ケズリ痕明瞭
9	土師甕	(22.6)	[6.0]	—	ADJ	普通	明赤褐色	5以下	口縁部内・外面直下強いヨコナデ 口縁部丸みをもつ
10	土師坏	(18.0)	(3.3)	—	BHJ	普通	黄橙色	15	ケズリ見づらい　口縁部1/6程残存
11	土師坏	(15.0)	[4.0]	—	CGH	普通	橙色	5	ケズリ痕明瞭
12	土師坏	(11.4)	[3.3]	—	AEJ	普通	明黄褐色	20	ケズリ痕見づらい
13	土師椀	(12.5)	5.5	5.8	G	良好	にぶい橙色	50	底部外面凹凸あり　内面非常に細かいヨコミガキ
14	土師坏	(13.4)	4.2	6.5	BK	普通	灰白色	70	胴部縦位ケズリ→ヨコナデ　底部ケズリ
15	須恵甕	—	—	—	BJ	普通	灰白色		
16	須恵壺	—	—	—	EF	良好	青灰色		胴上端片　南比企産
17	須恵甕	—	—	—	CEHJ	良好	灰白色		内面器面凹凸による凹凸が激しい ケズリによる砂粒が動いたあとが明瞭　外面ミガキ

（7） 畠跡（第142図～第145図）

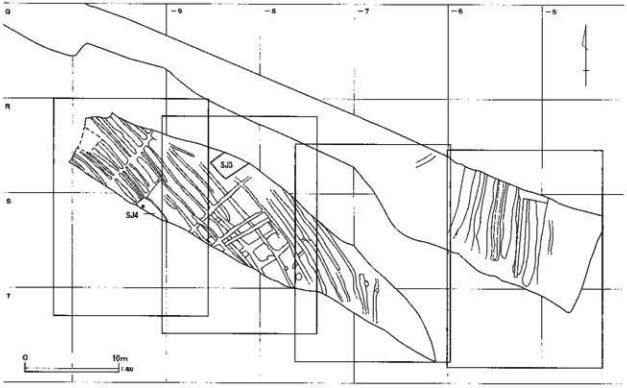
畠跡は第２面で検出された。畝の走行方向から大きく二つに分けられる。第１群はＳ－６グリッドを中心に検出され、走行方位はＮ－5°－Ｅである。

第２群は調査区南側全域にわたり検出された。走行方位はＮ－51°－Ｗである。一部これに直行するような畝も見受けられる。

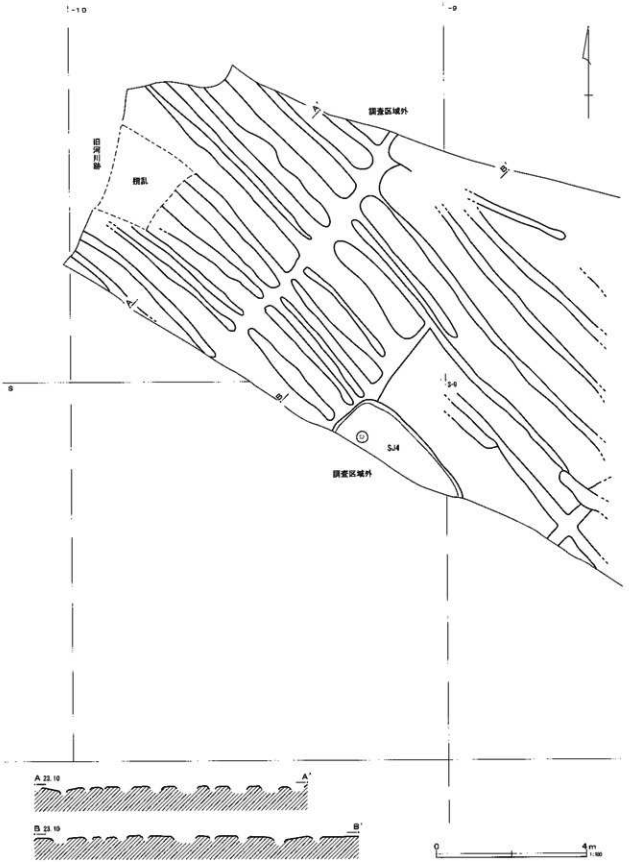
両群とも畝の幅は狭く、畝間の幅が広いことを特徴としている。第１群での畝の断ち割り調査から、何度も土をすきこんだ痕跡が認められた。全体的に黒褐色を呈していた。

後世に攪乱されたところ以外は五鉢式土器しか出土しないことから畠の時期は古墳時代前期以前になる。

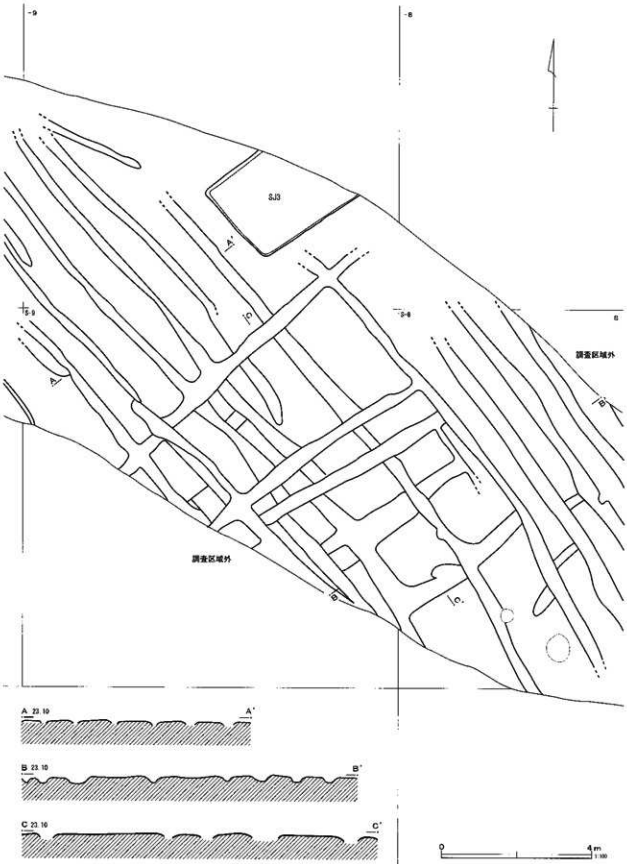
遺物は２面として一括で取り上げたものである（第146図）。１は台付甕で台部を欠損する。胴部はハケ整形の後、削られている。２は甕の口縁部破片である。外面に粗いハケ目が残る。３は東海地方にその系譜が求められるＳ字状口縁の台付甕である。外面はヨコナデと細かいハケ目が施される。口縁部が直立気味であることと、整形技法がオリジナルとはかけ離れているのでかなり在地化が進んだものと思われる。４は坩の口縁部破片である。口縁部外面は３回ほどにわけ丁寧にミガキを施す。５は甕形土器の口縁部破片である。体部外面はケズリが施される。



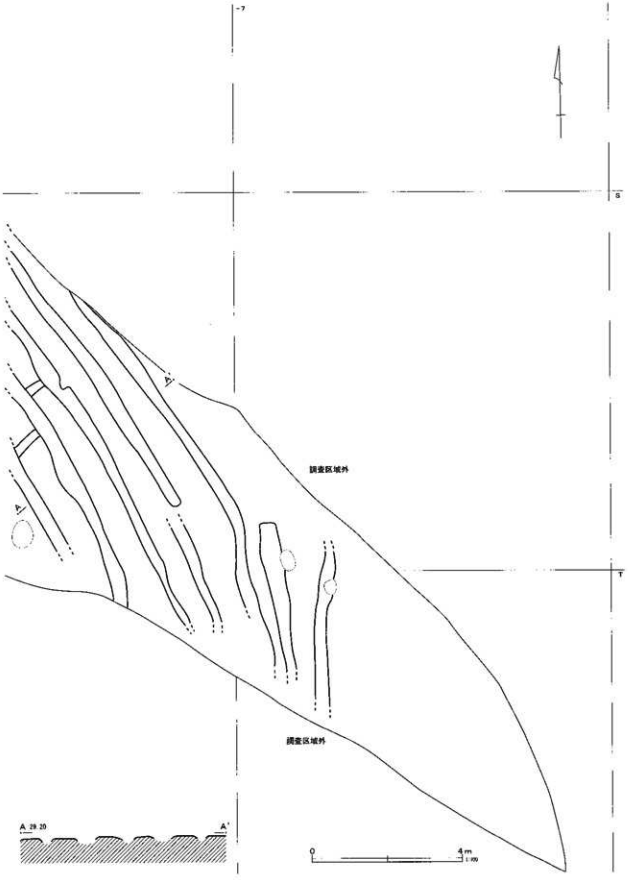
第141図　第２面畠跡区割図



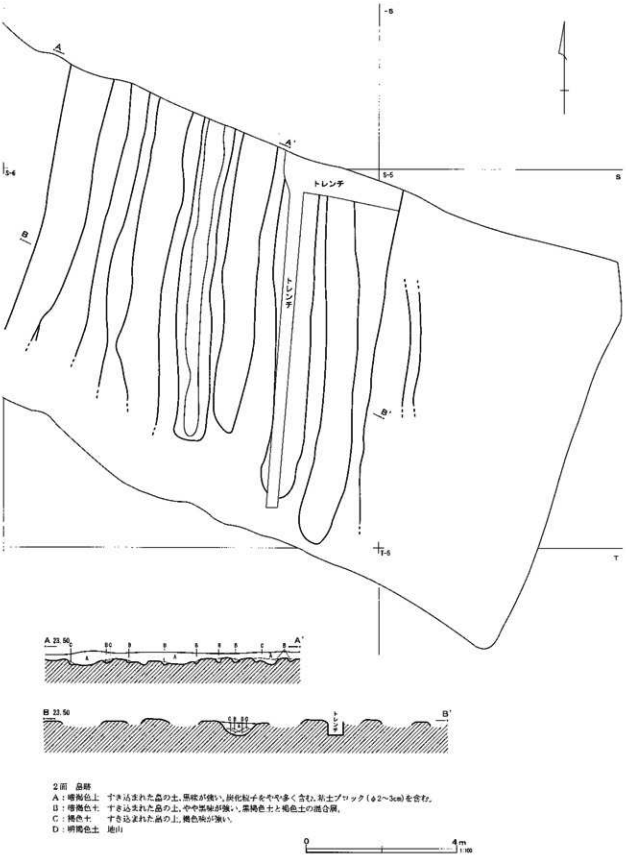
第142図　第２面畠跡（1）



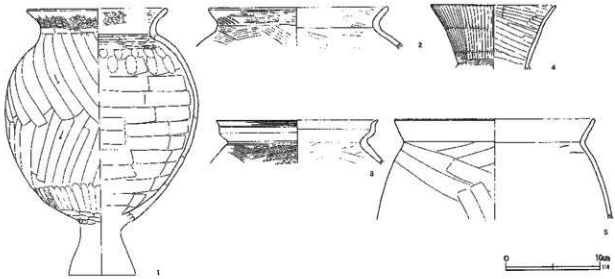
第143図　第２面畠跡（2）



第144図　第２面畠跡（3）



第145図 第２面畠跡（4）



第146図　第２面畠跡出土遺物

第33表　第２面畠跡出土遺物観察表（第146図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師台付甕	14.9	[22.7]	－	B E J	良好	にぶい橙色	80	外面ヘラケズリ→胴下半ナデ整形 内面下から上へヘラケズリ
2	土師甕	(19.4)	4.5	－	G H J	普通	橙色	5以下	口唇部丸みをもつ　外面太いハケ目
3	土師甕	(17.0)	[4.8]	－	C E G J	普通	橙色	5以下	胴部外面細かいハケ目
4	土師坩	(12.4)	[6.8]	－	A H J K	普通	淡黄橙色	20	外面細かい縦位ミガキ　内面粗い斜位ミガキ
5	土師甕	(21.3)	[10.5]	－	E J	普通	橙色	20	外面ケズリ整形見づらい 内面頸部直下の輪積部分強いヨコナデ

第34表　グリッド出土遺物観察表（第147図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(15.8)	[5.0]	－	D J	普通	浅黄橙色	5以下	Q-10表採　頸部に接合時の工具痕が残る
2	土師坏	(13.6)	[4.0]	－	A J	良好	橙色	30	Q-10表採　有段　底部のケズリ痕が明瞭　口縁部強いヨコナデ
3	土師坏	(13.4)	[4.8]	(13.2)	B E	普通	明赤褐色	20	S-10　底部ケズリ痕が明瞭　ユビナデ
4	土師坏	10.5	3.0	－	C E	普通	橙色	100	O-11　摩滅が激しい　口縁部着干歪む
5	土師坏	(13.0)	[3.0]	－	A G J	普通	橙色	10	Q-13　摩滅していてケズリ分かりづらい
6	土師甕	(12.8)	[2.5]	－	A E H J	普通	橙色	5以下	S-5　口縁部内・外面ヨコナデ
7	土師甕	(18.0)	[3.5]	－	E J K	普通	明褐灰色	5以下	S-7　口縁部　内・外面ヨコナデ　口唇部丸みをもつ
8	土師甕	－	[15.5]	－	E H	普通	橙色	20	R-7　胴下半　器面剥落が激しい
9	土師壺	－	[3.8]	8.4	E H	普通	淡黄色	5以下	S-5　底部ケズリ整形
10	須恵壺	(18.5)	[1.5]	－	E J	普通	灰色	5以下	P-14　未野痕
11	須恵壺	－	[4.9]	－	K	良好	灰白色	10	P-14 底部付近に焼成時に上器を安定させるための粘土が付着 底部回転ヘラケズリ　渤西産
12	須恵壺	－	[5.9]	－	E J	良好	暗青灰色		S-10　カキ目が明瞭
13	須恵甕	－	－	－	F J	良好	暗青灰色		S-9　タタキ口・カキ目がある　南比企産
14	土錘	－	－	－	A K	普通	橙色	100	表採　中央部に膨らみを有する　ナデ整形 全長4.4cm　厚さ1.15cm　孔径0.25cm

（8） グリッド出土遺物（第147図）

ここでは遺構確認中などに取り上げた遺物を掲載した。

1は壺の口縁部である。頸部が強く屈曲し、球胴になると思われる。五領式土器。

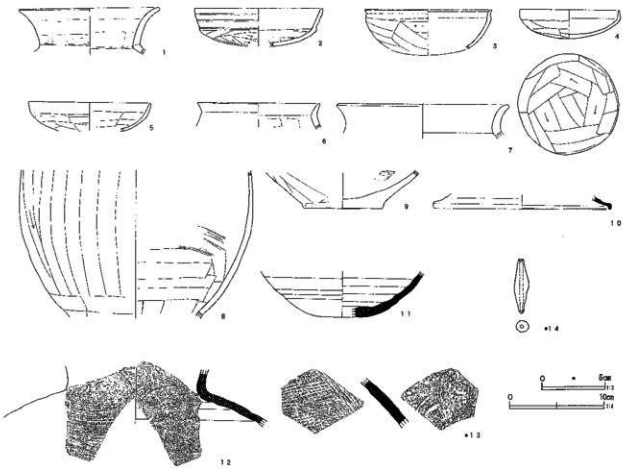
2～5は坏である。2は有段口縁で、境が沈線状になる。3は頸部に強いヨコナデがなされ屈曲する。4は口縁部が直立する。5は内湾口縁の坏である。

6・7は甕の口縁部である。6は口縁部が短く外傾する。7は口縁部が肥厚し、外反する。8は胴部下半でケズリが明瞭である。

9は壺の底部である。

10は須恵器の蓋である。11は須恵器の壺で、外面と底部内面に釉がかかる。12・13は須恵器の甕で、タタキ目が明瞭に残る。

14は土錘で中央部分が膨らみ、両端が細くなる。



第147図　グリッド出土遺物

Ⅶ 附編

北島遺跡では、弥生時代から中・近世までの遺構や遺物が数多く発見されている。なかでも、北島遺跡の立地的な特性から、木製品の出土が多い。本書においては、北島遺跡第17地点の遺構から出土した農工具などの木製品について報告した。

そこで、これらの木製品について、各器種の用途と選定された樹種の特徴と関連を明らかにするために、樹種同定を行なった。また、行田市小敷田遺跡等の周辺遺跡の樹種選定傾向と比較することによって北島遺跡出土木製品の特徴を抽出し、さらに、北島遺跡周辺の古環境から復原される植生等から用材の供給元の追及も目的とする。

北島遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

<目次>

はじめに
1．試料
2．分析方法
3．結果
4．考察

<表一覧>

表1　樹種同定結果

はじめに

北島遺跡は、荒川左岸と利根川右岸に挟まれた沖積低地から微高地にかけて位置し、縄文時代晩期から中近世にかけての複合遺跡である。地形的には、荒川が形成した新扇状地の扇端部付近に位置し、微高地は扇状地上に形成された自然堤防とされる（籠瀬　1990）。

本遺跡では、これまでに弥生時代中期を中心に花粉分析による古植生復元や樹種同定による木材利用状況の調査を行っている（パリノ・サーヴェイ株式会社　1998,2003）。花粉分析結果では、コナラ属、アカガシ亜属の木本花粉とともに、イネ科や水生植物の花粉化石の多い結果が得られている。また、樹種同定では、木製品にイヌガヤ、アカガシ亜属、ムクノキ、ケヤキ、ヤマグワが見られ、杭にはヤマグワが確認されている。

本報告では、古墳時代前期の木製品について樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得ることを目的とする。

1．試料

試料は、農耕具などの木製品4点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2．分析方法

各試料の接合面または破損面を利用して、5㎜ー1㎝角程度の木片を採取した。木片試料については、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。

切片をスライドガラス上に載せ、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。同定結果は、植物分類に従い、科・亜科・属・亜属・節・種で表

表1　樹種同定結果

番号	試料番号	挿図番号	遺　構	種　類	器　種	樹　種
2-1	1	70図72	河川跡	農工具	鍬	スギ
2-2	2	72図75	河川跡	農工具	三又鋤	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2-3	3	72図76	河川跡	農工具	竪杵未製品	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2-4	4	73図77	河川跡	農工具	弓	カヤ

示する。種は、組織的に種単位に分類できる種類と、日本に1種のみ自生し、過去に他種が自生したと考えられていない種類については種で同定する。同じグループ内に複数種があり、木材組織から種類間の区別が困難な場合には、科・亜科・属・亜属・節のグループ名で同定する。この際、分類群や木材組織の特徴、保存状況により、同定できるグループの単位が異なる。

3．結果

樹種同定結果を表1に示す。道管を有することから広葉樹であるが、種類の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹2種類（スギ・カヤ）と広葉樹1種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。なお、埼玉県内の生育状況については、高橋（1998a,1998b）を参考にした。

・スギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）

スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

埼玉県内では、社寺林・山林に植栽されたものが多いが、自生もあるとされる。

・カヤ（Torreya nucifera Sieb. et Zucc.）

イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁にかすかにらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

埼玉県内のほぼ全域の山林等に疎らに生育する。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

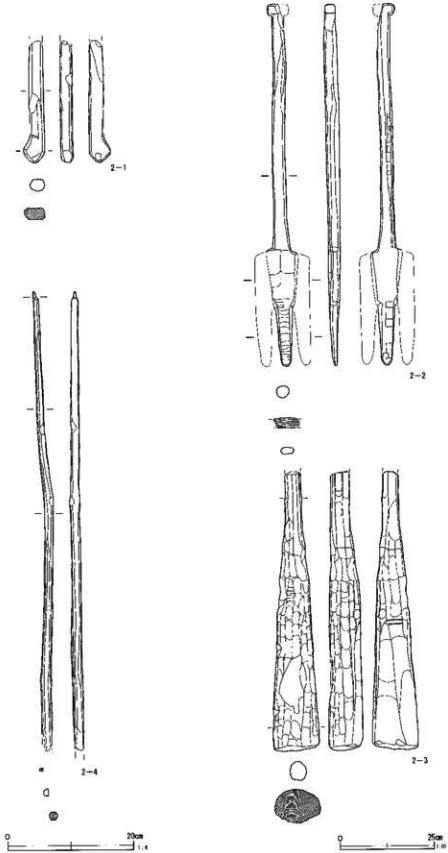
コナラ属は、いわゆる「どんぐり」の種類であり、コナラ亜属はその中でも落葉広葉樹を主とするグループである。クヌギ節は、どんぐりが2年目に熟すグループで、クヌギとアベマキの2種が含まれる。埼玉県内にはクヌギが山地・丘陵から平地に至る広い範囲で生育するが、アベマキは僅かに植栽されているのみで自生は確認されていない。そのため、今回の試料もクヌギの可能性が高いが、組織から両種を分類することは困難である。

4．考察

出土した木製品の時代時期は、古墳時代前期で農耕具である。木製品の器種別種類構成を表2に示す。

古墳時代前期の木製品4点には、針葉樹2種類（スギ・カヤ）、広葉樹1種類（クヌギ節）が確認された。

カヤを除く針葉樹の木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。カヤは、他の針葉樹よりも重硬な材質を有し、耐水性が高い。一方、広葉樹では、クヌギ節が重硬な材質を有し、強度も高い。これらの種類のうち、カヤは暖温帯常緑広葉樹林の



第148図　樹種同定

構成種であり、クヌギ節は二次林の構成種となる。全体的に台地上よりも、自然堤防上などの低地に生育する種類が多くみられるが、これは遺跡周辺の地形環境を反映したものと考えられる。これらの広葉樹材を中心とした組成は、本遺跡における花粉分析結果や比較的近い小敷田遺跡から出土した五領期の自然木の樹種同定結果（鈴木・能城　1991;パリノ・サーヴェイ株式会社　1998）とも調和的である。一方、スギについては、現在の遺跡周辺には植栽以外には生育は確認できない。スギについては、植栽されたものが県内に広く見られるが、本来自生したものであるか不明である。他地域からの搬入の可能性があるが、現時点では詳細は不明である。

杵は遺跡周辺で入手可能な種類を利用している。杵のクヌギ節は、重硬で樹皮の高い材質が選択された背景に考えられる。これらの木材は、遺跡周辺で生育していた樹木の中から、用途に応じて選択され利用されていたことが推定される。鋤では、利用される種類が限定される傾向がある。また、平鋤と三又鋤では、結果を見る限りでは形態による樹種の違いは認められない。鍬・鋤類の身については、これまでの調査でアカガシ亜属が多く利用されていることが明らかとなっている（鈴木　1988）。関東地方においても、千葉県から出土した鍬・鋤にアカガシ亜属が多く利用されているが、群馬県・埼玉県・東京都から出土した鍬・鋤にはアカガシ亜属に混じってクヌギ節やコナラ節が多く見られる（高橋　1996）。これは、アカガシ亜属の自生北限（群馬県安中市周辺）に近いために、アカガシ亜属よりもコナラ亜属の木材の入手が容易であり、その結果としてコナラ亜属の利用が多かったと考えられる。一方、栢についてはこれまでの調査でも雑多な組成になる傾向が指摘されており、その理由として、堅い材質の栢を用いることで刃先を破損しないように、軽軟で折れやすい木材を選択した可能性が考えられている（鈴木　1988）。その他の製品については、1器種1点のため、利用される種類の傾向等は不明であるが、基本的には遺跡周辺で入手可能な木材を利用したと考えられる。

本地域における木材利用については、時期別・用途別の利用傾向を把握するにはまだ資料が少ない。今後さらに資料を蓄積すると共に、木製品の形態、木取り、利用状況等も含めて木材利用を検討したい。

引用文献

籠瀬良明　1990　「自然堤防の諸類型　―河岸平野と水害―」古今書院　202頁

パリノ・サーヴェイ株式会社　1998　「北島遺跡の古環境変遷」『北島遺跡IV』（第2分冊）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　485-503頁

パリノ・サーヴェイ株式会社　2003　「北島遺跡から出土した木材の樹種同定分析について」『北島遺跡II』（第2分冊）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　521-524頁

鈴木三男　1988　「農具及び工具」島地　謙・伊東　隆夫編　『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣　50-57頁

鈴木三男・能城　修一　1991　「小敷田遺跡の木材化石群集」『小敷田遺跡、<河川跡遺物編・第Ⅱ分冊>　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　268-318頁

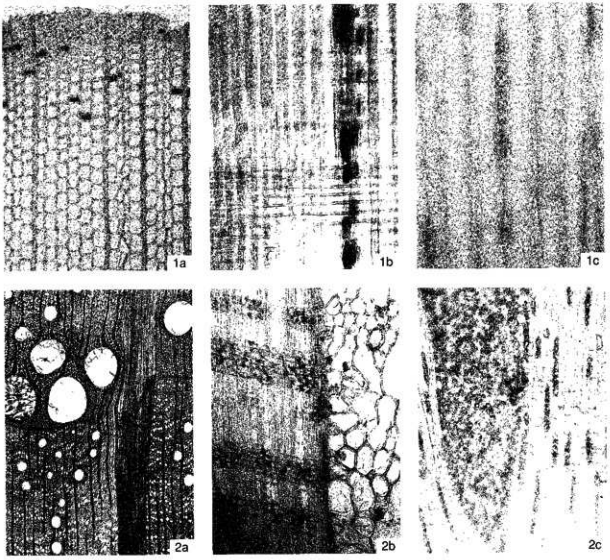
高橋重男　1998a　「埼玉県の裸子植物」伊藤　洋編　「1998年度版　埼玉県植物誌」埼玉県教育委員会　81-86頁

高橋重男　1998b　「埼玉県の被子植物」伊藤　洋編　「1998年度版　埼玉県植物誌」埼玉県教育委員会　87-288頁

辻誠一郎　1985　「関東地方における縄文時代以降の植生史：照葉樹林の消長をめぐって」『群落研究　2』8-10頁

山田昌久　1986　「くわとすきの来た道」『新保遺跡Ⅰ』一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集<本文編>　群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　168-188頁

図版1　木材



1．スギ（試料番号１）
2．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号３）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：1a,2b,c
100μm：1b,c
200μm：1a

Ⅷ まとめ

北島遺跡の大きな成果は、集落だけでなく、墓域、生産域が検出されたことにより、当時の人々の暮らしが立体的に理解できることが、第一に挙げられるであろう。ここでは、当時の人々が暮らした住居跡と生活の糧を得ていた生産域についてやや詳しく見ていきたい。

第17地点の住居跡について

住居跡の分布

前述のように、第17地点では住居跡が15軒検出されている。これらの分布を見てみると、調査区北側のF区にややまとまって住居跡が認められる。また、南側のE区でも住居跡が4軒検出されている。特に第29・30・31号住居跡は、等間隔に位置し小群を形成している。その他A～D区では、住居跡が1～2軒検出されているに過ぎない。F区では北側に集中していて、住居跡間の切り合いも認められ、他の区とは若干異なる。しかし、北側の調査区外に沿うように河川跡が延びていることから、未調査部分を含めても、合計で10軒にも満たないと考えられる。C区の第25・26号住居跡の北側の調査区外にも住居跡が認められるかもしれないが、それほど数は多くないであろう。

第17地点では、F区を除き、住居跡間に切り合いは認められず一定間隔をおいて住居跡が分布している。北側の第19地点では、同時期の集落跡が調査され、溝跡に囲まれた中から多数の住居跡が検出されている。住居跡間の切り合いも数多く認められ、第17地点とは様相を異にする。これらのことから、第17地点の住居跡群は、第19地点を中心とした大集落の周辺の小住居跡群と思われる。これらの住居跡群の性格については後述する。

住居跡の時期について

住居跡の時期については、少ない遺物ながらも、台付甕（S字甕を含む）や、小型器台などの器種がそろっていることと、器面調整の特徴から判断して、古墳時代前期の五領式期の住居跡である。これらの中で、縄文・櫛描文施文の土器が出土している第29・30号住居跡の時期比定が若干問題となろう。ここでは、第29図1・2・4、第30図1の土器が吉ヶ谷式土器、樽式土器の編年のどの段階に位置づけられるか確認しておこう。

第29図1・4は甕である。共に胴下半から底部を欠くが、頸部が括れ、外反しながら口縁部に至る器形になると思われる。1の口縁部には、刻み目などの加飾は見られない。文様は、口縁部から胴部最大径直下まで横位に縄文を施している。輪積痕を装飾化したものは見られない。第30図1は、壺の胴部上半である。胴部上半に帯縄文を3段施し、縄文部、無文部関係なく赤彩されている。

吉ヶ谷式土器に関しては、柿沼幹夫氏によりその変遷が明らかにされている（柿沼1982）。その中で氏は、吉ヶ谷式土器を3期4細分している。また、古墳時代前期の土器群に伴う縄文施文土器を吉ヶ谷系土器として把握している（柿沼1994）。上記の論文の中で、甕の変遷は、胴下半の調整と器形の変化を中心になされたものである。それによると、Ⅲ期の特徴として、輪積痕を残さない、胴部の張りが強くなる点を指摘している。壺は、なで肩で、胴部の張りが緩やかなものから、徐々に張りが強くなり、頸部が短くなる傾向があるとしている。

これらを基準に考えると北島遺跡のものは、Ⅲ期以降のものとなる。共伴している遺物などから考えても古墳時代の所産であると思われる。地域はやや異なるが、具体的には、根平4号住跡、中耕遺跡Ⅱb期に並行するであろう（水村ほか1980・杉崎1993）。壺が赤彩される点もこれらに近い。

第29図2は小型の甕形土器で、口縁部には細かい波状を呈する。口縁部から胴部最大径まで隙間なく櫛描波状文を施す。波状文は、6本一単位の櫛歯で、面的に施文されている。文様施文の特徴は波状文B

と呼ばれるもので、飯島克己・若狭徹氏の樽式土器編年3期に特徴的な施文方法である（飯島・若狭1988）。ただし、管見にして知らないが、2のような器形は、樽式土器には見られない。このことから樽式の3期に後出するものとして考えておきたい。

以上、これらのことから、弥生時代後期の吉ヶ谷・樽式土器の系譜を引く古墳時代前期の土器と考えられる。

また、従来櫛描文と縄文系の土器は住居跡内で共伴することはないと考えられてきた。この考えは前提としては、有効であろう。しかし、同時期の隣接する上器型式同士であるから全くの没交渉であったわけではない。例えば、江南町千代遺跡群富士山遺跡第25号住居跡に見られるように、住居内で共伴も認められる（新井・森田1998）。このような基盤の上に古墳時代でも同様な現象が生じたのであろう。次にこれらの住居跡についてやや細かく見て行きたい。

住居跡の平面形態と炉について

前述ように遺存状態は、第29・30・31号住居跡を除き総じて悪い。これは住居廃絶後の自然環境や、その後の攪乱などの影響によるものと思われる。特にF区については、遺構が密集することから残りが悪い。遺存状態以外にも、先にあげたE区検出の住居跡と他の住居跡の間には、違いが見られる。すなわち、住居の平面形態と、炉跡についてである。柱穴の配置についても違いが見られそうだが、ともに遺存状態が悪いため、今回は取り上げない。

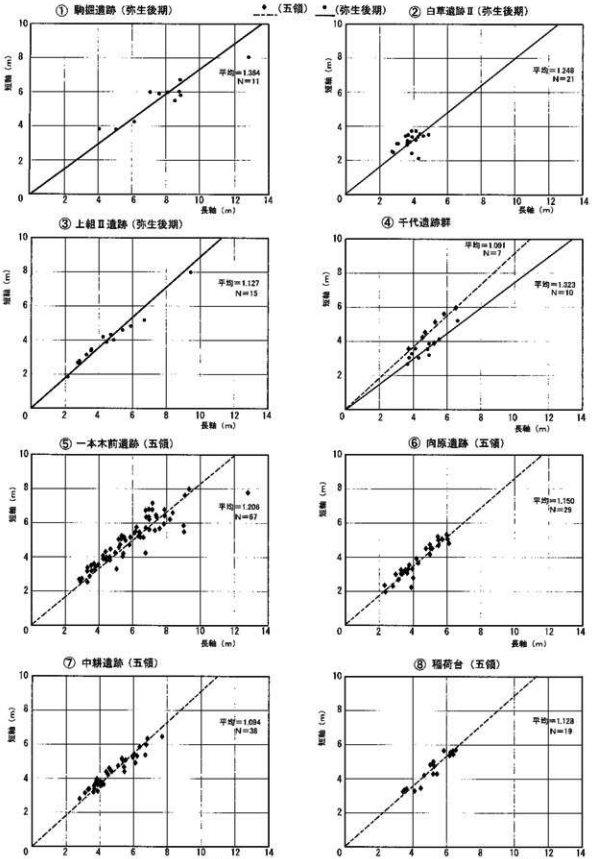
住居跡の平面形態は、E区の住居跡が長方形を呈するに対して、他の住居跡はほぼ正方形を呈する。E区の住居跡の長軸／短軸比（以下、住居比率と呼ぶ）は、第29号住居跡が1.188、第30号住居跡が1.255、第31号住居跡が1.218で、平均は1.220である。

平面形が長方形を呈する住居跡は、弥生時代後期に多く見られる。本遺跡の立地する妻沼低地では、弥生時代後期の良好な集落は検出されていない。ここでは、荒川右岸の東松山市駒堀遺跡、川本町白草遺跡の住居比率を見てみたい。これらの2遺跡は、吉ヶ谷式土器を主体とする時期の集落で、荒川右岸の比企丘陵と江南台地に立地する（谷井ほか1973・磯崎1992）。住居比率は、駒堀遺跡が1.364（第149図①）、白草遺跡が1.248（第149図②）である。ともに長方形の平面形態をなす。同様に図示しなかったが吉ヶ谷式期の住居跡が検出されている川本町四反歩遺跡1.304、嵐山町大野田西遺跡が1.372で、同様に長方形である（金子1993・佐藤1994）。武蔵野台地上に立地する上組Ⅱ遺跡では、弥生時代後期末の集落が検出されている（黒坂1989）。ここでの住居比率はやや低く、1.127（第149図③）である。上組Ⅱ遺跡では、各住居跡間の住居比率にもバラつきが少なく安定している。これが、時期的に古墳時代前期に近いためか、或いは、武蔵野台地の特徴であるか否かについては今後の検討課題である。

次に古墳時代前期の五領式期の住居比率について見てみる。大宮台地の向原遺跡（第149図⑥）で1.150、武蔵野台地の中耕遺跡（第149図⑦）で1.094、稲荷台遺跡（第149図⑧）で1.128のほぼ方形である（橋本2001・杉崎1993・富田1994）。このことから古墳時代前期に平面形態が方形になるのは、大宮台地、荒川右岸で共通した現象と言えるだろう。

では妻沼低地ではどうであろうか。古墳時代前期の住居跡が多数検出されている一本木前遺跡（第149図⑤）の住居比率は1.206と長方形である（寺社下2003・2004）。この数字だけを見てしまうと一本木前遺跡のそれは、弥生時代後期のものと変わらない。ここでやや細かくデータを見てみる。

先にあげた古墳時代前期の3遺跡の中で、平均住居比率が一番高いのは向原遺跡である。一本木前遺跡の中で向原遺跡の平均住居比率より低い住居跡は36軒ある。このうちの24軒の住居跡は長軸6m以下である。つまり、平均値を見ると弥生時代後期の住居比率と変わらない一本木前遺跡であるが、他の遺跡で多数を占める長軸6m以下の住居跡は、3遺跡と同様に正方形に近い。また、一本木前遺跡では長



第149図　周辺遺跡の住居跡比率

軸8mを超える大型の住居跡が7軒調査されている。そのうち5軒の住居比率は、平均の1.206より高い。以上のことから　本木前遺跡においても、長軸6m以下の住居跡は正方形に近いことが解る。

また、同一遺跡で弥生時代後期と古墳時代前期の集落が検出されている千代遺跡群（第149図④）でも住居比率を見ると、弥生時代後期1.323、古墳時代前期1.091である。つまり、古墳時代になると今まで長方形であった平面形が方形に変わったことが分かる。このことから平面形態の変化は、少なくとも吉ヶ谷式土器が分布する地域では共通する現象である。この現象は、吉ヶ谷式土器分布地域が五領式土器に変化するときだけに起こることであろうか。

弥生時代後期に櫛描文土器が分布する群馬県の状況についてはどうであろうか、新保遺跡や有馬遺跡等の弥生時代後期から古墳時代前期に継続する遺跡では、概ね同様の変化が見て取れる（佐藤1988・1990）。

こうした中で、古墳時代においてもその平面形態が長方形に近い住居跡はどのような意味があるのであろうか。以下に見るかの在り方と共に考えてみる必要があろう。

炉は、E区の住居跡群以外では、第24号住居跡で確認されているだけで、他の住居跡では見られない。第24号住居跡は、近世の溝跡により攪乱を受けているので、掘方のみの確認であるが、想定される平面形もおそらくは長方形を呈すると考えられる。また、E区の住居跡群とも比較的近い位置にあることから、本来はこれらと同一群を形成していたかもしれない。その他の住居跡では、炉は検出されていない。確かに、遺存状態が悪いこともあるが、柱穴が明確な住居跡においても炉が見られないことから、始めからなかったのであろう。

E区の住居群では、炉はいずれも複数確認されている。第29・30号住居跡の炉は、住居跡中心部分と壁とのほぼ中間地点に構築されており、それぞれ90°たがえて作られている。第31号住居跡のそれは、中心部分から長辺側に寄った部分に2基かが築かれている。これらの炉の在り方は、弥生時代後期の住居跡の状況に近い。

　本木前遺跡では、五領式期の住居跡が多数調査されている。これらのうち、第149図⑤のデータ作成の67軒の住居跡について見てみると、かを持たないもが31軒（46.3%）、1基のもの30軒（44.8%）、複数のもの6軒（8.9%）である。このうち、複数かが認められた住居跡は、住居比率が1.2以上のものがほとんどである。このことから住居の平面形が長方形であることと、炉が複数存在することの間には相関関係があると思われる。

本遺跡ではこれらの住居跡から、吉ヶ谷系、樽系の弥生土器の系譜を引く土器が出土している。一方、　本木前遺跡ではそのような傾向は見られない。このことから、一概に弥生時代の遺風を残しているということはできない。しかし、住居跡の平面形態や炉の在り方は、上屋構造、住居の空間分割を大きく規制する。言い換えれば、そこに暮す人々の生活様式に大きく規制される。また、従来の住居跡の平面形を捨て、新たに方形に近い形態を採用したことにも同じことが言える。つまり、長方形にするか方形にするかの選択は必然性が伴うはずである。

水田跡

水田跡については、登呂遺跡の発掘以来、数多くの遺跡で調査がなされている。特に、浅間山や榛名山などの火山を擁する群馬県域での水田研究は特筆される。降下火山灰により水田跡の時期がある程度判明すること、火山灰にパックされているため遺存状態が良好であること、同一遺跡で、重層的に確認できることが挙げられる。これらのことにより、通時的にも共時的にも水田跡の検討ができ、大きな成果が見られる。ここでは、群馬県域でこの問題に積極的に取り組んでいる斎藤英敏氏の成果に導かれながら本遺跡の水田跡を考えてみたい。ここで改めて本遺跡の水田跡（古墳時代前期）の特徴について整理してみよう。

ア．第150図は、水田区画ごとの標高を5㎝ごとに別け、示したものである。これを見ると北西側が高く南側に向うにつれ低くなっている。一部にＳＮ21、24のように周りの区画より標高が高いものもあるが、北西から南側に水を流していたようである。

イ．水田区画の面積は、最大で29.8㎡、最小で7.04㎡、平均15.7㎡である。

ウ．水田区画にあっては、北西－南東方向の畦が途切れなく続くものが多いことから、北西－南東方向の畦を造った後に北東－南西方向の畦を造ったと思われる。

エ．水口は、全部で23ヶ所確認されている。北西－南東方向の畦で８ヶ所、北東－南西方向の畦で15ヶ所である。水口の位置に規則性は見られない。すなわち、一定方向に水流を導くようには設定されていない。

オ．畦畔が交差するところは、十字状の部分とＴ字状の部分とが存在する。

以上の特徴が認められる。

斉藤氏によると、水田面積は通時的に見ると、浅間Ｃ火山灰降灰以前（ＡＤ300年以前）、Ｈｒ－ＦＡ及びＨｒ－ＦＰ降灰した6世紀初頭から中ごろ、奈良時代以降では、水田面積に大きな違いがあるとしている（斉藤2001・2002等）。すなわち、不定形な小区画水田→極小区画水田→大区画水田の変遷が辿れるとしている。斉藤氏は、群馬県内の資料を基に水田面積の平均を求め、その変遷を裏付けている。また、小区画水田は、一区画ごとの面積にばらつきがあるが、極小区画水田は、区画面積にばらつきが少ないこと、平面形もほぼ等しく規格性が高いことを挙げ、不定形な小区画水田と極小区画水田の違いに関して、平均面積の変化だけでなくその質的な違いにも言及している。

本遺跡の古墳時代前期の水田跡は、前述のように平均面積は15.7㎡であるが、最小のものは7.04㎡、最大のものは29.8㎡でかなりばらつきがある。平均面積では、群馬県の浅間Ｃ火山灰下から検出された浜川高田遺跡の13.731㎡に近い（斉藤2001）。

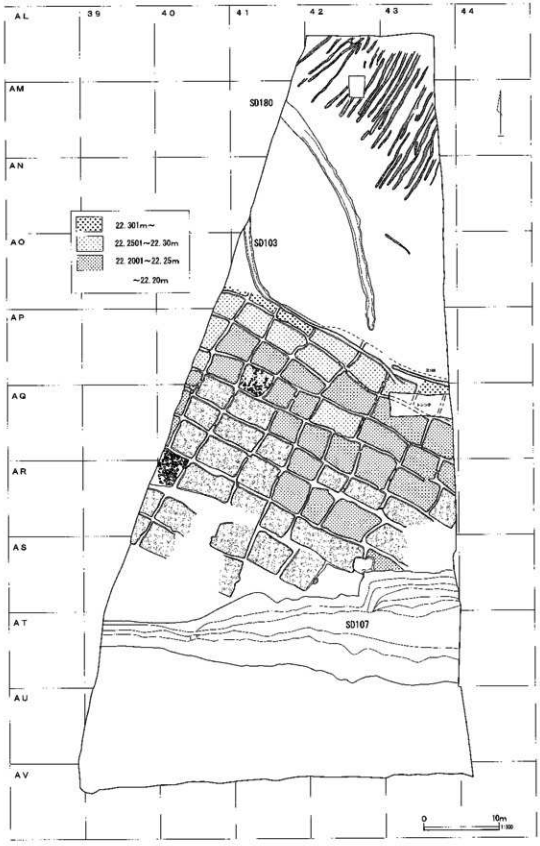
ここで、水田区画が小さいものと大きいものが水田内のどこに位置するか見てみたい。５～10㎡の区画は、ＳＮ22・23・42が該当し、調査された水田跡の中央部分に位置する。ＳＮ22・23は、周辺の区画から考えても本来は同一の区画であった考えられる。ここは周辺と比べ等高線が密な部分である。すなわち、傾斜が他の部分部と比べ急なとこである。

一方、やや大きい区画は、調査された水田跡の南側に集中する。ここでは等高線が疎な部分である。すなわち、傾斜が他の部分と比べ緩やかである。

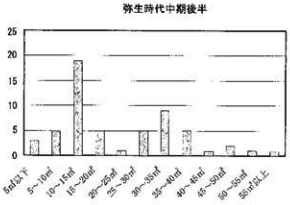
つまり、水田跡が作られた微地形により細かく区画が変えられていることが分かる。このことはすでに八賀晋氏により指摘されているように、水田に平均的に湛水するための技術である（八賀1979）。このようにして毎年少しずつ区画を変更していったと考えられる。

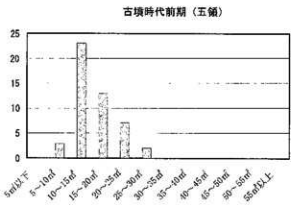
また、極小区画水田と呼ばれるものは、前述のように、人変企画性が高い。それは面積だけでなく、水口の位置、畦の造り方にも見ることができる。たとえば、極小区画水田が検出されている同道遺跡、有馬条里遺跡を見てみると、すでに多くの人が指摘しているが、以下のことが分かる。すなわち、傾斜方向に沿って等間隔に直線的な長い畦畔を造り、その後、適当な大きさで間を区画する。水口は後から造った畦畔に付設される。畦の交点は十字状になる（石坂ほか1983、大塚ほか1983）。これらに比べると、本遺跡の水田は、前述のように水口の位置に規則性が見られず、畦の交点も十字状にならない。

以上のように、水田区画面積の大きさやその他の属性から、本遺跡の水田跡は不定形な小区画水田に相当する。ただし、不定形な小区画水田においても、最初に区画する畦畔は、傾斜方向と同一方向になることが指摘されている。しかし、本遺跡では、等高線と沿うように、すなわち傾斜方向に直行するようにはじめの畦畔が造られている。等高線に沿って畦

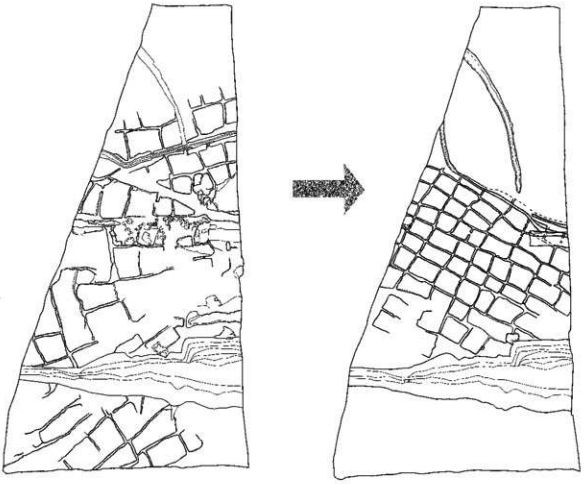


第150図　水田跡の標高（区画別）





	枚数	平均面積（㎡）	最小区画（㎡）	最大区画（㎡）
弥生時代中期後半	57	22.36	3.2	72.5
古墳時代前期	48	15.7	7.04	29.8



弥生時代中期後半　　古墳時代前期（五領）

第151図　第17地点水田跡の変遷

畔を築くのは、傾斜角度のきついところに築かれる水田に見られるという（工楽1991）。このことについては、本遺跡独自のものか否かは、今後の課題としたい。

次に先行する弥生時代中期後半の水田跡との比較を行なって見たい。弥生時代中期後半の水田跡は、平均面積22.36㎡、最小のものは3.2㎡、最大のものは72.5㎡である。また第151図からも分かるように、水田面積の分布は五領式期と違い、分布のピークが二ヶ所で認められる（10～15㎡と30～35㎡）。

これらのことから、弥生時代中期後半の水田跡の面積のばらつきは、五領式期のそれに比べはるかに多いと言うことができる。言い換えるならば、古墳時代前期の水田跡は、不定形でばらつきがあるが、その偏差が弥生時代に比べ小さくなっていると言うことができる。これは、先の斉藤氏が述べているように、6世紀初頭以降の規格化された極小水田の遍渡期と言えるであろう。

このことは、斉藤氏の論文で示された浅間C火山灰降灰以前の水田跡の面積においても認められる（斉藤2001）。すなわち論文で示された6遺跡での平均面積が21.66㎡であるのに対して、遺跡ごとの平均面積を見ていくと、最大で30.31㎡、最小で9.984㎡と違いが認められる。大きく見ると、30㎡を中心とする御布呂遺跡、同道遺跡、芦田貝戸遺跡Ⅱ、15㎡を中心とする浜川高田遺跡、浜川館遺跡、10㎡前後の浜川長町遺跡の3つに分けることができるかもしれない。

このような小区画水田における平均面積の違いはなぜ見られるのであろうか。地域性、地形的制約により、面積に微妙な違いが見られる場合も当然のことであろう。しかし、これらの遺跡では、Ｈｒ－ＦＡ及びＨｒ－ＦＰ下水田も検出されており、その平均面積はほぼ等しい。このことから、地域性、地形的制約以外に、時期的な違いも考慮する必要があろう。すなわち、時間的経過とともに、当初地形に制約された不定形で、面積にばらつきがある区画から、面積の縮小、平面形の規格化、面積の均一化が徐々に測られてゆき、6世紀の極小水田においてクライマックスを迎えるものと考えられる。

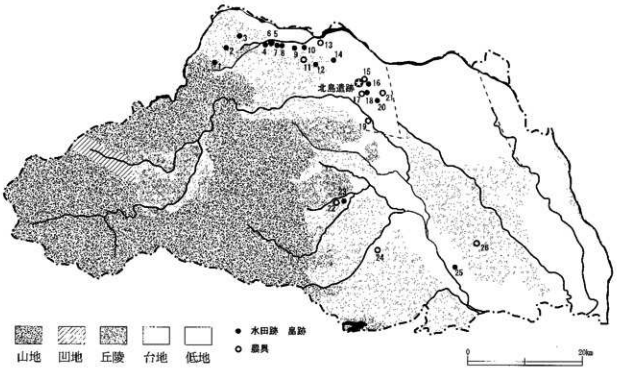
小区画水田から極小区画水田への変化は、斉藤氏が論じるように、徹底した水管理の下に増収を図った結果であると考えられる。そのため、実際に検出される水田跡は、小区画水田と分類されるもののなかでも一区画あたりの面積に違いが見られるのであろう。毎年僅かながらも地形を改変して収穫率を上げて行ったのであろう。ただ、継続期間が短いと考えられる水田跡でも、比較的整った小区画水田が見られる。このことから、その遺跡内で水田の継続年数に応じて徐々に区画面積が小さくなっていっただけでなく、新たに水田を開く際にどの程度の大きさが良いかは、時代ごとに決められていたのかもしれない。つまり、どの大きさがもっとも効率的で高収穫かということは、集落を超えて集団同士での情報の遣り取りがあったと想定できる。

その後は、本遺跡第17地点においても、Ｂ・Ｃ区で極小区画水田が造られるようになる（詳細は『北島遺跡ⅩⅡ』を参照）。遺物が検出されていないので、時期は明確ではないが、6世紀の所産であろう。その後は、本遺跡でも条里制が施行されるようであり、群馬県の状況と矛盾しない。

また、第152図及び第35表からも分かるように、県内北部の妻沼低地を中心に水田跡や農耕具の出土が認められる。現在、これらの水田跡に馬もしくは牛の足跡などは検出されていないので直接牛馬耕が行なわれていた証拠はない。但し、馬鍬と考えられる資料が、小敷田遺跡、下田町遺跡で出土している（吉田1991、赤熊・岡本2004）。

小敷田遺跡では、歯部分だけの出土である。下田町遺跡では、台木と歯が出土している。溝跡からの出土で、共伴土器から7世紀前半にあたる。6世紀にさかのぼる資料ではないが群馬県と同様に6世紀後半以降、畜力の利用が始まったと考えられる。

以上のことから、北島遺跡を含む埼玉県域でも斉



第152図　農耕関係の遺構及び遺物の検出遺跡

第35表　農耕関係の遺構及び遺物の検出一覧表

番号	遺跡名	所在地	水田跡	畠跡	農具	備考
	北島	熊谷市	○	○	○	弥生中期～中世
1	円良岡	児玉町	○			古代
2	児玉条里	児玉町	○			古代
3	今井条里	本庄市	○	○		古墳前期
4	原ヶ谷戸	岡部町	○			10世紀
5	滝下	岡部町	○		○	10～11世紀
6	四十坂下	岡部町	○			10世紀
7	岡部条里	岡部町	○	○		古墳前期
8	樋詰	岡部町		○		古墳後期
9	起会	深谷市	○			古墳後期～古代
10	森下	深谷市	○			12世紀初頭
11	深谷町	深谷市			○	古墳
12	清水上	深谷市		○		古墳前期
13	城北	深谷市			○	古墳後期
14	一本木前	熊谷市		○		古墳後期
15	東沢	熊谷市			○	古墳前期
16	中条条里	熊谷市	○			平安
17	諏訪木	熊谷市			○	古墳後期
18	池上	熊谷市	○			9～12世紀初頭
19	下田町	大里町			○	古墳後期
20	小敷田	行田市	○			6世紀以前
21	池守	行田市			○	古墳後期
22	中耕	坂戸市			○	弥生末～古墳前期
23	桑原B	坂戸市	○			古墳後期
24	山王塚脇	川越市			○	古墳
25	大久保条里	さいたま市	○			11世紀末～12世紀初頭
26	芳徳泥炭層	さいたま市			○	古墳

藤氏が想定した変遷と概ね一致する。このような前提の下に水田区画の画期に関して考えると、小区画水田から極小区画水田との画期と極小区画水田から大区画水田への画期とではその意味合いに違いがある。小区画水田から極小区画水田への変化は同一技術体系における発展段階の最終形態として位置付けることができる。極小区画水田とは、小区画水田の最も安定した収穫システムであったのだろう。この最も安定したシステムは一方で、停滞をもたらす結果となった。つまりそれ以上の増収が見込めなくなったことも意味するのである。極小区画水田から大区画水田への変化は、政治的な動向とともに、水田耕作にあたり畜力の利用という技術を導入し、新たな水稲農耕技術体系の中で更なる増収を目指した変化であろう。

畠跡

畠に関する考古学的な検討は低調で、農耕イコール水稲農耕と考えられがちであった。今、この水田偏重の生業観からの転換が求められている。この点に関しては、主に民俗学の分野でその見直しが進められてきた。

考古学的には、日本考古学協会2000年度鹿児島大会で『はたけの考古学』と題してシンポジュウムが行なわれ、全国的な規模で畠跡の聚成が行なわれ今後の研究の指針となっている（日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編2000）。

この中で、工楽善通氏が以下のように畠跡を分類している（工楽2000）。

A．一定範囲内に畝または畝間溝が間隔をおいて並列しており、畝部分が多少黒ずんでいる。

B．1～2 m間隔で溝が縦横に交差して碁盤目状をなし、その溝で囲まれた内側が本来は少々高まる。

C．平面形が20～30cmの円形土壙で、半球状に掘り込んだり、底面が平坦な浅い土壙が群れをなす。

この分類に従い本遺跡の畠跡を見てみるとA及びBがみとめられる。Bに分類されるものでは、その内側に高まりを認めることはできない。また、溝と溝との間隔が基準より狭い。これらは、Aが重なっているだけかもしれない。県内で検出された畠は、A類がほとんどである。ただし、一本木前遺跡では本遺跡と同様にA・Bのどちらの類型も認められる。

A・Bに見られる違いが作物による違いによるものかは今後の課題であろう。また、本遺跡では、畠が検出された面積が広大であることも特徴の一つである。同じく五領式期の畠が検出された一本木前遺跡では、住居跡の周辺に畠が作られている。その畠も畝数にして10本前後を基本としている。鬼高式期でも畠域は若干広がるが傾向はほぼ同じである。一方、本遺跡では、第17地点のように住居域と畠域が重なる部分もあるが、第19地点のように同時期の遺構が見られず、畠跡だけが検出された地点がある。第19地点の北側の第20地点においても畠跡が検出されていることから、本調査部分を含めるとその面積はさらに広大である。つまり、一本木前遺跡に見られる畠跡の在り方と根本的に異なるものである。一本木前遺跡の畠の経営母体が竪穴住居を単位とするならば、本遺跡の畠は、集落などのより大きな単位が母体となり集約的に行なっていたのかもしれないが、予測の域を出ない。いずれにせよ水田同様にその経営に力が注がれていたと理解できる。

水田同様に力が注がれていたとする仮定を確かめるためには、畠の耕作具の検討が不可欠である。水田研究では、農具の使用方法とその変遷の検討がなされている。従来、畠の場合は、遺跡立地と打製石斧の卓越から、畑作を想定してきた（松島1964）。県内では、小林茂・古川國男氏が、弥生時代中期中葉の下ツ原遺跡で同様のことを述べている（小林・古川1989）。また、当初の想定が河岸段丘状の遺跡を想定しているため、木器と畠の検討がなかなか結びつかなかったのであろう。『木器聚成図録近畿原始編』においても、一部を除いて畠との関連には触れられていない（上原1993）。

本遺跡の木器については、『北島遺跡XⅢ』で詳細に述べられているので、詳細は省略するが、本報告に関わる部分では、第17地点の河川跡中から先端に加工を施したものが出土している。これが民俗資料に見られる掘り棒として想定できるかもしれない。畠と木器の関係については山田昌久氏が縄文時代から見られる鋤、鍬が畠（畑）作に関わっていた可能性を指摘している（山田2000）。いずれにせよ、畠に関する考古学的研究はその緒についたばかりであり、畝などの検討とともに総合的に行なう必要があろう。

おわりに

最後に、北島遺跡は、はじめに述べたように、集落と共に墓域、生産域が調査され当時の生活が立体的に理解できる点を改めて強調しておきたい。第152図及び第35表からも、生産域や木器が検出された遺跡は、県北地域に集まっていることと、古代以降の遺跡が圧倒的に多いのが分かる。検出遺跡の偏りは、低地という特性を考慮する必要があることは言うまでもない。しかし、水田開発の適地という点も忘れてはならない。人は、このような低地に進出することで安定性の高い生活を営むようになったのであろうか。

従来、稲作農耕の導入により、生活の安定、定住化が促されたと一般に説かれている。その一方で広瀬和雄、大村直氏らにより、低地に進出した農耕集落が、短期間で廃絶し、想像以上に移動性に富んでいることが論じられている（広瀬2003、大村2002）。

本遺跡を通時的に見てみると、弥生時代後期と古墳時代中期から後期中ごろに集落の断絶時期が存在する。特に、弥生時代中期後半、古墳時代前期と大規模な集落が形成されていたが、それが徐々に縮小するのではなく突然廃絶されるのが特徴である。これらの集落は、大集落であるばかりでなく、水田、畠といった生産跡を残しているとともに、堰や護岸を築くなどの土木工事を行なっているのが大きな特徴である。古墳時代前期では、河川に護岸を築くことにより、弥生時代では、氾濫原であった場所を陸化し、畠を開いている。このように多大な労量を集中して築いたものを容易く破棄してしまうものであろうか。洪水により、予期せずして、集落が廃棄されることもあろう。確かに本遺跡では、洪水による堆積が認められる。しかし、その一方で第19地点の中央水路のように掘削を繰り返し使い続けられた遺構も存在する。つまり、全くの無人の野になっているのではない。

これらのことから、我々が想定している以上に広い範囲の住居域を持っていたのであろう。これは洪水などの自然災害に見舞われやすい低地という自然条件に合わせた集団組織を持ち、柔軟に自然と対峙していたことを意味するであろう。つまり北島遺跡だけでなくより広い範囲を対象に分析する必要がある。幸いにも熊谷周辺では本遺跡をはじめ一本木前遺跡など古墳時代前期の集落が調査されている。今後は、土器の編年をもと人々の移動を周辺遺跡も含め考えて行く必要があろう。

引用・参考文献

青木克尚　2002 「9 深谷市轟遺跡調査」『第35回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　埼玉県立博物館　埼玉県立埋蔵文化財センター　彩の国生涯学習振興協議会

赤熊浩一・岡本健一　2004 「下田町遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第296集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

浅野晴樹　1989 「北島遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

新井　端・森田安彦　1998 「千代遺跡群一弥生・古墳時代編一」江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会

石坂　茂ほか　1983 「岡道遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

磯崎　一　1992 「白草遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

磯崎　一　2005 「北島遺跡ⅩⅢ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第305集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

飯島克己・菅狭　徹　1988 「樽式土器補年の再構成」『信濃』第40巻第9号　信濃史学会

上原真人　1993 「木器聚成図録近畿原始編」奈良国立文化財研究所

大谷　徹　1991 「北島遺跡Ⅲ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大谷　徹　2004 「北島Ⅷ／田谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大塚昌彦ほか　1983 「青馬条里遺跡」渋川市発掘調査報告書第7集　渋川市教育委員会

大村　直　2002 「弥生・古墳時代のムラ研究について」『ムラ研究の方法一遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告書4　岩田書院

柿沼幹夫　1982 「古ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号　土曜考古学研究会

柿沼幹夫　1994 「古ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『特別展　検証！　関東の弥生文化』埼玉県立博物館

金子直行　1993 「四反歩遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

工藤善通　1991 「水田の考古学」UP考古学選書12　東京大学出版会

工藤善通　2000 「いまはたけの考古学に熱い視線が注がれている」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会

栗原文蔵・田部井功　1976 「弥勒西新田遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第29集　埼玉県遺跡調査会

黒坂禎二　1989 「上組Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒坂禎二　2002 「池上／諏訪木」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

飯持和夫　1995 「森下・戸森松原・起会」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小林　茂・吉川國男　1989 「秩父市ドッ原遺跡の調査（二）」『古代』第87号　早稲田大学考古学会

斎藤国夫　1981 「池守遺跡」行田市文化財調査報告書第12集　埼玉県行田市教育委員会

斉藤英敏　2002 「小区画水田・畦小区画水田の構造一群馬の水田跡から見た古代東アジア一」『研究紀要』19　群馬県埋蔵文化財調査事業団

斉藤英敏　2002 「水田跡から見た東アジアの農耕技術の変遷一「群馬県水田跡一覧表」の分析を通じて一」『研究紀要』20　群馬県埋蔵文化財調査事業団

佐藤明人ほか　1988 「新保遺跡Ⅱ」群馬県教育委員会　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

佐藤明人　1990 「有馬遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査報告書第102集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

佐藤康二　1994 「大野田西遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

寺社下博　1978 「中条条里遺跡調査報告書」昭和52年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会

寺社下博　1981 「鐘塚古墳」昭和55年度熊谷市埋蔵文化財報告書　熊谷市教育委員会

寺社下博　1983 「女塚」昭和57年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会

寺社下博　2000 「一本木前遺跡」平成11年度熊谷市埋蔵文化財報告書　熊谷市教育委員会

寺社下博　2001 「一本木前遺跡Ⅱ」平成12年度熊谷市埋蔵文化財報告書　熊谷市教育委員会

寺社下博　2002『北島遺跡』平成14年度熊谷市埋蔵文化財報告書　埼玉県熊谷市教育委員会
寺社下博　2003『一本木前遺跡Ⅳ』平成14年度熊谷市埋蔵文化財報告書　熊谷市教育委員会
寺社下博　2004『一本木前遺跡Ⅴ』平成15年度熊谷市埋蔵文化財報告書　熊谷市教育委員会
杉崎茂樹　1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之・書上元博　1998『北島遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之　2004『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之・宮田和夫　2005『北島遺跡ⅩⅡ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第304集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木敏昭　1999『横間栗遺跡』平成10年度熊谷市埋蔵文化財報告書　熊谷市教育委員会
瀧瀬芳之・中村倉司　1990『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
瀧瀬芳之・山本　靖　1993『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宅間清公　2003「3熊谷市諏訪本遺跡の調査」『第36回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　埼玉県立博物館　埼玉県立埋蔵文化財センター
田中広明　2002『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中広明　2004『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第293集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
谷井　彪ほか　1979『野川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集　埼玉県教育委員会
知久裕昭　2004「9深谷市幡羅遺跡（第3・4次）の調査」『第37回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　埼玉県立博物館　埼玉県立埋蔵文化財センター
富田和夫　1994『稲荷前遺跡（B・C区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中島　宏　1984「池守・池上」昭和58年度埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書　埼玉県教育委員会
中村倉司　1989『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
橋本　勉　2001「尚原遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第272集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
広瀬和雄　2003『住居と集落』『古墳時代の日本列島』青木書店
松島　透　1964「飯田地方における弥生時代打製石器―硬い耕土と石製農具―」『日本考古学の諸問題』考古学研究会
松田　哲　2002『一本木前遺跡Ⅲ』平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
松田　哲　2004『籠原裏遺跡』平成15年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
水村孝行ほか　1980『根平』埼玉県発掘調査報告書第27集　埼玉県教育委員会
宮本直樹ほか　1998『岡部条里遺跡』埼玉県大里郡岡部町埋蔵文化財調査報告書第3集　岡部町教育委員会
山田昌久　2000「考古資料から畑を考える」『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会
山本　靖　2005『北島遺跡Ⅹ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第302集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田　稔　1991『小敷田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田　稔　2003『北島遺跡Ⅶ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉田　稔・宮田和夫　2004『北島遺跡Ⅷ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第291集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
吉野　健　1992『西別符廃寺』平成3年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
吉野　健　1994『西別符焼寺（第2次）』平成5年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
吉野　健　2000『西別符祭祀遺跡』平成11年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
吉野　健　2001『諏訪本遺跡』熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財報告書　埼玉県熊谷市遺跡調査会
吉野　健　2002『前中西Ⅱ』平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
吉野　健　2003『前中西Ⅲ』平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書　熊谷市教育委員会
渡辺清志　2004「4熊谷市諏訪本遺跡の調査」『第37回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　埼玉県立博物館　埼玉県立埋蔵文化財センター